

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—XXIV—

福岡県筑紫野市所在剣塚遺跡群の調査

上 卷

1 9 7 8

福岡県教育委員会

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— XXIV —

福岡県筑紫野市所在剣塚遺跡群の調査

上 卷

昭和 53 年

福岡県教育委員会

序

九州縦貫自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は昭和51年度をもって終了しました。この8年の間に多額の経費と膨大な人力をもって計159個所の調査を実施いたしました。これらは、いずれも貴重な内容をもつものであります。

この報告書は、昭和48年度に実施した筑紫野市杉塚所在剣塚遺跡群調査の記録であります。その内容は、弥生時代の集落・墓地，前方後円墳をはじめとする新・旧の各古墳，歴史時代の瓦窯・墓地等であります。本報告書を学問研究に，文化財愛護思想の普及，あるいは教育等にご活用いただければ幸甚に存じます。

諸般の事情により著しく発刊が遅れましたことをおわびいたします。また，本文中に記名した方々をはじめ，種々のご協力をいただいた関係各位に深く謝意を表します。

昭和53年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 浦 山 太 郎

例 言

1. この報告書は、九州縦貫高速自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち、昭和48年度に発掘した筑紫野市に所在する剣塚遺跡群の調査報告である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の委託事業として、福岡県教育委員会が実施した。
3. 本報告にあたっての木材の鑑定には、九州大学農学部松本勲教授と同林弘也助手に担当していただいた。
また、剣塚第1号瓦窯および溝状遺構出土の瓦類の整理・報告については、九州歴史資料館調査課に分担していただいた。
4. 本書は上・下の2巻に分ち、上巻に I～V を、下巻に VI をそれぞれ掲載している。
5. 本書の執筆は、下記のとおりである。

V-1	九州歴史資料館	石松好雄
	”	森田勉
	”	高橋章
V-2	”	亀井明德
I, II, III, IV, V-1・4	福岡県教育庁管理部文化課	石山勲
V-2・3・5・6, VI	”	中間研志
VI-8		平島勇夫
6. 掲載図の実測・製図の分担については、挿図目次に示すとおりである。掲載写真のうち、遺物については、九州歴史資料館石丸洋氏の指導の下に、岡紀久夫・前田次郎・平島美代子の3君があたった。
7. 遺物の整理作業の大部分については、岩瀬正信氏の指導の下に、九州歴史資料館の整理作業員がこれを行ない、出土品は同館にて保管している。
8. 本書の編集は、上巻を石山が、下巻を中間がそれぞれ担当した。

目 次

(上 卷)

I 調査の経過	1
II 位置と環境	5
III 古墳時代の遺構と遺物 1	
1. 剣塚第1号墳	7
2. 剣塚第2号墳	40
3. 剣塚第3号墳	41
4. 第11号住居跡	53
5. 剣塚遺跡群出土土器	56
IV 古墳時代の遺構と遺物 2	
1. 古墳の排列	63
2. 古剣塚第1号墳	65
3. 古剣塚第2号墳	71
4. 古剣塚第3号墳	72
5. 小 結	76
V 歴史時代の遺構と遺物	
1. 第1号瓦窯跡	79

2. 平安時代木棺墓・土塚墓	90
3. 火葬墓・円形周溝（墓）・不明土塚群	113
4. 竪穴式小石室	117
5. 表採の歴史時代遺物	118
6. 小 結	121

（下 巻）

VI 弥生時代の遺構と遺物

1. 住居跡群	127
2. 袋状竪穴群	153
3. 土塚墓群	229
4. 甕棺墓群	241
5. 石蓋土塚墓・箱式石棺墓	261
6. 柱穴群	265
7. 表採遺物と周辺遺跡採集遺物	273
8. 小 結	297

図 版 目 次

(上 巻)

本文対照頁

P L . 1	(1) 剣塚遺跡群と水城 (石山撮影) ……………	5
	(2) 剣塚遺跡と周辺の遺跡 (石山撮影) ……………	5
P L . 2	剣塚遺跡群全景 (南東上空から) (石山撮影) ……………	5
P L . 3	(1) 剣塚遺跡群全景 (北東側上空から) (石山撮影) ……………	5
	(2) 同上 赤外線写真 (北東上空から) (石山撮影) ……………	5
P L . 4	(1) 剣塚第1号墳伐採直後全景 (北東から) (石山撮影) ……………	7
	(2) 剣塚第1号墳前方部 (北西から) (石山撮影) ……………	7
P L . 5	剣塚第1号墳石室全景 (石山撮影) ……………	9
P L . 6	(1) 剣塚第1号墳墓壇北西隅 (石山撮影) ……………	9
	(2) 剣塚第1号墳墓壇北隅 (石山撮影) ……………	9
P L . 7	(1) 剣塚第1号墳石室全景 (北西から) (石山撮影) ……………	9
	(2) 剣塚第1号墳石室墓道出土須恵器 (石山撮影) ……………	11
P L . 8	(1) 剣塚第1号墳東側周湟土器出土状態 (中央は古剣塚第3号墳) (中間撮影) ……	11
	(2) 剣塚第1号墳東側周湟土器出土状態近景 (中間撮影) ……………	11
P L . 9	剣塚第1号墳西側周湟須恵器出土状態全景 (北西から) (石山撮影) ……………	12
P L . 10	(1) 剣塚第1号墳西側周湟北半須恵器出土状態 (石山撮影) ……………	12
	(2) 剣塚第1号墳西側周湟北半土器20出土状態 (石山撮影) ……………	12
P L . 11	(1) 剣塚第1号墳西側周湟北半土器群出土状態 (石山撮影) ……………	12
	(2) 剣塚第1号墳西側周湟北半土器10他出土状態 (石山撮影) ……………	12
P L . 12	(1) 剣塚第1号墳西側周湟南半土器出土状態全景 (石山撮影) ……………	12
	(2) 剣塚第1号墳西側周湟南半土器群出土状態 (石山撮影) ……………	12
P L . 13	(1) 剣塚第1号墳出土三累環式環頭柄頭……………	15
	(2) 剣塚第1号墳出土玉類……………	15
	(3) 剣塚第1号墳出土鉄製工具……………	15
P L . 14	剣塚第1号墳東湟出土土器 1……………	17
P L . 15	剣塚第1号墳東湟出土土器 2……………	18
P L . 16	剣塚第1号墳東湟出土土器 3, 西湟北半出土土器 1 (最下段) ……………	20
P L . 17	剣塚第1号墳西湟北半出土土器 2……………	21
P L . 18	剣塚第1号墳西湟北半出土土器 3, 西湟南半出土土器 1 (下2段) ……………	23
P L . 19	剣塚第1号墳西湟南半出土土器 2……………	27
P L . 20	剣塚第1号墳西湟南半出土土器 3, 西湟出土土器……………	30

P L . 21	(1) 剣塚第2号墳墳丘遺存状態……………	40
	(2) 剣塚第2号墳南側堅穴……………	40
	(3) 出土土製模造鏡……………	40
P L . 22	(1) 剣塚第3号墳全景(右は第2号墳)(石山撮影)……………	40
	(2) 剣塚第3号墳全景(石山撮影)……………	40
P L . 23	(1) 剣塚第3号墳墓道先端と土器出土状態(北東から)(石山撮影)……………	42
	(2) 剣塚第3号墳周埴土器出土状態(石山撮影)……………	42
P L . 24	(1) 剣塚第3号墳羨道先端部(南西から)(石山撮影)……………	45
	(2) 剣塚第3号墳周埴堆積状態と土器出土状況(石山撮影)……………	45
P L . 25	(1) 剣塚第3号墳墓壇壁工具痕(石山撮影)……………	45
	(2) 剣塚第3号墳出土玉類……………	45
P L . 26	剣塚第3号墳出土土器 1……………	46
P L . 27	剣塚第3号墳出土土器 2……………	48
P L . 28	剣塚第3号墳出土土器 3……………	49
P L . 29	剣塚第3号墳出土土器 4, 剣塚第3号墳周辺出土土器……………	52
P L . 30	剣塚第11号住居跡出土土器……………	54
P L . 31	剣塚第1号墳出土土器(左列最上段), 剣塚遺跡群出土土器 1……………	56
P L . 32	剣塚遺跡群出土土器 2……………	59
P L . 33	剣塚遺跡群出土土器 3……………	60
P L . 34	(1) 剣塚第1号墳前方部下の古剣塚第1号墳, 第2号墳 墳丘断面(石山撮影)……………	63
	(2) 剣塚第1号墳前方部下の古剣塚第1号墳丘断面(石山撮影)……………	65
P L . 35	(1) 古剣塚第1~5号墳全景(北から)(石山撮影)……………	63
	(2) 古剣塚第1~5号墳全景(南東から)(石山撮影)……………	63
P L . 36	(1) 古剣塚第1~5号墳全景(北西から)(石山撮影)……………	63
	(2) 古剣塚第4号墳墳丘(第2号墳から一上方は四王寺山)(石山撮影)……………	63
P L . 37	(1) 古剣塚第1号墳主体発見状況(上部盛土は剣塚第1号墳前方部)(石山撮影)……………	67
	(2) 古剣塚第1号墳主体横断面(石山撮影)……………	67
P L . 38	(1) 古剣塚第1号墳丘全景(上方は古剣塚第3号墳一北西から)(石山撮影)……………	65
	(2) 古剣塚第1号墳主体部全景(南西から)(中間撮影)……………	68
P L . 39	(1) 古剣塚第1号墳第1号箱式石棺(中間撮影)……………	68
	(2) 同(蓋石除去後)(中間撮影)……………	68
	(3) 古剣塚第1号墳第1号石棺側面補強状態(中間撮影)……………	68
P L . 40	(1) 古剣塚第1号墳(右上方)・第2号墳(左)・第4号墳(右手前)墳丘(北東から)(〃)……………	63
	(2) 古剣塚第1・2号墳境溝堆積状態と高杯脚部出土状態(中間撮影)……………	69
P L . 41	(1) 古剣塚第1・2号墳西裾石材および土器出土状態(中間撮影)……………	70
	(2) 同 近景(中間撮影)……………	70
P L . 42	(1) 古剣塚第2号墳墳丘カルデラ部(石山撮影)……………	71

	(2) 古剣塚第3号墳墳丘全景(古剣塚第2号墳から)(石山撮影)……………	72
P L . 43	(1) 古剣塚第3号墳全景(周湮完掘後)(石山撮影)……………	72
	(2) 古剣塚第3号墳全景(手前は剣塚第1号墳墓壇)(石山撮影)……………	72
P L . 44	(1) 古剣塚第3号墳土器出土状態全景(石山撮影)……………	74
	(2) 古剣塚第3号墳出土土器近景 1(石山撮影)……………	74
P L . 45	(1) 古剣塚第3号墳出土土器近景 2(石山撮影)……………	74
	(2) 古剣塚第3号墳出土土器近景 3(石山撮影)……………	74
P L . 46	古剣塚第1・3号墳出土遺物……………	75
P L . 47	(1) 剣塚第1号瓦窯全景(石山撮影)……………	79
	(2) 剣塚第1号瓦窯西側溝瓦堆積状態(石山撮影)……………	84
	(3) 同 瓦除去後(石山撮影)……………	84
P L . 48	剣塚第1号瓦窯全景(石山撮影)……………	80
P L . 49	(1) 剣塚第1号瓦窯煙道先端(石山撮影)……………	80
	(2) 剣塚第1号瓦窯焼成室床面の構造(手前は階部)(石山撮影)……………	80
P L . 50	剣塚第1号窯跡・溝状遺構出土軒平瓦・文字瓦・その他……………	85
P L . 51	剣塚第1号窯跡出土瓦類……………	85
P L . 52	剣塚第1号窯跡出土丸・平瓦……………	85
P L . 53	剣塚第1号瓦窯内出土土器……………	84
P L . 54	(1) 第1号木棺墓使用釘……………	92
	(2) 第2号木棺墓(東から)(中間撮影)……………	93
P L . 55	(1) 第2号木棺墓(南半)(中間撮影)……………	94
	(2) 第2号木棺墓副葬灰釉長頸壺……………	95
	(3) 第2号木棺墓副葬土師器・黒色土器……………	94
P L . 56	(1) 第2号木棺墓使用釘……………	95
	(2) 第3号木棺墓(北から)(中間撮影)……………	97
P L . 57	(1) 第3号木棺墓使用釘……………	98
	(2) 第3号木棺墓副葬土師器……………	97
	(3) 第4号木棺墓出土スクレイパー……………	99
	(4) 第4号木棺墓(東から)(中間撮影)……………	100
P L . 58	(1) 第4号木棺墓副葬白磁碗・土師器碗・使用釘……………	101
	(2) 第5号木棺墓(中間撮影)……………	102
P L . 59	(1) 第5号木棺墓使用釘……………	103
	(2) 第5号木棺墓副葬鏝子……………	103
	(3) 第5号木棺墓副葬刀子……………	103
	(4) 第6号木棺墓使用釘……………	104
	(5) 第6号木棺墓副葬土師器……………	104
	(6) 各木棺墓使用釘付着木質鑑定資料……………	109

P L . 60	(1) 第6号木棺墓(西から)(中間撮影)	104
	(2) 第1号土塚墓(東から)(中間撮影)	106
P L . 61	(1) 第1号土塚墓副葬土師器	107
	(2) 第1号火葬墓(南から)(中間撮影)	113
P L . 62	第1号火葬墓出土土師器	113
P L . 63	(1) 第2号火葬墓・第4号土塚墓・小石室(南から)(中間撮影)	114
	(2) 第1号円形周溝墓(南から)(中間撮影)	114
P L . 64	(1) 第6号住居跡南側柱穴出土滑石製紡錘車	116
	(2) 第8号土塚出土石帯・青銅製品	116
	(3) 第6号土塚出土鉄鎌(布付着)	116
	(4) 1号墳盛土中出土土釘	105
	(5) 表採土師器	119
P L . 65	1号墳盛土中・表採土師器・白磁・青磁・瓦質土器	119
P L . 66	(1) 竪穴式小石室南側溝(中間撮影)	117
	(2) 竪穴式小石室全景(中間撮影)	117

(下 卷)

		本文対照頁
P L . 67	(1) 南半弥生時代遺構全景(北から)(中間撮影)	127
	(2) 北半弥生時代遺構全景(南から)(中間撮影)	128
P L . 68	(1) 第1号住居跡全景(北から)(中間撮影)	131
	(2) 第1号住居跡出土土器・石器類	132
P L . 69	(1) 第2号住居跡全景(北西から)(中間撮影)	133
	(2) 第2号住居跡出土土器・玉	134・135
P L . 70	(1) 第2号住居跡出土石器	135
	(2) 第3号住居跡出土砥石	137
	(3) 第4号住居跡出土土器	137
	(4) 第4号住居跡全景(東から)(中間撮影)	138
P L . 71	(1) 第5号住居跡出土石器	140
	(2) 第6号住居跡出土石器	142
	(3) 第6号住居跡全景(北から)(中間撮影)	141
P L . 72	(1) 第7号住居跡全景(東から)(中間撮影)	144
	(2) 第7号住居跡出土土器・石器	145
P L . 73	(1) 第7号住居跡出土石包丁	145
	(2) 第8号住居跡出土磨石	147
	(3) 第8号住居跡全景(北から)(中間撮影)	148

P L . 74	(1) 第10号住居跡全景(西から)(中間撮影)	150
	(2) 第10号住居跡出土土器・石器	151・152
P L . 75	(1) 袋状堅穴群・弥生時代遺構の集中状況(東から)(中間撮影)	153
	(2) 第1・2号袋状堅穴(西から)(中間撮影)	159
	(3) 第1号袋状堅穴出土土器・石器	158
P L . 76	(1) 第2号袋状堅穴出土土器・石器	160
	(2) 第3号袋状堅穴出土石斧	162
	(3) 第3号袋状堅穴(北から)(中間撮影)	159
P L . 77	(1) 第4・5号袋状堅穴(北から)(中間撮影)	164
	(2) 第5号袋状堅穴出土土器・石器	163
P L . 78	(1) 第6号袋状堅穴(南から)(中間撮影)	164
	(2) 第6号袋状堅穴出土土器・石器・紡錘車	165・167
P L . 79	(1) 第7号袋状堅穴(南から)(中間撮影)	168
	(2) 第7号袋状堅穴出土スクレイパー	169
	(3) 第8号袋状堅穴(南から)(中間撮影)	168
	(4) 第8号袋状堅穴出土土器・石器	169
P L . 80	(1) 第13号袋状堅穴(南から)(中間撮影)	172
	(2) 第13号袋状堅穴出土土器・石器	173・174
P L . 81	(1) 第15号袋状堅穴(西から)(中間撮影)	175
	(2) 第16号袋状堅穴出土土器	176
	(3) 第20号袋状堅穴(東から)(中間撮影)	181
P L . 82	第20号袋状堅穴出土土器・石器	178・179
P L . 83	(1) 第21号袋状堅穴(北から)(中間撮影)	181
	(2) 第24号袋状堅穴(西から)(中間撮影)	182
P L . 84	(1) 第25号袋状堅穴出土土器	182
	(2) 第26号袋状堅穴(東から)(中間撮影)	184
	(3) 第26号袋状堅穴出土土器	183
	(4) 第27号袋状堅穴出土土器・石器・土製紡錘車	186
P L . 85	(1) 第28・33号袋状堅穴(東から)(中間撮影)	189
	(2) 第28号袋状堅穴出土土器・石器	188
	(3) 第29号袋状堅穴出土土器	190
	(4) 第31号袋状堅穴出土土器	194
P L . 86	(1) 第31・35号袋状堅穴(西から)(中間撮影)	194・195
	(2) 第32号袋状堅穴出土土器・土製投弾	196
	(3) 第34号袋状堅穴(南から)(中間撮影)	196
P L . 87	(1) 第34号袋状堅穴出土炭火板材	198・199
	(2) 第34号袋状堅穴出土の叩き目のある甕	197

	(3) (2) 甕外面の叩き目の接写	197
P L . 88	第34号袋状竪穴出土甕	200
P L . 89	第34号袋状竪穴出土甕・壺	202
P L . 90	(1) 第34号袋状竪穴出土壺	204
	(2) 第34号袋状竪穴出土磨製石器	208
P L . 91	第34号袋状竪穴出土壺	207
P L . 92	(1) 第34号袋状竪穴出土石器	209
	(2) 第36号袋状竪穴出土土器・石包丁	211
	(3) 第39号袋状竪穴出土土器・石器	213
P L . 93	(1) 第40号袋状竪穴出土土器	213
	(2) 第41号袋状竪穴出土土器・石器	217
	(3) 第43号袋状竪穴出土石核	220
	(4) 第42号袋状竪穴出土土器・石器	219
P L . 94	(1) 第45号袋状竪穴出土石器	222
	(2) 第48号袋状竪穴出土土器・石器	226
	(3) 第51号袋状竪穴出土土器・石器	229
	(4) 第1号土塚墓出土石鏃	232
	(5) 第2号土塚墓(西から)(中間撮影)	233
P L . 95	(1) 第3号土塚墓(北西から)(中間撮影)	234
	(2) 第3号土塚墓副葬小壺・石器	232・235
	(3) 第4号土塚墓副葬小壺・管玉	235
P L . 96	(1) 第4号土塚墓副葬小壺・管玉(西から)(中間撮影)	236
	(2) 第9号土塚墓出土磨製石鏃	241
	(3) 第10号土塚墓(西から)(中間撮影)	238
P L . 97	(1) 第12号土塚墓(西から)(中間撮影)	240
	(2) 第13号土塚墓(北西から)(中間撮影)	240
P L . 98	(1) 前方後円墳墓道周辺の甕棺群(南から)(中間撮影)	241
	(2) 第1号甕棺墓(西から)(中間撮影)	257
P L . 99	(1) 第1号甕棺墓副葬小壺	245
	(2) 第1号甕棺	244
	(3) 第2号甕棺	246
	(4) 第2号下棺頸部叩き目	246
P L . 100	(1) 第4号甕棺墓(南東から)(中間撮影)	258
	(2) 第6号甕棺墓(東から)(中間撮影)	259
P L . 101	(1) 第6号甕棺	246
	(2) 第7号甕棺	247
	(3) 第7号甕棺墓(西から)(中間撮影)	259

P L . 102	(1) 第8号甕棺	246
	(2) 第9号甕棺墓(東から)(中間撮影)	259
	(3) 第9号甕棺胸部破片の布疋痕接写	249
P L . 103	(1) 第10号甕棺墓・甕棺(南東から)(中間撮影)	250
	(2) 第11号甕棺墓(西から)(中間撮影)	260
P L . 104	(1) 第12号甕棺墓(南から)(中間撮影)	260
	(2) 第13号甕棺墓(西から)(中間撮影)	261
P L . 105	(1) 第12号甕棺	250
	(2) 第13号甕棺	250
	(3) 第14号甕棺墓(北西から)(中間撮影)	261
P L . 106	(1) 第14号甕棺	253
	(2) 第15号甕棺副葬丹彩小壺	254
	(3) 第15号甕棺墓(北から)(中間撮影)	261
P L . 107	(1) 第15号甕棺	255
	(2) 第16号甕棺	254
P L . 108	(1) 第16号甕棺墓(東から)(中間撮影)	262
	(2) 第16号甕棺墓棺内副葬小壺出土状態(南から)(中間撮影)	255
P L . 109	(1) 第16号甕棺副葬丹彩小壺	255
	(2) 第18号甕棺	256
	(3) 番外甕棺	256
P L . 110	(1) 第4号甕棺墓(南東から)(中間撮影)	258
	(2) 第17号甕棺墓(東から)(中間撮影)	262
	(3) 第4号甕棺	248
P L . 111	(1) 第1号石蓋土塚墓(東から)(中間撮影)	264
	(2) 第2号石蓋土塚墓(北から)(中間撮影)	264
P L . 112	(1) 第3号箱式石棺墓上方の標石出土状態(東から)(中間撮影)	267
	(2) 第3号箱式石棺墓(東から)(中間撮影)	266
P L . 113	土塚群・柱穴群・表採土器・石器	268
P L . 114	土塚群・柱穴群出土石器	269
P L . 115	表採石器(その1)	279
P L . 116	表採石器(その2)	281
P L . 117	表採石器(その3)	283
P L . 118	表採石器(その4)	287
P L . 119	(1) 表採磨石・砥石	291
	(2) 表採土錘・紡錘車	297
	(3) 周辺遺跡採集土器	298

挿 図 目 次

(上 卷)

Fig. 1	剣塚遺跡群全体図 (二神製図)	折りこみ
Fig. 2	剣塚遺跡群周辺地形図 (道路公団原図, 二神製図)	5
Fig. 3	剣塚遺跡群位置図 (石山作成)	折りこみ
Fig. 4	剣塚第1号墳墳丘測量図 (石山, 川述 (公), 副島 (源), 内田実測, 平田製図) 折りこみ	
Fig. 5	剣塚第1号墳墳丘断面図 (関・笹林実測, 石山製図)	7
Fig. 6	剣塚第1号墳後円部西側東西断面図 (中牟田実測, 二神製図)	8
Fig. 7	剣塚第1号墳西滄断面図 (中牟田・次郎丸実測, 二神製図)	9
Fig. 8	剣塚第1号墳石室実測図 (中牟田・次郎丸実測, 石山製図)	折りこみ
Fig. 9	剣塚第1号墳石室想定図 (石山作成)	10
Fig. 10	剣塚第1号墳西滄北半土器出土状態実測図 (石山・中牟田・次郎丸実測, 平田製図)	折りこみ
Fig. 11	剣塚第1号墳西滄南半土器出土状態実測図 (中牟田・次郎丸実測, 平田製図)	11
Fig. 12	剣塚第1号墳出土玉類実測図 (石山実測・製図)	14
Fig. 13	剣塚第1号墳墓壇出土鉄器実測図 (石山実測・製図)	15
Fig. 14	剣塚第1号出土柄頭実測図 (石山実測・製図)	16
Fig. 15	剣塚第1号墳東滄出土土器実測図 1 (石山・関・谷実測, 石山製図)	17
Fig. 16	剣塚第1号墳東滄出土土器実測図 2 (石山・関・谷実測, 石山製図)	18
Fig. 17	剣塚第1号墳東滄出土土器実測図 3 (石山・関・谷実測, 石山製図)	19
Fig. 18	剣塚第1号墳東滄出土土器実測図 4 (石山・関・谷実測, 石山製図)	20
Fig. 19	剣塚第1号墳東滄出土土器実測図 5 (石山・関・谷実測, 石山製図)	21
Fig. 20	剣塚第1号墳西滄北半出土土器実測図 1 (石山・関・谷実測, 石山製図)	22
Fig. 21	剣塚第1号墳西滄北半出土土器実測図 2 (石山・関・谷実測, 石山製図)	23
Fig. 22	剣塚第1号墳西滄北半出土土器実測図 3 (石山・関・谷実測, 石山製図)	24
Fig. 23	剣塚第1号墳西滄北半出土土器実測図 4 (石山・関・谷実測, 石山製図)	25
Fig. 24	剣塚第1号墳西滄北半出土土器実測図 5 (石山・関・谷実測, 石山製図)	26
Fig. 25	剣塚第1号墳西滄南半出土土器実測図 1 (石山・関・谷実測, 石山製図)	27
Fig. 26	剣塚第1号墳西滄南半出土土器実測図 2 (石山・関・谷実測, 石山製図)	28
Fig. 27	剣塚第1号墳西滄南半出土土器実測図 3 (石山・関・谷実測, 石山製図)	30
Fig. 28	剣塚第1号墳西滄出土土器実測図 (石山・関・谷実測, 石山製図)	31
Fig. 29	剣塚第1号墳出土土器実測図 1 (石山・関・谷実測, 石山製図)	32
Fig. 30	剣塚第1号墳出土土器実測図 2 (石山・関・谷実測, 石山製図)	33

Fig. 31	剣塚第1号墳墳丘復元図(石山作成)	34
Fig. 32	剣塚第2号墳墳丘測量図(松永・瀬戸実測, 平田製図)	40
Fig. 33	剣塚第2号墳南側竪穴内出土土器実測図(関実測, 石山製図)	41
Fig. 34	剣塚第2号墳南側竪穴内出土土製模造鏡実測図(中間実測, 石山製図)	41
Fig. 35	剣塚第3号墳全体図(瀬戸・副島(源)・松永実測, 平田製図)	42
Fig. 36	剣塚第3号墳周溝断面図(副島(源)実測, 石山製図)	43
Fig. 37	剣塚第3号墳石室実測図(中間実測, 石山製図)	44
Fig. 38	剣塚第3号墳出土玉類実測図(石山実測・製図)	45
Fig. 39	剣塚第3号墳出土土器実測図 1(石山・関・谷実測, 石山製図)	47
Fig. 40	剣塚第3号墳出土土器実測図 2(石山・関・谷実測, 石山製図)	48
Fig. 41	剣塚第3号墳出土土器実測図 3(石山・関・谷実測, 石山製図)	49
Fig. 42	剣塚第3号墳出土土器実測図 4(石山・関・谷実測, 石山製図)	50
Fig. 43	剣塚第3号墳出土土器実測図 5(石山・関・谷実測, 石山製図)	51
Fig. 44	剣塚第3号墳出土土器実測図 6(石山・関・谷実測, 石山製図)	51
Fig. 45	剣塚第3号墳付近出土土器実測図(石山・関・谷実測, 石山製図)	52
Fig. 46	剣塚第11号住居跡実測図(中牟田・次郎丸実測, 石山製図)	53
Fig. 47	剣塚第11号及び周辺出土土器実測図(石山実測・製図)	54
Fig. 48	剣塚遺跡群出土土器実測図 1…(石山・関・谷実測, 石山製図)	57
Fig. 49	剣塚遺跡群出土土器実測図 2(石山・関・谷実測, 石山製図)	58
Fig. 50	剣塚遺跡群出土土器実測図 3(石山・関・谷実測, 石山製図)	59
Fig. 51	古剣塚古墳群全体図(石山・中間・川述(公)・中牟田・次郎丸実測, 平田製図)	63
Fig. 52	古剣塚古墳群地山整形面測量図 (石山・中間・川述(公)・中牟田・次郎丸実測, 平田製図)	64
Fig. 53	古剣塚第1号墳墳丘測量図(石山・中牟田・次郎丸・佐々木実測, 平田製図)	65
Fig. 54	古剣塚第1号墳墳丘南北断面図(石山・中牟田実測, 二神製図)	66
Fig. 55	古剣塚第1号墳墳丘東西断面図(平島実測, 二神製図)	66
Fig. 56	古剣塚第1・2号墳裾部南北断面図(秀島実測, 二神製図)	67
Fig. 57	古剣塚第1号墳第1号石棺実測図(中間実測・製図)	68
Fig. 58	古剣塚第1号墳出土土器実測図(石山実測・製図)	69
Fig. 59	古剣塚第1・2号墳西裾石材および土器出土状態実測図(萩原・高田実測, 石山製図)	70
Fig. 60	古剣塚第1・2号墳西裾出土土器実測図(石山実測・製図)	70
Fig. 61	古剣塚第2号墳墳丘南北断面図(寺島・笹林・関実測, 石山製図)	折りこみ
Fig. 62	古剣塚第2号墳墳丘東半東西断面図(中牟田実測, 二神製図)	折りこみ
Fig. 63	古剣塚第3号墳墳丘測量図(石山・中牟田・次郎丸・佐々木・神代実測, 石山製図)	72
Fig. 64	古剣塚第3号墳墳丘南北断面東壁実測図…(寺島・笹林・関実測, 石山製図)・折りこみ	
Fig. 65	古剣塚第3号墳墳丘南北断面西壁実測図(次郎丸・石山実測, 二神製図)	折りこみ
Fig. 66	古剣塚第3号墳墳丘西辺東西断面図(次郎丸実測, 石山製図)	折りこみ

Fig. 67	古剣塚第3号墳内部主体実測図(石山実測・製図)……………	73
Fig. 68	古剣塚第3号墳土器出土状態実測図(石山実測・製図)……………	74
Fig. 69	古剣塚第3号墳出土土器実測図(石山実測・製図)……………	75
Fig. 70	古剣塚第3号墳墳丘内出土鉄器実測図(中間実測・製図)……………	75
Fig. 71	剣塚第1号瓦窯全体図(川述(公)・佐々木実測, 二神製図)……………	79
Fig. 72	剣塚第1号瓦窯実測図(佐々木実測, 石山製図)……………	折りこみ
Fig. 73	剣塚第1号瓦窯跡階部・燃烧室床面縦断面図(佐々木・石山実測, 石山製図)……………	81
Fig. 74	溝状遺構実測図(中牟田・次郎丸実測, 石山製図)……………	83
Fig. 75	剣塚第1号瓦窯内出土土器実測図(森田実測・製図)……………	84
Fig. 76	剣塚第1号瓦窯跡・溝状遺構出土軒平瓦拓影・実測図(石松・高橋実測・製図)……………	86
Fig. 77	剣塚第1号瓦窯跡・溝状遺構出土文字瓦拓影(石松・高橋実測・製図)……………	87
Fig. 78	剣塚第1号瓦窯跡・溝状遺構出土熨斗瓦その他拓影(石松・高橋実測・製図) 折りこみ	
Fig. 79	剣塚第1号瓦窯跡・溝状遺構出土丸・平瓦拓影(石松・高橋実測・製図)……………	88
Fig. 80	剣塚第1号瓦窯跡・溝状遺構出土鉄器実測図(石山実測・製図)……………	89
Fig. 81	第1・2号木棺墓実測図(内田・山崎実測, 中間製図)……………	91
Fig. 82	第1号木棺墓副葬須恵器実測図(谷実測, 中間製図)……………	93
Fig. 83	第1号木棺墓使用釘実測図(中間実測・製図)……………	93
Fig. 84	第2号木棺墓出土土器・灰釉陶器実測図(中間・手柴実測, 中間製図)……………	94
Fig. 85	第2号木棺墓使用釘実測図(中間実測・製図)……………	95
Fig. 86	第3・4号木棺墓実測図(中牟田・次郎丸・佐々木実測, 中間製図)……………	97
Fig. 87	第3号木棺墓副葬土器実測図(中間実測・製図)……………	97
Fig. 88	第3号木棺墓使用釘実測図(中間実測・製図)……………	98
Fig. 89	第4号木棺墓出土土器・白磁実測図(亀井実測, 中間製図)……………	99
Fig. 90	第4号木棺墓使用釘・出土石器実測図(中間実測・製図)……………	100
Fig. 91	第5・6・7号木棺墓実測図(中牟田実測, 中間製図)……………	101
Fig. 92	第5号木棺墓出土土器実測図(中間実測・製図)……………	102
Fig. 93	第5号木棺墓使用釘及び出土鏃・刀子実測図(中間実測・製図)……………	103
Fig. 94	第6号木棺墓出土土器実測図(手柴実測, 中間製図)……………	104
Fig. 95	第6号木棺墓使用釘実測図(中間実測・製図)……………	104
Fig. 96	第1号墳東裾出土釘実測図(中間実測・製図)……………	105
Fig. 97	第1・2号土塚墓実測図(中間実測・製図)……………	106
Fig. 98	第1号土塚墓出土土器実測図(手柴実測, 中間製図)……………	107
Fig. 99	第3・4・5号土塚墓実測図(内田・副島・瀬戸・中牟田実測, 中間製図)……………	108
Fig. 100	第1・2号火葬墓実測図(佐々木・杉野・山崎実測, 宮崎製図)……………	112
Fig. 101	第1号火葬墓出土土器実測図(中間・手柴実測, 中間製図)……………	113
Fig. 102	第1・2号円形周溝(墓)実測図(中牟田・山崎・杉野実測, 宮崎製図)……………	115
Fig. 103	第6・8号土塚出土鉄器・青銅製品・石帯実測図(中間実測・製図)……………	116

Fig. 104	第1号竖穴式小石室（二神製図）……………	117
Fig. 105	表土・1号墳盛土・周溝出土土師器・火舎・土鍋・青磁・白磁実測図 （中間・手柴・木林実測，中間製図）……………	118
Fig. 106	表土中出土近世陶器実測図（中間実測・製図）……………	121
Fig. 107	木棺墓・土坑墓・表土中出土土師器の法量（中間作成）……………	122
Fig. 108	第2～5号木棺墓棺復元図（中間作成）……………	124
Fig. 109	第1号火葬墓副葬土師器の法量（中間作成）……………	125

（下 巻）

Fig. 110	弥生時代遺構配置図（中間作成）……………	127
Fig. 111	住居跡配置図（中間作成）……………	128
Fig. 112	第1号住居跡実測図（中牟田実測，宮崎製図）……………	131
Fig. 113	第1号住居跡出土土器・石器実測図（中間・平島実測，中間製図）……………	132
Fig. 114	第2号住居跡実測図（中牟田実測，宮崎製図）……………	133
Fig. 115	第2号住居跡出土土器実測図（中間実測・製図）……………	134
Fig. 116	第2号住居跡出土土玉・石器実測図（三浦・中間・平島・多々良実測，平ノ内製図）…	135
Fig. 117	第3号住居跡実測図（山崎・内田実測，宮崎製図）……………	137
Fig. 118	第3号住居跡出土砥石実測図（平島実測，中間製図）……………	137
Fig. 119	第4号住居跡出土土器実測図（中間実測・製図）……………	137
Fig. 120	第4号住居跡実測図（内田実測，宮崎製図）……………	138
Fig. 121	第5号住居跡実測図（内田・山崎実測，宮崎製図）……………	139
Fig. 122	第5号住居跡出土土器実測図（中間実測・製図）……………	139
Fig. 123	第5号住居跡出土石器実測図（平島・中間実測，平ノ内製図）……………	140
Fig. 124	第6号住居跡実測図（内田実測，宮崎製図）……………	141
Fig. 125	第6号住居跡出土土器・石器・鉄器実測図（中間・平島実測，中間製図）……………	142
Fig. 126	第7号住居跡出土砥石実測図（中間実測・製図）……………	143
Fig. 127	第7号住居跡実測図（笹林・山崎実測，宮崎製図）……………	144
Fig. 128	第7号住居跡出土土器・石器実測図（中間実測・製図）……………	145
Fig. 129	第7号住居跡出土石器実測図（平島・中間実測，平ノ内製図）……………	146
Fig. 130	第8号住居跡出土土器・石器実測図（中間・平島実測，中間・平ノ内製図）……………	147
Fig. 131	第8号住居跡実測図（笹林実測，宮崎製図）……………	148
Fig. 132	第9号住居跡実測図（中牟田・次郎丸実測，宮崎製図）……………	149
Fig. 133	第10号住居跡実測図（石山・中牟田実測，宮崎製図）……………	150
Fig. 134	第10号住居跡出土土器実測図（中間実測・製図）……………	151
Fig. 135	第10号住居跡出土石器実測図（中間実測，平ノ内製図）……………	152
Fig. 136	袋状竖穴配置図（中間作成）……………	154

Fig. 137	第1号袋状竖穴出土土器・石器実測図（中間実測・製図）	158
Fig. 138	第1・2・3号袋状竖穴実測図（杉野・山崎・中牟田実測，中間製図）	159
Fig. 139	第2号袋状竖穴出土土器・石器実測図（中間・平島実測，中間製図）	160
Fig. 140	第4号袋状竖穴出土土器実測図（中間実測・製図）	161
Fig. 141	第3号袋状竖穴出土石器実測図（中間実測・製図）	162
Fig. 142	第5号袋状竖穴出土土器・石器実測図（中間・平島実測，中間製図）	163
Fig. 143	第4・5・6号袋状竖穴実測図（内田・佐々木実測，中間製図）	164
Fig. 144	第6号袋状竖穴出土土器・土製品実測図（中間実測・製図）	165
Fig. 145	第6号袋状竖穴出土石器実測図（中間・平島実測，平ノ内製図）	167
Fig. 146	第7・8号袋状竖穴実測図（山崎実測，中間製図）	168
Fig. 147	第7号袋状竖穴出土石器実測図（平島実測，中間製図）	169
Fig. 148	第8号袋状竖穴出土土器・石器実測図（中間・平島実測，中間製図）	169
Fig. 149	第11号袋状竖穴出土土器実測図（中間実測・製図）	170
Fig. 150	第11・12号袋状竖穴実測図（次郎丸・中牟田実測，中間製図）	171
Fig. 151	第13・14号袋状竖穴実測図（中間・次郎丸・中牟田実測，中間製図）	172
Fig. 152	第13号袋状竖穴出土土器実測図（中間実測・製図）	173
Fig. 153	第13号袋状竖穴出土石器実測図（平島・中間実測，平ノ内製図）	174
Fig. 154	第15・16・17号袋状竖穴実測図（次郎丸・中牟田実測，中間製図）	175
Fig. 155	第16号袋状竖穴出土土器・石器実測図（中間・平島実測，中間製図）	176
Fig. 156	第17号袋状竖穴出土土器実測図（中間実測・製図）	176
Fig. 157	第18・19号袋状竖穴実測図（中牟田実測，中間製図）	177
Fig. 158	第20号袋状竖穴出土土器実測図（その1）（中間実測・製図）	178
Fig. 159	第20号袋状竖穴出土土器・石器実測図（その2）（中間・平島実測，中間製図）	179
Fig. 160	第23号袋状竖穴出土土器実測図（中間実測・製図）	180
Fig. 161	第24号袋状竖穴出土土器実測図（中間実測・製図）	180
Fig. 162	第20・21・22・23号袋状竖穴実測図（中牟田・石山・次郎丸実測，中間製図）	181
Fig. 163	第24号袋状竖穴実測図（萩原・秀島実測，中間製図）	182
Fig. 164	第25号袋状竖穴出土土器・玉実測図（中間・平島実測，中間製図）	182
Fig. 165	第26号袋状竖穴出土土器・石器実測図（中間・平島実測，中間製図）	183
Fig. 166	第26号袋状竖穴実測図（萩原・次郎丸・内藤実測，中間製図）	184
Fig. 167	第27号袋状竖穴出土土器実測図（中間実測・製図）	185
Fig. 168	第27号袋状竖穴出土石器実測図（平島・中間実測，平ノ内製図）	186
Fig. 169	第27号袋状竖穴実測図（中牟田・内藤・平島実測，中間製図）	折りこみ
Fig. 170	第28号袋状竖穴出土土器・石器実測図（中間実測・製図）	188
Fig. 171	第28・33号袋状竖穴実測図（次郎丸・萩原実測，中間製図）	189
Fig. 172	第29号袋状竖穴出土土器・石器実測図（中間・平島実測，中間製図）	190
Fig. 173	第29・30号袋状竖穴実測図（萩原・秀島・中牟田実測，中間製図）	191

Fig. 174	第30号袋状竖穴出土土器・石器実測図（中間・平島実測，中間製図）	192
Fig. 175	第31号袋状竖穴出土土器・石器実測図（中間・平島実測，中間製図）	194
Fig. 176	第31・35号袋状竖穴実測図（三国・次郎丸・中牟田実測，中間製図）	折りこみ
Fig. 177	第32号袋状竖穴出土土器実測図（中間実測・製図）	195
Fig. 178	第32号袋状竖穴出土投弾形土製品実測図（中間実測・製図）	195
Fig. 179	第32号袋状竖穴実測図（次郎丸・内藤・中牟田実測，中間製図）	196
Fig. 180	第34号袋状竖穴出土土器実測図（その1）（中間実測・製図）	197
Fig. 181	第34号袋状竖穴実測図（佐々木実測，中間製図）	折りこみ
Fig. 182	第34号袋状竖穴出土土器実測図（その2）（中間実測・製図）	200
Fig. 183	第34号袋状竖穴出土土器実測図（その3）（中間実測・製図）	202
Fig. 184	第34号袋状竖穴出土土器実測図（その4）（中間実測・製図）	204
Fig. 185	第34号袋状竖穴出土土器実測図（その5）（中間実測・製図）	206
Fig. 186	第34号袋状竖穴出土土器実測図（その6）（中間実測・製図）	207
Fig. 187	第34号袋状竖穴出土石器実測図（その1）（平島実測，中間製図）	208
Fig. 188	第34号袋状竖穴出土石器実測図（その2）（平島実測，平ノ内製図）	209
Fig. 189	第35号袋状竖穴出土土器実測図（中間実測・製図）	210
Fig. 190	第36号袋状竖穴出土土器・石器実測図（中間実測・製図）	211
Fig. 191	第37号袋状竖穴出土土器実測図（中間実測・製図）	212
Fig. 192	第36号袋状竖穴実測図（中牟田実測，中間製図）	213
Fig. 193	第39号袋状竖穴出土土器・石器実測図（中間実測・製図）	213
Fig. 194	第40号袋状竖穴出土土器実測図（中間実測・製図）	213
Fig. 195	第37・38号袋状竖穴実測図（次郎丸実測，中間製図）	214
Fig. 196	第39・40号袋状竖穴実測図（三隅・内藤・平島実測，中間製図）	215
Fig. 197	第41号袋状竖穴実測図（平島・神代・福井・三隅実測，中間製図）	216
Fig. 198	第41号袋状竖穴出土土器・石器実測図（中間・平島実測，中間製図）	217
Fig. 199	第42号袋状竖穴実測図（福井・神代・三隅実測，中間製図）	218
Fig. 200	第42号袋状竖穴出土土器・石器実測図（中間・平島実測，中間製図）	219
Fig. 201	第43号袋状竖穴出土土器実測図（中間実測・製図）	219
Fig. 202	第43号袋状竖穴出土石器実測図（平島実測，中間・関製図）	220
Fig. 203	第43号袋状竖穴実測図（次郎丸実測，中間製図）	221
Fig. 204	第44号袋状竖穴出土土器実測図（中間実測・製図）	222
Fig. 205	第45号袋状竖穴出土石器実測図（中間実測・製図）	222
Fig. 206	第46号袋状竖穴出土土器実測図（中間実測・製図）	222
Fig. 207	第44・47号袋状竖穴実測図（中牟田・佐々木・神代実測，中間製図）	折りこみ
Fig. 208	第45号袋状竖穴実測図（末永・中牟田・次郎丸実測，中間製図）	223
Fig. 209	第46号袋状竖穴実測図（中間・神代実測，中間製図）	224
Fig. 210	第47号袋状竖穴出土土器実測図（中間実測・製図）	224

Fig. 211	第48・49号袋状竖穴実測図（中牟田・次郎丸・長野実測，中間製図）	225
Fig. 212	第48号袋状竖穴出土土器・石器実測図（中間・平島実測，中間製図）	226
Fig. 213	第50・51・52号袋状竖穴実測図（佐々木・中牟田・中間・高倉・次郎丸実測，中間製図）	227
Fig. 214	第50号袋状竖穴出土土器実測図（中間実測・製図）	228
Fig. 215	第52号袋状竖穴出土土器実測図（中間実測・製図）	228
Fig. 216	第51号袋状竖穴出土土器・石器実測図（平島・中間実測，中間製図）	229
Fig. 217	弥生土塚墓配置図（中間作成）	230
Fig. 218	第1号土塚墓出土石器実測図（平島実測，平ノ内製図）	232
Fig. 219	第3号土塚墓副葬小壺実測図（中間実測・製図）	232
Fig. 220	第1・2号弥生土塚墓実測図（井上・高田実測，中間製図）	233
Fig. 221	第3・5・6号弥生土塚墓実測図（栗原・中間・内藤・大平実測，中間製図）	234
Fig. 222	第3号土塚墓出土石器実測図（平島実測，平ノ内製図）	235
Fig. 223	第4号土塚墓副葬小壺実測図（中間実測・製図）	235
Fig. 224	第4号土塚墓出土管玉実測図（中間実測・製図）	235
Fig. 225	第4・7・8号弥生土塚墓実測図（森田・次郎丸・中間実測，中間製図）	236
Fig. 226	第5号土塚墓出土土器実測図（中間実測・製図）	237
Fig. 227	第9・10号弥生土塚墓実測図（菊地実測・中間製図）	238
Fig. 228	第11号弥生土塚墓実測図（笹林・山崎実測，中間製図）	239
Fig. 229	第12・13号弥生土塚墓実測図（杉野実測，中間製図）	240
Fig. 230	第9号土塚墓出土磨製石鏃実測図（中間実測，平ノ内製図）	241
Fig. 231	甕棺墓配置図（中間作成）	242
Fig. 232	第1号甕棺実測図（中間実測・製図）	244
Fig. 233	第1・14号甕棺墓副葬小壺実測図（中間実測・製図）	245
Fig. 234	第2号甕棺墓出土石鏃実測図（平島実測，中間製図）	245
Fig. 235	第2・5・6・8号甕棺実測図（中間実測・製図）	246
Fig. 236	第3・4・7・9号甕棺実測図（中間実測・製図）	247
Fig. 237	第10・12・13・14号甕棺実測図（中間実測・製図）	250
Fig. 238	第15・16・17号甕棺実測図（中間実測・製図）	252
Fig. 239	第15・16号甕棺墓副葬小壺実測図（中間実測・製図）	254
Fig. 240	第18・番外号甕棺実測図（中間実測・製図）	255
Fig. 241	第1号甕棺墓実測図（井上・福井・石山実測，中間製図）	257
Fig. 242	第2・3・4・5号甕棺墓実測図（井上・福井・石山・末永・神代実測，中間製図）	258
Fig. 243	第6・7・8・9号甕棺墓実測図（中牟田・石山・金・三国実測，中間製図）	259
Fig. 244	第10・11・12号甕棺墓実測図（三国・石山・中牟田実測，中間製図）	260
Fig. 245	第13・14・15号甕棺墓実測図（中間実測・製図）	261
Fig. 246	第16・17・18号甕棺墓実測図（石山・栗原実測，中間製図）	262
Fig. 247	石蓋土塚墓・石棺墓配置図（中間作成）	263

Fig. 248	第1・2号石蓋土坑墓実測図（高田・萩原・井上実測，中間製図）……………	264
Fig. 249	第3号箱式石棺墓実測図（次郎丸・栗林・立石・原田実測，中間製図）……………	266
Fig. 250	古剣塚1号墳旧地表及びPit中出土土器実測図（中間実測・製図）……………	268
Fig. 251	1号墳墳丘下弥生時代Pit群実測図（次郎丸実測，中間製図）……………	折りこみ
Fig. 252	住居跡群近辺Pit中出土遺物実測図（中間・平島・多々良実測，中間・平ノ内製図）	269
Fig. 253	第1・2・3号土坑出土土器実測図（平島実測，平ノ内製図）……………	269
Fig. 254	古剣塚1号墳墳丘下旧地表及びPit中出土土器実測図 （平島・重松・中間実測，平ノ内製図）……………	270
Fig. 255	第9～12号土坑出土土器・土器実測図（平島・多々良・中間実測，中間・平ノ内製図）	271
Fig. 256	第17～20号土坑出土遺物実測図（中間・重松・平島実測，中間・平ノ内製図）……………	272
Fig. 257	第21～30号土坑出土土器・石器実測図（平島・中間実測，中間・平ノ内製図）……………	273
Fig. 258	表土・1号墳盛土・周溝内出土弥生式土器実測図（その1）（中間実測・製図）……………	276
Fig. 259	1号墳盛土周溝内出土弥生式土器実測図（その2）（中間実測・製図）……………	277
Fig. 260	表面採集石器実測図（その1）（平島・重松・中間・多々良実測，平島製図）……………	279
Fig. 261	表面採集石器実測図（その2）（平島・重松・中間・山本実測，平島製図）……………	281
Fig. 262	表面採集石器実測図（その3）（平島実測・製図）……………	283
Fig. 263	表面採集石器（その4）（平島実測，多々良製図）……………	284
Fig. 264	表面採集石器実測図（その5）（平島・中間実測，多々良製図）……………	285
Fig. 265	表面採集石器実測図（その6）（平島・多々良実測，平島製図）……………	286
Fig. 266	表面採集石器実測図（その7）（平島実測・製図）……………	287
Fig. 267	表面採集石器実測図（その8）（中間実測・製図）……………	288
Fig. 268	表面採集石器実測図（その9）（平島・中間・三浦実測，平島製図）……………	289
Fig. 269	表面採集石器実測図（その10）（平島・三浦・中間実測，中間・平島製図）……………	291
Fig. 270	表面採集石器実測図（その11）（中間・平島実測，中間製図）……………	292
Fig. 271	表面採集石器実測図（その12）（平島実測，中間製図）……………	293
Fig. 272	表面採集石器実測図（その13）（中間・平島実測，平ノ内製図）……………	294
Fig. 273	表面採集石器実測図（その14）（平島・中間・鳥井実測，中間製図）……………	295
Fig. 274	表面採集石器実測図（その15）（平島実測，中間製図）……………	296
Fig. 275	表面採集石製品・土製品実測図（中間・平島実測，平ノ内製図）……………	297
Fig. 276	剣塚遺跡北方水田採掘中採集の弥生式土器実測図（中間実測・製図）……………	299
Fig. 277	袋状竅穴の床面標高と床面積（中間作成）……………	300
Fig. 278	袋状竅穴の底床面長径と短径（中間作成）……………	301
Fig. 279	袋状竅穴の復元深さと床面積（中間作成）……………	302
Fig. 280	打製石鏃の石質と重さ（中間作成）……………	308
Fig. 281	打製石鏃の長さとは幅（中間作成）……………	308
Fig. 282	剣塚出土前期壺の法量（中間作成）……………	315
Fig. 283	剣塚出土前期甕の法量（中間作成）……………	316

表 目 次

(上 卷)

	頁
Tab. 1 劍塚第1号窯窯内出土土器法量表(森田作成)	85
Tab. 2 平安時代木棺墓一覽表(中間作成)	90
Tab. 3 第1号木棺墓使用釘一覽表(中間作成)	92
Tab. 4 第2号木棺墓使用釘一覽表(中間作成)	95・96
Tab. 5 第3号木棺墓使用釘一覽表(中間作成)	98・99
Tab. 6 第4号木棺墓使用釘一覽表(中間作成)	100
Tab. 7 第4号木棺墓出土石器一覽表(平島作成)	100
Tab. 8 第5号木棺墓使用釘一覽表(中間作成)	103・104
Tab. 9 第6号木棺墓使用釘一覽表(中間作成)	105

(下 卷)

Tab. 10 弥生時代住居跡一覽表(中間作成)	129
Tab. 11 第1号住居跡出土石器一覽表(平島作成)	131
Tab. 12 第2号住居跡出土玉・石器一覽表(平島作成)	136
Tab. 13 第3号住居跡出土石器一覽表(平島作成)	136
Tab. 14 第5号住居跡出土石器一覽表(平島作成)	139
Tab. 15 第6号住居跡出土石器一覽表(平島作成)	143
Tab. 16 第7号住居跡出土石器一覽表(1)(平島作成)	146
Tab. 17 第7号住居跡出土石器一覽表(2)(平島作成)	147
Tab. 18 第8号住居跡出土石器一覽表(平島作成)	149
Tab. 19 第10号住居跡出土石器一覽表(平島作成)	153
Tab. 20 袋状竪穴一覽表(中間作成)	155
Tab. 21 第1号袋状竪穴出土石器一覽表(平島作成)	158
Tab. 22 第2号袋状竪穴出土石器一覽表(平島作成)	161
Tab. 23 第3号袋状竪穴出土石器一覽表(平島作成)	161
Tab. 24 第5号袋状竪穴出土石器一覽表(平島作成)	162
Tab. 25 第6号袋状竪穴出土石器一覽表(平島作成)	166
Tab. 26 第7号袋状竪穴出土石器一覽表(平島作成)	168
Tab. 27 第8号袋状竪穴出土石器一覽表(平島作成)	170
Tab. 28 第13号袋状竪穴出土石器一覽表(平島作成)	174

Tab. 29	第16号袋状竖穴出土石器一覧表（平島作成）	176
Tab. 30	第20号袋状竖穴出土石器一覧表（平島作成）	180
Tab. 31	第25号袋状竖穴出土石器一覧表（平島作成）	183
Tab. 32	第26号袋状竖穴出土石器一覧表（平島作成）	183
Tab. 33	第27号袋状竖穴出土土製品・石器一覧表（平島作成）	188
Tab. 34	第28号袋状竖穴出土石器一覧表（平島作成）	189
Tab. 35	第29号袋状竖穴出土石器一覧表（平島作成）	192
Tab. 36	第30号袋状竖穴出土石器一覧表（平島作成）	193
Tab. 37	第31号袋状竖穴出土石器一覧表（平島作成）	193
Tab. 38	第34号袋状竖穴出土石器一覧表（平島作成）	209
Tab. 39	第36号袋状竖穴出土石器一覧表（平島作成）	212
Tab. 40	第39号袋状竖穴出土石器一覧表（平島作成）	212
Tab. 41	第41号袋状竖穴出土石器一覧表（平島作成）	217
Tab. 42	第42号袋状竖穴出土石器一覧表（平島作成）	219
Tab. 43	第43号袋状竖穴出土石器一覧表（平島作成）	220
Tab. 44	第45号袋状竖穴出土石器一覧表（平島作成）	223
Tab. 45	第48号袋状竖穴出土石器一覧表（平島作成）	226
Tab. 46	第51号袋状竖穴出土石器一覧表（平島作成）	228
Tab. 47	弥生土坟墓一覧表（中間作成）	231
Tab. 48	第1号土坟墓出土石器一覧表（平島作成）	232
Tab. 49	第3号土坟墓出土石器一覧表（平島作成）	235
Tab. 50	第4号土坟墓出土管玉一覧表（中間作成）	237
Tab. 51	第9号土坟墓出土石器一覧表（平島作成）	241
Tab. 52	甕棺墓一覧表（中間作成）	242
Tab. 53	第2号甕棺墓出土石器一覧表（平島作成）	245
Tab. 54	石蓋土坟墓一覧表（中間作成）	265
Tab. 55	古剣塚1号墳々丘下旧地表及びPit中出土石器一覧表（平島作成）	273
Tab. 56	住居跡群近辺Pit中出土石器一覧表（平島作成）	273
Tab. 57	第1・2・3号土塚出土石器一覧表（平島作成）	274
Tab. 58	第9～12号土塚出土石器一覧表（平島作成）	274
Tab. 59	第17～20号土塚出土石器一覧表（平島作成）	274
Tab. 60	第21～30号土塚出土石器一覧表（平島作成）	274
Tab. 61	表面採集石鏃一覧表（平島作成）	278
Tab. 62	表面採集ポイント・スクレイパー一覧表（平島作成）	280
Tab. 63	表面採集石錐一覧表（平島作成）	286
Tab. 64	表面採集石核・刃器一覧表（平島作成）	286
Tab. 65	表面採集スクレイパー一覧表（平島作成）	288

Tab. 66	表面採集石斧・石のみ一覧表（平島作成）	290
Tab. 67	表面採石包丁一覧表（平島作成）	294
Tab. 68	表面採集砥石一覧表（平島作成）	296
Tab. 69	表面採集磨石一覧表（平島作成）	297
Tab. 70	表面採集石製品・土製品一覧表（平島作成）	298
Tab. 71	打製石鏃分類表（その1）（中間・関作成）	306
Tab. 72	打製石鏃分類表（その2）（中間・関作成）	307
Tab. 73	スクレイパー・使用された剝片一覧表（平島作成）	309
Tab. 74	石器・不使用剝片の総数・総重量による比率一覧表（簗田・藤井・木村・関作成）	310
Tab. 75	磨製石器一覧表（平島作成）	311
Tab. 76	弥生前期～中期初頭壘形土器分類表（中間作成）	317

I 調査の経過

本書で調査結果を報告する剣塚遺跡群は、時期的には弥生時代から歴史時代にわたり、遺構としては、住居跡・生産遺跡・墳墓等の多種・多様なものがあり、県内でも最大規模の複合遺跡の一つとすることができる。無論、連綿として営なまれたものではなく、その間に何回かの断絶はあるが、この低台地は生活の場あるいは死後の安息の地としてくり返しくり返し利用されてきたのである。

当遺跡群は、本県に係わる九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財のうちの第33～35の三地点に該当しており、当初は各100・140・800㎡の計1,040㎡が調査予定面積として挙げられていた。このうち第33地点は剣塚第2号墳、第35地点は同第1号墳にあたり、第34地点は須恵器散布地とされていた。

昭和48年度は、筑紫野工事区での建設が急ピッチで進みつつあり、しかもこの区間が県内でも遺跡密集度が特に高い筑紫野市および筑紫郡太宰府町にもまたがることから、調査の進捗が急がれた。この間の経緯については、九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳに詳述しているので、それに拠りたい。

従って、6月10日に粕屋郡古賀町の原口A1号墳の調査を了えた筆者らは、直ちに剣塚遺跡群調査についての諸般の準備を行ない、調査予定面積が1,100㎡不足であることから調査所要期間を二ヶ月とし、同月15日から伐採作業を開始した。

剣塚第1号墳については、円墳と前方後円墳との二つの見解があったが、伐採直後に前方後円墳であることが判明した。けれども後円部に大規模な陥没があり調査は比較的容易と判断し、墳丘測量を行なうとともに遺構の存在が予測される第1号墳と第2号墳との間の台地平坦面にグリッドを設定して耕作土の除去を開始した。この結果、剣塚第3号墳をはじめ、さらには弥生時代の住居跡・貯蔵穴等が続々と発見され、早くも調査期間の延長は必至の状況となった。

一方、剣塚第1号墳の墳丘については、トレンチ設定による断面観察を主眼とする調査計画を立てたが、当初予定の調査期間（2ヶ月）と竹根の除去ならびに予測されるトレンチの深さ等の排土作業上の困難度とからユンボの導入を決意した。墳丘の長軸に沿って1本、これと直交して前方部・後円部に各1本を設定し、オペレーターには地山に若干喰いこんでも可と指示

I 調査の経過

した。排土を墳丘の各所に積み上げつつまたたくまに掘削は進んだが、前方部前縁近くに至って箱式石棺の蓋石（古剣塚第1号墳第1号石棺）が壁面に露出したのに気づいた。この時点では、墳丘下に弥生時代の石棺群が存在するので、墳丘断面実測後盛土を除去して再調査する必要があると判断した。その後ユンボにより掘削した断面を仔細に観察した結果、盛土下の3ヶ所に腐植土に覆われた盛土が存在することに気づき、ユンボ作業時の監督の不十分さが悔まれた。そこで、再度計画を変更し、墳丘断面の調査終了後に再びユンボ・ブルを導入して腐植土層の約30cm上位までの盛土部分の除去を行ない、この後は通常の人力による排土作業を行った結果、接続して営なまれた5基の方墳（古剣塚第1～5号墳）を確認するにいたったのである。

この間、後円部石室発掘の過程で、本墳築造時の墓壇および墓道掘削作業により寸断された甕棺・木棺の存在が確認されており、計3期（後に歴史時代木棺墓をも確認）にわたる墓地在重複して営なまれたことが明らかになり、当遺跡の重要性がますます痛感された。

そこで、日本道路公団福岡建設局々長に対して調査期間の大巾な延長を申し入れるとともに、剣塚遺跡群の南半にあたるこれらの地域の取扱いについての協議を開始した。当課では、古剣塚古墳群が県内では稀有な方墳から形成されており、しかもその下に弥生時代前期の甕棺・木棺墓多数が営なまれているという重要さからみて、古剣塚古墳群の墳丘を露出させた段階での現状凍結を強く要望した。当時既に当遺跡の前後では盛土・橋脚造りが進行しており、路線変更による現状保存は無理な状況であったが、工法上の変更つまり予定では削平される当遺跡部分にスパンの長い高架橋を導入することによって橋脚下にこれらの遺構群を保存したいとしたのである。これは完成路面高の変更につながりその影響は前後数kmに波及することが予測されたが、技術的には可能であるとの判断から、公団側に路面高および工法についての設計変更と所要経費の試算を求めた。また調査担当者間で話し合った結果、現状保存についての協議が続いている間は、古剣塚古墳群の内部調査は行なわないこととした。しかし、諸般の事情があり、当遺跡の調査を全面的に中断したのではなく、この間はそれまで未発掘であった剣塚第1号墳の周湟の調査に充てている。

数回にわたり現地での検討・協議を行ない、またこの間に県文化財専門委員の諸先生に現地での指導・助言をいただいたが、福岡建設局の昭和48年12月7日付の最終的な回答は下記のとおりである。

「古墳保存のための工法変更は、

1. 供用開始の大巾な遅れとこれに伴う莫大な経済的損失
2. 巨額（直接工事費約12億円）の工事費の増加
3. 実施計画の変更の困難性

から、不可能といわざるを得ず、当公団といたしましては、剣塚古墳の重要性は認識いたしておりますが、古墳の現状保存はいたしかねます。」

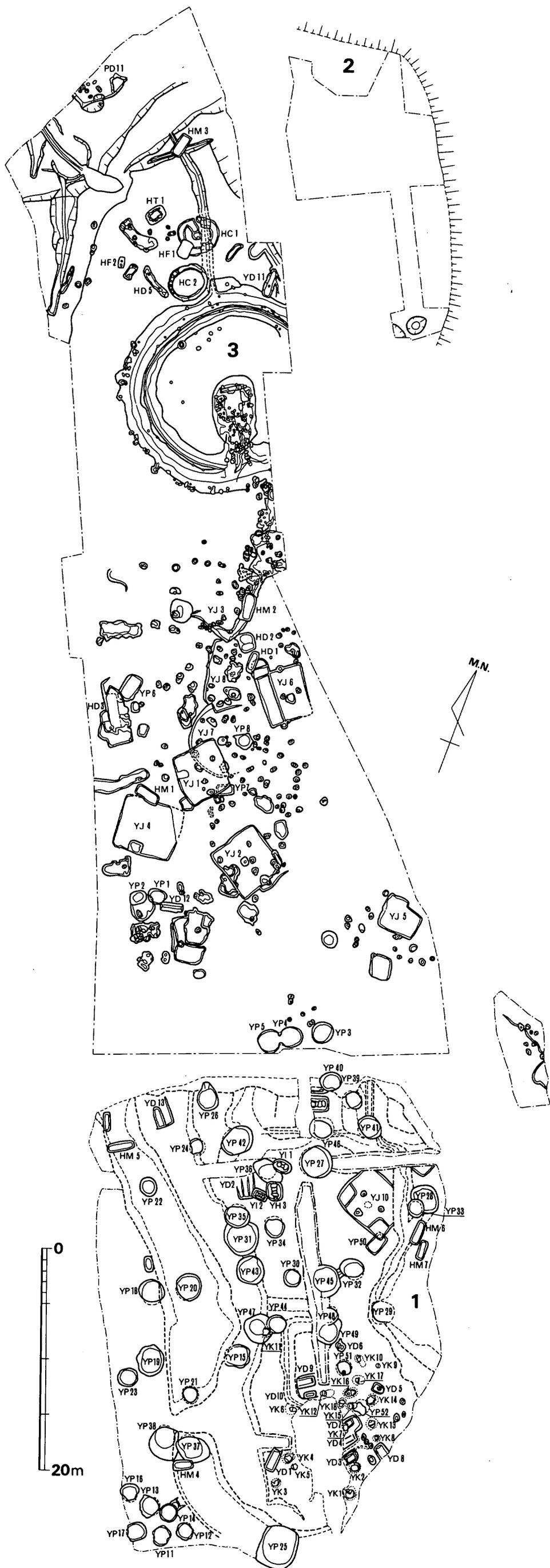


Fig. 1 剣塚遺跡群全体図 (縮尺 1/400)

「調査期間を昭和49年3月末を限度として延長することは止むを得ないものと考えています。」(抄録)

結果として、当課はこの回答にそって剣塚遺跡群の全面発掘を行ない、調査対象面積は計7,120㎡に達し、下記のと通りの多種多様な遺構を記録保存するに至った。

1. 弥生時代

住居跡 (YJ)	10
袋状竪穴 (YP)	50
土塚墓 (YD)	13
甕棺墓 (YK)	18
石蓋土塚墓 (YI)	2
箱式石棺墓 (YH)	1

2. 古墳時代

古剣塚第1～5号墳	
剣塚第1～3号墳	
住居跡 (PD)	1

3. 歴史時代

瓦窯	1
溝状遺構	1
木棺墓 (HM)	7
土塚墓 (HD)	5
火葬墓 (HF)	2
円形周溝墓 (HC)	2
竪穴式小石室 (HT)	1

本遺跡についての調査期間ならびに調査関係者は下記のとおりである。

調査期間

自 昭和48年6月15日

至 昭和49年3月30日

総括

教 育 長	森田 實	教 育 次 長	西村 太郎
文 化 課 長	森 英俊	文化課課長技術補佐	藤井 功
文化課調査係長	松岡 史	文化課技術主査	鶴久 嗣郎

庶務

文化課庶務係長 (前任)	姫野 博	文化課庶務係長	前田 栄一
-----------------	------	---------	-------

I 調査の経過

文化課庶務主査 (兼任)	小川浩一郎	文化課庶務主査	師岡 満
文化課主事	滝 龍二	文化課嘱託	因 将太
調査			
文化課技師	石山 勲	文化課技師	川述 昭人
文化課技師	中間 研志		
調査補助員	次郎丸達朗	中牟田賢治	
	川述 公紀	瀬戸 孝司	
	内田 始	副島 源司	
	佐々木隆彦		
	福岡教育大学学生	佐賀大学学生	早稲田大学学生
	国学院大学学生	明治大学学生	鹿児島大学学生

報告書作成までの整理事業は、石山・中間がこれにあたり、下記諸君の協力・参加を得た。

遺物実測	関 晴彦	平ノ内幸治	
	平島勇夫	谷	
	木林万理子	多々良友博	
	重松絢子	三浦 亮	
	鳥井展石	手柴淳子	
トレース	平田倫子	二神和子	宮崎真理子
原稿清書・編集補助	原口留美子	簗田靖子	藤井節子
	木村スナエ	関 ミヨ子	米倉鈴子

Ⅱ 位置と環境

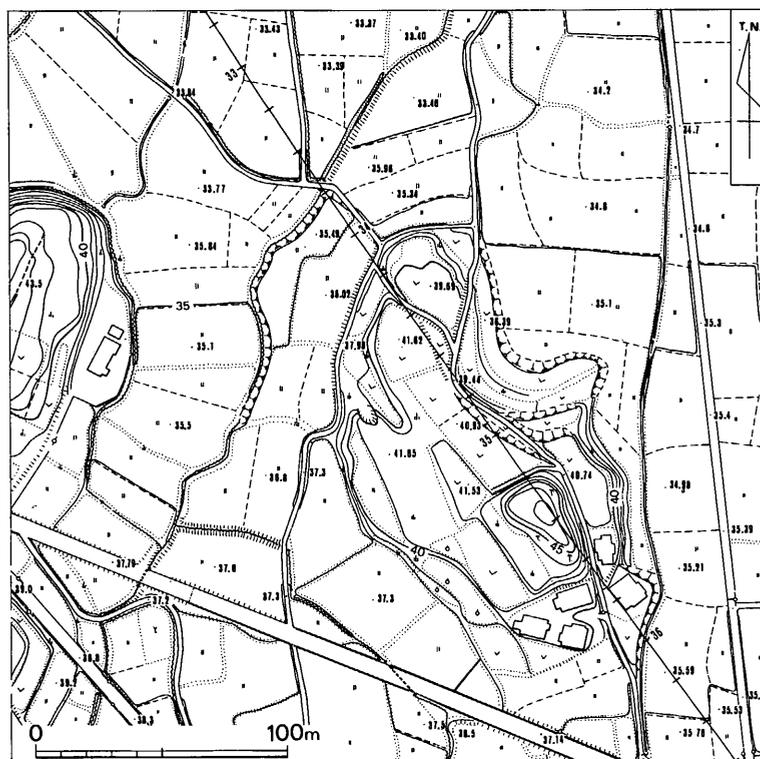


Fig. 2 剣塚遺跡群周辺地形図（縮尺 $\frac{1}{3000}$ ）

剣塚遺跡群は、福岡県筑紫野市大字杉塚に所在する（Fig. 2・3）。二日市地区は、隣接する筑紫郡太宰府町とともに、福岡平野と筑紫平野とを結ぶルートの南北にあたっており、北西には現春日市を中心とする「奴国」が、東には甘木・朝倉地区、南には小郡地区と、県内でも遺構・遺物の質量ともに図抜けた地域に狭まれており、これを扼する重要な地点となっている。

本遺跡群は、このルート南側の天拝山から派生する支脈が低く平地に向って突出した低台地上にある。山麓からは程よく離れ、かつ平地からの視界を遮ぎるものではなく、古墳の立体感を

II 位置と環境

強調するには格好の地といえ、築造にあたっての選地の確かさが偲ばれる。

周辺の遺構・遺物については、二日市地区が九州縦貫道建設工事に伴ない、また春日地区が新幹線車輛基地建設工事によって、それぞれ近年相次いで調査され、これらの報告書で再三にわたり述べられているので、ここではくり返さず、下記文献に拠られたい。

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告

Ⅳ	1974年
Ⅴ	1974年
Ⅵ	1975年
Ⅶ	1976年
Ⅷ	1977年
XⅥ	1977年
XⅧ	1977年

山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告

第1集	1976年
第2集	1976年
第3集	1977年
第4集	1977年

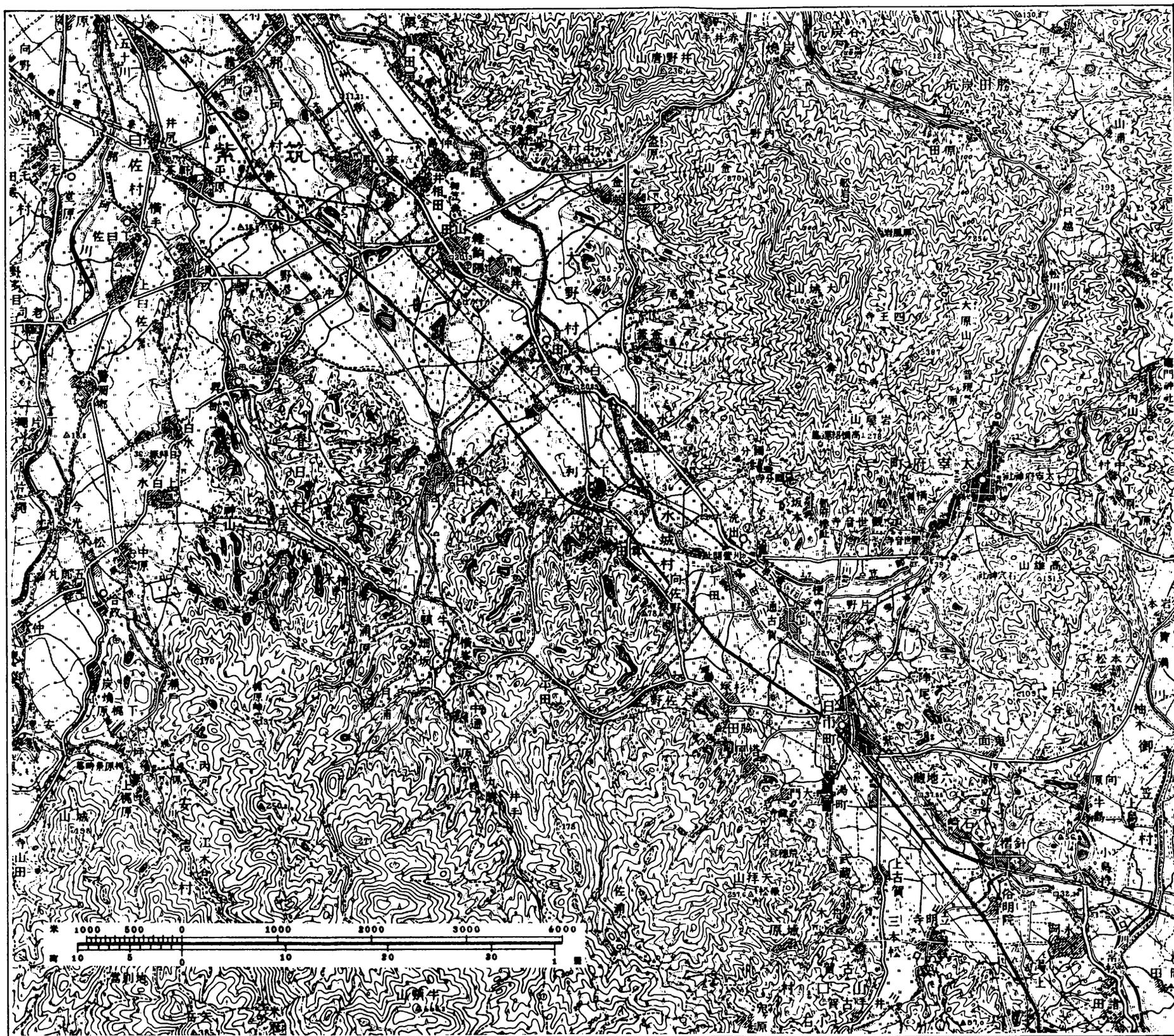


Fig. 3 剣塚遺跡群位置図 (縮尺 1/60000)

Ⅲ 古墳時代の遺構と遺物 1



Fig. 4 剣塚第1号墳丘測量図(縮尺 1/300)

Ⅲ-1 剣塚第1号墳

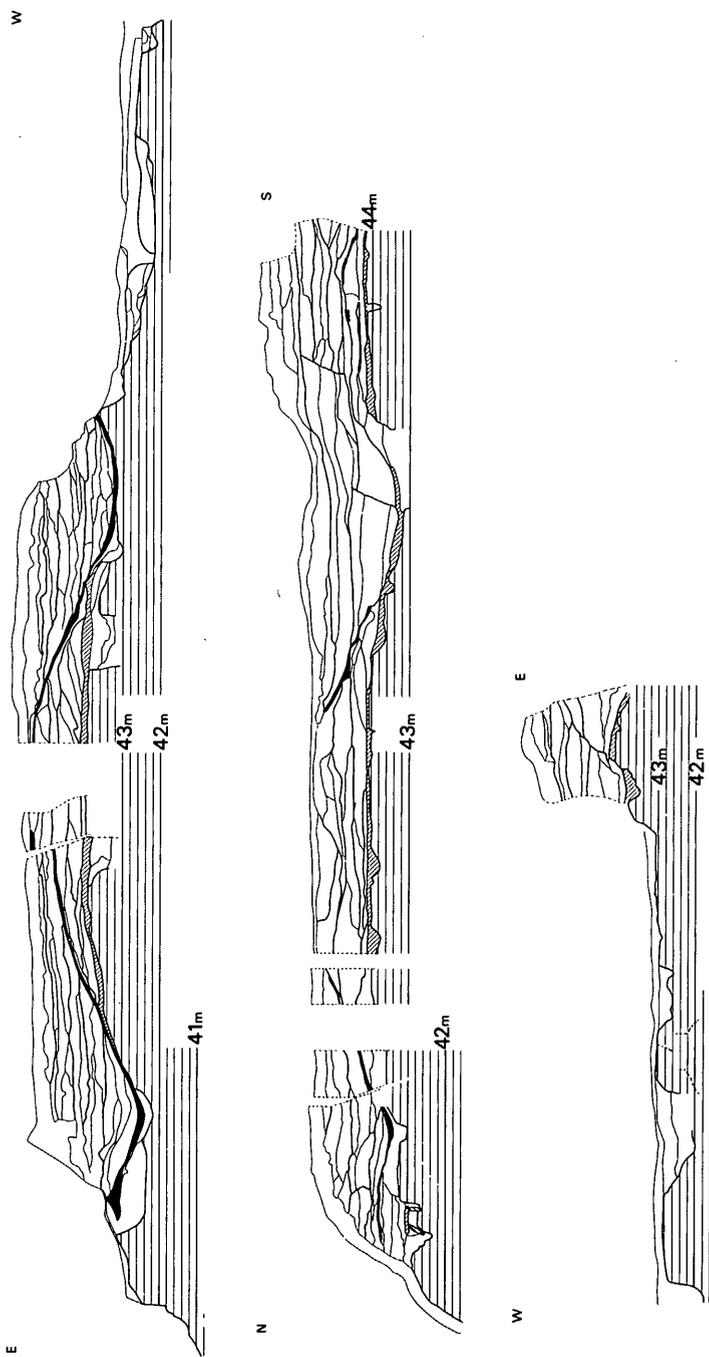


Fig. 5 剣塚第1号墳墳丘断面図（縮尺 1/200）

墳丘

本墳は、先述したごとく分布調査段階では前方後円墳と断定するには至らなかったが、伐採直後の観察で直ちに前方部を西北に向けると認められた。

発掘前の地形測量の結果による現状での規模は、全長約40m、前方部巾約23m、後円部径約15mで、前方部が異様なほど広く感じられ、また後円部は著しく変改せられて大規模な盗掘孔も認められた。前方部上面は畑として耕作されたために後円部墳頂よりも約1.3m低い平坦面となっていた。両側くびれ部も同様に耕作されており、極端に狭まっている。低台地に立地する本墳の墳丘構築上の最大の特徴は以下で述べるごとく、先行する5基の方墳の墳丘の高まりをそっくり利用して営なまれた点に

あり (Fig. 5), 調査時の世相を反映して „乗取り古墳“ と称される向もあったほどである。土盛にあたっては, 前方部前縁と後円部中核の形成に特に注意が払われている。

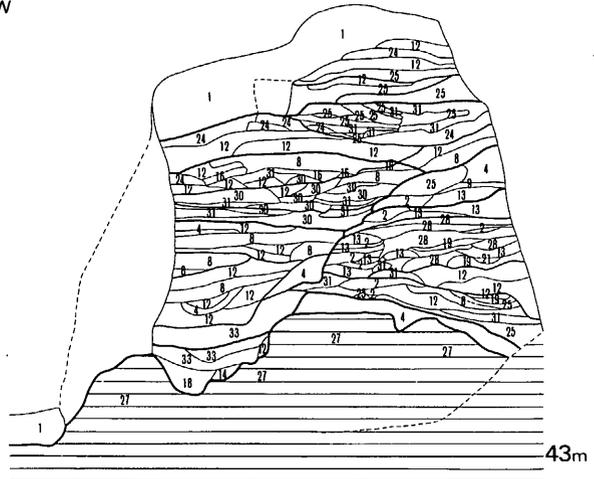
前方部前縁部では, まず古剣塚第1号墳の墳丘上にカルデラ状の土堤を作り, 次にこれと古剣塚第2号墳の高まりとの間を埋めるという作業をくり返している。

後円部では, 最初に古剣塚第3号墳墳丘北半部を削平し, 石室墓竈端から北側へ7.4mの範囲までを盛土・整地して, 北側を意識的に低くした第一段を設けている。段の北側法面には粘質土を多用して, 維持強化を図っている。この後さらに石室構築と平行して盛土がなされ, 北限を墓竈端から3.8mとする第2段が形成される。第2段南端上面の高さは約46.1mで, これは玄室周壁最上段の高さと一致すると推定され, 後円部の西側断面 (Fig. 6) でも, これより約20cm低いが同様な平坦部がある。

従って, 第2段は, 天井石を運搬・架構するための基礎としての意味を持ち, これ以上の盛土作業は, 天井石を覆い, 墳丘の形状・規模を整えるためのものであったと思われる。

1. 黒褐色土
2. 黄褐色砂質土
4. 暗茶褐色粘質土
8. 黒色粘質土
12. 淡赤黄褐色粘質土
13. 明黄褐色粘質土
14. 淡灰黒褐色粘質土
16. 炭化物混入淡灰黒褐色粘質土
18. 淡黄褐色砂質土
19. 黄色ブロック混入明灰黄褐色土
21. 赤黄褐色粘質土ブロック混入明黄褐色砂質土
24. 暗黄褐色粘質土
25. 黄色粘質土ブロック混入淡茶褐色土
30. 赤褐色粘質土

W



E

Fig. 6 剣塚第1号墳後円部西側東西断面図 (縮尺 1/60)

27. 明赤黄褐色砂質土
28. 暗赤黄褐色砂質土
31. 明茶褐色粘質土
33. 暗赤褐色粘質土

上記以外の側面の各部分は, いずれも後世の侵蝕を受けており明確ではないが, 現存部分では外縁にカルデラ状の土堤を設けた形跡はなく, 略水平位となるように5・6段階に分けて土盛りし, 仕上時にカットして調整したと思われる。

平面の規模については, その復元が稍繁雑であるので, 後述することとする。

後円部の現存最高部は47m強であり, 西側くびれ部付近からの比高は約5.8mである。

既述のように、第2段目が周壁最上段の高さに略一致するとすれば、天井石の厚さ等を勘案し $4.8\text{ m} + \alpha$ であったと思われる。従って当初の坵底からの比高は、約7 mと推定される。前方部の高さは不明であるが、古劍塚第2号墳の墳頂部がカットされていることから (Fig. 6 1) 後円部よりも高くする意志はなかったものと判断される。

周 湟

西側での遺存状態が良好である。通有の楕形とはならず、略墳丘側縁に沿った形で掘り割られている。後円部側面には、石室主軸と直交する形で上端巾2.3 mの陸橋部が掘り残されている。

現存巾は、くびれ部が約7 mと最大である。後円部では、内縁が完好な弧を描いて整齊であるのに対して外縁線は弧とならず、このため数値も3.2~4.6 mとバラツキが多い。

墳丘裾部が削り出されていることは明らかであるが、地形からみて、周湟が完周していたとは考えにくく、北側および東半では周湟外縁の立ち上りはなかったと思われる。ただし、土盛による外堤をめぐらすことは可能であるが、本墳にこれが築成されたか否かは不明である。

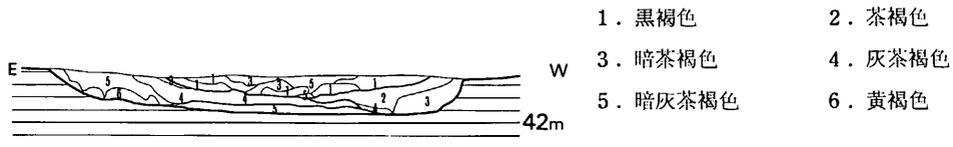


Fig. 7 劍塚第1号墳西湟断面図 (縮尺 1/60)

石 室 (Fig. 8)

ほぼ南東に開口する横穴式石室を主体とするが、大破しており、僅かに遺存する石材も墓壇壁に喰いこんでいる裏込め材 (Fig. 8 にて▲印を付す) を除けば全て原位置を移動している。一部にタガネ、矢の痕跡もあることから石材の入手先として本墳が選ばれたものと推定される。

墓壇は、古劍塚第3号墳墳丘裾部から掘りこまれており、地山部分の深さ1.8 m弱と深い。前・後の二部から成り、玄室・羨道が営まれたとみられる。玄室部分は、上端巾5 m、同長さ5.9~6.1 mと方形に近く、この前面に最大巾3.8 m、長さ2.5~2.8 mの不整形な羨道部分が付設され、さらに上端巾約2 mの切通状の墓道が接続している。注意されるのは、玄室部とそれ以前の羨道部・墓道部とが正接せず東偏している点である。因みに、玄室部の中軸線は墓道左壁下端線に略合致する (Fig. 9 参照)。

墓壇底は、石材破碎・搬出の際に攪乱を受け、凹凸著しく、僅かに玄室中央部が略当初の坵底面とみられるに過ぎないが、羨道部よりも6 cm程度低い。けれども、この程度の高低差は仕上時の土・礫による床面の仕上げにより充分カバーされ得るが、水抜き点では難点がある。

破砕されてはいるが、巾0.6m、長1.3mの石材が現存しており、周壁基部に大石が腰として配置されたことは明らかであるが、これを据えつけるための掘りこみが顕著ではない点特徴的である。腰石の据えつけに際しては、その基部に裏込め材を配している。これらはいずれも一端が稍尖って墓坑壁に喰いこんでおり、他端を腰石に接触させて稍斜めに置いた後に尖った側を叩いて補強したものである。

石室の規模は、上述の現状であるので推測を重ねる以外にはない（Fig. 9参照）。石室全長は、墓坑の規模からみて全長6.5m+ α とみられ、単室と推定される。

玄室の巾は、仮に奥壁腰石の厚さを0.6m、両側壁のそれを0.5mとすると、2.6m弱となろう。この場合の中軸線もまた墓道右壁の上端と下端との中間の位置に延びることとなる。一方、右側壁の延長線は、羨道部と墓道との接続部の下端線に大略一致する。

一方、現状では突出している墓坑西壁を石材抜取時に掘削によって変形を受けたものとすれば、玄室巾は2m強となる。この場合でも、中軸線は墓道左壁下端線に接近することになる。

玄室長は、西壁を当初のものとすれば3.4m前後に、右壁の1辺約1mの方形孔を生かせば2.7m前後、の二案が考えられる。

高さは、既述したとおり、天井石内面はほぼ4.6mであったと思われ、従って玄室高は3.3m前後と見做される。

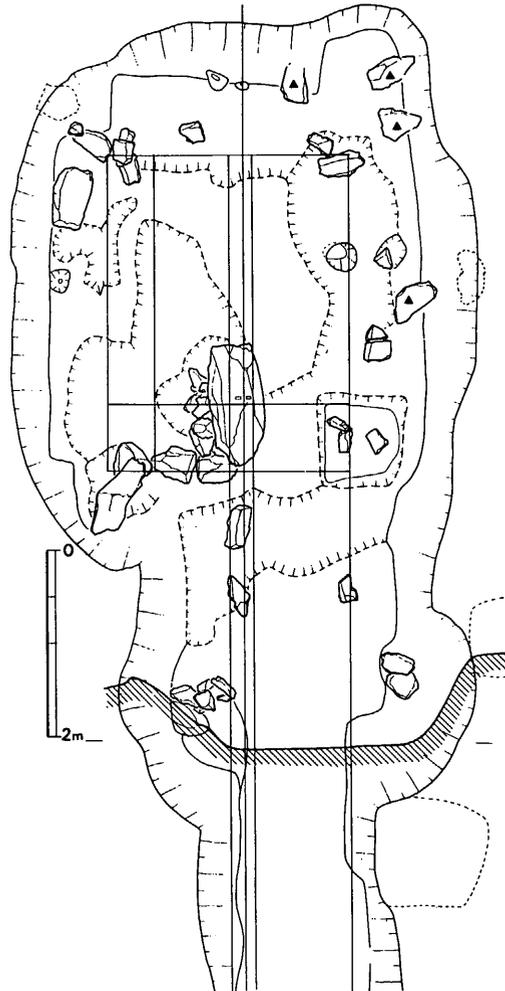


Fig. 9 剣塚第1号墳石室想定図（縮尺 1/80）

遺物出土状態

玄室

床面清掃中に、三累環式環頭柄頭1と玉類・鉄器片若干を採取したにとどまったが、柄頭は本墳の名前の由来を偲ばせるものがある。いずれも原位置を移動している。

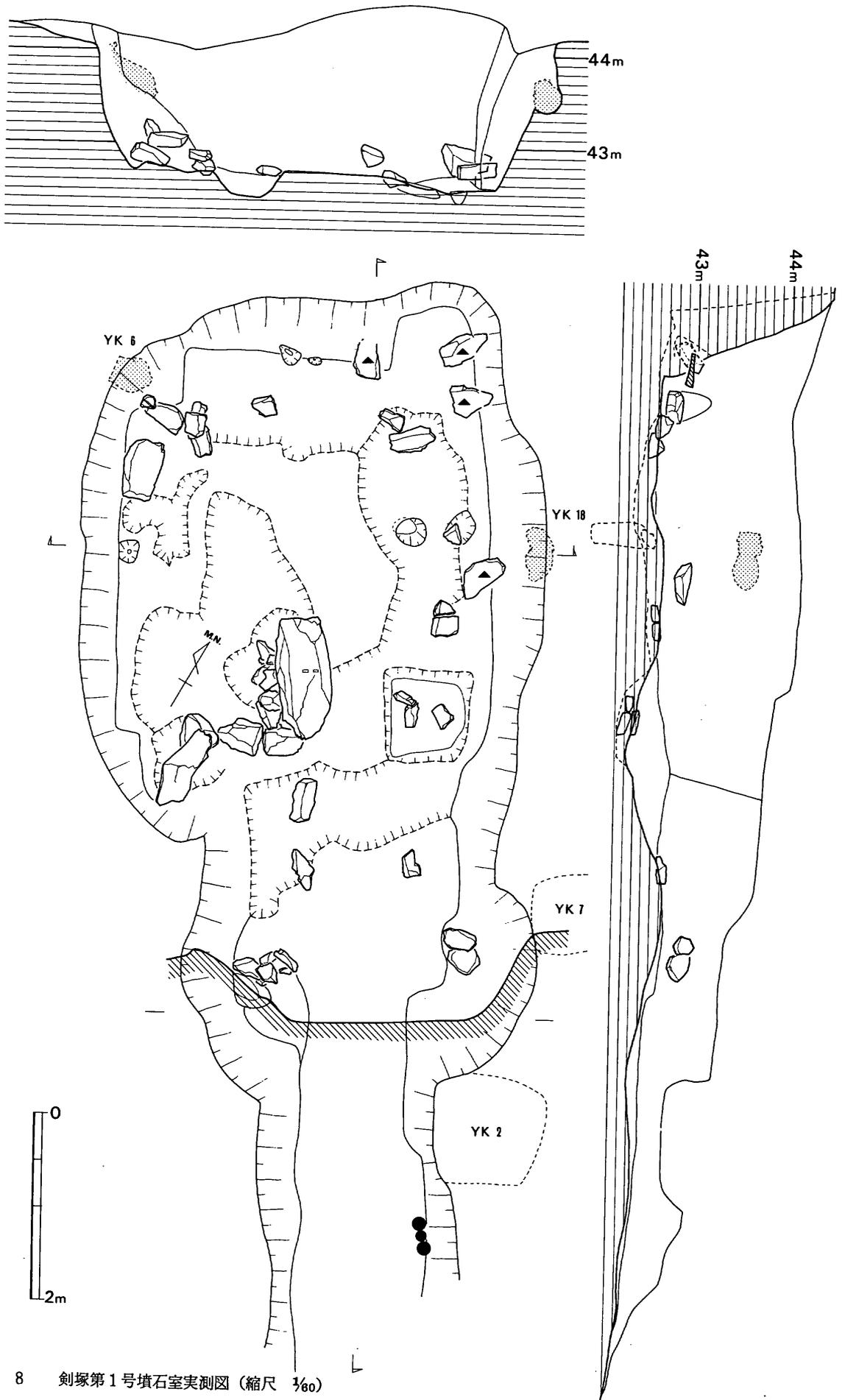


Fig. 8 劍塚第1号墳石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{60}$)

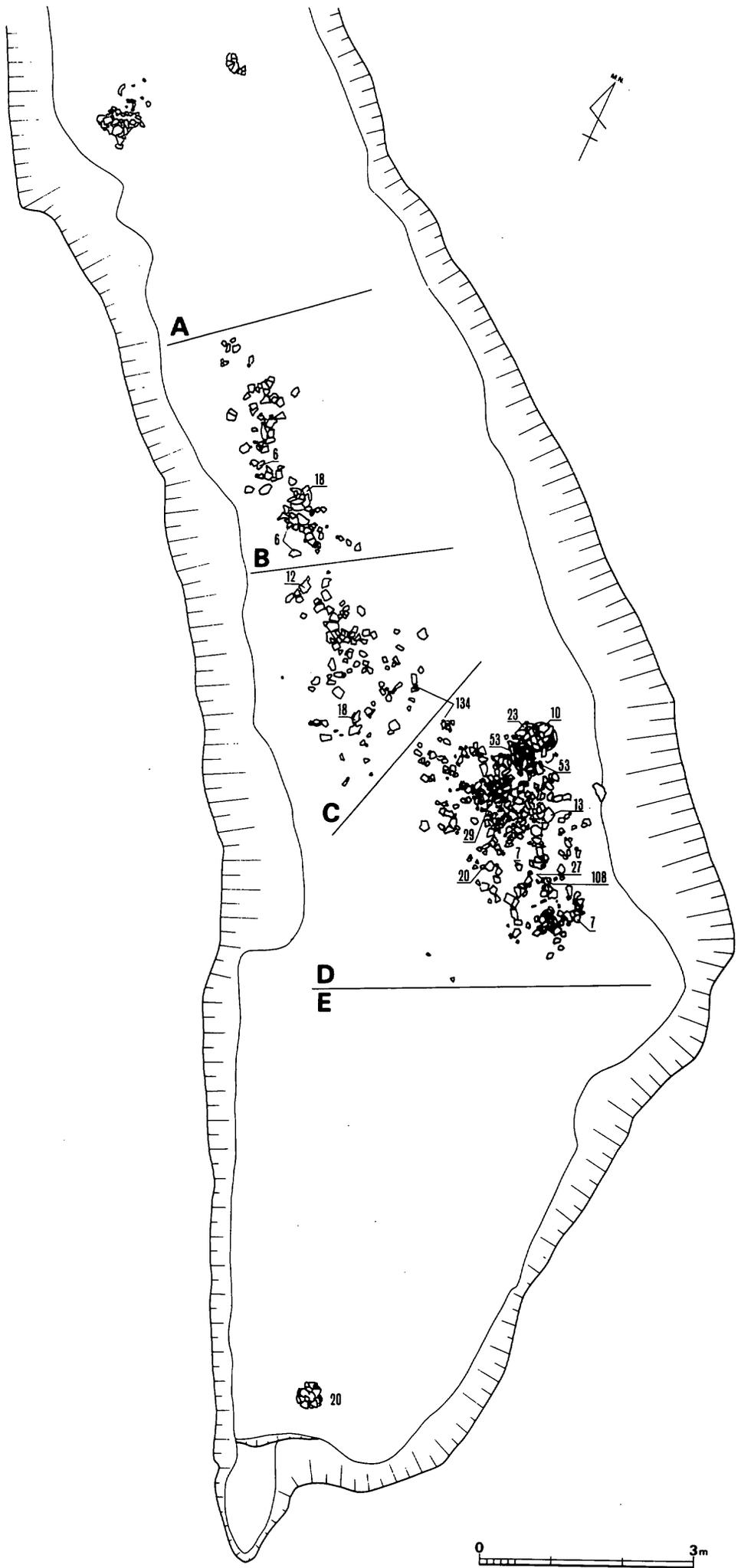


Fig. 10 劍塚第1号墳西滄北半土器出土状態実測図 (縮尺 1/80)

墓道

提瓶2個と杯蓋1個計3個の須恵器が並置された状態で発見された。墓道直上にはなく間層をはさむが、状態からみて供献されたものと思われる。取り上げ前に盗難にあい、現場保守についての厳しさに欠けた点を強く反省している。

周溝

東溝および西溝から多数の土器が採取されている。

東溝

溝底あるいは少しく間層をはさんだ状態で出土している。各器種を含む計28個体以上の破片は、散乱状態にあり、中・大型器種で据え置かれた等の原位置を示すものはない。

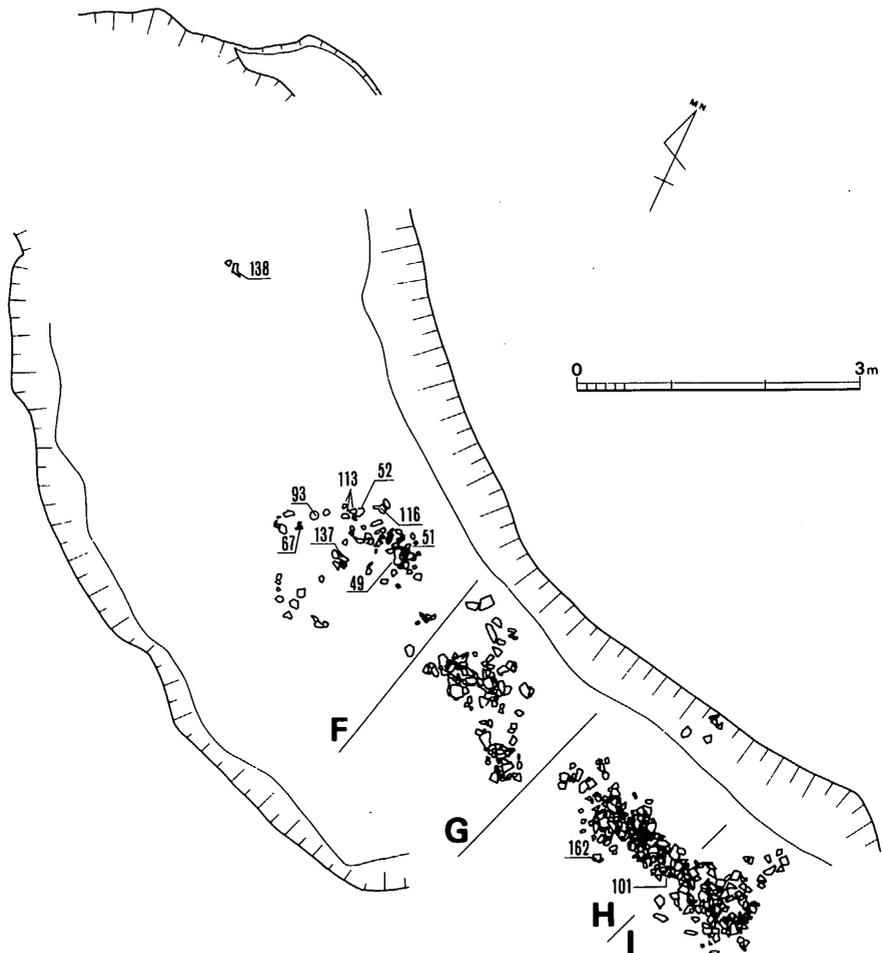


Fig. 11 剣塚第1号墳西溝南半土器出土状態実測図(縮尺 1/80)

西 湊

西湊は、後円部側面に設けられた陸橋部によって、南北に二分されている。東湊と同様に、この溝底直上あるいは少しく上位から多数の土器片が出土したが、均一な分布状態にあるのではなく、くびれ部以北と墓道寄りに集中する。

採取した土器片は、土師器が皆無に近く須恵器のみで占められているとしてよい程であり、かつ、その出土状態が後述するように特徴的であることが注意された。

個体のいずれもが小片となっているのは当然であるが、甕（23）とこれを押し潰したかに見える甕（10）の2例を除けば一括状態にあるものはなく、広範囲にわたって破片が散らばる例が圧倒的に多い。以下、西湊を図示したように区分した上で、破片の分布状態について述べてたい。

A 東湊と西湊にまたがる例

甕（9）がそれで、東湊と墳丘の高まりを隔てた西湊のE区とから出土した破片が接合された。

B 西湊南半と北半とにまたがる例

2個体が確認されている。甕（53）は、南半のI区と北半のB～D区とから、有蓋高杯蓋（106）は、南半のF区と北半のC区とから、それぞれ破片が採取されている。この他、南半から黄灰色を呈する焼成不良の甕体部片が出土しており、これらが同様な焼成で北半から出土した甕2個（13・18）の一部である可能性が高いが確認できていない。

上記の諸例が、意識的な破壊と破片の撒布によることは明らかである。これら程極端ではないが、2区以上にまたがって破片が出土した例を列举すると、

A～E区	甕（6）
A～C区	甕（12）
B～D区	壺（80・134）
C～E区	大甕（20）、甕（7）
B・C区	大甕（18）、壺（114）
D・E区	甕（10・23・29）
G～I区	杯身（120）
F・G区	有蓋高杯（67・138）
H・I区	大甕（1・16）、甕（135）

となる。もとよりこれらの区分は、土器採取時に設定した目安に過ぎない。けれども、甕（20）のように、口頸部は一括状態で陸橋部近くから、肩より下の破片は8m以上離れたD・E区から採取された例もあり、無視できない。

上記の破片分布状態に加えて、採取した破片では一部しか接合し得なかった個体——脚部あるいは口頸部を全く欠く例が多数あることが注意された。

1 剣塚第1号墳

以上の他に、

A区	甕(22), 杯(126), 壺(63), 撮付杯蓋(111)
C区	甕(26)
D区	杯身(108), 大甕(13), 27
F区	杯身(73・99・119・72・52), 有蓋高杯蓋(51・113), 高杯(116・137), 甕(49・93)
H区	器台(162)
I区	甕(8), 撮付蓋(74)

がそれぞれ出土している。

器種では、南半では杯・高杯等の小型器種が目立つのに対し、北半では甕が多量に採取されたにもかかわらず、小型器種が乏しい点が特徴的である。

遺物

墓壇内堆積土中

装身具	勾玉	1
	ガラス小玉	1
工具	刀子	2
	矢状鉄器	2
武器	直刀	1
	金銅柄頭	1
	鉄鏃片	若干
不明鉄器片		若干
墓道		
須恵器	杯(蓋?)	1
	埴瓶	2
東渚		
須恵器	甕	1
	大甕	6
	甕	7
	横瓶	1
	壺	1
	台付壺	2
	撮付蓋	6

Ⅲ 古墳時代の遺構と遺物 1

	長頸壺	1	西湊南半		
西湊北半			須恵器	杯 蓋	3
須恵器	杯 身	1		杯 身	5
	大 甕	3		高 杯	1
	甕	8		有蓋高杯	4
	横 瓶	1		有蓋高杯蓋	3
	壺	1		甗	2
	台付壺	1		器 台	2
	長頸壺	2		大 甕	3
	杯 蓋	1		甕	1
土師器	甌	1		撮付蓋	1
				高台付杯	1
西 湊			1号墳出土		
須恵器	杯 蓋	1	須恵器	大 甕	4
	杯 身	1	土師器	甌	1
	提 瓶	1			
	平 瓶	1			
	撮付蓋	1			
土師器	甌	1			

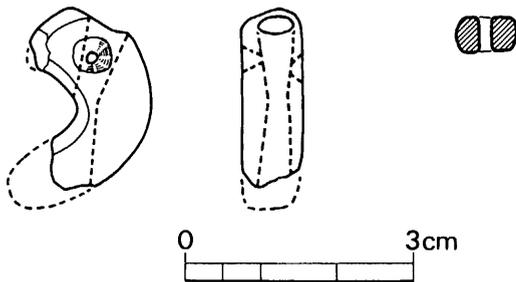


Fig. 12 剣塚第1墳出土玉類実測図 (実大)

装身具 (Fig. 12)

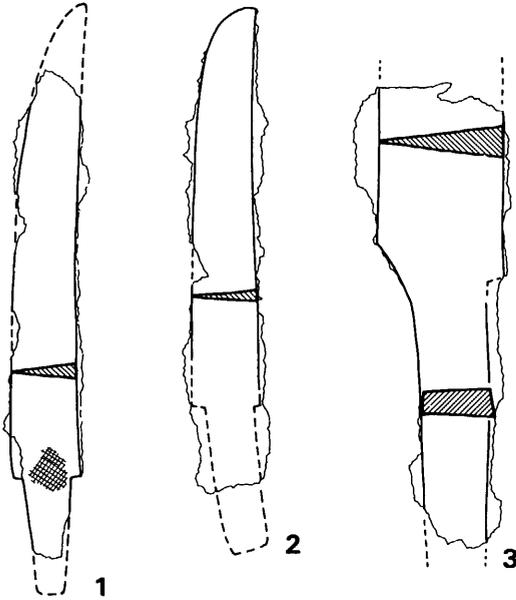
勾玉

硬玉製であるが、部分的に濃緑色を呈するのみで雲が多い。頭部と尾部の両端を欠失し、現存長 2.3 cm。厚さは 8 mm で、尾が僅かに細くなる。頭部に両側から穿たれた一孔をもつ他に、頭部背面から尾部先端へ通ずる一孔が穿たれている。着装

法の差を示すものか。

ガラス小玉

濃紺色を呈し、最大径8mm、高さ5mm。



工具 (Fig. 1 3)

刀子

1は、鋒および茎先端を欠き、現存長13cm。関部刃巾1.7cm。関部に稍荒い布が錆着している。2は、茎先端を欠き、現存長13cm。両関と推定される。鋒には研ぎ減りが認められる。

これらの他に、矢状の鉄器がある。4は、現存長4.6cmで、頭部は3.2×2.5cmの長方形で、頭部近くの各稜線は面取りされている。断面は非相称。5は、現存長2.7cm、頭部巾2.3×2.1cm。

武器

三累環式環頭柄頭 (Fig. 1 4) 金銅の環頭のみで、柄尻の被せ金具および刀身は失なわれている。頂部を除く2環は独立せずに基部と一体となっており、基部上面に山形の小突起をつけ、下部に切りこみを設けて端部を表現している点で特徴的である。

全幅5.6cm、全長6.6cm、茎長4.1cm。3環とも正円ではなく、2.55～2.7cmの最大巾をもち、巾は頂部のそれが8mmと他の2環よりも1mm広い。環身断面は六面形で最大厚はいずれも1cmであ

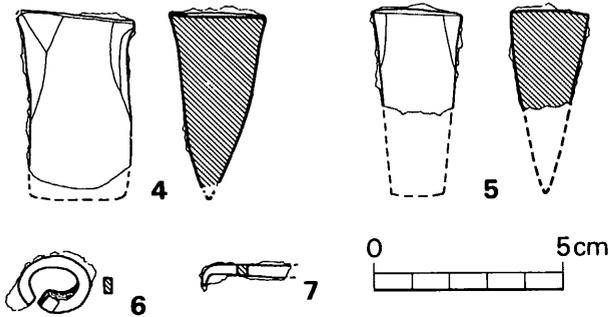


Fig. 13 劍塚第1号墳墓坑出土鉄器実測図 (縮尺 1/2)

るが、下部を少しく細身としており、稜線もシャープであり立体感に富む。鑿による加飾はなく、一部に布が錆着している。

茎は、基部での巾2.4cm、同厚5.5mm、先端部巾2.2cm、同厚3.5mm。径7mm強の目釘孔に3mm弱の銅製目釘が遺存している。柄部木質の一部が遺存しているが、一面では基部と先端との間に1mmの間隙があるのに対して、他面では密着するがやはり基部から1mm前後の所で段がつけられている。

シャープな優品であるが、茎をはじめ環身の各所に鑄造時の湯まわりの悪さによる小孔が認められる。

環の表現により後出的な様相がみられるが、朝鮮製とみられる。九州では、5例目であるが(註1)、既知の4例のいずれとも異なる。国内での発見例としては第15例目(註2)となる。

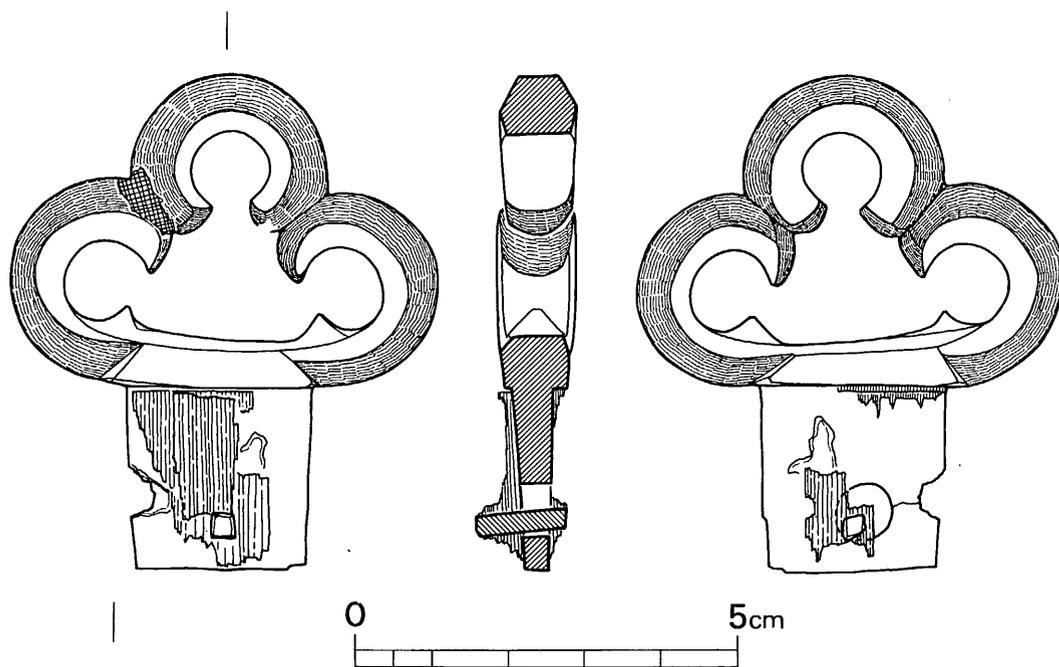


Fig. 14 剣塚第1号出土柄頭実測図(実大)

註 1. 九州出土例については、小田富士雄氏の集成・考察がある。「九州発見の三累環頭柄頭」<九州考古学29・30>1966年「小清兵衛山古墳」<佐賀県文化財調査報告書16>所収、1967年

註 2. 国内出土例については、新谷武夫氏の所論による。「環状柄頭研究序説」『考古学論集——松崎寿和先生退官記念』1977年

直刀 (Fig. 13-3)

関部周辺の一部のみ。両関と推定され、茎部は内反り気味である。

1 剣塚第1号墳

不明鉄器 (Fig. 13)

6は、 4×2.5 mmの長方形断面の棒鋼を折り曲げて 14×15 mmの環をつくった後、一端を直立させており、現存高10mm。7は、鉄鍬の茎かと思われたが、一端が釣状に折れ曲っている。

土器 (Fig. 15~30)

東 湟

甕

48は厚手で、稍ズングリとしてはいるが、灰青色を呈して焼成良好で、胎土も選り抜かれ、調整もまた頗る丁寧である。現存高7.5cm、胴部最大径9.1cm。

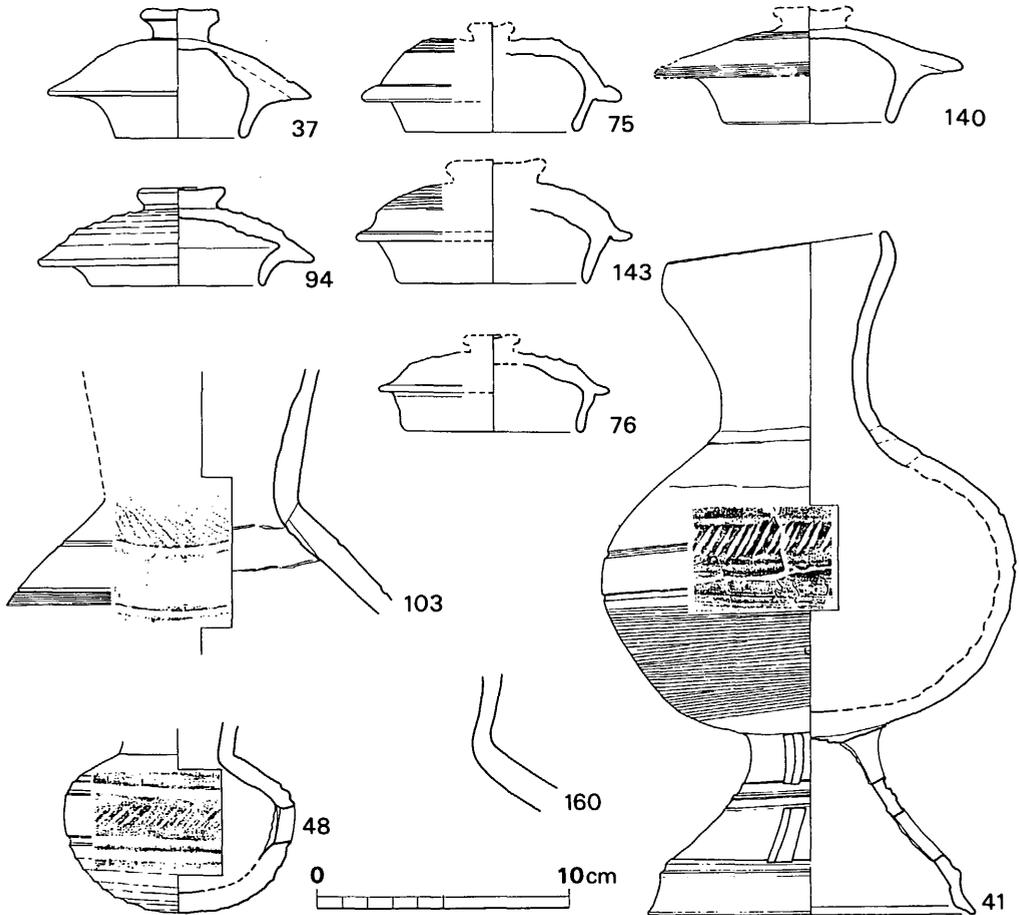


Fig. 15 剣塚第1号墳東湟出土土器実測図 1 (縮尺 1/3)

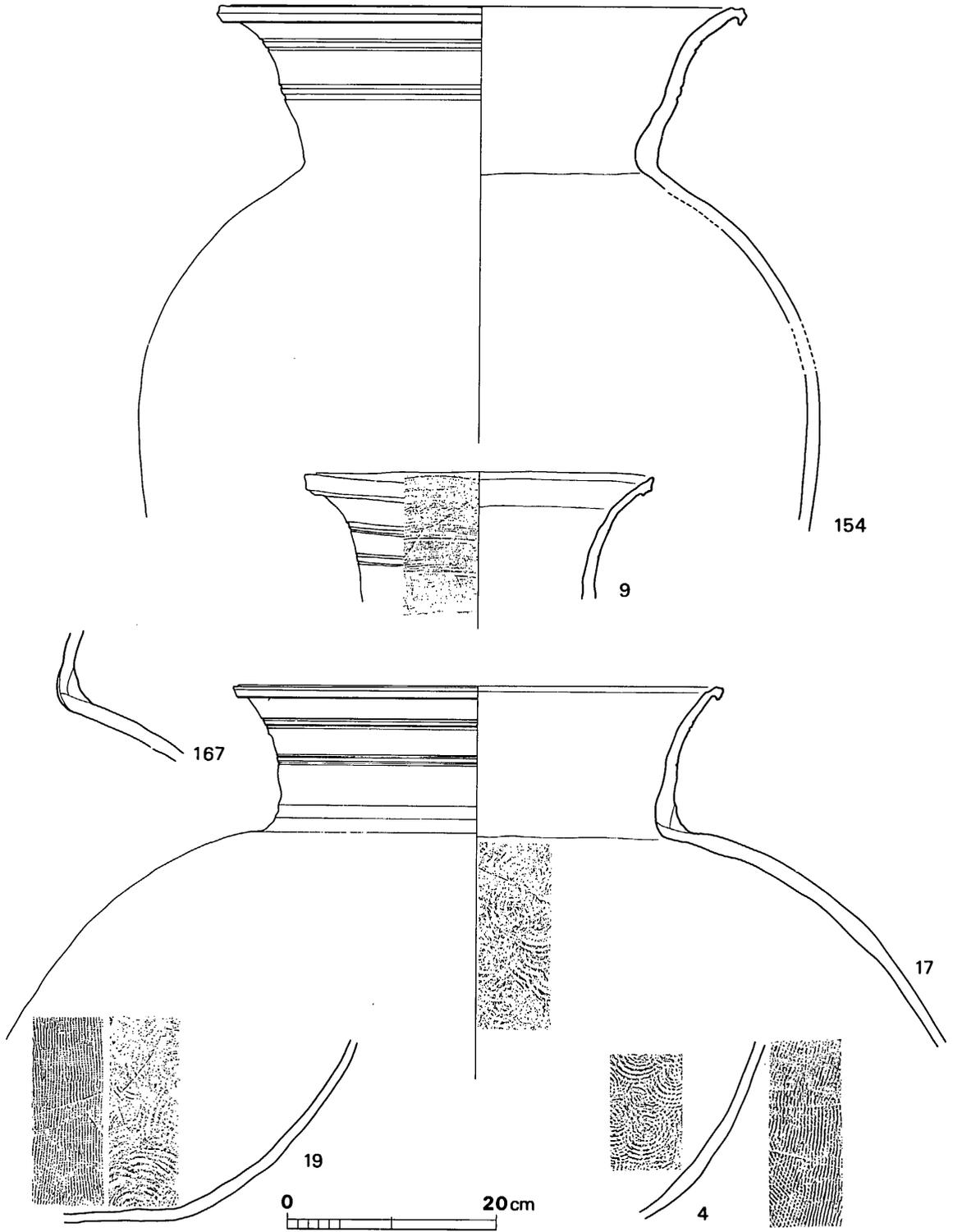


Fig. 16 剣塚第1号墳東滄出土土器実測図 2 (縮尺 1/6)

1 剣塚第1号墳

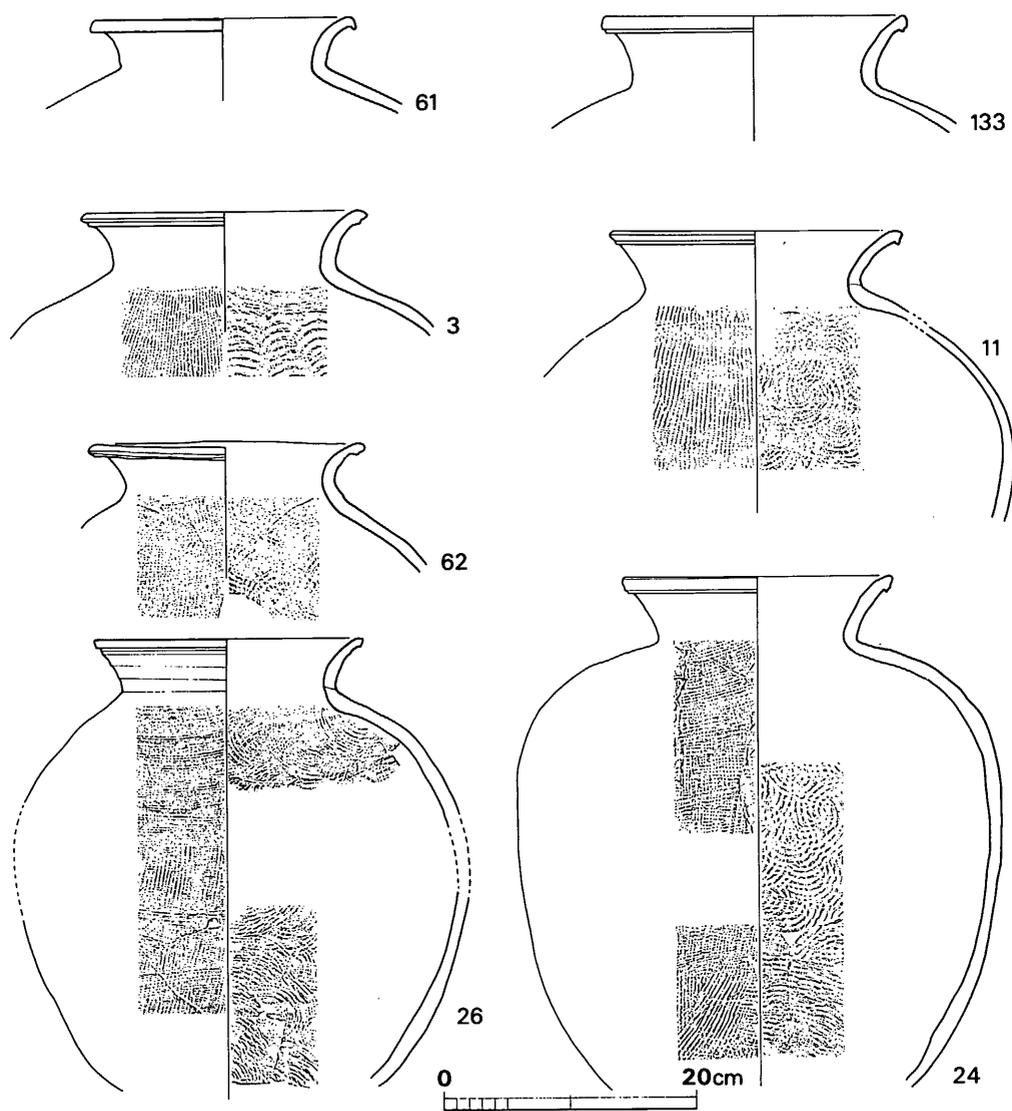


Fig. 17 剣塚第1号墳東渕出土土器実測図 3 (縮尺 1/6)

大甕

154は、体部下半を欠き、現存高49.8cm。口径50.2～51.1cm、頸径33.8cm。頸高15cm、胴部最大径60cm前後。2本の沈線帯で頸部を3部に分ち、上・中段に巾2.5cmの工具を用いて波状文をめぐらす。焼成良好。9は、口頸部のみで現存高12.7cm。歪みを生じており、口径33.2～34.6cm。焼成良好。17も、口頸部と肩の一部のみ。復元口径46.8cm、頸径41.8cm、頸高14.5cm。頸部と肩部との補強は入念。頸部の2段の波状文は上・

下で形状が異なる。焼成良好。**167**は頸部から肩部にかけてのみしか遺存しないが、接合は特に入念に行なわれている。これらの他に底部近くの破片2個体分(**4・19**)がある。

甕

26、**24**を除く5個体は、いずれも肩部以下を失っている。**61**は復元口径20.5 cm、同頸径16.3 cm前後、頸高3.9 cm。灰青色を呈する。**3**は、復元口径22.8 cm、同頸径17.8 cm。口縁部は全体にシャープさに欠ける。灰青色を呈する。**62**は縁が稍歪む。口径22 cm前後、頸径16.6 cm前後。口縁部は**3**と同様に鈍く、頸と肩とがなす稜もまた同様である。灰青色を呈する。**26**は、底部を除いて略完全に復元できる。従って、底部がもともと打ち欠かれた可能性が強い。口径21.3 cm前後、頸径17.4 cm前後、頸高4.2 cm。胴部最大径36.1 cmは略中位にあるため稍ズングリとした感を受ける。現存高36 cmで、灰青色を呈する。**133**は、復元口径24.2 cm、同頸径19.6 cm、頸高5.7 cm。胎土・焼成ともに良好。**11**は、復元口径23.3 cm、同頸径17.1 cm、頸高4.7 cm。焼成良好。**24**は、復元口径21.3 cm、同頸径15.7 cm、頸高5.3 cm。最大径は胴部上位にあるため、稍いかつい感を受ける。

横瓶

15は、口頸部から体部上半にかけての一部のみ。復元胴部30.6 cm。内面の同心円文は消されずに残る。紫灰色を呈して焼成良好。

壺

41は台付壺で、両部は正接していない。器高26.2 cm、頸部最大径9.3 cm、胴部最大径16.2 cm、脚部高7.2 cm、同底径13 cm。灰青色を呈し焼成良好。細粒を多く含む。体部下半にはカキ目調整を施す。成形・施文・調整ともに稍シャープさに欠ける。**103**は、台付直口壺に近い形状をとる。焼成は良好であるが、調整に稍難がある。**160**は、頸部から肩部にかけての一部のみ。復元頸径8.6 cmで、頸部上半に波状文が付されている。焼成堅緻。**147**は、台付直口壺で脚部を欠く。現存高18.2 cmで、口径9 cm前後、頸径8.3 cm、頸高4 cm、胴部最大径17.2 cm。灰青色を呈し焼成堅緻であるが、成形は稍シャープさに欠ける。頸部および体部下半には荒くカキ目調整を施す。

長頸壺

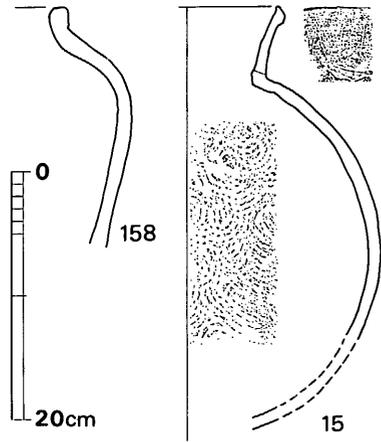


Fig. 18 剣塚第1号墳東遶出土
土器実測図 4(縮尺 1/4)

1 剣塚第1号墳

134は、体部は略完存するが頸部を欠く。現存高12.7cm、胴部最大径20.6cm、高台径10.8cm。灰青色を呈して焼成堅緻。

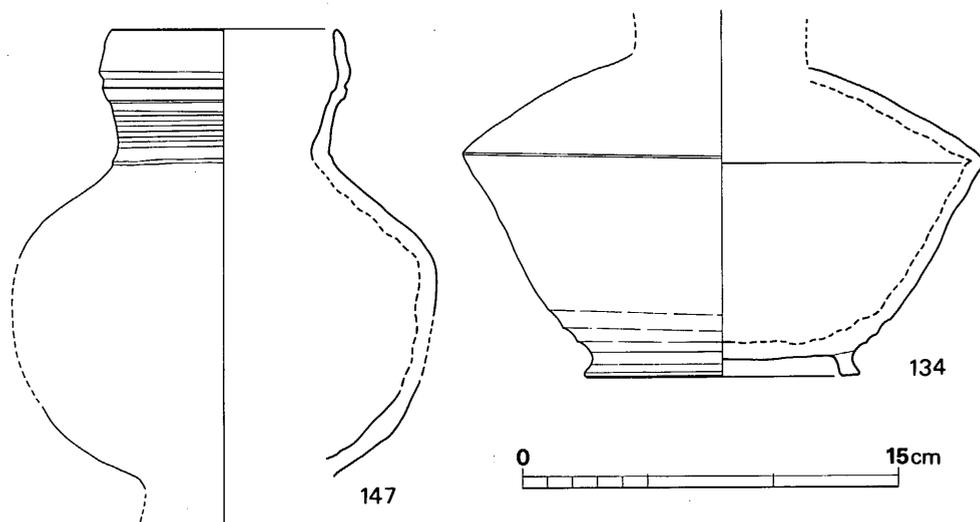


Fig. 19 剣塚第1号墳東遑出土土器実測図 5 (縮尺 1/3)

撮付蓋

37は口縁の一部を欠くのみで、略完形。最大径10.3cm、器高5.1cm。受け部付近が異常な程厚手に作られる点で140と共通する。灰青色を呈し、焼成良好。胎土に細粒を多く含む。撮は心を外れる。140は撮を欠失する。復元最大径12.2cm、現存高4cmと大型である。器表全面にカキ目調整を施した後櫛目文で加飾する。胎土・焼成共に良好。94は撮の一部を欠くが、略完形。最大径11cm。器高4.9cm。受部の厚さは前2者に比べずっと薄い。頸部には細く篋削りが施される。胎土に細粒を多く含むが、焼成は堅緻。75は撮を失なう。肩から頸部にかけてカキ目調整を施す。身から外しての焼成か。細粒を多く含むが焼成は堅緻。復元最大径10.3cm。同器高4.3cm。143は黄灰色を呈して焼成良好。全体に厚手であり、胎土に細粒を多く含む。最大径10.9cm、復元器高4.9cm。76は薄手で、復元最大径9.1cm、器高3.2cmの小形品。灰青色を呈して、焼成は良好である。底部は、手持状態で篋削り。

西遑北半

杯身

108は復元最大径11.8cm、同器高約4cm。灰青色を呈して焼成良好。

大甃

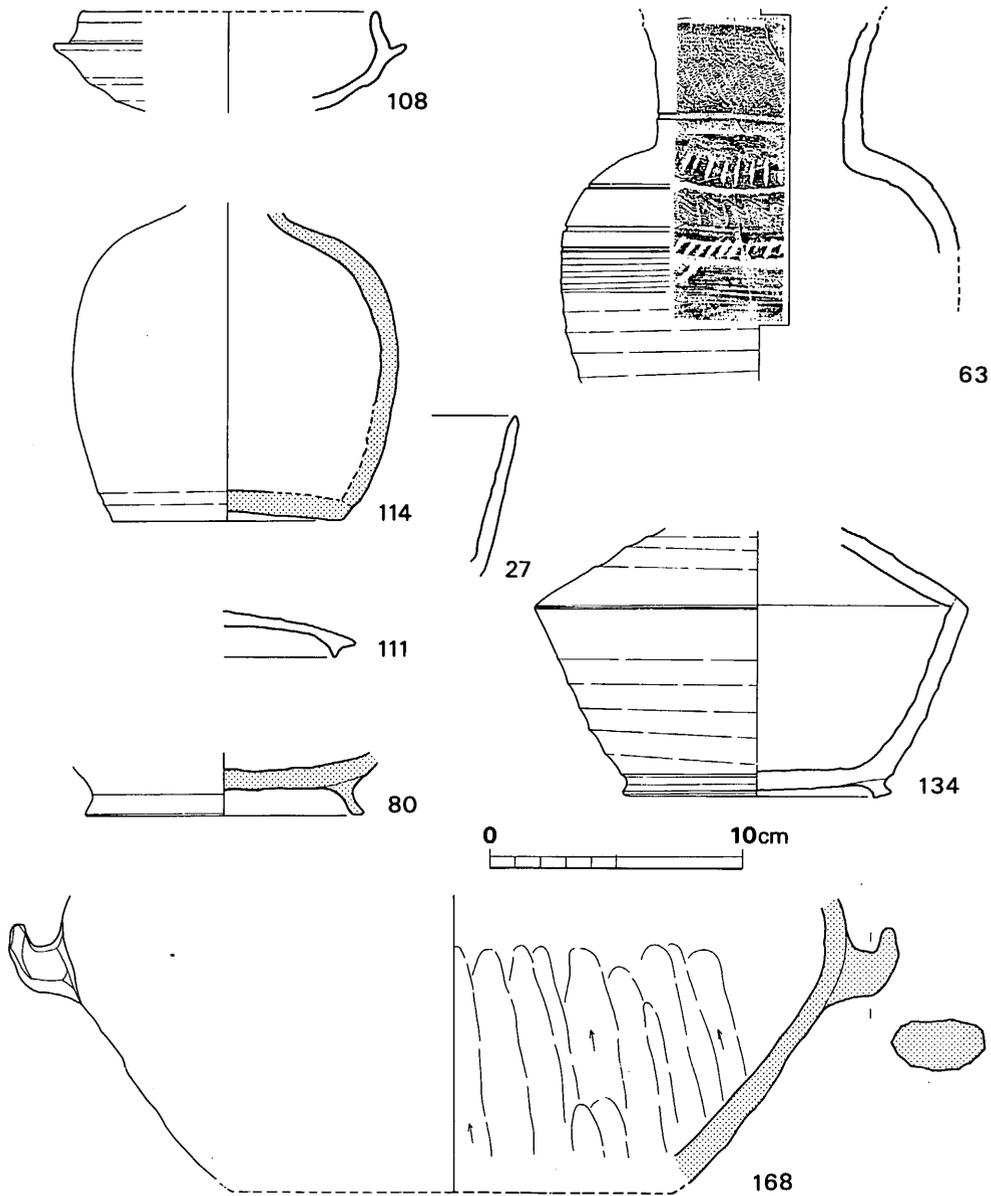


Fig. 20 剣塚第1号墳西澗北半出土土器実測図 1 (縮尺 1/4)

20は底部をも含めた各部の破片があり、器高75.5cm。口縁は稍歪み、口径37.5～38.4cm。頸径20.7cm、頸高15.3cm。胴部最大径61.6cmは上位にあり均斉のとれた感を受ける。底部は少しく凹む。頸部に沈線3本をめぐらす以外は加飾されない。接合部は表裏両面から行なわれるが、補強部分は薄い。灰青色を呈す。18は、黄灰色を呈して焼成極めて甘

1 剣塚第 1 号墳

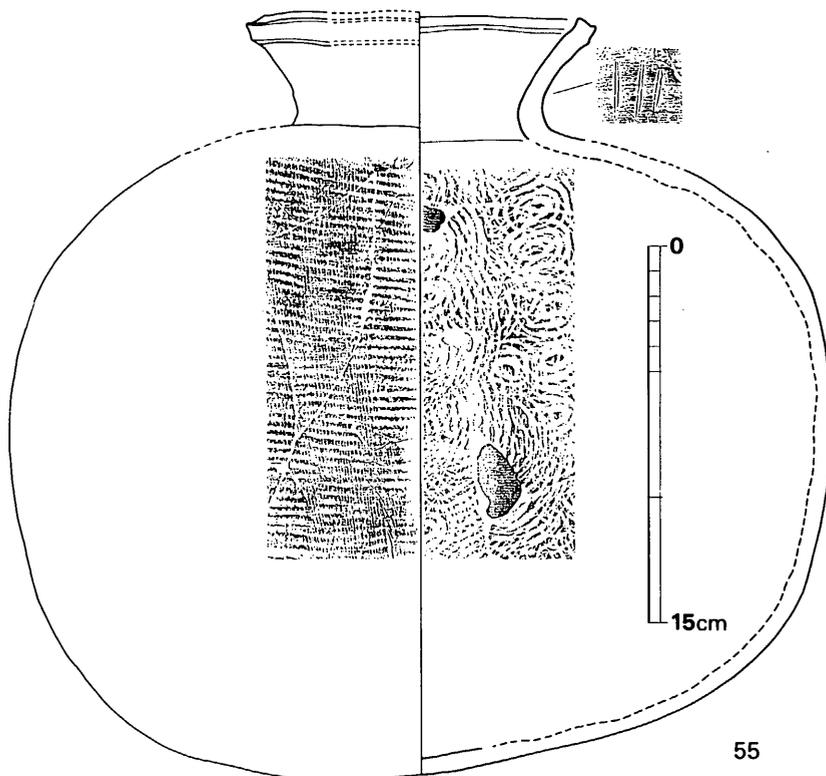


Fig. 21 剣塚第1号墳西滄北半出土土器実測図 2 (縮尺 1/4)

い。口径40.6 cm, 頸径31 cm, 頸高15.4 cm。頸部に沈線帯2本をめぐらし波状文を付すが, 下帯は完周しない。13も18と同様に黄灰色を呈し, ひとまわり小型で, 口径31.2 cm, 頸径24.1 cm, 頸高13.8 cm。頸部内面には粘土紐の痕跡を明瞭にとどめる。

甕

12は肩部以下を欠く。復元口径23.6 cm, 同頸部径17.6 cm, 頸高5.1 cm。頸部の接合法は稍特異である。6は, 口頸部の一部と底部とを欠く。復元器高43.7 cm, 同口径23.1 cm, 頸径17.6 cm, 頸高4.8 cm, 胴部最大径41.4 cm。7は, 底部を欠き現存高38.9 cm。復元口径19.5 cm, 同頸径15.5 cm。胴部最大径の復元値は36.9 cmで中位にあり, スマートさには欠ける。焼成に稍難がある。29もまた底部片を欠き, 現存高42.6 cm。全体に稍歪んでおり, 口径23.1 cm, 頸径17.5 cm, 頸高5.2 cm。底部に窯詰時の支えに用いたとみられる粘土塊が熔着する。53は, 肩以下を欠く。口径20.5 cm, 頸径15 cm, 頸高4.4 cm。29とともに, 口縁部はシャープさに欠ける。10は底部以外は略完存し, 復元器高42 cm強。口径20.8 cm前後, 頸径17.2 cm前後, 頸高3.6 cm前後。

口縁部は折り曲げて丸く瘤状にふくらませている。肩と底部付近の3ヶ所に他の個体の土器片が熔着している。23も同様に肩部が稍ふくらみ、外周に沈線をめぐらす点特徴的である。底部近くの一部を欠く。口径20.5cm, 頸径15.9cm, 胴部最大径37.7cm, 器高41.1cm。頸部は明確な稜をもたない。内部の同心円文は上半は平行に移動するが体部下半は乱れており、当て板ではなく叩き板(棒)に刻されたことを示唆する。22は口縁および底部の歪みが著しい。底部は3ヶ所が径5~8cmにわたって凹んでおり、成形後の乾燥時に生じたものか。口径21.2cm, 頸部径15.5cm, 胴部最大径42.7cm, 復元器高44cm。口縁部端を強く外反させてアクセントをつけている。

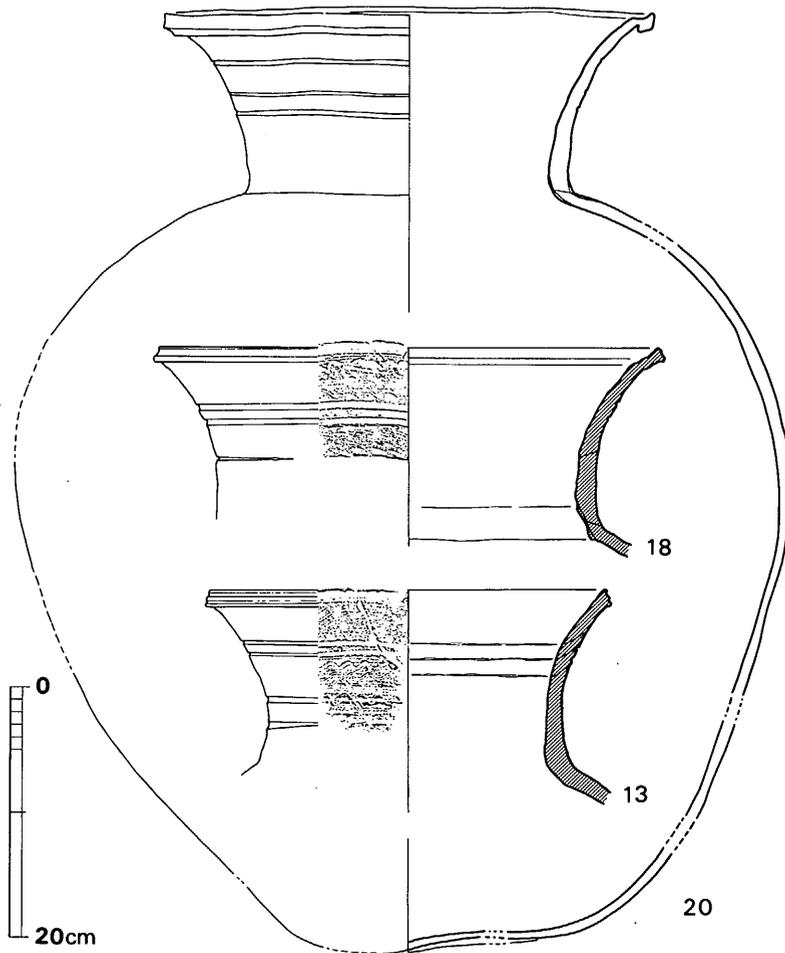


Fig. 22 剣塚第1号墳西滄北半出土土器実測図 3 (縮尺 1/6)

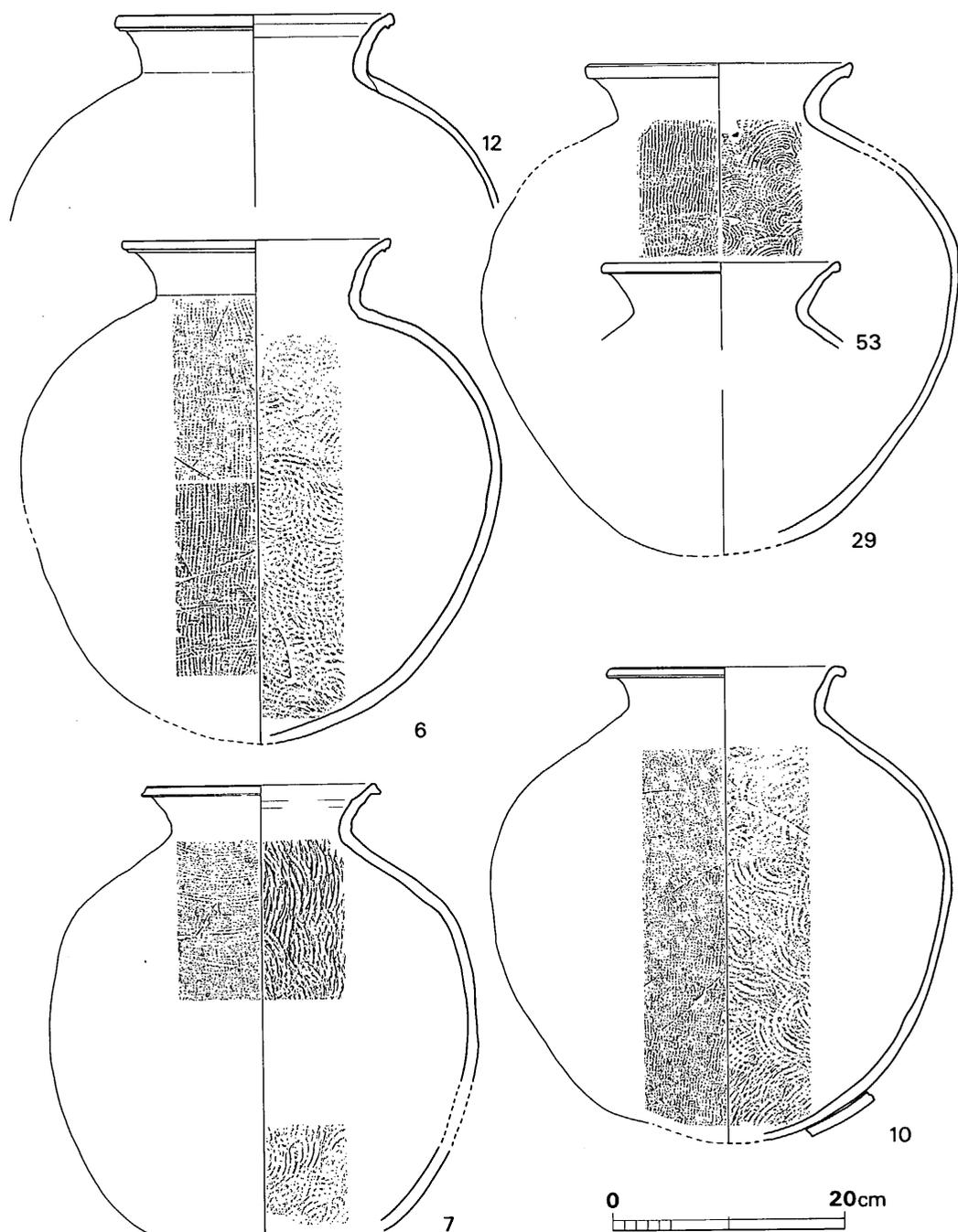


Fig. 23 劍塚第 1 号墳西滄北半出土土器実測図 4 (縮尺 1/6)

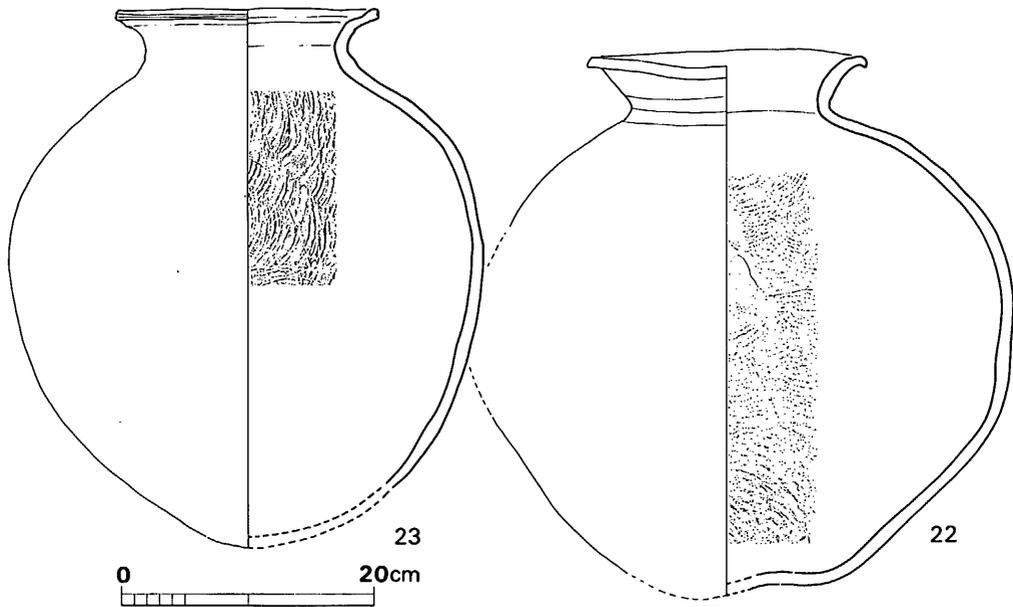


Fig. 24 剣塚第1号墳西隄北半出土土器実測図 5 (縮尺 $\frac{1}{6}$)

横 瓶

55は一部を欠くが、略完存する。器高30.6cm、巾32.1cm、胴部最大直径26.6cm。口縁は稍波打ち、口径13.6cm前後。焼成時には口頸部を焚口側に向け、すわりの良い大直径側を下にして据えており、径12.2cmの円形の詰台の痕跡を残す。従って、色調も下側は灰青色を、上半は赤茶褐色を呈する。体部は内外を全面に叩きしめ、その後最大径側の過半のみにカキ目調整を施し、内部は末調整。成形調整後、上方から屈みこむ姿勢で、頸部側面に篋記号を付す。

壺

63は台付壺とみられ、口縁部と肩部以下を欠失する。復元胴部最大径15.6cm、同頸径8.3cm。胎土精良、焼成堅緻。頸部及び肩部を波状文・櫛歯文にて加飾する。体部はカキ目・篋削調整が施されている。114は、口頸部を欠くが、全形はトックリ形と思われる。現存高12.5cm、胴部最大径12.9cm、底径11cm。底部円板接合部から底部中央にかけて篋削りを施し、中央部は回転させながらナデつけている。胎土・成形・調整・焼成いづれも精良

168は復元最大径31cm、同底径17.4cm、現存高11.7cm。内面は須恵器と同様の灰青色を呈するが、器表は部分的に赤褐色を呈する。胎土に細粒を多く含み、内側は横ナデ後全面にわたって篋削りを施す。底部から7.5cm上位に把手がつく。

長頸壺

134は口頸部を欠き胴部のみ。現存高10.7cm, 最大径15.2cm, 底径10.6cm。器表頸部周辺および体部下半以下については筥削りを施し, 調整は丁寧。灰青色を呈して焼成堅緻。80は黄灰色を呈して極めて軟質。底部しか採取されていないが長い口頸部が付されたものと思われる。底径11cm。

杯蓋

111は赤灰色を呈し, 焼歪みが著しい。

西湟南半

杯蓋

112は復元口径14.3cm, 同器高3.5cm。灰青色を呈して焼成良好。内面に同心円の叩き棒痕を残し, 後中央部は指ナデ。口唇内面は殺がれて, 全体的にシャープな感を受ける。

130は, 復元口径13.3cm, 器高4.6cm。肩部に鋭い稜がつく。内面に叩き棒の痕跡をとどめる。焼成良好。

杯身

120は最大径15.8cm, 器高4.5cmと大形。内面に蓋と同様同心円の叩き棒痕を残す

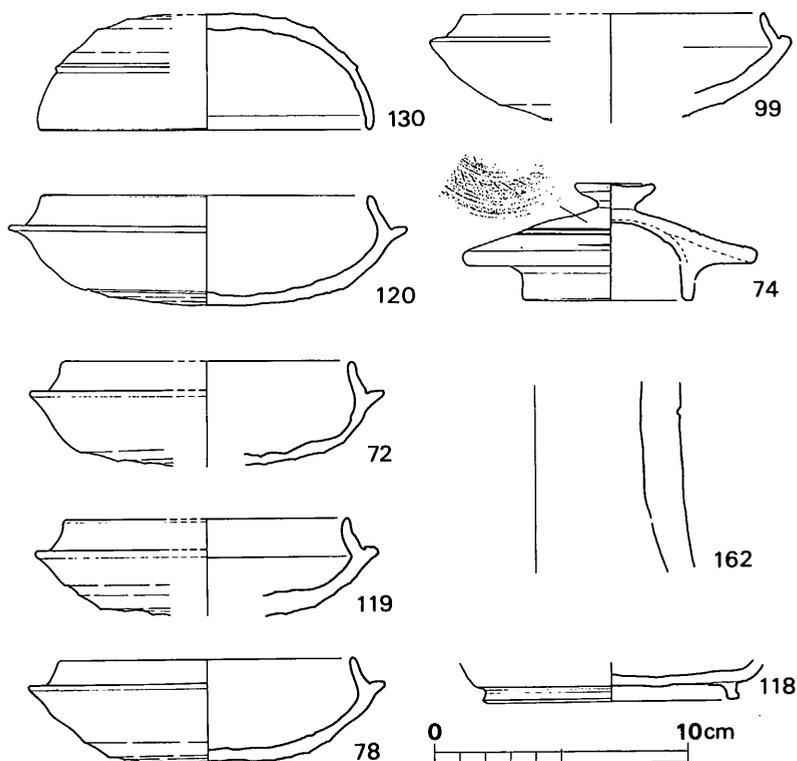


Fig. 25 剣塚第1号墳西湟南半出土土器実測図 1 (縮尺 1/3)

焼成堅緻。72は、復元最大径14cm、同器高4.2cm。内面に叩き板の痕跡をとどめ、119・73と共通する。119は、口径13.7cm、復元器高3.9cm。篋削りをザックリと行なう。73は最大径14.1cm、器高4.1cm。稍イビツではあるが、胎土・焼成・調整ともに良好。99は、復元最大径14.3cm、同器高4.4cm。体部の張りを失なっている。

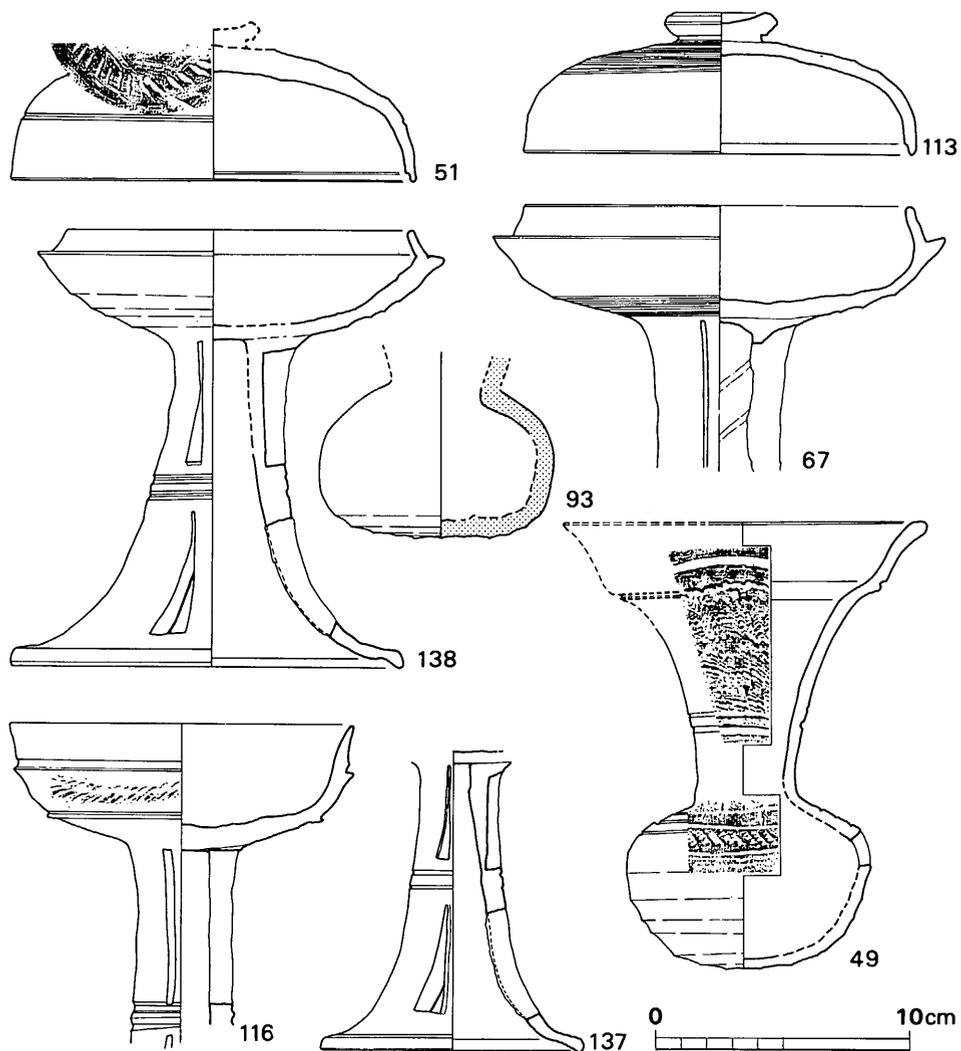


Fig. 26 剣塚第1号墳西滄南半出土土器実測図 2 (縮尺 1/3)

高 杯

116は脚下半を失なう。口径13.4cm、現存高12.7cm。杯部は高さ5cmで2段にアクセントをつけ、シャープな感を受ける。脚部は2条の沈線の上・下2段に長方形の透しを各3

1 剣塚 1 号 墳

ヶ所に設ける。灰青色を呈し、焼成良好。137は脚部のみで杯部を欠く。脚高11.6cm、同底径10.4cm。2条の沈線をはさんで3ヶ所2段の三角形透しを加えるが、上段は切りこんだだけで、貫通していない。胎土に細粒を多く含む。器表の一部に自然釉がみられ、焼成度にはかなりムラがある。杯部内面に蓋杯と同様に同心円の叩き棒の痕跡をとどめる。

有蓋高杯

138は器高17.3cm、杯部最大径16cm、脚部復元高13cm、同脚部底径15.4cm。脚部には、2条の沈線をはさみ3ヶ所に2段の三角形透しを設けるが、上段のそれは切りこみのみ。67と同様に杯部内面に叩き棒痕を残す。胎土に細粒を多く含むが、焼成は良好。67は脚の下半を失なう。杯部は、復元最大径17.7cm、同高4.3cm。内面に叩き板痕をとどめる。脚部の透しは2段各3ヶ所で、狭まい。これらの他に図示していないが、脚部のみが採取されている101がある。脚高15cm弱、復元底径13.8cm。2条の沈線を付し、上段に狭長な長方形、下段に三角形に近い梯形の透しを3ヶ所に付し、全面にカキ目調整を施す。138に比して脚部は細くて高く、脚端の形状もより単純である。

有蓋高杯蓋

51は、器高5.3cm、口径15.9cmと大形で、有蓋高杯の蓋であるが撮を欠失している。肩部に一条の沈線、頂部に櫛歯文をめぐらす。胎土は精良で、焼成も良好。篋削りの範囲は広く、肩近くにまで及ぶ。113は復元口径15.4cm、器高5.5cm。内面に叩き棒痕をとどめる。肩から頂部にかけて、篋削り後カキ目調整を施す。106は復元口径15.2cm、器高5.5cm。細粒を多く含む、焼成は甘い。内面に叩き棒痕を残す。三者とも、採取された高杯とはセットとならない。

甗

49は口縁部の一部を欠き、器高17.6cm。胴部最大径9.6cmに対して口径は14.3cmと、大きく外反する。頸部上段と胴部沈線間に櫛描波状文、櫛歯文をめぐらす。黄灰色を呈して、焼成は甘い。調整は入念に行なわれている。93は頸部を欠くが、胴部は完存する。胴部最大径9.2cm、同高6.1cm。底部は丁寧に篋削りを施す。軟質で風化が進んでいる。

器台片

162は、筒形脚部の上部近くの一部を残すのみ。この他に子持器台片がある。

大甕

1は、口頸部の一部のみ。上・中段に波状文をめぐらし、さらに下段に櫛歯文を付す。3段にわたる加飾は本器のみである。16・8は体部のみ。

甕

135は肩以下を欠く。復元口径18.8cm、頸高4.6cm。暗灰青色を呈して焼成は良好である。

撮付蓋

74は最大口径11.6cm、復元器高4.7cm。かえり部の外径は、6.8cm前後とみられる。灰青色を呈し、焼成・調整ともに良好である。

高台付杯

118は灰白色を呈して焼成稍不良。高台外径10cm。高台内側は指頭にて強くナデつけられている。

西 湟
蓋 杯

107は復元口径13.4cm、器高4.3cm。灰青色を呈して焼成良好。頂部に篋記号を付す。

杯 身

38は底部に、記号を付す。復元最大径11.8cm、同器高4cm。蓋を被せての焼成。底部の篋削りの範囲は狭い。

平 瓶

146は復元胴部最大径24cm、胴部高14cmの大形品で、口頸部を欠く。灰青色を呈して焼成良好。肩近くに2条の沈線をめぐらすが、荒いカキ目調整が施されているので、際立たない。体部下半には回転篋削りを施すが、底部は各方向からの指ナデのみ。体部に比し底部の器肉の薄さが目立つ。

横 瓶

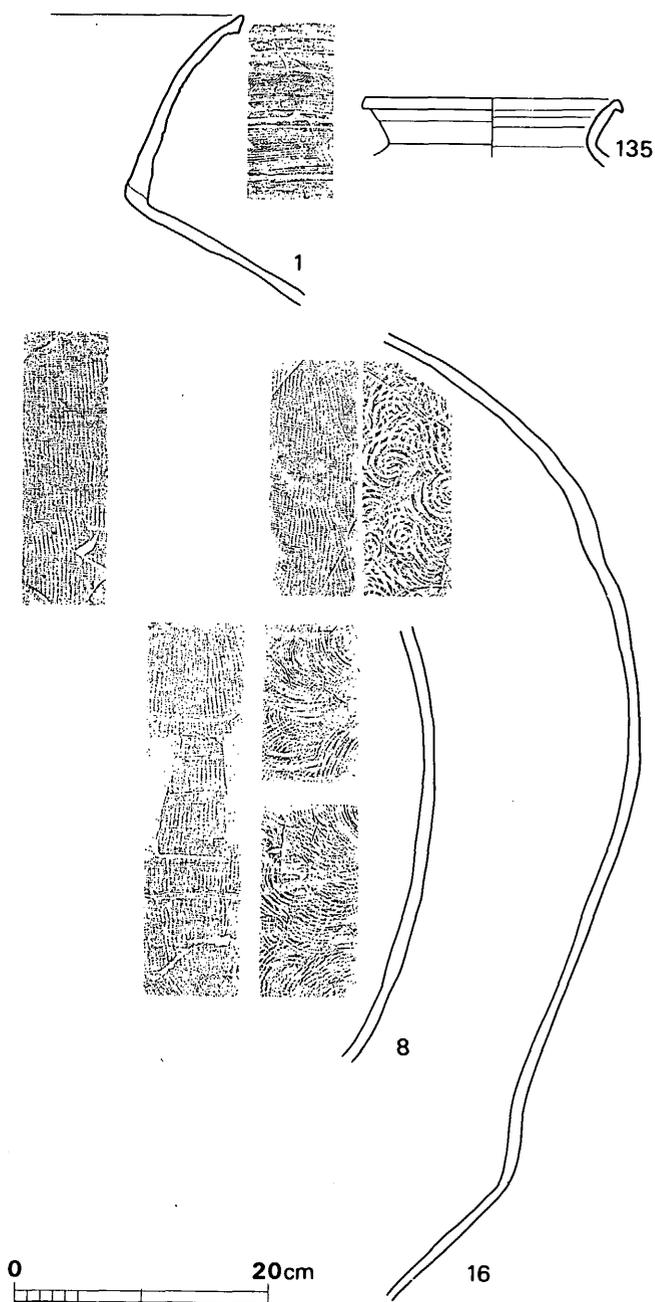


Fig. 27 剣塚第1号墳西湟南半出土土器実測図 3 (縮尺 1/6)

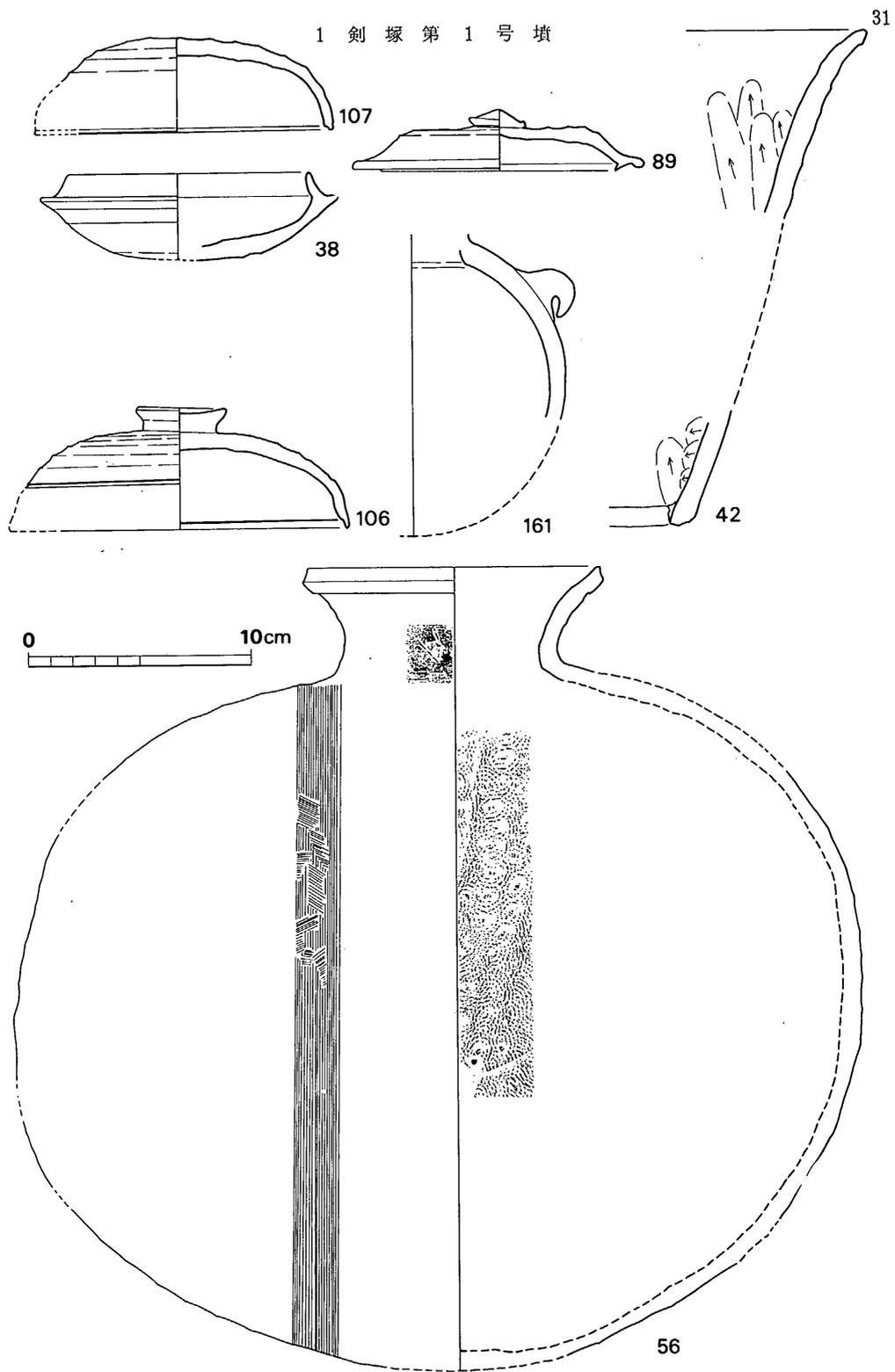


Fig. 28 劍塚第 1 号墳西滄出土土器実測図 (縮尺 $\frac{1}{3}$)

56は復元器高36.4cm, 最大径31.9cm, 巾37.8cm, 口径13.1cm。器表全面にカキ目調整を施す。長側の一方に径13cm弱の詰台の痕跡をとどめており, 口頸部を焚口部に向けて窯詰されている。頸部に篋記号の一部をとどめ, 内面の同心円叩き棒痕はそのまま。

撮付杯蓋

89は灰青色を呈して焼成良好。頂部に篋記号を付す。復元口径13.1cm, 器高2.8cm
提瓶

161は復元胴部最大径13.8cm。一部に自然釉が認められて焼成堅緻。

甌

42は口縁および底部の一部のみ。黒青色を呈して焼成良好。口縁部以下は縦方向の篋削りを略全面に施す。胎土に細粒を多く含み, 色調とともに特徴的で他片との識別は容易である。

剣塚第1号墳出土土器

東・西のいずれに属するか不明の土器が4点ある。

大甕

21は, 底部を欠く。復元口径41.

2~37.2cm, 同頸径25cm, 頸高14.

8cm, 復元胴部最大径58cm, 同器高72.3cm。口頸部は稍歪む。口唇部の形状・成形に特色がある。

2は, 頸部から肩部にかけての破片のみが採取されている。

復元頸径33.3cmと前者を上まわる。この他体部下半片36がある。

いずれも, 灰青色を

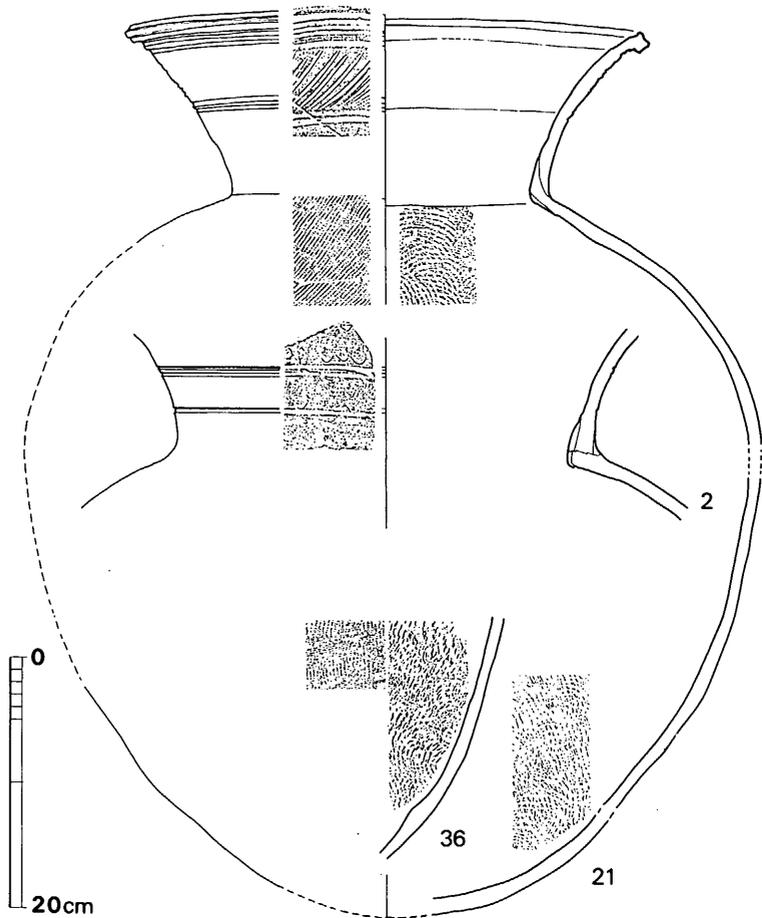


Fig. 29 剣塚第1号墳出土土器実測図 1 (縮尺 1/6)

呈して焼成良好である。

甌

152は現存高11.4cm, 復元底径17.4cm, 現存高11.4cm。把手は底面から9.5cm上位につけられている。器表は赤褐色を, 内面は暗褐色を呈し, 丁寧にナデられている。

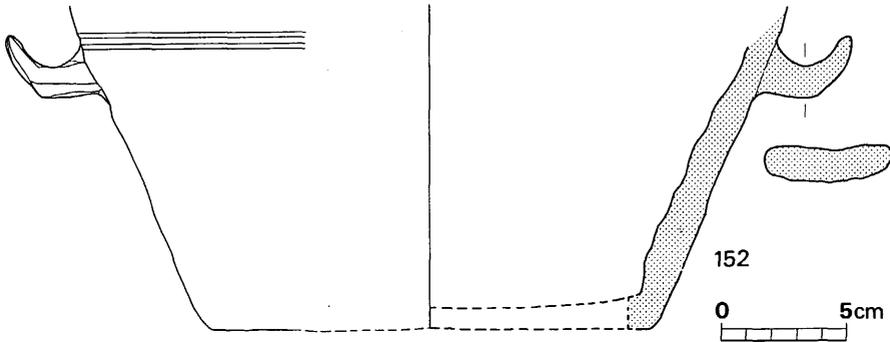


Fig. 30 剣塚第1号墳出土土器実測図 2 (縮尺 1/4)

小 結

1. 墳丘規模と形態について

当初の墳丘規模の復元については, 周滄西半が現在しているものの前方部両隅角が失なわれているので, その復元にはかなりの困難がある。

一定の比率をもつ企画によって築造されたとする前方後円墳のプランの単位については, 上田宏範氏の後円部径1/6説(註1)と柵国男氏の墳丘全長1/8説(註2)とがある。同じく企画性についての分析とはいえ, 両氏の立論の過程と結果には大きな相違があるが, 後述するように本墳の墳丘全長は後円部径の2倍と推定されるので, ここでは両氏の所説については直接言及しないことにする。

復元にあたっては, 前方後円墳のプランの決定に際し,

1. まず, 墳丘全長・前方部幅と後円部径とが決定され
2. これらの長さは, 原則として一定の長さの単位の整数倍とされた。

との2点を想定し, これを前提条件としている。本墳の場合, 後円部径はほぼ2.1mとみてよく, この1/6——3.5mを基本単位とし(註3), 以下, これによって検討を加えたい。

なお, Fig. 3 1は, 剣塚第1号墳の盛土除去後の測量図に, 上記単位3.5mの方眼を置い

たものである。小稿の目的は、規模の復元にあり、そのための作業線を記入しているに過ぎない。

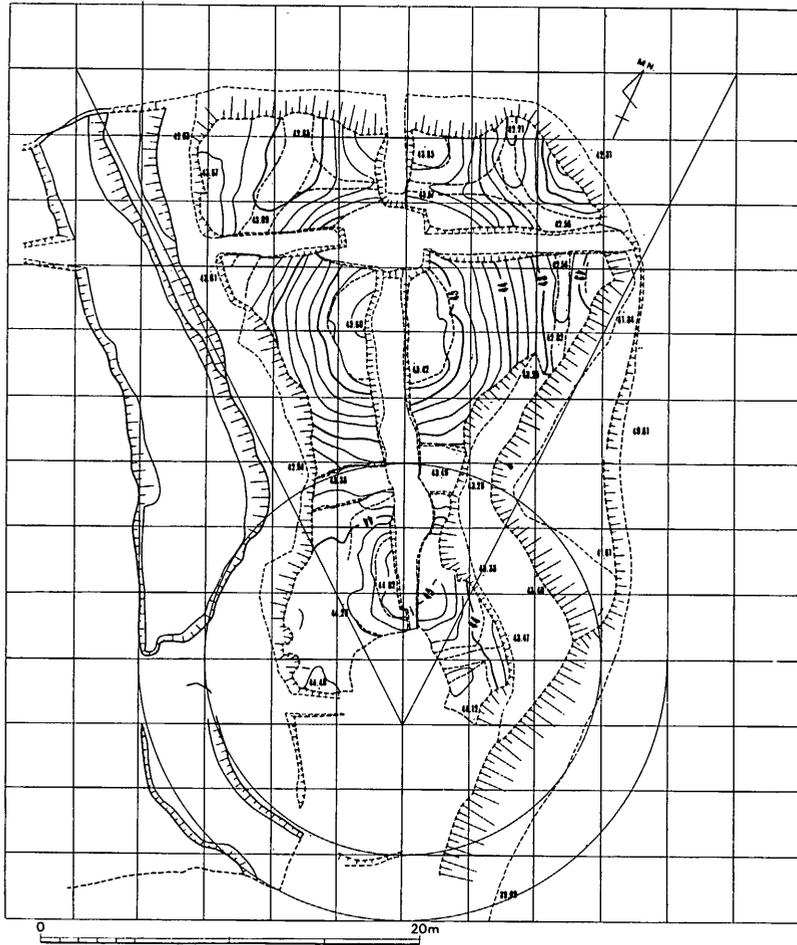


Fig. 31 剣塚第1号墳墳丘復元図(縮尺 1/400)

墳丘全長

前方部前縁を失っているが、仮に東西長10.3mの古剣塚第1号墳を完全にとりこんだとすると44m以上となり、13単位をとると45.5mとなる。

けれども、前方部前縁の土層断面(Fig. 54)でも、古剣塚第1号墳の腐植土層は、後世の攪乱以前に一部が削られていることが明らかである。また九州の前方後円墳のうち、墳丘全長が後円部径の2倍をこえる例は極く少数に過ぎない。

従って、本墳の全長は12単位換言すれば、後円部径の2倍と推定される。この場合、復元前方部前縁線は、現状道路敷の南端線にほぼ一致し、最大でも1m程度の侵蝕しか受けていな

1 剣塚第1号墳

いこととなる。

前方部幅

想定線は、10単位としており、周湟内縁線にほぼ合致する。これより狭くとると、想定線は現存する東側墳丘内部に食いこむこととなり、逆に広くとると隅角部が西湟外縁に接近しすぎる嫌いがある。なお、西側内縁線は途中から肩部が浅く掘られて2段となり、東側の肩をとると周湟の幅としてはより好ましいものとなるが、上述の東側盛土範囲と矛盾しとり難い。

従って、本墳の規模は、

全長	42 m	(12単位)
前方部幅	35 m	(10単位)
後円部径	21 m	(6単位)

と復元される。

一見して気づくように、本墳の前方部は異様なほどに発達している。前方後円墳の形態が時期的変遷をとげることは、多くの先学により指摘されているところであり、小林行雄博士によれば、「この変化を、かりに一言であらわすと、前方後円墳は、四世紀から六世紀にいたるあいだに、前方部が後円部の前方に低くのびた形から、それが後円部より大きくなった形にかわったともいえるのである」（註4）。変化は、平面と立面とに認められ、同時に企画性と不離の関係にあるが、平面形の変化、それも後円部径に対する全長および前方部幅の比率という観点にしぼって以下少しく検討を加えたい（註5）。

剣塚第1号墳の、全長および前方部幅の対後円部径の比率は、2:1, 5:3で、それぞれ後円部径の2倍、約1.67倍となる。

県内で、現時点までにその存在が確認されたあるいはほぼ確実とみられる前方後円墳は、196基である。これらのうち、測量図が作成されているものは意外に少なく、全体を論ずるには資料不足の感があるが、既知の例では、全長が後円部径の2倍をこえる例、ならびに前方部幅が後円部径の1.5倍以上となる例は極めて稀である。従って、上述の本墳についての復元値がほぼ原状に近いとすれば、本墳の形態は極めて特異なものといえることができよう。

九州の前方後円墳のプランの変遷については、既に森貞次郎博士の先駆的業績がある（註6）。計測値の集成段階にあるにすぎないが、試みに、九州での古墳の年代決定の標識となっている八女市・岩戸山古墳についてこれをみると、

	A	B	C		
	全長	前方部幅	後円部径	A/C	B/C
I	135 m	92 m	70 m	1.93	1.31
II	132 m	96 m	72 m	1.83	1.33

となる(註7)。因みに、岩戸山古墳は、森貞次郎博士によって筑紫国造磐井の奥津城に比定されている(註8)。同墳と比較すると、一見剣塚第1号墳は前方部が「発達」し、後出型式であるかに見える。

けれども、5世紀末に比定される京都郡菟田町・番塚は、

A	B	C		
全長	前方部幅	後円部径	A/C	B/C
50m	35m	20m	2.5	1.75

で(註9)、後出する岩戸山古墳よりも著しく前方部が広がっており、九州でも対後円部率は最も高く、特異な存在である。ただし、番塚の石室は古式の構造をとりながらも「ほぼ封土の下底に床をおく」のであり、小林行雄博士が指摘されたように(註10)、横穴式石室の採用による後円部の縮小化とみられ、番塚よりも後出する6世紀前半代の春日市・日拝塚(註11)もまた同様である。

縮小化の一方で、番塚と大略同期には、裾部を削り出すことにより、石室を中心かつ上位に置く手法をとる宗像郡津屋崎町・津屋崎第17号墳(註12)例もあって、模索・固執する一面もある。従って、単純に前方部の「発達度」で論ずることは危険である。

ともあれ、剣塚第1号墳の形態的特徴は、前方部幅の拡大とするよりも、番塚・日拝塚両墳におけると同様に、後円部の縮小化に起因すると理解すべきと思われる。

2. 石室構造について

大破しているので、原形を正確には復元し難い。墓壇と墓道の遺存状況は、片袖式石室の可能性を強く示唆するものがある。けれども、県内では片袖式は極めて稀であり、後期古墳群中の一角に築かれているに過ぎず、主流ではない。むしろ、畿内およびその周辺地域において古式の段階から片袖式をとる石室が多いことが注目されるが、断定し難い以上、立ち入ることは避けたい。

既述のように、本墳の墳丘は、春日市・日拝塚と形態あるいはその背景において相通ずるものがある。同墳は、「6世紀の前半」に比定され、その石室は単室構造とはいえ、全長8.4m、玄室長3.6m、同幅2.6m、同高4mと比較的大型で、羨道部の構造に前室的様相が看取されることが注意される。

それだけに、全長7mに達しない本墳の石室は、墳丘規模に比してバランスを欠く感を一層強くする。

3. 年代について

1 剣塚第1号墳

墳丘形態からは、五世紀代の番塚、「6世紀の前半」とされる日拝塚と同グループに属する。

出土土器の型式は、墓道出土の提瓶・杯（蓋？）がより古式であり、周湟出土例中では、器台・子持器台が古く、有蓋高杯は蓋杯に比して先行型式の名残りをより強くとどめる。撮付蓋を伴う長頸壺は、発見例が増加しつつあり、至近の大野城市上大利・大浦1号窯（註13）、豊前の京都郡荊田町・天観寺山窯跡群（註14）では「第ⅣA様式」とされ、以前と以後とを峻別すべき標識となる器種と思われる。

以上から、採取した土器の最古・最新両期はそれぞれ、6世紀半、6世紀末とすることができる。

従って、本墳の築造期は、岩戸山・日拝塚両墳に後出する6世紀中葉前後に比定される。

4. 土器の出土状態について

採取された土器は、墓道出土例と周湟出土例とに二分される。周湟での破片分布の中心は、確認し得たのは墓道左側とくびれ部両側の3ヶ所であるが、この他失なわれた墓道右側もまたその一つであったと推定される。

墓道出土の3個体の須恵器が、並置された原位置にはほぼ完形で現存していたのに対し、周湟出土例はいずれも細片となって原位置を移動しており、これが意識的な破壊と破片撒布によることは既述のとおりである（註15）。

周湟出土の土器は、いずれも何らかの儀礼に使われたとみてよいが、これを破壊したのは、葬送儀礼に用いた土器を日常生活で再び使用しないという意志のあらわれが理由の第1点であろう。先行する5世紀後半代の粕屋郡須恵町・乙植木第2号墳では葬送儀礼における飲食行為と土器の破壊・破片の撒布とが確認されている（註16）。しかし、本墳では甕などの容器類に比して飲食器である小型器種が相対的に少量であり、しかも、小型器種は溝底に投げつけられ、大型器種は破壊後に口頸部とそれ以下の破片とわざわざ移動させる（甕20）、あるいは、墳丘の高まりを隔てた東・西の周湟に撒き散らしたかに見える（甕9）という徹底した破壊・撒布ぶりは、5世紀代のあり方とは少しく異なる。最近の群集墳あるいは横穴群の調査の結果でも、採取時には異なる墳丘あるいは墓道から出土したことが確認された須恵器の破片が、整理作業の結果同一個体に接合された例が二三あり（註17）、広範囲にわたる破片の撒布は本墳だけの特別例ではない。

亀田博氏は、「畿内（後期の木棺葬墳―筆者註）における須恵器杯の状態をみると伏せられたものや積み重ねられたものが多く、何らかの形で食物を入れることを拒絶している。これは食物を入れないことを明示し、なおかつ食器を副葬する心情が被葬者の周囲に存在したことを示す。」とされている（註18）。

多量の土器を伴ないながら、明らかに飲食物を入れない状態にある例としては、遠賀郡岡垣町・東田第11号墳（註19）、福岡市・高崎第2号墳（註20）等がある。高崎第2号墳は石室内を中心として160個体以上が採取されており、「逆に意識的におかれているものがある」。東田第11号墳では、「石室前面左側の盛り土中」から300個以上が出土し、小型器種はまさに累々として積み重ねられている。これらの累積状態を、単に参会者による飲食行為の終了の結果とするよりも、死者に対する飲食物供献の意志のなさの表われと理解すべきであろう。上記二例は、いずれも本墳よりも少しく後出する6世紀後半代に比定されている。

本墳の周滄での土器出土状況もまた、器台というまさに供献用の器種を含みながらも、死者への飲食物の供献をまさに拒絶していると思われぬ。

墓道でのあり方は、全く対照的に、現実に納められたか否かはともかく、飲食物供献の形をとっている。矛盾するかに見えるが、儀礼全体としては死者への供献を拒みながらも、死を受け入れ難い肉親の情が、室外の墓道へこれらの土器を並置させたものと推察される。

- 註 1. 同氏「前方後円墳における築造企画の展開」『近畿古文化論攷』1962年、「前方後円墳」1969年、「前方後円墳における築造企画の展開(その二)」『樞原考古学研究所論集』1975年所収
2. 実見したのは、同氏「古墳の設計」1975年
3. 単位を後円部径の1/6としたのは、墳丘全長の1/8あるいは1/16では粗あるいは密に過ぎるとの判断があったためであり、これ以上の意味はない。
4. 「古墳のはなし」1969年
5. 本墳の場合は、先行して営なまれた古剣塚古墳群の墳丘を最大限に利用しようとした、施工上の省力化の一環としての要素が、墳丘形態に影響を与えた可能性もある。つまり、直列する古剣塚第1～3号墳を主軸上にとれば、墓壇端は第3号墳の裾部に自ずと位置し、第4・5号墳の位置が前方部幅の決定に大きく作用したと考えられるのである。けれども、基本的には利用したのであって規制されたのではない。
6. 同氏「北九州古墳の編年的考察 予報」＜西日本史学1＞1949年
7. I案は、森貞次郎博士の「岩山古墳」1970年の記載による。II案は、八女市教育委員会が委託して作成した原図をもとに筆者が後円部径の1/6を単位をするとの前提で復元した数値である。第2原図の貸出を快諾された同市教育委員会に対して、心から御礼申し上げます。
8. 同氏「筑後国風土記逸文にみえる筑紫君磐井の墳墓」＜考古学雑誌41-3＞1956年
9. 渡辺正気・松岡史「福岡県京都郡番塚前方後円墳」＜日本考古学協会第24回総会研究発表要旨＞1959年
10. 「日本考古学概説」1951年
11. 渡辺正気「日拝塚前方後円墳」＜九州前方後円墳集成1＞1969年

1 剣塚第1号墳

12. 拙稿「津屋崎町第17号墳」＜福岡県文化財調査報告書54＞1977年所収、なお、同墳は、福岡県遺跡等分布地図（宗像郡編）の奴山第8号墳（№350029）と一致する。
13. 小田富士雄・柳田康雄・真野和夫『野添・大浦窯跡群』＜福岡県文化財調査報告書43＞1970年
大浦窯跡群は、本遺跡群の北東約1.8kmにあり、その灰原からは剣塚第1号墳出土土甎（Fig.29—21）と酷似する破片（同書第23図）が出土している。本古墳群出土須恵器の生産地は、同窯を含む大野城市牛頸・上大利、太宰府町・向佐野地区であった可能性が高い。
14. 小田富士雄『天観寺山古窯跡群』1977年
15. これらの土器特に須恵器は、古・新の二期に分れることは確実であるが、出土状態としては混在している。これは、これらの土器群が意識的に埋め戻されることなく放置されたことを意味しており、古剣塚古墳群の各墳丘表面に堆積した腐植土層の厚さからも肯定されよう。従って、土器の破壊・散布を追葬時あるいはそれ以降の所産とすることは、本墳に限ればあり得ない。
16. 拙稿「古墳における古式須恵器のあり方について」＜九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告X＞1977年所収
17. 九州歴史資料館 岩瀬正信氏の御教示による。
18. 同氏「後期古墳に埋納された土器」＜考古学研究92＞1977年
19. 川述昭人『東田古墳群』1977年
20. 浜田信也「高崎第2号墳」＜今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書1＞1970年所収

Ⅲ-2 剣塚第2号墳

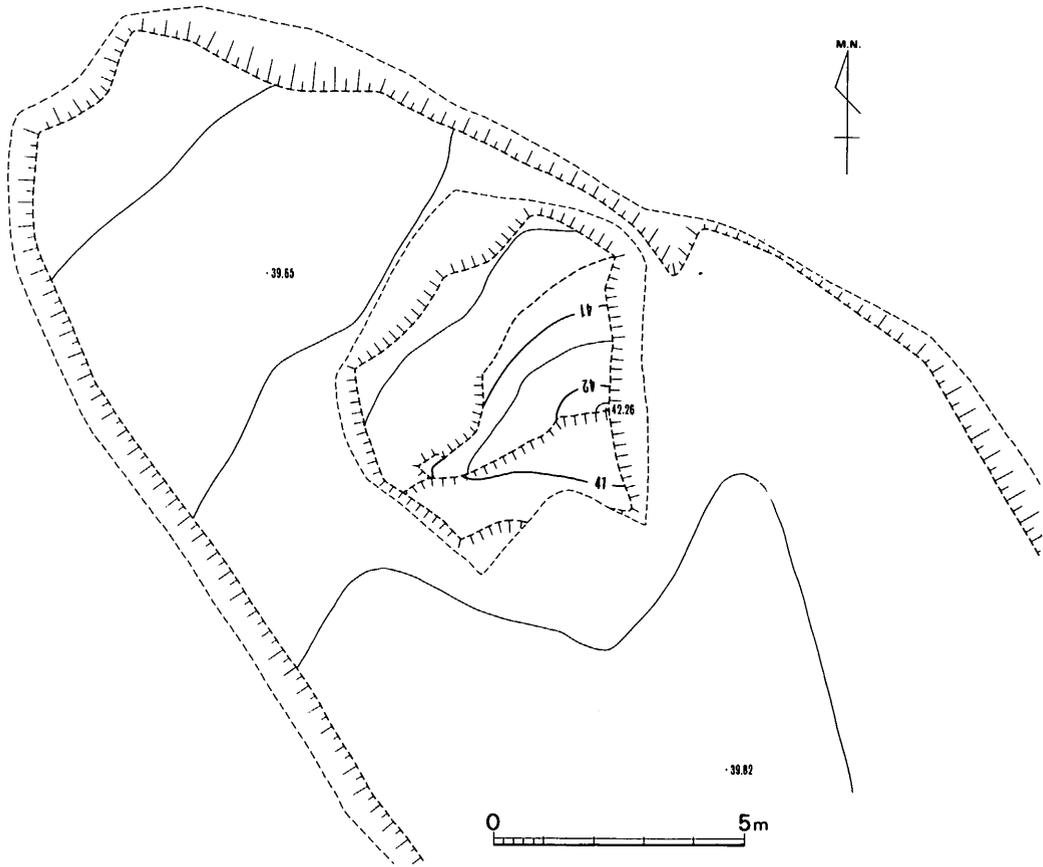


Fig. 32 剣塚第2号墳墳丘測量図 (縮尺 1/150)

墳丘

剣塚第3号墳に北接するが、盛土の一部を残すのみで大破している。周辺を精査したが、墓壇・周溝と思われる何らの痕跡も確認できなかった。

なお、南側に延長したトレンチの南端に1.5×2mの不整形の竪穴1個を検出している。この堆積土中から、土製模造鏡2と須恵器甕片を採取した。

遺物

大甕 (Fig. 33-156)

黄灰色を呈して、極めて軟質である。復元口径40cm前後、頸高14cm。頸部に沈線帯を2段にめぐらし、上・中段に波状文を付す。

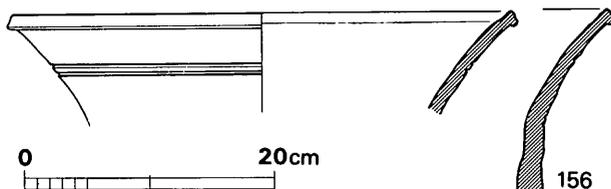


Fig. 33 劍塚第2号墳南側堅穴内出土土器実測図（縮尺 1/6）

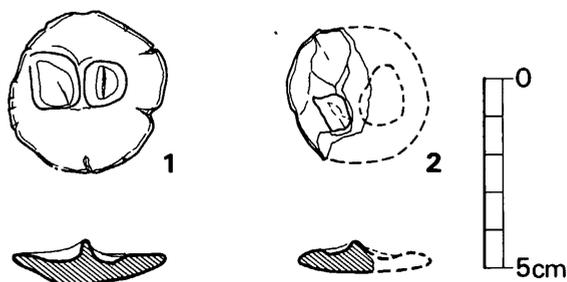


Fig. 34 劍塚第2号墳南側堅穴内出土
土製模造鏡実測図（縮尺 1/2）

土製模造鏡（Fig. 34）

1は、4.3×3.9 cmの不整円形で、総高1.2 cm。淡褐色を呈して焼成稍不良で、部分的に灰黒色を呈する。掌上で指頭にて鈕部をつまみ出しており、爪の痕跡をとどめる。

2は、1/2しか現存せず、復元径3.5 cm前後、総高8 mmと1より

もひとまわり小型である。淡褐色を呈して焼成不良。

Ⅲ—3 劍塚第3号墳

墳丘ならびに周溝

至近に第2号墳が墳丘の一部をとどめており、周辺になお他の古墳が営まれた可能性が強く感じられた。けれども、本墳の周辺は畑化されて全くの平坦面となっており、それらしき高まりは認められなかった。散布地としての性格を把握するためにトレンチを設定し、耕作土を除去し地山面を露出させる過程で周溝を検出し、本墳の存在を確認するにいたった。

東側が1段削り落されているためこの部分の確認はできなかったが、完周する溝をめぐらしたことはほぼ確実とみられる。注目されたのは、地山に穿たれた巾3 m前後の溝が、大小の2本の溝から成る点にあった。このうち内側の小溝は、上端巾0.9 m前後、深さ約0.8 mで推定外径約1.5 m前後である。これが墳丘築成の過程で埋め戻されたことは土層断面図（Fig. 36）によって明らかである。従って、内側の小溝は、墳丘構築に際しての地割溝としての性格

Ⅲ 古墳時代の遺構と遺物 1

をもつと考えられる。一方、外側の溝は、前述の小溝をいったん埋め戻した後に、墳丘裾部を整える作業を兼ねて一段深く掘りこまれ、排土は墳丘上部の盛土に使用されたものと思われる。この上端巾は、2.5 m前後、深さ1.3 m前後で、外径約19 mの不整形円形を呈する。

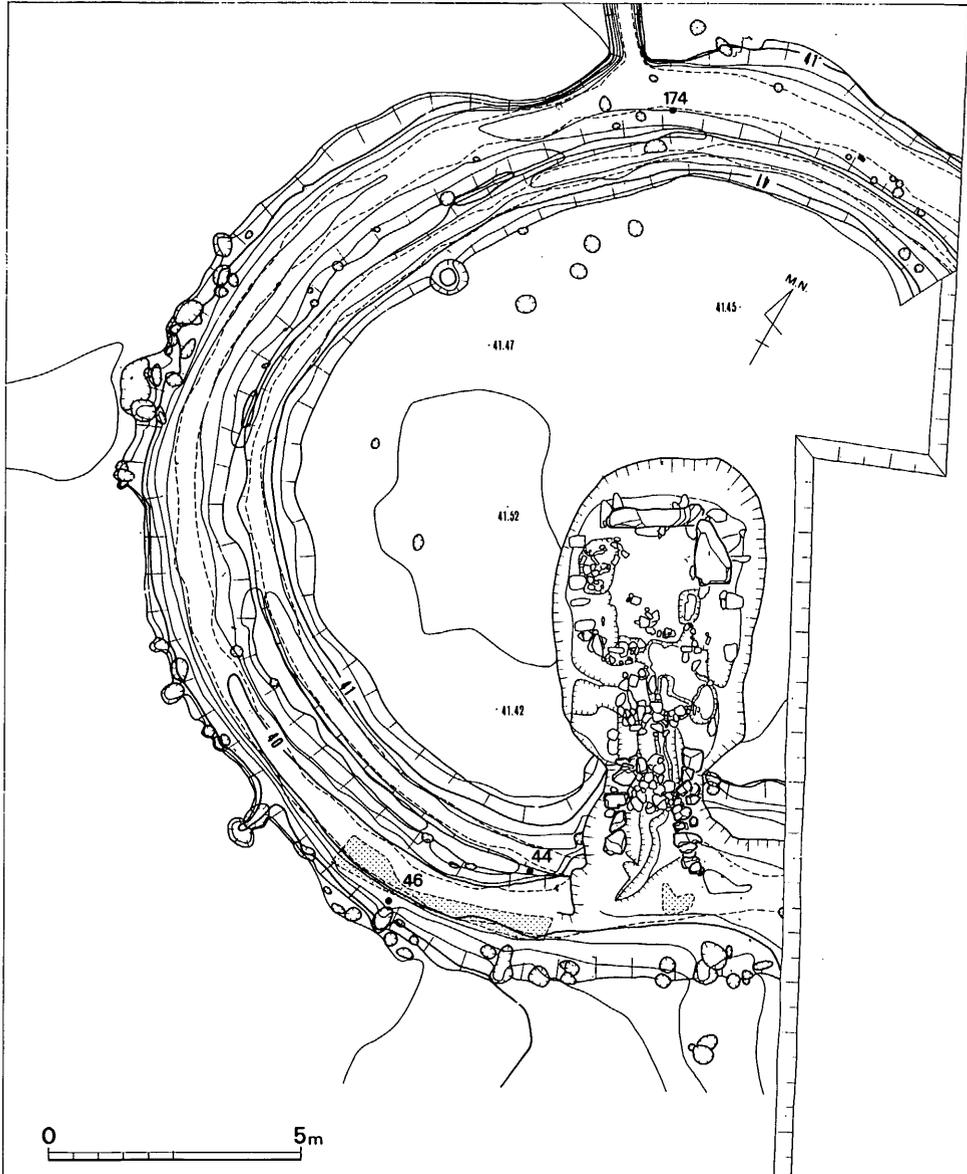
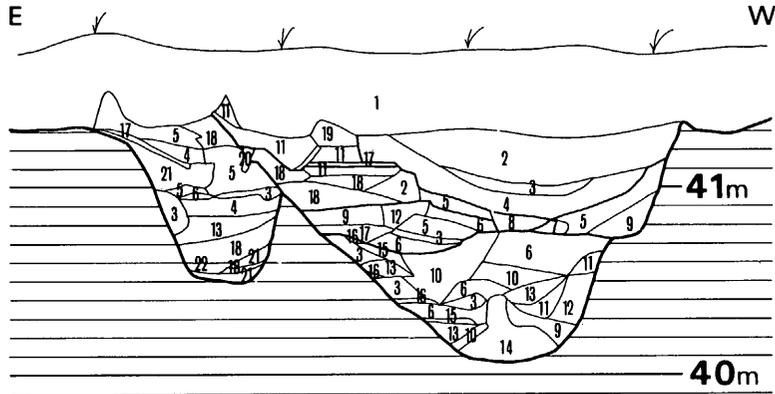


Fig. 35 剣塚第3号墳全体図 (縮尺 $\frac{1}{150}$)

本墳の周溝でさらに注目されたのは、石室背後の北東側に設けられた排水溝である。これは

上端巾約1m、深さ0.9m弱で長さ約15m続く。調査期間中、一時多量の降雨があり、一夜にして深さ約1mの水がたまったことがあり、この排水溝はこの点頗る有効であったと思われる。けれども、追葬時にはこうした溝は必然的に不便を生じることになる。



- | | | |
|--------------|---------------------|----------------|
| 1 耕作土（灰色土質層） | 2 茶褐色赤色土混入粘土層 | 3 茶褐色粘土層 |
| 4 明茶褐色粘土層 | 5 淡茶褐色粘土層 | 6 濃茶褐色粘土層 |
| 7 黄色茶褐色粘土層 | 8 5の黄混り | 9 黄褐色砂混り粘土層 |
| 10 明黒褐色粘土層 | 11 灰褐色粘土層 | 12 明灰褐色粘土層 |
| 13 黒褐色粘土層 | 14 明黄褐色白斑混入砂質層 | 15 黒土粘土層 |
| 16 赤褐色粘土層 | 17 赤褐色砂質混入粘土層（黒斑混り） | 18 赤黄褐色砂質混入粘土層 |
| 19 暗黄褐色粘土層 | 20 3の砂質 | 21 茶色砂質層 |
| | | 22 赤黄色砂質層 |

Fig. 36 剣塚第3号墳周溝断面図（縮尺 1/40）

石室 (Fig. 37)

主体は南東に開口する全長7mの両袖式横穴式石室で、深さ1m強、上端最大巾4.1m、同長さ6.2mの不整隅丸長方形プランの墓壇内に営なまれている。

玄室は、大破しており、奥壁および右側壁の腰石各1石が現存するに過ぎない。奥壁の腰には高さ1.1m強の1枚石が用いられているが、上半は割り取られている。裏込土の残存状況（ドットを付す部分）からみて、両側壁には各2個の腰石が配されたとみられ、玄室内法は、長さ2.4m前後、奥壁部巾1.9m弱と推定される。構築に際しての根締めは周到に行なわれ、また要所に腰石と直交させて支石を置いている。床の一部に敷石が遺存するが屍床等の設置を思わせる痕跡はない。

横口部から羨道前半までの間も大破しており構造、規模は不明であるが、玄門の巾は60cm前後であったと思われる。

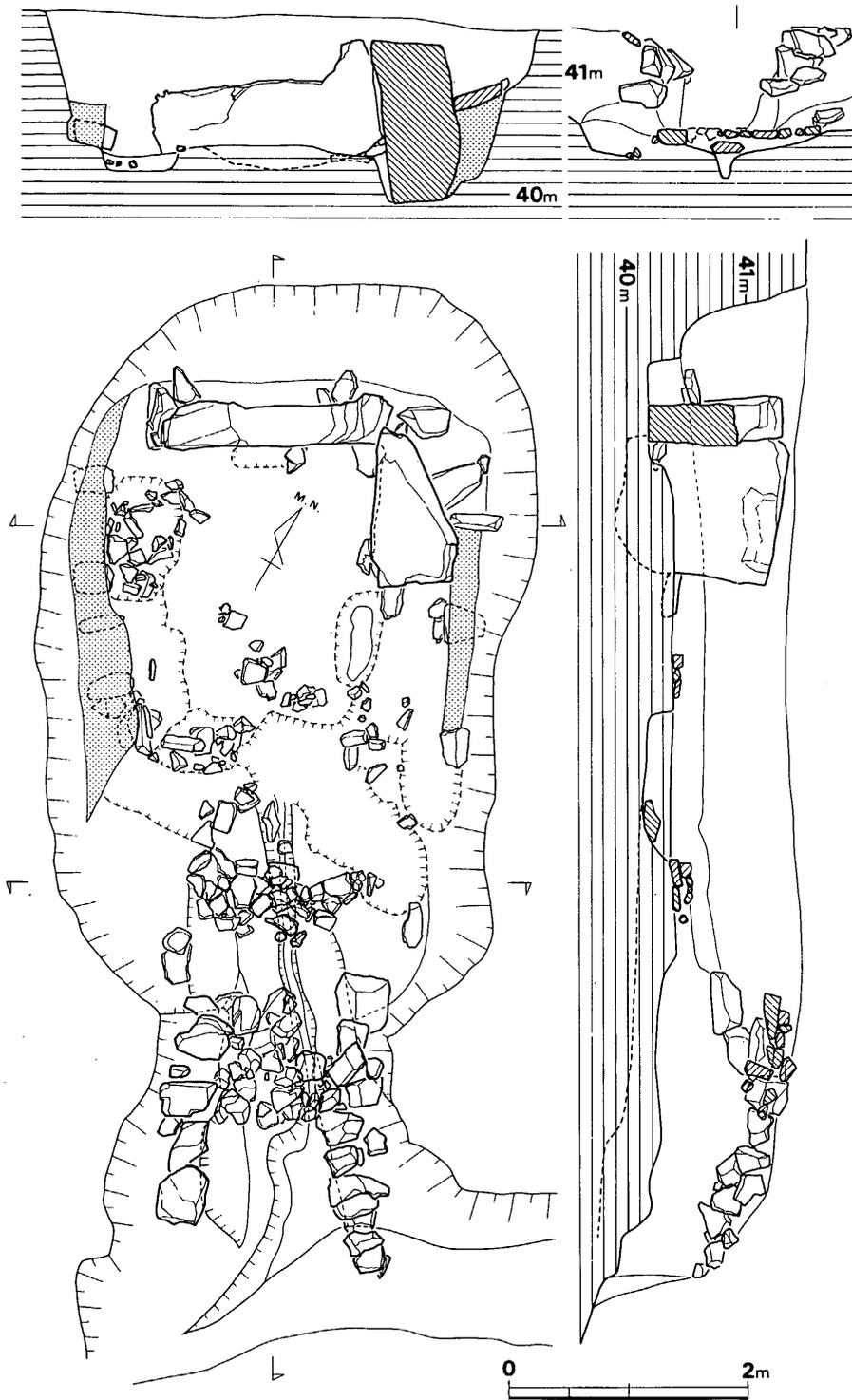


Fig. 37 剣塚第3号墳石室実測図 (縮尺 1/60)

裾広がりの変道側壁は、先端部が左側で1.9 m、右側で2.6 mの長さにならって現存する。このうち、左右の先端部分各1.2 m、1.6 mは、軟質の黒褐色土層上にあつて基盤は極めて脆弱である。従つて、この部分に天井石を架けわたすことは不可能であり、また、これら先端部は築造当初のものではなく後に附加された可能性が強いといえる。とすれば、当初の本石室は全長約5.4 mの単室であつたと推定される。その場合変道側壁前面は、切通し状の墓道となつて周溝へと続いたものと思われる。横口部から周溝までの間の床には、巾15～30 cm、深さ20 cm前後の排水溝が穿たれており、上面は石で覆われていた。

遺物出土状態

石室内

石室は既述のように大破しており、室内堆積土中から原位置を移動した玉類・鉄器片若干を採取したにとどまる。

周溝

溝中からは、20個体以上の土器が採取された。これらは、墓道正面および向つて左側に集中しており（Fig. 35でドットを付す部分）、いずれも溝底直上ではなく、50 cm以上上位にあり、かつ間層をはさんで上下の2層に分れている。下層出土例としては、甕（59）等があるが、個体数は少ない。上層出土例には、甕（44・46）、大甕（155）、長頸壺（45）等がある。大甕の出土状況は各部の破片が一括状態にあるのではなく、破片を意識的に撒いた形跡が窺われる。一方、石室背後の排水溝近くからは土師器の鉢（174）が出土したが、これは溝底と少しく間層をはさむ程度で、対照的である。

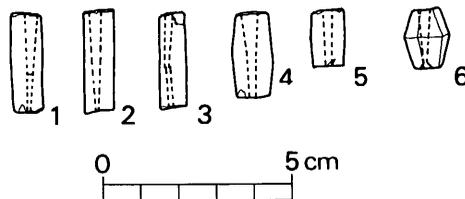
遺物

玉類（Fig. 38）

管玉、切子玉、ガラス玉が採取されている。

管玉

5個あり、いずれも碧玉製である。1は、長さ26.5 mm、径6.5～7.5 mm。研磨が充分でなく10稜体となっている。2は、長さ26.5 mm、径7.5～8 mm。3は著しく風化が進行しており、白緑色を呈する。長さ25.5



mm、径6.5～7 mm。両側からの穿孔は、稍食い違う。4は、長さ22.5 mm、径8.5×10 mmとズングリとしており、中脹らみ。5は、長さ14.5 mm、径7.5～8 mmで、1ほどではないが一部に稜を

Fig. 38 剣塚第3号墳出土玉類実測図（縮尺 1/2）

残している。

切子玉

水晶製であるが、風化が進み使用による細い欠損部が多い。全体に鋭さを欠く。高さ15.5 mm, 最大径12 mm。

ガラス玉

6個があり、いずれも濃紺色を呈する。径8~10 mm, 高さ5.5~8.5 mm。

土器 (Fig. 39~44)

土師器を殆んど含まない点がまず注意され、これは剣塚第1号墳とも共通する。確認した器種とその数量は下記のとおりである。

高杯	2
有蓋高杯	1
甕	2
提瓶	2
平瓶	2
大甕	1
甕	3
壺	1
台付壺	2
撮付蓋(壺)	1
長頸壺	1
杯	1
瓶	1
鉢(土師器)	1

高杯

68は、器高7.2 cmの小形品。杯部口径7.6 cm, 同高3.1 cm。脚底径6.8 cm。杯部底面は、手持状態で篋削りされるが、全体として調整は雑で、杯部と脚部とは正接していない。

脚内面に篋記号を付す。焼成良好。64は脚部のみで、底径10.2 cm, 脚部高8.8 cm。68と同様に脚内面に2条の沈線からなる篋記号を付す。

有蓋高杯

70は脚部のみ。底径13.8 cm, 現存高9.5 cmと大型である。灰青色を呈して焼成良好で、脚端もシャープで、成形・調整またみごとである。

甕

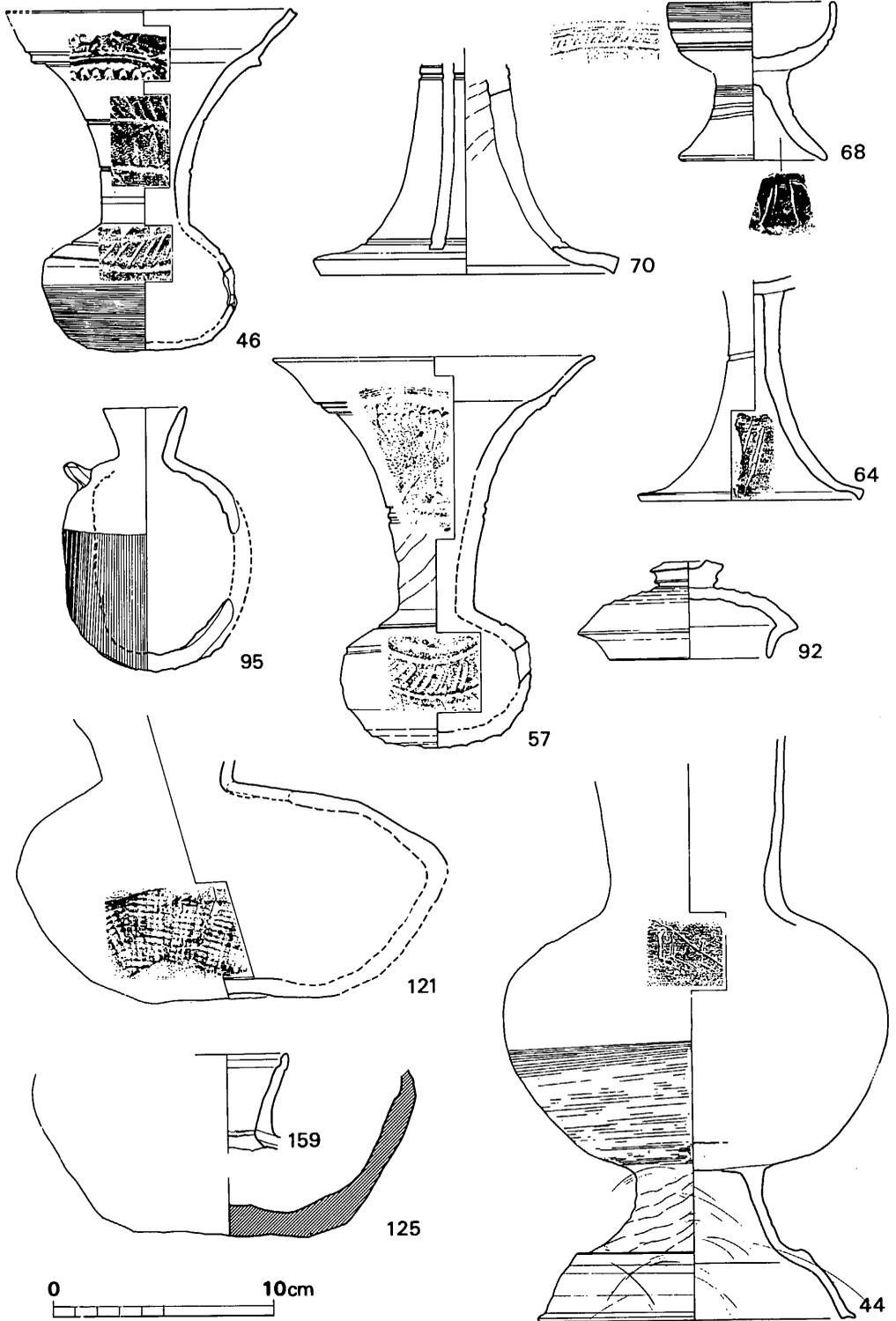


Fig. 39 劍塚第3号墳出土土器実測図 1 (縮尺 1/3)

57は口縁の過半を欠く。器高17.8cm, 口径14.5cm, 頸径3.4cm, 頸高11.4cm, 胴部最大径8.5cm。頸部下半には絞りの痕跡を残す。砂粒を多く含むが、焼成は堅緻。胴部と以上とは正接せず、成形は稍劣る。焼成の具合からみて口縁を焚口に向け横倒しに近い状態で窯詰されたとみられる。46は口縁の一部を欠失する。57よりもひとまわり小型で器高15.4cm, 復元口径13cm, 頸径4cm, 胴部最大径8.7cm。口縁部と頸部上段に波状文をめぐらし、胴部沈線間に楡歯文を付すが、ナデが完全ではなく一部では沈線からはみ出している。胴部下半は、篋削後カキ目調整を施す。灰青色を呈し、焼成・胎土ともに良好であるが、歪つて成形は劣る。頸部内面に絞りの痕跡を顕著にとどめる。

提 瓶

95は胴部の一部のみ。胴部復元径10.5cm, 同厚8.5cm。成形は、粘土紐の痕跡を残し肉厚で貼付部分が多く難があるが、調整は丁寧に行なわれている。黄灰青色を呈し、焼成は良好。把手は通例とは90度ズレており、3本であったと思われる。159は頸部のみで、平瓶のそれである可能性を残す。口径5.5cm, 頸高3.8cm。茶灰青色を呈し、焼成は稍甘い。

平 瓶

121は、口頸部を欠く。胴部最大径19.5cm, 高さ9.8cm前後。灰赤褐色を呈し、軟質。体部下半に叩き板の痕跡を残し、底部とともに手持状態で篋削りされている。125は胴部下半のみ。胴部最大径17.2cm。赤褐色を呈して軟質。

大 甕

155は、器高97.7cmの大型品で、口縁部をはじめ各所に歪みを生じている。口径48~55cm, 頸部径34.1~37.4cm, 胴部最大径76.4cm。頸部には2条からなる沈線帯2本と斜行線で加飾する。底部は採取されており、この点で甕の54・59とも共通し、剣塚第1号墳例とは対照的である。黒青色を呈し焼成堅緻。

甕

59は器高22.8cm, 口径16.5cm, 頸径11.4cm。胴部最大径23.6cmは中位にあり、ズングリとした感を受ける。胴部器表全面は整然と叩きしめられ、後部分的にカキ目調整がなされている。胎土に細粒を多く含む、一部に自然釉が認められる。底部に詰台として用いたとみられる甕の破片が熔着している。39は肩部以下を欠失する。復元口径24.4cmで、口縁部は玉縁状となる。灰白色を呈して極めて軟質。頸部器表に2条の平行線の篋記号が付されている。54は頸部以上を欠く、現存高28.3cm, 頸部径15.3cm, 胴部最大径30.2cm。灰青色を呈して焼成良好。

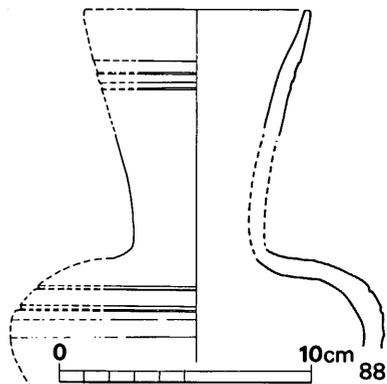


Fig. 40 剣塚第3号墳出土土器実測図 2
(縮尺 1/3)

3 剣塚 第 3 号 墳

壺

45は、口縁部の一部を欠くが略完存し、胴部最大径19.3cmは下位にある特徴的な形態をとる。器高24.5cm、口径13.3cm、頸径7.8cm。体部上半に4条の沈線をめぐらし、ほぼ全面にカキ目調整を施す。底部は、周縁部を手持状態にて篋削りし厚さを整え、平底

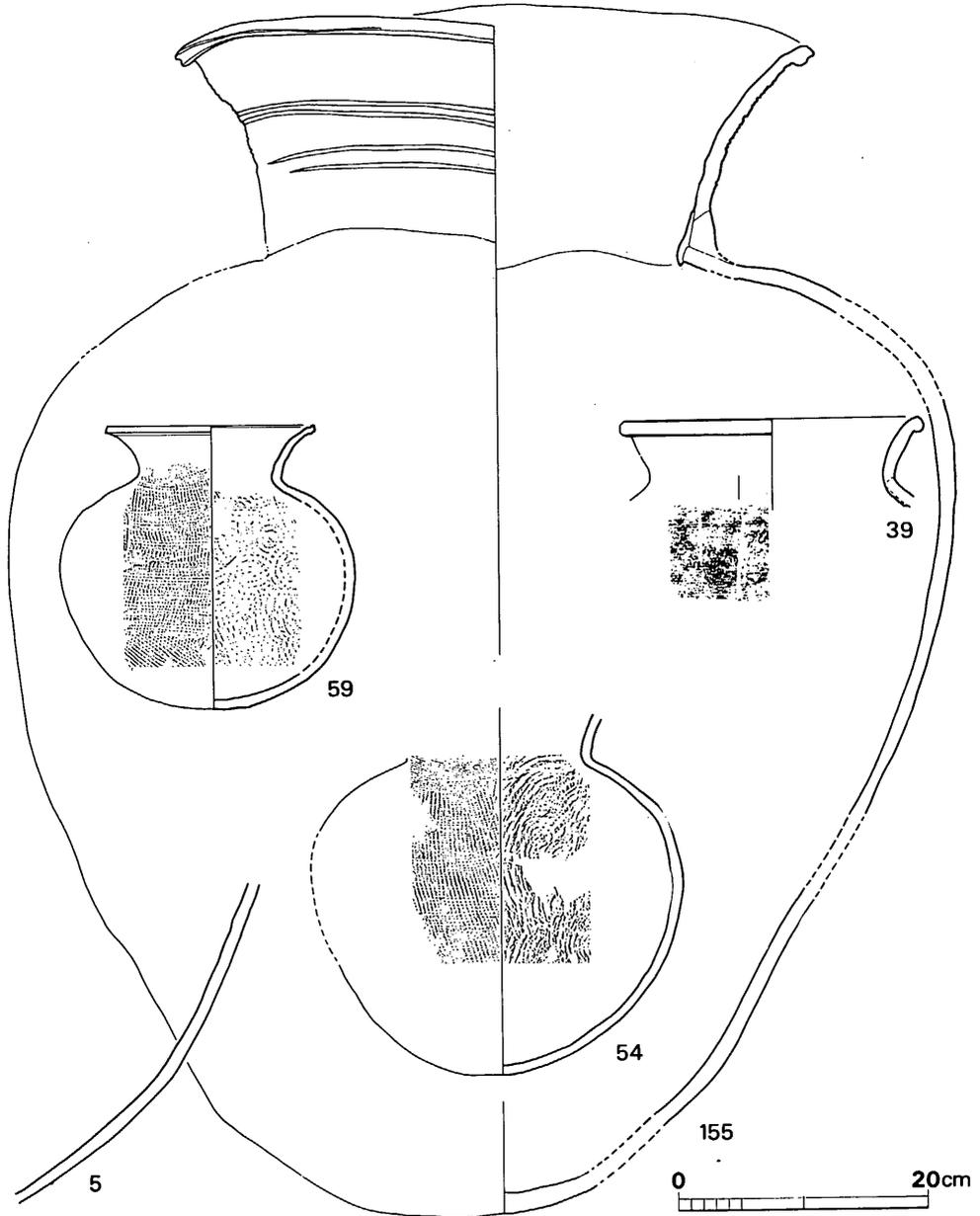


Fig. 41 剣塚第3号墳出土土器実測図 3 (縮尺 1/6)

に近いが不安定である。従って、焼成時には小粘土塊4個を用いて横倒しとしている。濃い飴色の自然釉がかかる。44は台付直口壺で口縁部を欠き、現存高26.5cm。胴部最大径17.1cm，脚高6.8cm，同底径14.3cm。暗灰青色を呈し、胎土・焼成共に良好。胴部の肩から頸部下半にかけて手持状態にて斜めにカキ目調整を施す点特徴的である。上半はナデ消される。体部の全面にもカキ目調整が施されたとみられるが、後ナデ調整が行なわれる。脚部器表には絞りの痕跡をとどめる。88は台付長頸壺で、肩部以下を欠失する。復元口径8.9cm，同頸径5.2cm，同頸高9.6cm，同胴部最大径14.6cm。口縁下と肩部に各2条の沈線をめぐらす。内外ともナデ調整は入念。肩以下の器表は篋削りされたとみられる。

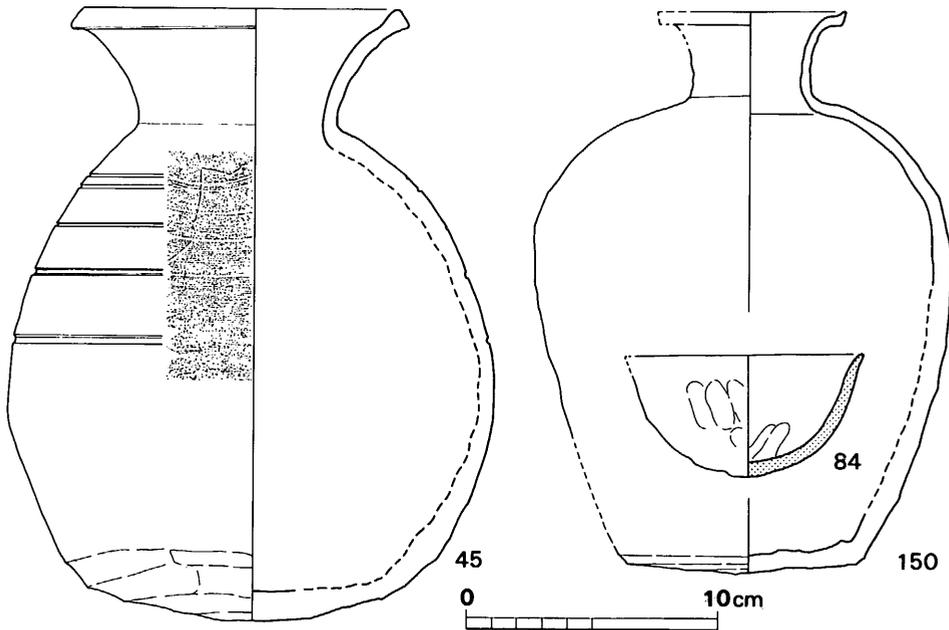


Fig. 42 剣塚第3号墳出土土器実測図 4 (縮尺 1/4)

撮付蓋

92は略完形。最大径10cm，器高4.4cm。内面の粘土紐の痕跡は、強く指頭によってナデ消されている。焼成堅緻であるが、焰のあたり見合からみて、身から外された状態で焼成されている。胎土に細粒を多く含む。

長頸壺

136は口縁と底部を欠き，現存高24.2cm。胴部最大径21.1cm。頸部内面に絞りの痕跡をとどめる。灰青色を呈し，胎土・焼成ともに精良。成形・調整またシャープで見事である。

杯

128は黄灰色を呈して，極めて軟質。口径12.7cm，器高3.8cm。底部は粘土紐を巻

3 剣塚第3号墳

いた円板。

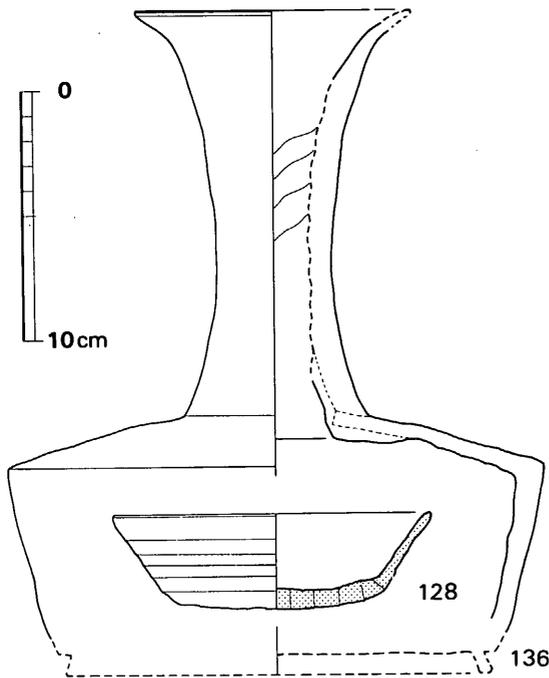


Fig. 43 剣塚第3号墳出土土器実測図 5 (縮尺 1/3)

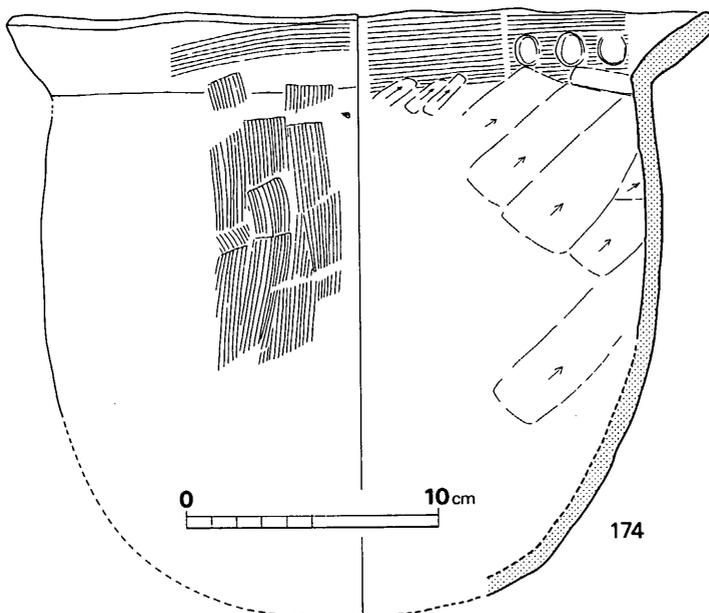


Fig. 44 剣塚第3号墳出土土器実測図 6 (縮尺 1/3)

瓶

150は徳利形を呈する。器高22.4 cm, 復元口径7.4 cm, 胴部最大径16.5 cm, 底径9 cm。胎土に細粒多く含むが, 焼成・成形いずれも良好である。体部下半から底部にかけては篋削調整が施される。

土師器鉢 (Fig. 44-174)

底部を欠く。口径28 cm, 頸径23.8 cmで, 復元器高は24 cm。胴部最大径24.6 cmは, 上位にある。口縁は厚ぼったく, この内面に刷毛目をかけた後, 体部内面を篋削りしている。器表は, 頸部を横方向に以下は縦あるいは斜めに刷毛目調整を施す。調整時の手の動きで, 口縁を中心に各所に歪みが生じており, 一部に指紋を残す。

赤褐色を呈して比較的硬質。相對する2ヶ所は, 黒色を呈し, この部分は特に堅い。

周辺出土の土器

以上の他に、本墳確認前に各トレンチから採取した須恵器片が若干ある。いずれも杯であるが、このうち78はその形態からみて本墳に伴う可能性が強い。

杯 蓋

78は、口径12cm、器高4.1cmで厚手。焼成は堅緻であるが、頂部の調整は稍雑である。篋記号を付す。

撮付杯蓋

86は灰青色を呈して焼成良好。

杯 蓋

129は復元口径15cm、器高2.1

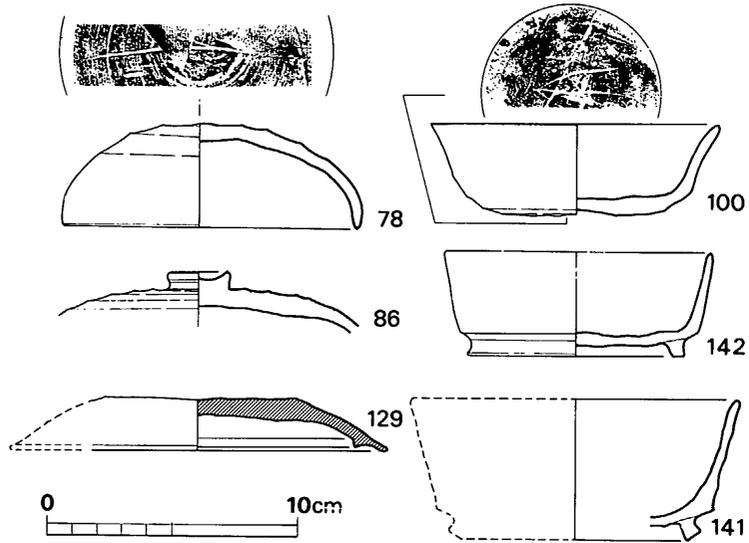


Fig. 45 剣塚第3号墳付近出土土器実測図(縮尺 1/3)

cm、赤褐色を呈するが硬質。頂部は、平坦面となっており、静止状態にて各方向から篋ナデ。杯

84は口縁の一部を欠くが、略完存する。口径9.4cm、器高4.8cm。体部略全面に篋ナデを施す。黄灰色を呈する。100は、復元口径11.5cm、器高3.7cm。灰青色を呈して焼成良好。底部は手持状態で篋削りされ、篋記号を付す。

高台付杯

142は歪みを生じており、復元口径10.6cm、器高4.2cm。みこみに粘土紐の痕跡を残す。胎土・焼成良。伏せて焼かれたと思われる。141は過半を欠失する。胎土に細粒を多く含み、焼成は良好であるが、調整は稍雑。

小 結

出土土器の型式は、大別して2期に分かれ、剣塚第1号墳周湊出土例の大部分とほぼ同期に属するとみられる。従って、築造期は、第1号墳に少しく遅れる6世紀後半代に比定されよう。土器の出土位置が、土師器鉢(174)を除けば、墓道前面および左右に限定されている点が第1号墳とは異なる。

石室は、既述のように単室とみられるが、所属時期を考慮すると、先行型式としてのそれと

は考えにくい。ただ、羨道側壁前半が初葬時以後の改修であるとすれば、それ以降は既成の羨道部を前室的に扱ったとも考えられる。

Ⅲ—4 第 11 号 住 居 跡

位置と構造 (Fig. 4 6)

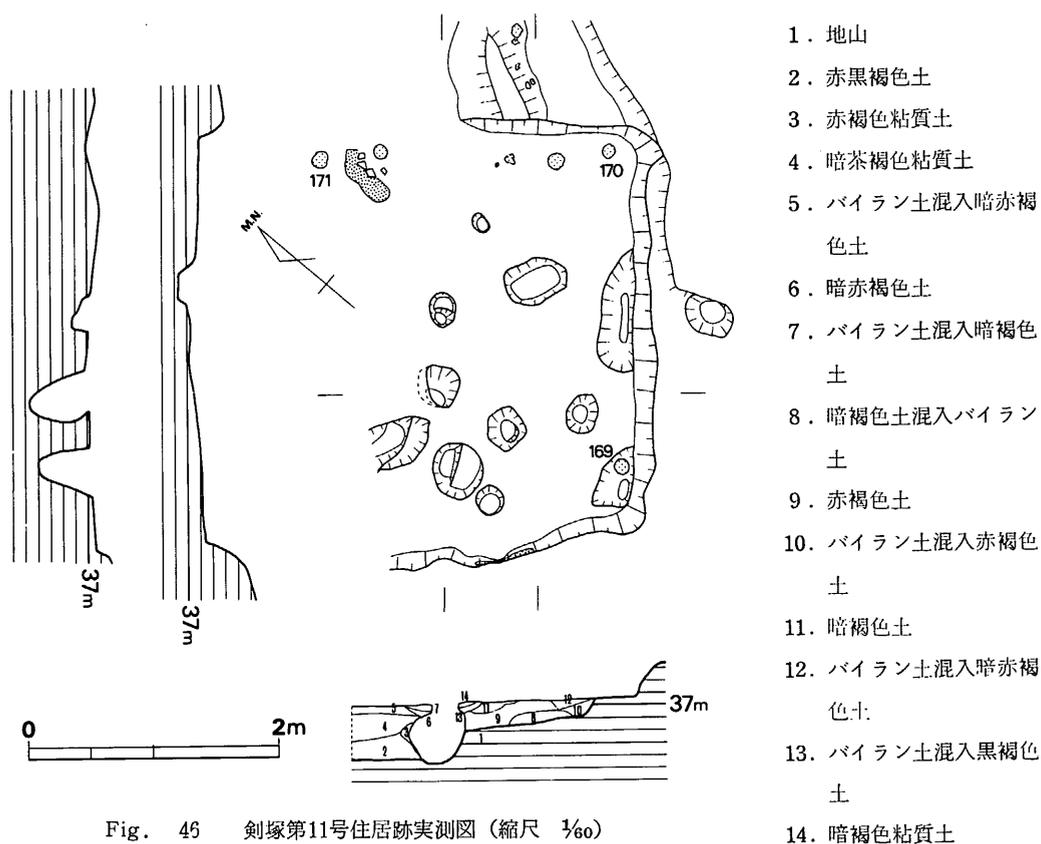


Fig. 46 剣塚第11号住居跡実測図 (縮尺 $\frac{1}{60}$)

剣塚遺跡群の最北端にあたり、他の諸遺構が営なまれた台地上面よりも約2.5mと一段低い比較的狭小な平坦面に位置する。西接して剣塚第1号瓦窯が築かれている。当初はこれらの地区には遺構は存在しないのではないかと判断していたが、瓦窯跡が確認されたことにともない、これに付随する遺構検出を目的として調査区を拡大した結果発見されたものである。

北半を失っているが、床面長一辺3.2~3.4mの不整形プランとみられ、対角線の

一方を略南北にとる。現況は平坦面であるが築造時は緩斜面であったために、床面は盛土されており、その厚さは北西側では45cmに達している。壁高は、東側で23cm。ピットは大小・深浅計10穴が現存するが、4本柱のうちのA・B2穴しか現存しない。

現存部分にはカマドは付設されていないが、東壁と北側床面の一部に焼土（Fig. 46にて密ドットを付す部分）が認められた。

遺物出土状態

須恵器および土師計7個体（Fig. 46にて粗ドットを付す）分が、略床面に接した状態で出土した。いずれも各辺に沿う位置にある。なお、これらの他に本住居跡に伴なう遺物ではないが、住居跡外の北東側の浅い溝の中から糸切底土師器を採取している。

遺物

土師器高杯（171）

口径12.2cm，器高8.3cmで。口縁部の一部を欠くが，略完存する。杯部は正接せず，稍傾く。杯部および脚部端の器表に篋ミガキを施す。杯部内面には同心円の叩きの痕跡を残す。脚部の内面は篋でザックリと扶る。形態・手法とも115と酷似し，同一工人の手になるとみてよい。

須恵器杯身

2個体あり，いずれも口縁部を少しく欠くのみで完形に近い。底部に同一の篋記号を付す。169は，最大径12.1cm，器高4.9cm。赤灰青色を呈し，焼成は稍軟調。蓋受部内面には鋭い稜がつく。底部の突起は両側からの篋による切りこみによって生じたと思われる，この部分には篋削りが施されていない。170は，最大径11.5cmと前者よりも小型で，器高3.2～3.4cmと少しく歪む。灰青色を呈して焼成良好。底部中央は未調整。

糸切土師器杯

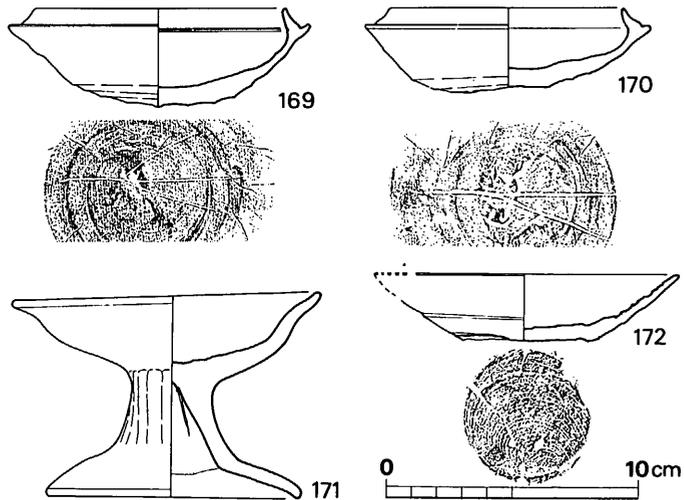


Fig. 47 剣塚第11号及び周辺出土土器実測図（縮尺 1/3）

復元口径 12.1 cm, 器高 2.7 cm。茶灰色を呈し、焼成は硬い。胎土は良好。内面には、回転調整の鋭い稜をとどめる。

小 結

図示した 3 個体の土器は、出土状態からみて本住居跡に伴うことは明らかである。従って、これらの土器の所属型式からみて、本住居跡は剣塚第 1・3 号両墳よりも遅れて築造され、大略 6 世紀末に比定される。

須恵器杯身の 169・170 は、同一の窠記号を有しながらも、手法上に相違がある。形態は良く似ていることから、同一グループによる製作とみられるが、底部にみられるクセは、二人の工人の存在を思わせる。

筆者は、かつて古墳出土の須恵器に付された窠記号について述べたことがある（註 1）。窠記号の意義は、既に多くの先学により多様な用途が想定されているが、主として成形・窯詰等の作業上の必要性による場合と、使用者および生産者（工人・管理者的存在）側の必要性による場合との三つに大別される。山崎純男氏は、福岡市・広石古墳群出土須恵器の検討を通じて、生産者側の必要性として（氏は主体を明示されていないが）「製作時における生産量（数量）のある単位を示すために記入された」とされ、他方使用者側では「ヘラ記号を持つ須恵器を副葬することによって、その表わす単位の数量の須恵器の代用」、具体的には「ヘラ記号を有する須恵器は 1 個体で 10 個体前後の須恵器の量を意味」したのではないかとされる（註 2）。前段は明解であり、用途の一つとして賛意を表わしたい。後段は、飲食物供献の変遷ともからみ、普遍化できるか否かはなお検討の余地がある。

複数の工人が製作にあたったとすれば、各人の製作量の和がグループの総生産量となるわけで、窠記号が数量の一定の単位を示すものとして管理者的存在が付したとしても、数量の（正確には製品の）把握は工人側にとっても必要であったと思われ、工人毎に窠記号が変えられた可能性もある。もっとも、30 種類以上の窠記号が確認された八女市・塚ノ谷第 4 号窯の場合は（註 3）、直ちに工人の数を示すとは考えられないが。

先稿では触れなかったが、瓦生産においては、大川清氏が、窠・印等によって文字・記号が付された意義について論及されている（註 4）。奈良時代の造瓦組織と須恵器生産体制とを直ちに対比することはできないが、体制の実態解明の過程で生産者側の必要性に基く場合の窠記号の意義が明らかになると思われる（註 5）。

本住居跡出土例については、明解な意義を示し難い。居住者にとって利となる点はあったと思われるが、これが結果であるのか否かは判断し難い。

- 註 1 拙稿「鈴カ山，山の前両古墳群出土須恵器にみられるヘラ記号について」 <九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ> 1972年所収
- 註 2 同氏「広石古墳群出土の須恵器にみられるヘラ記号の検討」『広石古墳群』 <福岡市埋蔵文化財調査報告書 41> 1977年所収
- 註 3 真野和夫「ヘラ記号について」『塚ノ谷窯跡群』 <八女古窯跡調査報告 1> 1969年
- 註 4 氏によれば，東国の国分寺造営に伴なう膨大な量の瓦をまかなうために，課税の一形態として調達が行なわれ，この際の実務的な必要性から，記号・文字が付されたのである。氏の長年の持論は，下記論文に展開されている。
「東国国分寺造営時における造瓦組織の研究——瓦埴文字を中心として」 <国士館大学人文学会紀要 5> 1973年
- 註 5 須恵器生産体制については，中村浩氏の新稿がある。「須恵器生産に関する一試考——和泉陶邑窯における陶工組織について」 <考古学雑誌 63-1> 1977年

Ⅲ—5 剣塚遺跡群出土土器

正確な出土地点が不明であるものに下記があり，3点を除けばいずれも須恵器である。

杯 蓋	2
杯 身	4
有蓋高杯	1
平 瓶	1
大 甕	2
甕	3
横 瓶	1
壺	2
台付壺	4
長頸壺	1
撮付杯蓋	5 + 1
杯 蓋	3
高台付杯	1
土師器高杯	1
" 杯身	2

5 劍塚遺跡群出土土器

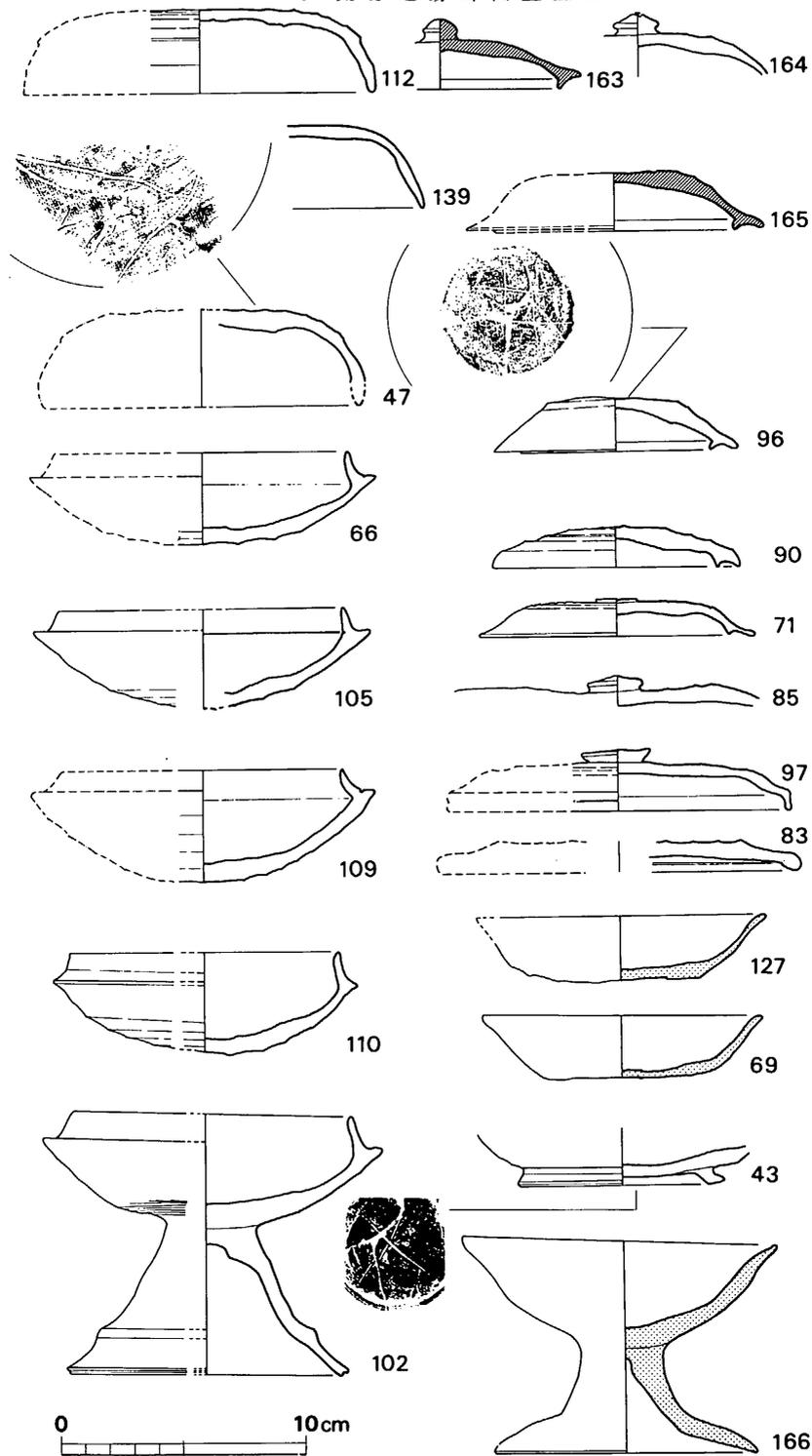


Fig. 48 劍塚遺跡群出土土器実測図 1 (縮尺 1/3)

杯 蓋

139は、歪みが著しい。肩部に別個体の杯の口縁が熔着している。47は、復元最大径13cm，同器高4cm，篋削りの範囲は肩にまで及ぶ。器表肩部に×印の篋記号が付されている。

杯 身

66は暗灰白色を呈して，焼成は稍甘い。復元最大径14.2cm，同器高3.8cm。内面に同心円の叩き板痕をナデ消すための調整が施される。105は復元最大径13.8cm，器高4.

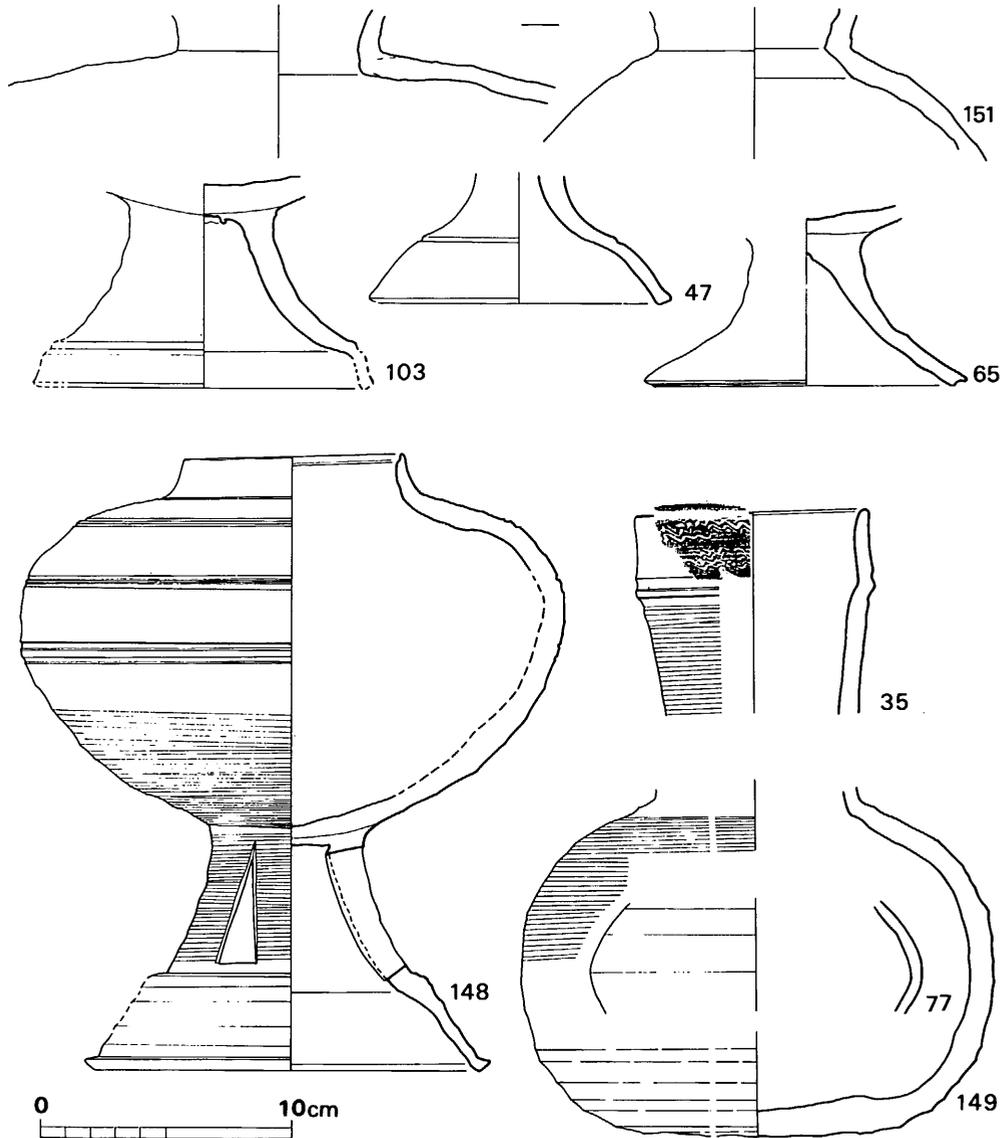


Fig. 49 剣塚遺跡群出土土器実測図 2 (縮尺 1/3)

1 cm。焼成温度は高きに過ぎる。109は、復元最大径14 cm，器高4.7 cm。灰白色を呈して焼成不良。内面に叩き板痕を残す。110の蓋受部は稍ダレた感を受ける。復元最大径12.5 cm，同器高4.1 cm。

有蓋高杯

102は復元口径13.8 cm，器高10.7 cm。杯部内面に叩き棒の痕跡をとどめる。脚部との接合後，周囲にカキ目調整を施す。暗灰青色を呈して焼成良好。

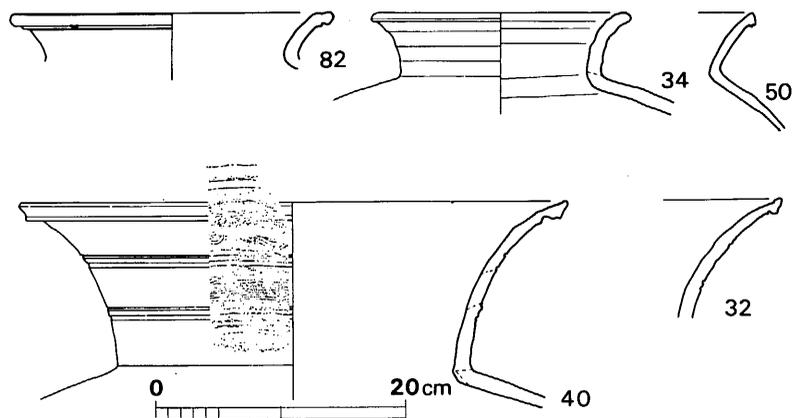


Fig. 50 剣塚遺跡群出土土器実測図 3 (縮尺 1/6)

大甕

40は肩部以下を欠失する。復元口径43.5 cm，頸径28.4 cm，頸高13.2 cm。頸部は2本の沈線帯により3分され，上・中段に波状文をめぐらす。灰青色を呈して焼成良好。

甕

82は口頸部のみ。復元口径25.4 cm，頸高3.7 cm。暗灰青色を呈して焼成良好。34は，復元口径20.8 cm，頸径16.3 cm，頸高5.3 cm。口縁部には特にアクセントがつかない点が特徴的である。灰青色を呈して焼成良好。50は，口縁から肩部にかけての一部のみ。

横瓶

151は頸部から肩にかけての一部のみ。復元頸径8 cm強。胎土に大粒の石英粒を含み，暗灰色を呈する。内面は丁寧なナデ調整が施され，剣塚第1号墳出土土例とは異なる。

壺

35は有蓋直口壺と思われるが，頸部のみで，口径9.3 cm，現存高8 cm。口縁下に波状文・二条の沈線帯を付し，以下にはカキ目調整を施す。灰青色を呈し，胎土・焼成ともに良好。149は口頸部を欠く。現存高14 cm，復元胴部最大径18.9 cm。体部下半から底部にかけては，回転篋削り，肩部から頸部にかけてはカキ目調整を施す。細粒を多く含み，全体に厚手。

Ⅲ 古墳時代の遺構と遺物 1

焼成は良好。77は、復元最大径13.4cmで、直口壺あるいは短頸壺と思われる。148は有蓋台付短頸壺で、過半を失なう。復元器高24.8cm、口径8.8cm、胴部最大径21.6cm、復元脚長9.7cm、同底径16.2cm。体部は少し歪むが脚部の仕上は良好である。体部下半は篔削後カキ目調整を施す。脚部には、3ヶ所に三角形の透しを設ける。

この他に3個体分の脚部がある。103は、脚部高7cm、同復元底径13.7cm。灰青色を呈し、胎土も良好。117は、現存高5cm、底径12.1cm。65は、脚部高6.2cm、同復元底径13cm。暗灰青色を呈する。

長頸壺

図示していないが、145は長頸壺の頸部から肩部にかけてのみ現存する。復元胴部最大径20.5cmで、黄灰色を呈して稍軟質。頸部接合のために頂部にあけた孔は、頸部内径よりも少し大きく、外側には粘土を貼付して補強している。

撮付杯蓋

163は黄灰色を呈し、焼成不良。復元最大径10.5cm、同器高2.8cm。擬宝珠状の撮をもち、身受部は高い。164は身受部を欠く。暗灰青色を呈し、胎土も精良である。71は、復元最大径11.4cm、器高1.6cm。撮は高さ1mm強と形ばかりのもので身受部は口縁端よりも低くなる。暗灰青色を呈し、調整も良好。85は大きく歪む。97は、復元口径14cm、器高2.5cm。撮は鉤状で、口縁は略垂直に屈折している。灰青色を呈し焼成良好。83は、口縁部の一部を残すのみ。端部の形状に特色がある。頂部には篔削りが施され、胎土・調整良好。灰白色を呈し、稍軟質。

杯蓋

165は復元最大径12.2cm、器高2.4cm。暗茶褐色を呈し、頂部は手持状態での篔削りが施されている。身受部は口縁よりも僅かに突出する。96は、口径10cm、器高2.2cm。頂部はやはり手持状態での篔削りが施され、×印の篔記号が付されている。90は、口径10cm、器高1.6cm。身受部先端は口縁部と同高と低くなっている。器表は篔削りされ、丁寧な調整ぶりである。灰青色を呈する。

高台付杯

43は、底部のみ。底径8.5cmで、底面に×印の篔記号を付す。

土師器高杯

166は器高8.7cm、口径12.8cm、底径10.6cm。杯部は正接せず、やや傾く。内外とも篔によりナデ・削られており、調整は入念。杯部内面に同心円の叩き痕をとどめる。

土師器杯

127は黄灰色を呈して、焼成甚だ甘い。復元口径11.9cm、器高2.7cm。内面の一部に煤が付着する。底部に板目あり。69もまた黄褐色を呈する。口径11.4cm、器高3.6

5 剣塚遺跡群出土土器

cm。内外の一部に煤が付着する。底部は板目。

IV 古墳時代の遺構と遺物 2

1 古墳の排列

IV-1 古墳の排列

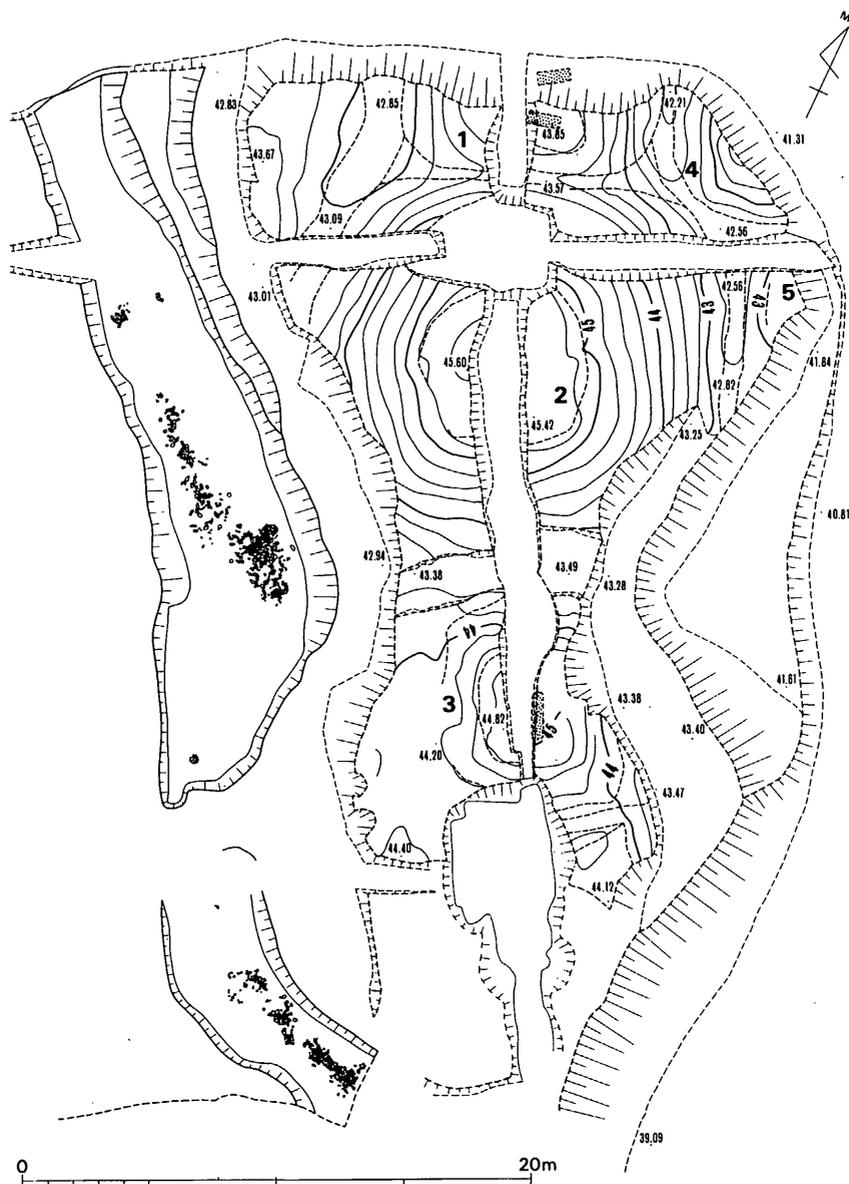


Fig. 51 古剣塚古墳群全体図 (縮尺 1/300)

IV 古墳時代の遺構と遺物 2

矩形墳4基が確認され、極めて接近して営なまれているのが注意される。第1～3号墳は、北西から南東にかけて、最大の第2号墳をはさんでほぼ直列する。第1号墳に東接して第4号墳が営なまれ、さらに第2号墳の東側、第4号墳に南接して第5号墳が築かれた可能性が高い。この他に、第1号墳の西側に墳丘らしき高まりがあるが、他墳に比して立ち上りが緩すぎる嫌いがある。

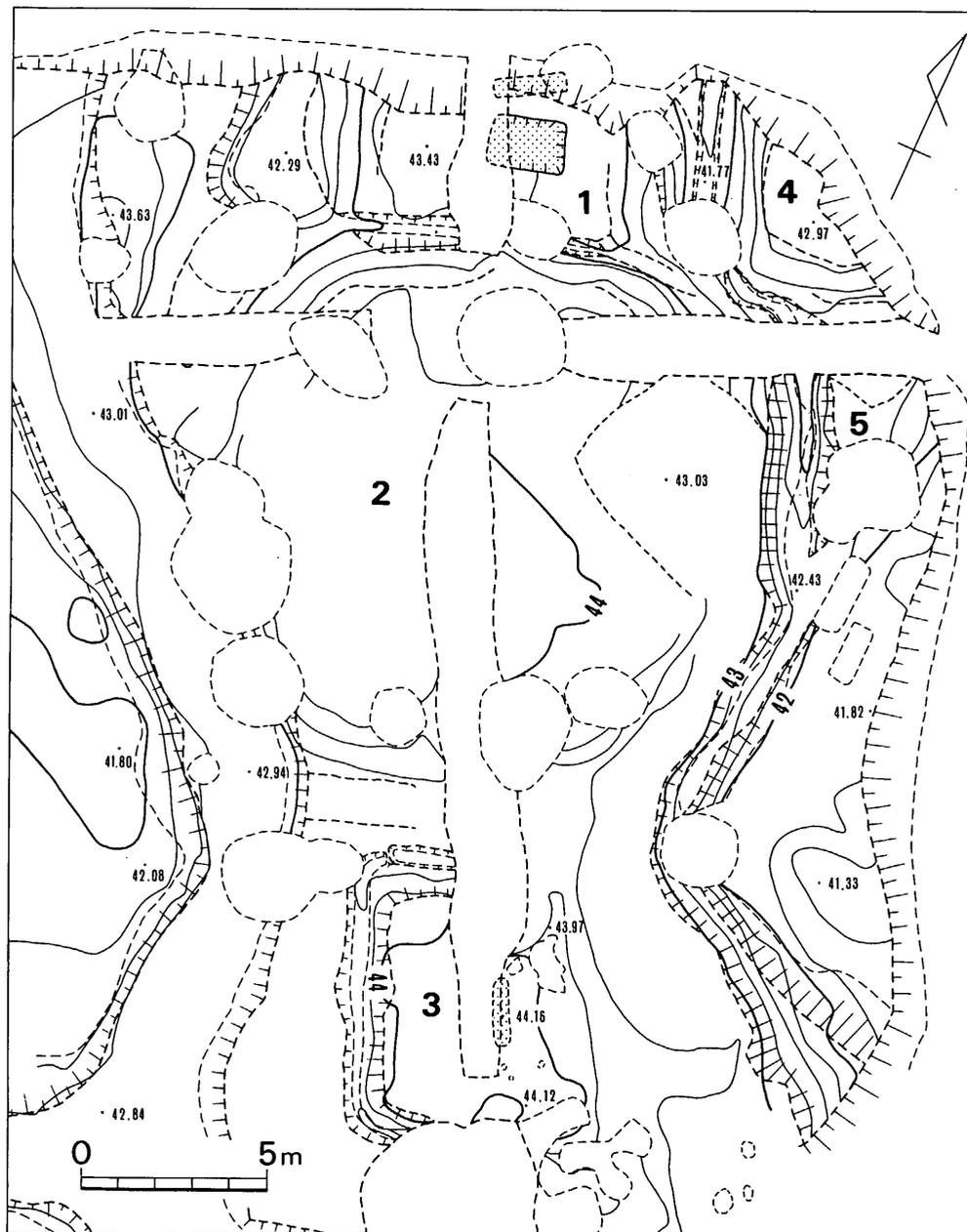


Fig. 52 古剣塚古墳群地山整形面測量図 (縮尺 1/200)

2 古剣塚第1号墳

第1号墳の北西、第3号墳の西、南東に墳丘があったとは考えられない。従って、本古墳群の排列は、視角を東側に予測・設定してのことと思われる。

IV-2

古剣塚第1号墳

墳丘 (Fig. 53-56)

矩形墳である。剣塚第1号墳の築造と後世の道路拡幅等によって墳丘の過半を失っているが、古剣塚第2号墳寄の2隅は現存している。剣塚第1号墳の前方部盛土部分を除き本墳の表面を覆う腐植土層を露出させた段階 (Fig. 53) では、東西長 (北東～南西) 10.3 m、東側からのみかけの高さ1.6 m強、同じく西側からの高さ1 mの規模であり、南接して古剣塚第2号墳が営なまれているため、前方後方墳としての可能性を検討した時期もあったほどである。

墳丘構築にあたっては、削り出しと土盛とを併用している。削り出しは、東側で1.5 m、西側で1 mに達するが、南側では顕著でなく、上端巾0.5 m、深さ0.2 mの狭くて浅い溝が穿たれている

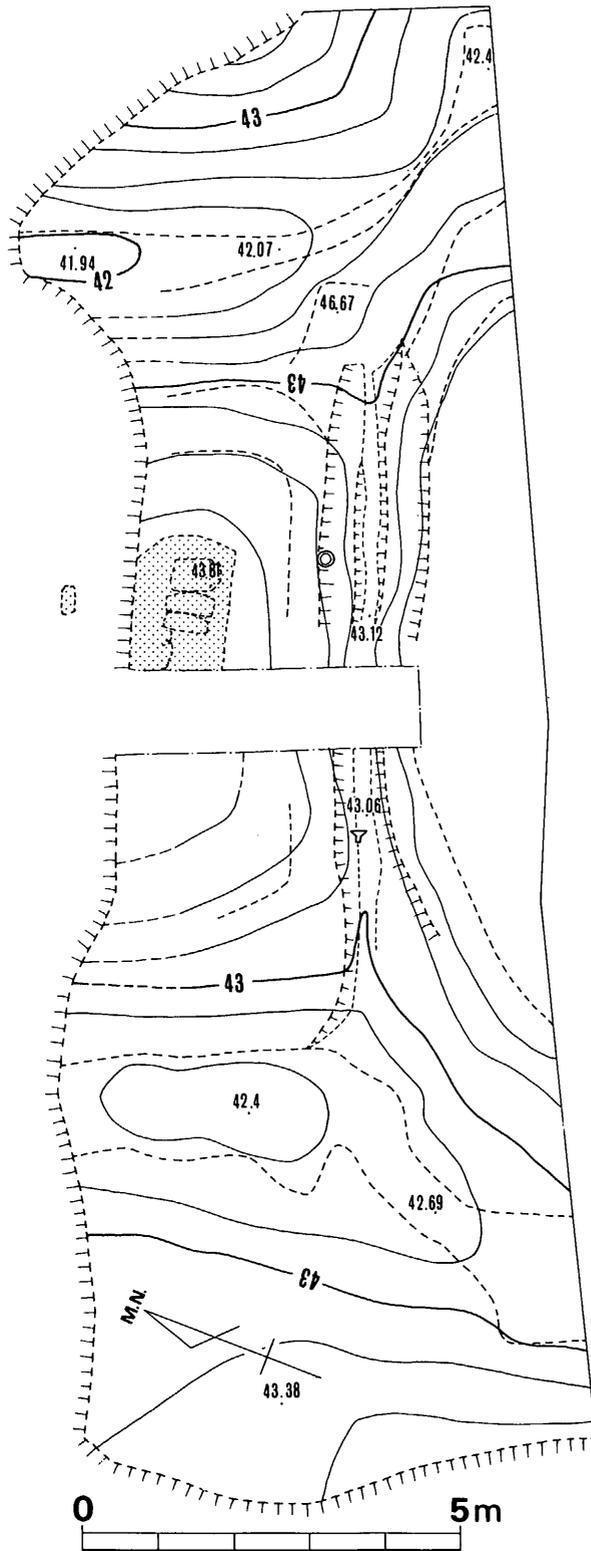
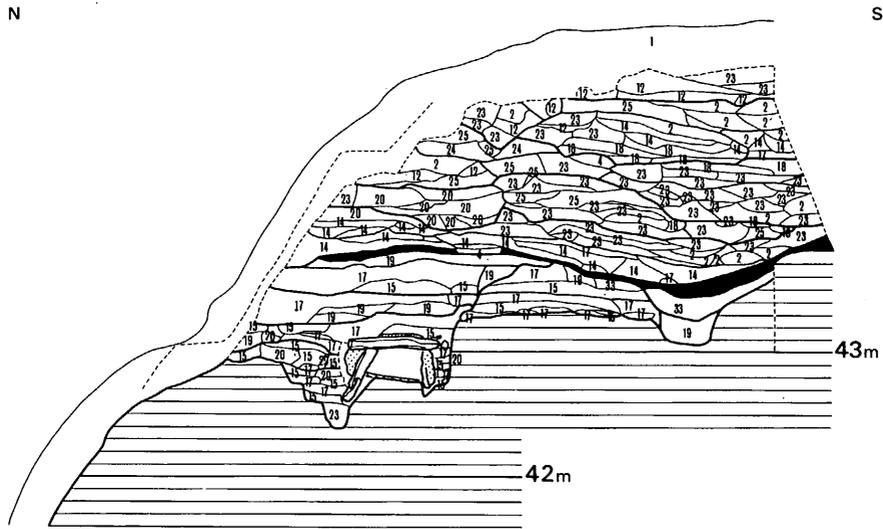


Fig. 53 古剣塚第1号墳墳丘測量図 (縮尺 1/100)

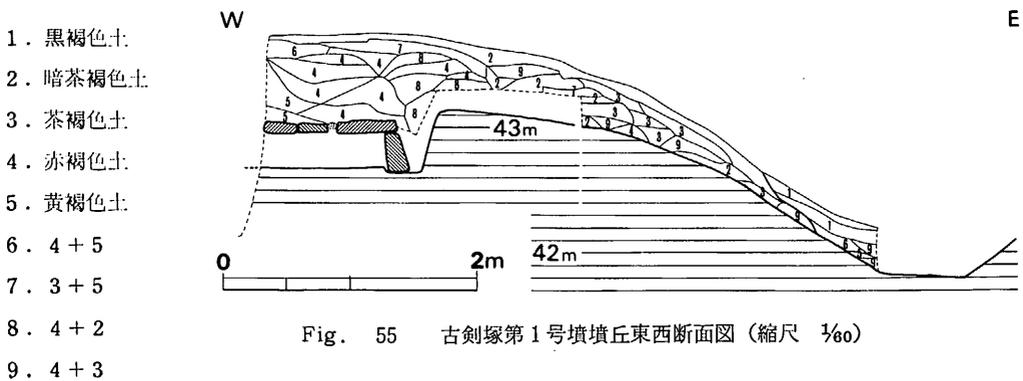
に過ぎない。築造期の表土は、後述する古剣塚第2・3号墳とは異なり除去されており、整地・削り出しによって矩形台状の基部がまず形成されたとみられる。



- | | | |
|----------------------|--------------|--------------------|
| 1. 黒褐色土 | 2. 黄褐色砂質土 | 4. 暗茶褐色粘質土 |
| 12. 淡赤黄褐色粘質土 | 14. 淡灰黒褐色粘質土 | 15. 赤色粒子混入淡灰黄褐色粘質土 |
| 17. 暗黄褐色砂質土 | 18. 淡黄褐色砂質土 | 19. 黄色ブロック混入明灰黄褐色土 |
| 20. 暗赤黄褐色粘質土 | 23. 明赤黄褐色粘質土 | 24. 暗黄褐色粘質土 |
| 25. 黄色粘質土ブロック混入淡茶褐色土 | 33. 暗赤褐色粘質土 | |

Fig. 54 古剣塚第1号墳丘南北断面図 (縮尺 1/60)

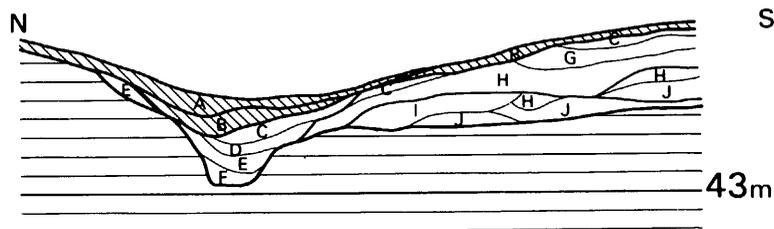
土盛は、主体構築後に開始されている。古剣塚第2号墳寄の南側ではカルデラ状とする配慮が窺われる。東西の裾部は、削り出した地山面が露出していたと思われる。盛土の厚さは、石棺墓塚の外側で0.4～0.5 m、石棺蓋石上面でも0.7 mに過ぎない。



- | |
|----------|
| 1. 黒褐色土 |
| 2. 暗茶褐色土 |
| 3. 茶褐色土 |
| 4. 赤褐色土 |
| 5. 黄褐色土 |
| 6. 4 + 5 |
| 7. 3 + 5 |
| 8. 4 + 2 |
| 9. 4 + 3 |

Fig. 55 古剣塚第1号墳丘東西断面図 (縮尺 1/60)

上記を勘案すると、本墳の東西長は10.3m、東側からのみかけの高さ2m、西側からは1.5mの高さがあったと思われる。本墳が方墳あるいは長方形墳のいずれであるかは決し難い。後述するように2基の主体が現存部分に営なまれていることから、方墳としての可能性が高いとも思われるが、一方で、第2・第3号墳が長方形墳であることも無視できない。東西の裾部の削り出しは、浅いが巾の広いU字状となるように行なわれているので、壮大な感を抱かせる(PL. 36-1)。



- A. 黒色腐植土(旧表) B. Aより少し薄い黒色土(旧表下部) C. 暗灰色土
 D. 淡灰褐色土 E. 茶褐色土 F. 淡茶褐色土 G. 暗黄褐色土
 H. 明黄褐色土 I. Hよりも多く赤味をおびる J. 赤褐色土に黒色土がブロック状に混入

Fig. 56 古剣塚第1・2号墳裾部南北断面図(縮尺 1/40)

なお、南側裾部の周溝堆積状況から本墳が古剣塚第2号墳に先行することは明らかである。

主体

地山を穿った墓壇底に営なまれてた2基の箱式石棺が現存し、墓壇は独立している。なお、本墳を方墳とすれば第3の主体が営なまれた可能性を残す。

第1号石棺(Fig. 57)

古剣塚第2号墳寄りに位置し、主軸を北東から南西にとる。ユンボによる掘削の際に、南西側の小口壁と蓋石1枚とを失ない、慙慙にたえない。墓壇は、最大巾1.55mの不整隅丸長方形プランを呈し、この壇底を各側石底面の形状に合わせて一段掘りくぼめ、上端を略水平位に揃えている。側石には、各3・4枚が充てられているが、北東側小口に接する1石のみは立てて用いている。いずれも稍内傾しており、外周を粘土で覆うが、北東側小口から北側にかけては基部に割石を配して裏込めとしている。蓋石は3枚が現存し、粘土で目張りされている。後述する石棺の内法からみて、失なわれた南西側の蓋石が最大であったと推定される。

石棺の床面長は、墓壇端がトレンチの西壁に達していないことと側石の欠損状況からみて、140cm内外と推定される。巾は北東側が40cmであるのに対して南西側は45cmをこえとみられ、床も僅かに南西側が高い。高さは、23cmと極めて低い。なお床面には赤色顔料が認

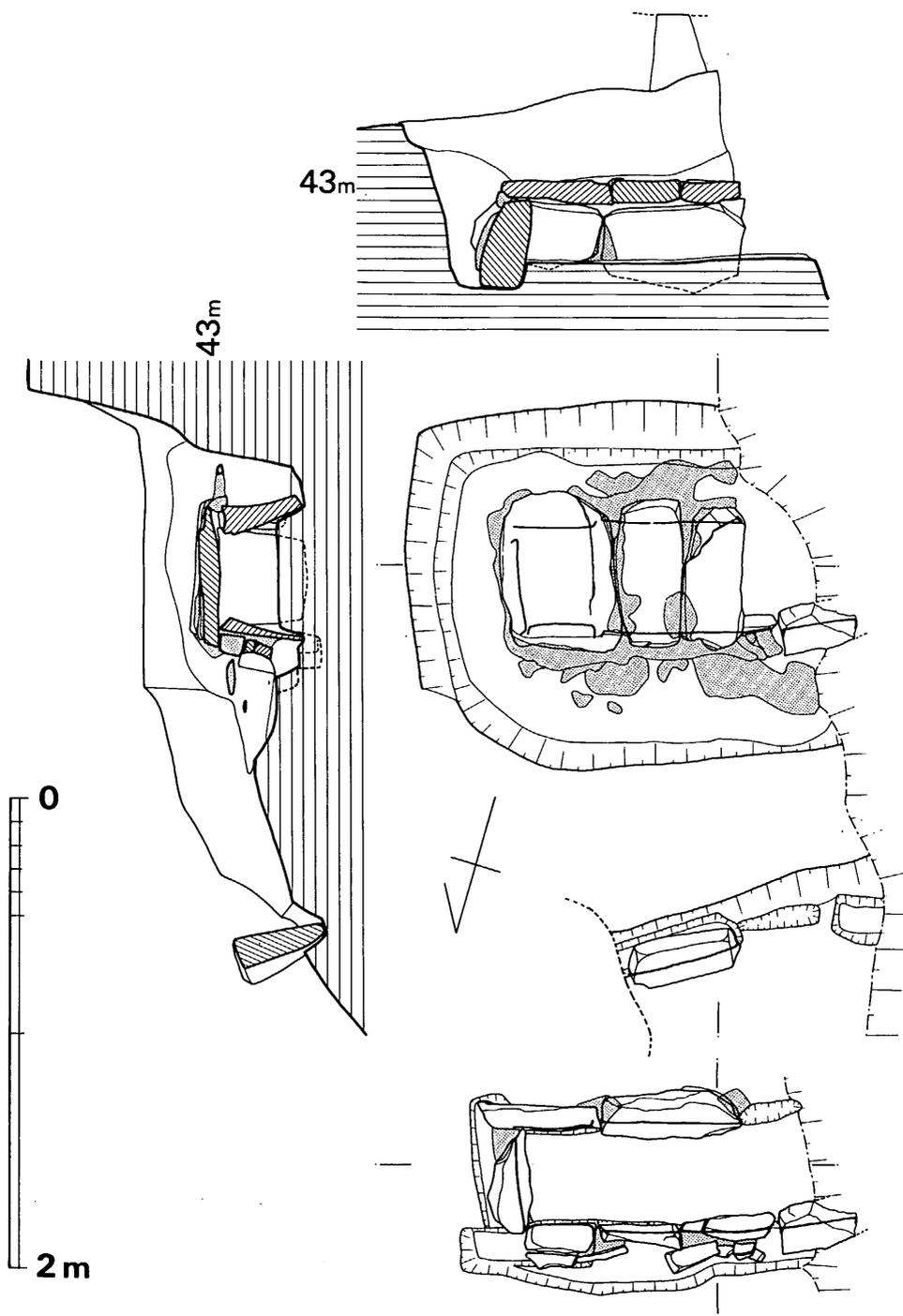


Fig. 57 古剣塚第1号墳第1号石棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{30}$)

められた。

第2号石棺 (Fig. 57)

第1号石棺に北接して営なまれているが、前方部前縁が削り落された際に破壊され、側石材1石を残すにとどまる。すえつけのための掘りこみから推定すると、第1号石棺と平行せず中軸線は稍斜交する。

遺物出土状態

第1号石棺は、攪乱を受けていないが、棺内外からは南西側に頭位をとったとみられる遺体をも含めて、何らの遺物も採取されていない。

南側墳丘裾部から、土師高杯(123)が採取された。断面実測用畔をはさんで、杯部が東側の溝肩部から、脚部が西側の溝底から少しく上位(E・F層間)と分れて出土している。杯部の出土位置から、一応本墳に所属させている。椀(124)の出土位置は不明確である。

遺物 (Fig. 58)

高杯(123)

脚端を欠くが、ほぼ完形。黄赤褐色を呈して脆弱で、風化が著しい。口径21.7cm。杯部と脚部とは正接せず、器高は13.5~14cm。杯部は内彎気味で、下半にはかすかな稜がつく。脚部高7.5cm、同底径13cmで、脚部はふくらまずに直線に近く、内部は篋にて抉り取る。筒部から脚端へ移る屈曲部の相対する位置に、径8mm前後の2孔を穿つ。

椀(124)

復元口径13.7cm、同器高6.8cm。風化が著しく進行しているが、器表の一部に篋ミガキによる光沢ある肌をとどめる。内側の稜線はシャープである。

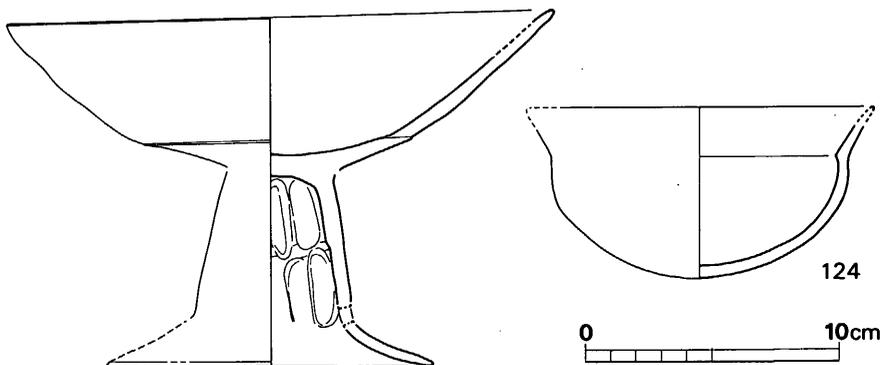


Fig. 58 古剣塚第1号墳出土土師器実測図(縮尺 1/3)

なお、本墳から古剣塚第2号墳にかけての西側裾部から、花崗岩と土師器数個体が出土した (Fig. 59)。石材は特に顕著な構造・構成をとるわけではなく、性格は不明である。

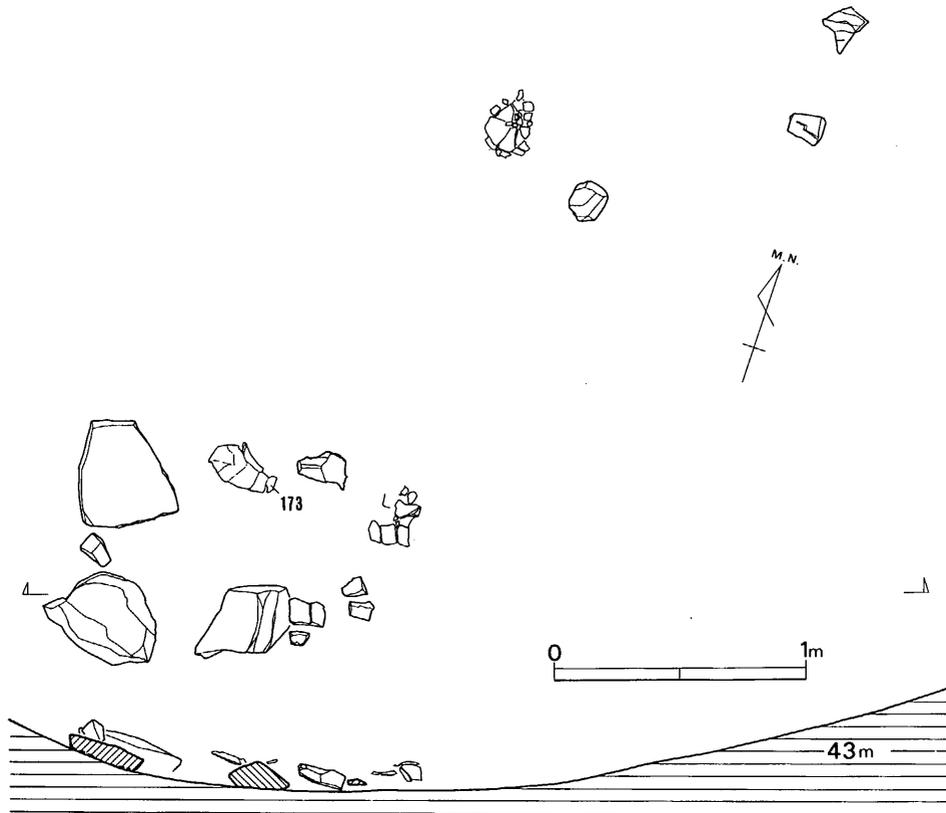


Fig. 59 古剣塚第1・2号墳西裾石材および土器出土状態実測図 (縮尺 $\frac{1}{30}$)

甕 (Fig. 60-173)

黄灰色を呈して極めて軟質で、風化が著しく進んでおり、一部しか器肌をとどめない。薄手で、口唇内面は少しく脹らむ。頸部内面には指頭によって縦方向にナデ、おさえられている。

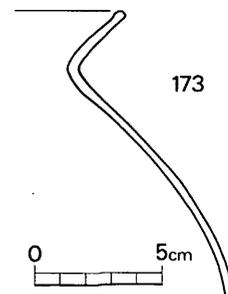


Fig. 60 古剣塚第1・2号墳西裾出土土器実測図 (縮尺 $\frac{1}{3}$)

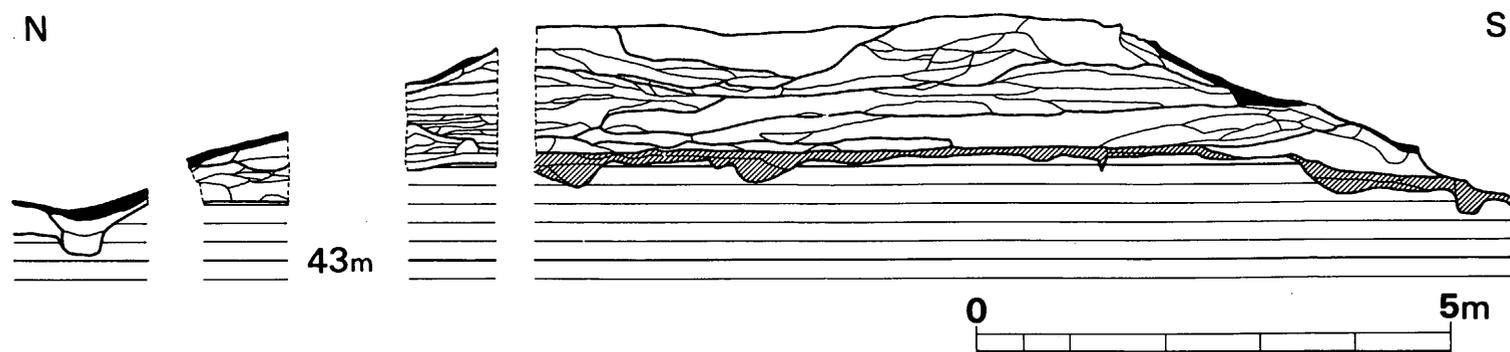


Fig. 61 古剣塚第2号墳丘南北断面図 (縮尺 1/60)

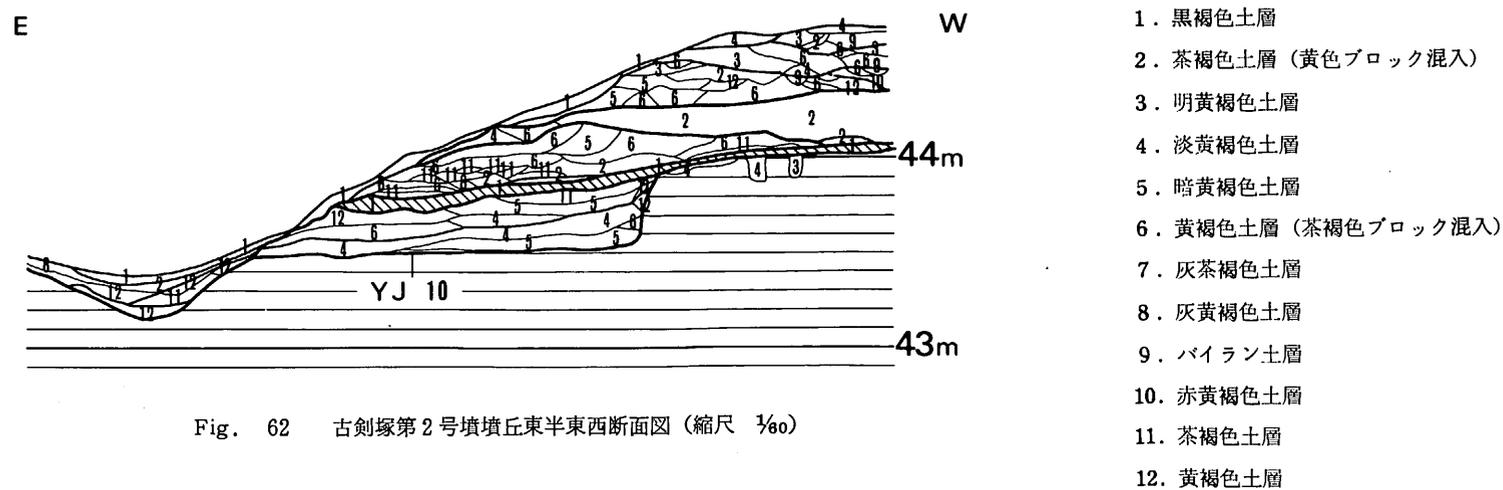


Fig. 62 古剣塚第2号墳丘東半東西断面図 (縮尺 1/60)

IV-3 古剣塚第2号墳

墳丘 (Fig. 61・62)

矩形墳である。墳丘部および南半各裾部を古剣塚第1号墳と同様裾部をまず削り出しているが、削り残した内部の地表は整地されていない。削り出しは、1・3号墳に比してより大規模で、東側で巾3.2m、深さ1m、西側では巾4.5m、深さ0.8mに達している。この溝底は、東西で同高ではなく東側が0.9m低く、古剣塚第1号墳の場合よりもさらに極端である。ただ、削り出しは外周に沿って一様に行なわれたのではなく南高北低となっており、南半部では全く施されていない。

盛土の厚さは、現存部分では1.2mであり、当初は1.5mを少しくこえたと推定される。盛土作業は、東西では西側から東側へ、南北断面では両外側から中心部への流れが観察される。西および南側の断面には、2段築成を思わせる部分があるが、東側では認められない。

東西長は、15.7m以上で略16.5mと思われる。南北の現存長は13.9mで、復元最大値は15mとみられる。従って、本墳は東西が少しく長い長方形墳となる。東辺裾部中央から現存最高部までの高さは3.26mで、当初は3.5m内外のみかけの高さがあったものと思われる。

長方形墳ではあるが、隅角部は丸味を帯びており、特に第1号墳よりも著しい。先行する同墳の高まりによる制約を受けたとみられる。

主体

ユンボによるトレンチ掘削の際に破壊されたと思われる、名状し難い心境にある。

古剣塚第1号墳のように地山を穿った墓壇に営まれた箱式石棺であった痕跡はない。恐らくは、後述する古剣塚第3号墳の主体と同様な粘土床+木棺という構造であったと思われる。この場合も墳丘短軸と直交するのではなく、平行関係にあったと思われる。トレンチをほとんど略平行する2基の主体の可能性もあるが、盛土部除去作業の過程ではそれを示唆する変化は特に認められなかった。前述のようにユンボのバケット巾より狭い主体が、営まれたものと推定されるに過ぎず、無念である。

IV-4 古剣塚第3号墳

墳丘

長方形墳である。裾部は0.6～0.9mの深さにわたって削り出されるが、内部の表土部分は削平されず、直に盛土されている。南東側しか当初の盛土部は完存しないが、現存する最も厚い部分でも0.6mに過ぎない。縦断トレンチの1m程の間を隔てた東壁と西壁とでは作業ぶりが異なり、東半のそれがより緻密である。墳頂部は、剣塚第1号墳築造の際に北側の過半を削平されてはいるが、現存部分から推して平坦な長方形をなしたとみられ、西側からのみかけの高さは約1mである。北辺(北西～北)側では、いったんほぼ完成した墳丘部(第1次墳丘)にさらに盛土しており、この結果が長方形プランとなったと思われる、主体部を第1次墳丘の稍北側に偏して設けたことに起因するかとも思われる。

第1次墳丘の規模は、東西長5.2～5.5m、南北長6m前後とみられ、完成した第2次墳丘(周溝内側)の南北長は約7mとみられる。

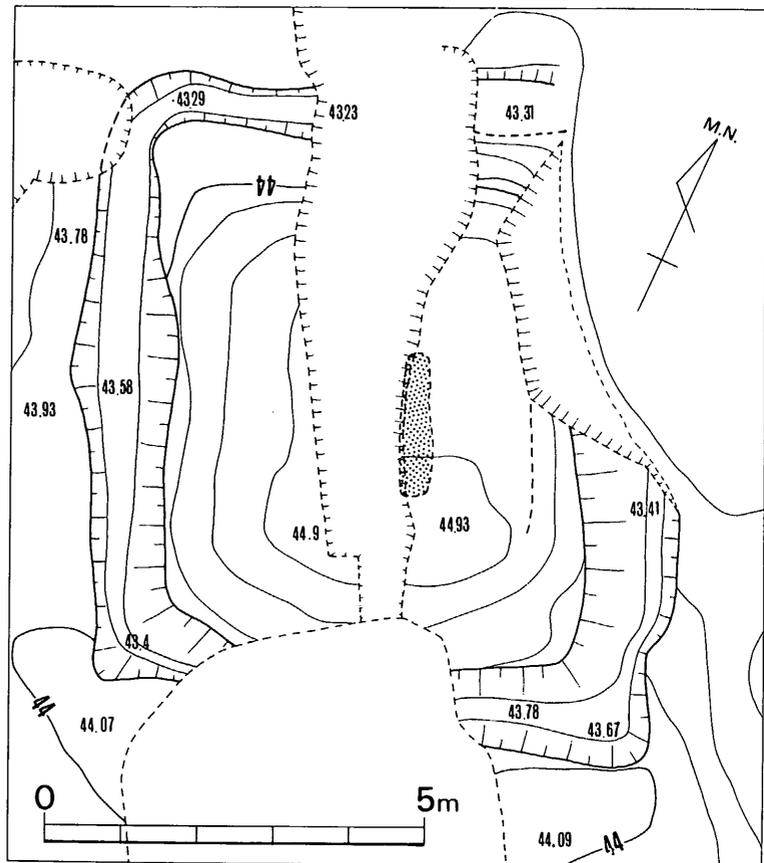


Fig. 63 古剣塚第3号墳墳丘測量図(縮尺 1/100)

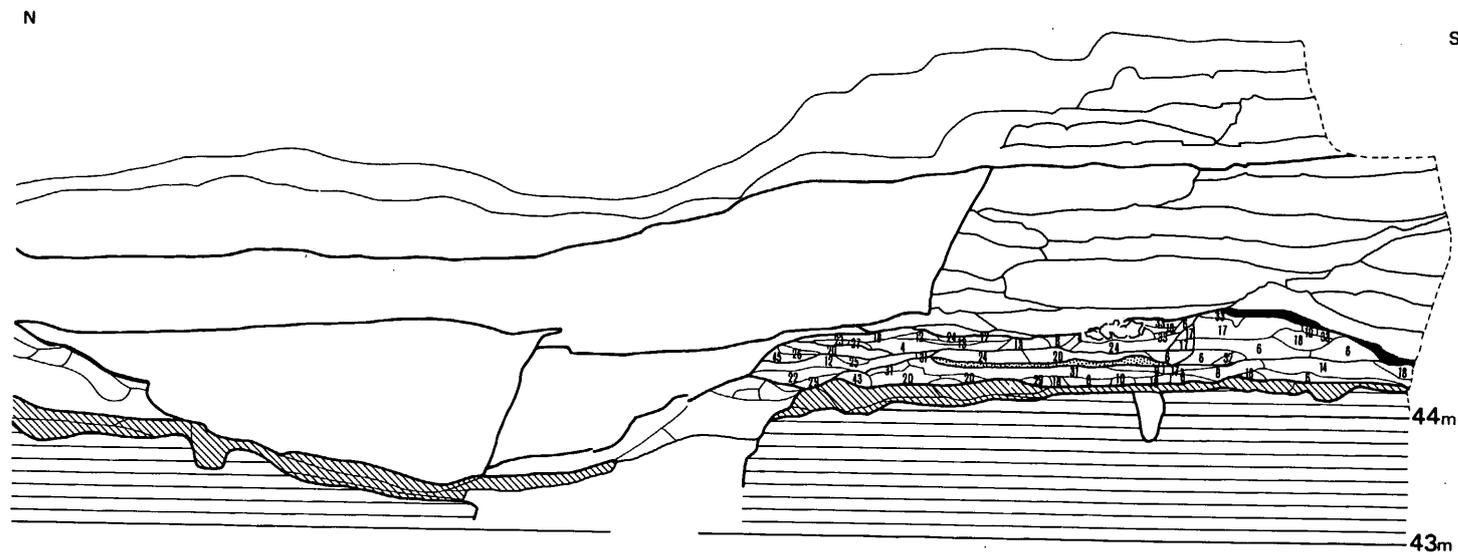


Fig. 64 古剣塚第3号墳填丘南北断面東壁実測図 (縮尺 1/60)

- 4. 暗茶褐色粘質土
- 8. 黒色粘質土
- 10. 赤色粒子混入灰黄褐色粘質土
- 13. 明黄褐色粘質土
- 17. 暗黄褐色砂質土
- 20. 暗赤黄褐色粘質土
- 23. 明赤黄褐色粘質土
- 25. 黄色粘質土ブロック混入淡茶褐色土
- 27. 明赤黄褐色砂質土
- 31. 明茶褐色粘質土
- 33. 暗赤褐色粘質土
- 45. 暗黄褐色土
- 6. 淡茶褐色粘質土
- 9. 淡灰褐色粘質土
- 12. 淡赤黄褐色粘質土
- 14. 淡灰黒褐色粘質土
- 18. 淡黄褐色砂質土
- 22. 淡黒褐色砂質土
- 24. 暗黄褐色粘質土
- 26. 淡黄褐色砂質土
- 29. 淡赤黄褐色砂質土
- 32. 淡黄褐色粘質土
- 43. 淡赤褐色粘質土

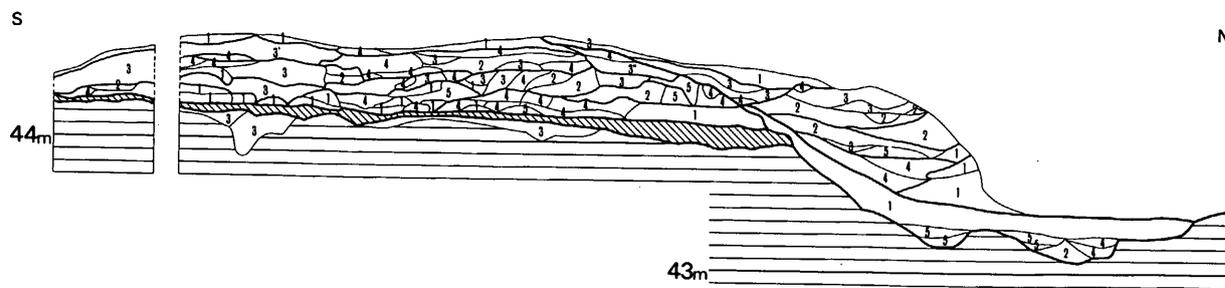


Fig. 65 古剣塚第3号墳填丘南北断面西壁実測図 (縮尺 1/60)

- 1. 黒褐色系
- 2. 黄褐色系
- 3. 茶褐色系
- 4. 灰褐色系
- 5. 赤褐色系

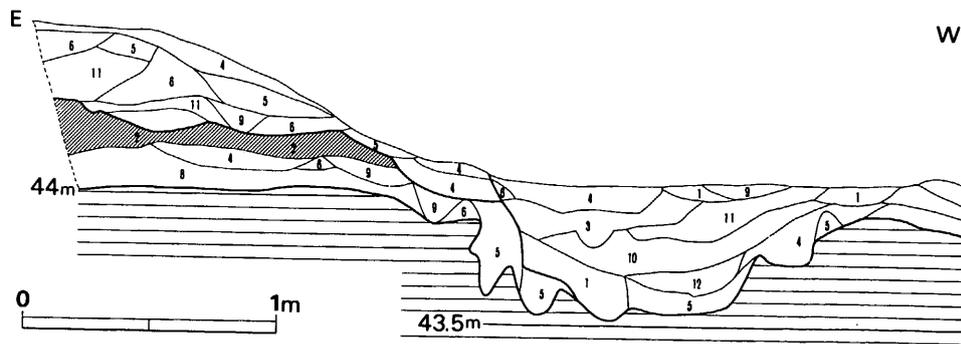


Fig. 66 古剣塚第3号墳填丘西辺東西断面図 (縮尺 1/60)

- 1. 黒色土
- 2. 茶褐色土 (旧表)
- 3. 黒褐色土
- 4. 灰茶褐色土
- 5. 灰黄褐色土
- 6. 黄褐色土
- 7. バイラン土
- 8. 赤褐色土
- 9. 淡茶褐色土
- 10. 明茶褐色土
- 11. 2 + 黄色土
- 12. 9 + 赤色土

周溝

本墳は、溝で画されているが、北隅は築造時の地表の高低差の関係で掘り割られてはいない。各辺の溝巾は53～125cm（上端値）と一定せず、従って、南北長8～8.9m、東西長7.25～7.7mと、バラツキがある。

主体 (Fig. 67)

主体の発見が不用意な状況でなされたために、不明部分が多いが、組合式の木棺であったと推定される。

構築にあたっては、地表にいったん10～20cm程度の厚さに盛土して略水平位とし、次に粘土を厚さ2～7cmに敷いており、粘土は赤色顔料で染まって淡赤色を呈している。主軸を墳丘長軸に沿う南東から北西にとり、その現存範囲は188×36cmで、2つのコーナーは隅丸となっている。南東側が厚く、また僅かではあるが高い。この粘土以外に、埋葬施設を思わせるものはない。

遺体を直葬したとは考えにくく、また後述する土器の出土状況からみても、木棺の使用が想

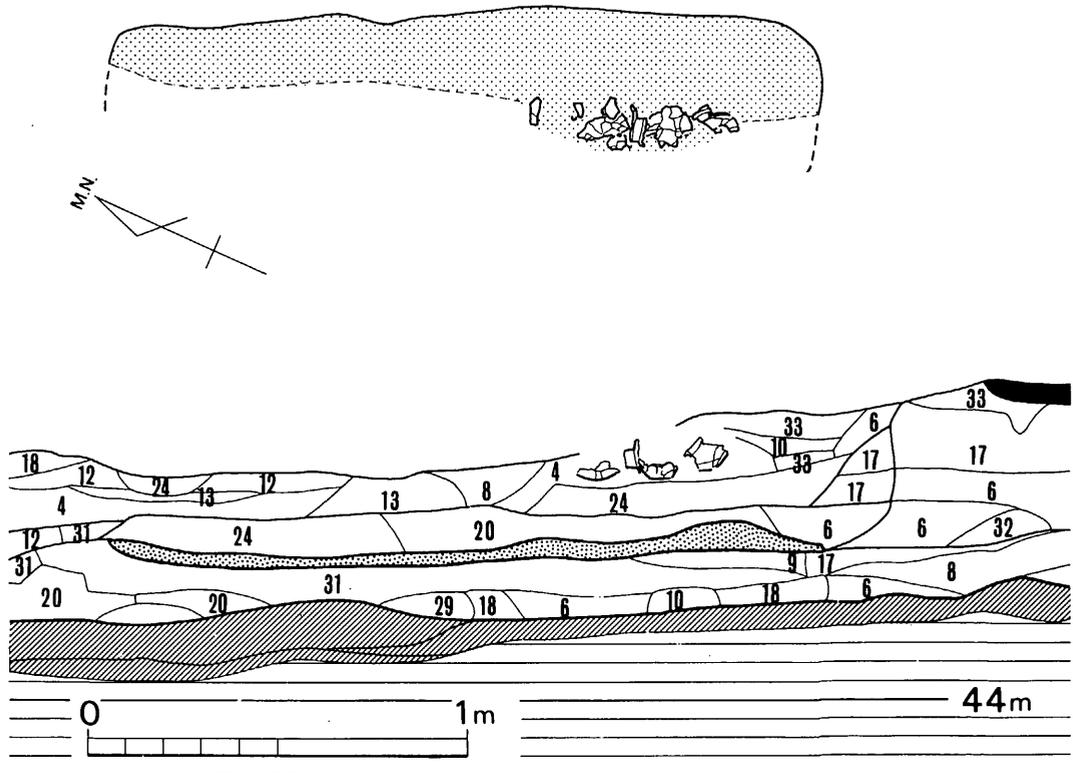


Fig. 67 古剣塚第3号墳内部主体実測図（縮尺 1/20）

定され、粘土床の横断面が平坦であることから、組合式の構造をとったと考えるのが妥当と思われる。組合式木棺の使用を想定した場合、南東側の粘土床の厚い部分は枕としての機能を果たしたとも考えられる。

けれども、粘土床の外周に棺材の痕跡はなんら確認されていない。僅かに南東側の盛土層序にそれを思わせる部分があるが、北西側では各盛土層は横走するのみで顕著な立ち上りは認められず、また2つのコーナーが隅丸となっている等、構造の細部については不明点が多い。

なお、この主体は長方形墳の中央部よりも少しく東に偏しており、西接してさらに1基の主体が設けられた可能性が高い。西壁の縦断面には特にその痕跡を示すものはなく、同一主体が極めて接近して営なまれたとみられるが、確かめる術もなく、無念である。

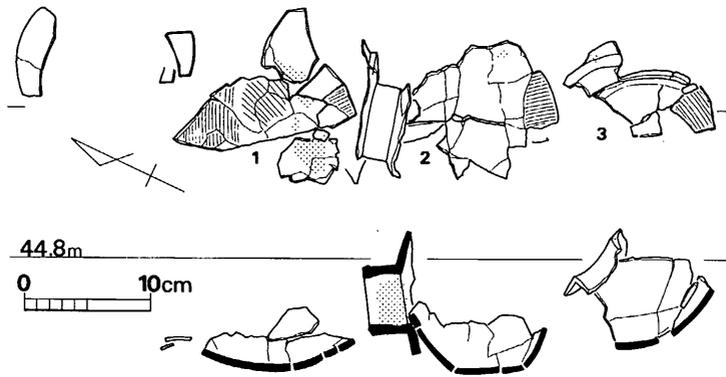


Fig. 68 古剣塚第3号墳土器出土状態実測図(縮尺 1/6)

遺物出土状態 (Fig. 68)

3個体とみられる土師器が、粘土床の14~17cm上位から出土しており、これらが本墳の存在確認の端緒となったことは既述のとおりである。棺内に納められたのではなく、棺外——恐らくは木蓋の上に置かれたものと思われ、平面的には遺体の頭部から胸部にかけての位置にある。仮に木棺の長軸上にあるとすれば、粘土床の南東側の中は70cmに達することとなる。

このうち、2・3は、北から北西側に口頸部を向けて横倒しとなった状態にある。ただし、立面位は特に南東側が高いという程のことはなく、木蓋の腐朽の結果か否かは不明である。壺1の底部は壺2の口縁部にすっぽりと納まった状態にあり、壺2は器台的な用い方をされている。

墳丘盛土中から、鉄製工具2点が採取されたが、副葬品か否かは不明である。

遺物

4 古剣塚第3号墳

土器 (Fig. 69)

壺

2・3はいずれも複合口縁の小型壺である。2は、復元口径14.2cm、頸径6cm。胎土は精良であるが、赤褐色を呈して軟質で、3程ではないが風化が進行している。頸部は稍内傾し、口縁部へいたる平坦部は稍脹らむ。各部とも屈折は鋭い。破損状況からは、頸部に口縁部を嵌めこんだかみえ、頸部内面に粘土の貼付痕を残す。内面には横方向の刷毛目調整を施す。内外に赤色顔料が塗られており、3と共通する。

3は、口径12.5cm以上、頸径5.4cm前後と、口頸部は2よりもひとまわり小型である。頸部は少しく内傾し、内面は平滑に仕上げられているが、屈折部は全体的にリズム感を欠く。器表肩部には縦方向の刷毛目調整を施し、頸部との接合部には粘土紐の痕跡を残す。黄褐色を呈して極めて脆弱であり、他に胴部の破片を採取しているが図示した以上の接合は困難である。

1は、上半を失なっているが、同様な複合口縁の壺であったと推定される。

2・3は体部以下を失なっているが、1でみる限りでは穿孔されていないと思われる。

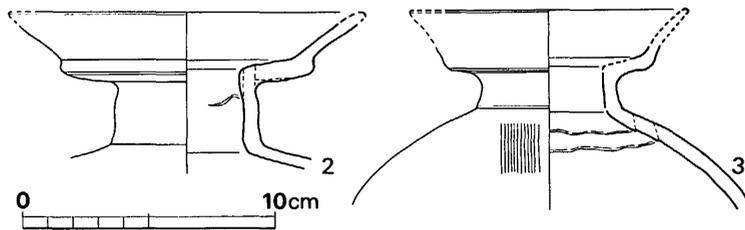
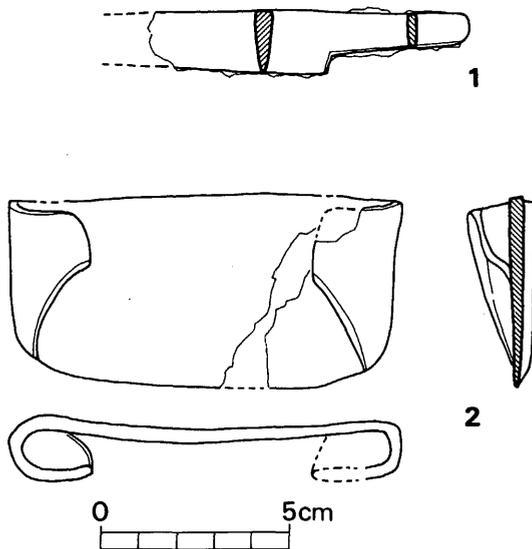


Fig. 69 古剣塚第3号墳出土土師器実測図 (縮尺 1/3)



墳丘内出土鉄器 (Fig. 70)

1は、刀子で、鋒を欠き現存長8.4cm。2は鋤先で、巾10.4cm、現存長5.1cmで、刃部先端は稍狭まる。両端の折り返し部の下半を刃部に密着させている。

Fig. 70 古剣塚第3号墳墳丘内出土鉄器実測図 (縮尺 1/2)

IV—5 小 結

1. 立地

低台地上に築かれている点、相前後する時期に尾根上に営なまれた筑紫郡那珂川町・炭焼（註1）、油田（註2）両古墳群とは異なる。けれども既に柳田康雄氏が指摘したように（註3）、立地の相違について外的条件による規制を考える必要はないと思われる。

2. 墳丘と周溝

本群は矩形墳からなり、最大の第2号墳を中核として溝を共有して接し合わんばかりに並列する有様は、群集する「方形周溝墓」を思わせるものがある。

第2・3号墳は明らかに長方形墳であるが、既述のように、第3号墳が築造の過程で墳形と規模が変更されたとすれば、長方形プラン自体には特に意味がないことになる。けれども、方・長、円・矩という平面的な差が全く背景を持たないとは考えられず、また、上述の連動的な有様は甚だ暗示的でもあり、これについての評価は保留しておきたい。

墳丘築成にあたっては、地山削り出しと土盛とを併用し、第1・3号墳では0.6～0.7mに過ぎないが第2号墳は1.5m以上とみられ、前述の油田・炭焼両古墳群よりも厚く、小郡市・津古第2号墳（註4）に近い。

周溝については全周を確認してはいないが、隣接墳との境を明確にする程度の溝は囲繞していたとみられ、これは、各墳の築造期が極めて接近していたことを示唆する。

3. 主体の構造

第1号墳では地山に穿った墓壇に営なまれた箱式石棺2基が、第3号墳では盛土中に木棺1基と、異なる手法・構造の主体がそれぞれ確認されている。細部に若干の差異はあるが、油田古墳群内部でも同様な傾向が認められて注目される。結論的にいえば、地山を穿った墓壇底に箱式石棺を営なむより弥生的な前者が先行するとみられる。

ただし、本群第3号墳の木棺の形状・構造については少なからぬ不明点がある。この点で、油田第3号墳の粘土を用いた主体を、「長いことと、床面が平坦である点から、刳貫きの半截の蓋のみを被たのであったろう」という渡辺正気氏の指摘（註5）は重要である。

要するに、当該期の在地型古墳では、箱式石棺から木棺へと主体構造に著しい変化を生じな

がらも、その構造が定型化せず、模索と固執とがくり返されている（註6）。なお、狭長な木棺の導入については、柳田康雄氏が述べているように（註7）、近年その例を増しつつある畿内型古墳からの影響とみるべきである。

本群でも、複数の主体が営なまれて注意されたが、炭焼第4号墳でその可能性が指摘された裾部への小形主体の営造は、調査範囲内ではその形跡は認められない。

4. 年 代

第1号墳南溝付近出土の高杯（123）と、第1・2号墳西側裾部付近で出土した甕（173）は、その出土の状態に特に時期差を示すものはない。甕は、井上裕弘氏の分類による春日市・柏田遺跡出土の「甕Ⅰ（庄内式）」（註8）に相当する。第3号墳出土の複合口縁の壺は、頸部に加飾された突帯をもたない点で炭焼第3・4号墳および津古第3号墳出土土例とは異なる。

上記と主体構造とを勘案すると、第1号墳が第3号墳よりも先行するとみられ、中核墳である第2号墳が第1号墳に僅かに後出することは既述のとおりであるが、第3号墳との先後関係を示す直接的な根拠はない。強いて推測すれば、第1号墳に次いで第2号墳が営なまれたものと思われる。

第1号墳は油田第2号墳と、第3号墳は津古第3号墳と、それぞれほぼ同期とみられるが、絶対年代については、前者が「4世紀中頃から後半」に、後者が「四世紀後半代」に、それぞれ比定されていることを示すにとどめたい。

5. 副葬品

第1号墳の第1号石棺は、全く副葬品を伴わず、第3号墳の確認し得た主体もまた同様であったと思われる。

本群の被葬者達が、福岡平野と筑紫平野とを結ぶ要衝を扼する勢力（註9）の翼下にあったことは疑いないが、要衝であること自体に生産性はない以上、質・量ともに秀れた副葬品を持ち得なかったとしても、特に不思議はない。（石山 勲）

註 1 柳田康雄編『炭焼古墳群』＜福岡県文化財調査報告書37＞1968年

註 2 渡辺正気・柳田康雄編『油田古墳群』＜福岡県文化財調査報告書42＞1969年

註 3 同氏「古墳群の立地」 註 1 文献所収

註 4 波多野皖三「津古遺跡群」＜筑紫史論3＞1975年 所収

註 5 氏の見解は、柳田康雄「内部主体」（註1 文献所収）中に紹介されている。

- 註 6 少しく後出し、また地域も異なるが、粕屋郡古賀町の深町古墳群、同原口古墳群 A 支群でも同傾向にある。両古墳群については<九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 X X I>にて報告している。
- 註 7 註 1 文献に同じ
- 註 8 同氏「おわりに」<山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 4 下巻>1977年
- 註 9 当該地域を「筑紫君の本貫であったと想定」される森貞次郎博士は、「四世紀後半から五世紀初頭にかけて、筑紫君一族はこの地峡を占拠することによって、やがて筑紫平野に進出する力を培ったものとみられ」ている。「磐井の反乱」<古代の地方史 1 西海編>1977年所収

V 歴史時代の遺構と遺物

V-1 第 1 号 瓦 窯 跡

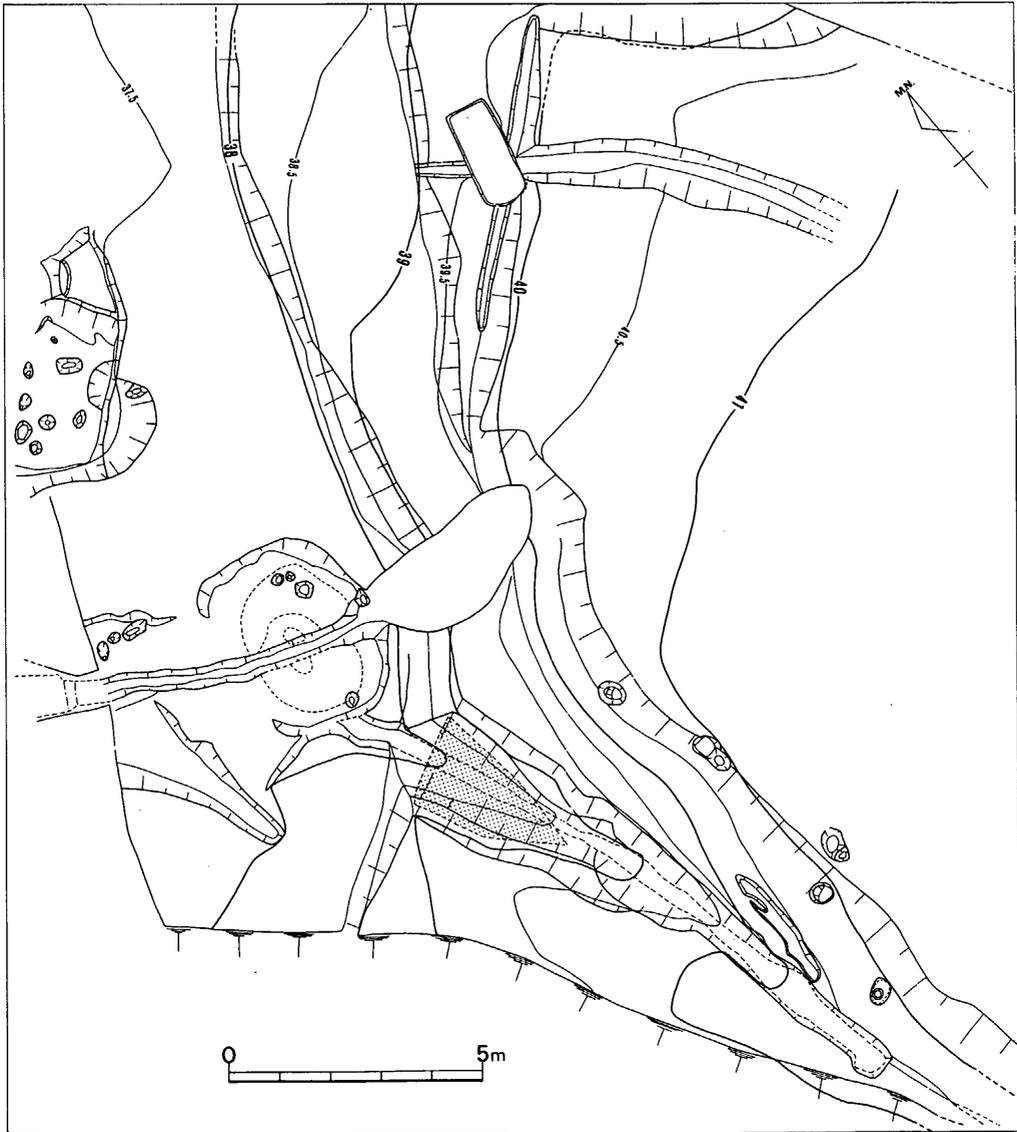


Fig. 71 劍塚第 1 号瓦窯全体図 (縮尺 1/300)

1. はじめに

当遺跡の北西端の急斜面に位置している。剣塚第3号墳の周辺調査の初期の段階で、北東側崖天端近くに瓦が所在することが知られていた。その後火葬墓をはじめとする各種歴史時代遺構が確認されるにいたり、念のため先述の瓦の周辺を清掃したところ高熱による赤変が確認され、瓦窯の煙道最先端部であることが判明した。直ちに斜面及び一段下の平坦面にまで発掘範囲を拡張した結果、略完存する瓦窯1基を検出するにいたった。

焚口より前面は、剣塚遺跡群の占地する台地よりも2～2.5m低位の平坦面にある。調査範囲内では不明溝状遺構を検出したのみで他に窯体は確認されず、本窯1基のみと推定される。なお、窯体確認後、当該地点周辺は「クド畑」と呼称されていたことを知った。

2. 窯の構造 (Fig. 7 2)

花崗岩パイラン土の地山をトンネル状に穿って作られており、瓦窯の形態としては大川清氏分類の地下式有階無段登窯(註1)に属する。主軸を略東西にとり、天井部は煙出し周辺を除いて全て落下していたものの、遺存度は極めて良好である。

焼成室は、31度強の急傾斜で、煙道基部と第1次燃焼部床面との高低差は2.4m弱に達する。第1次床面の水平長3m強、同斜距離3.5mで、最終床面の斜距離は3.7m弱である。

巾は、階部で1.7m強、これより除々に広まって同部から0.7mの所(B-B')で1.9mと最大となり、これより先は炎と煙の流れを考慮して煙出部に向かって先細りとなる。B-B'での高さは1.3m前後とみられる。床面には煙道部から巾14～20cmの三条の浅い溝が掘られており、一部では瓦片を蓋に用いている。詰台は四段のみしか現存しないが、当初は煙道寄にさらに3段が設けられ計7段と思われるが、階部の最終補強時以降では、階部寄にさらに一段が設けられた可能性がある。詰台は、下段に丸瓦(Fig. 7 2で・印を付す)を上段に平瓦を各数枚づつ重ねているが、粘土等による補強は特になされていない。

壁は全く補修されていない、構築時のままである。ただ、B-B'の横断面でみる限りでは左壁の方が右壁に比して熱変層が厚いことが注意された。床面も、階部近くを除けば同様に補修を受けていない。床面は赤く壁に比して熱の受け方が少ないかにもえ奇異に思われたが、これは詰台の周辺の一部にみられるように瓦の細片をその表面に敷き詰めた結果によるとみられる。焼成室堆積土中からはかなりの瓦が採取されたが、窯詰時の状態を示すものはない。

煙道基部は、焼成室先端から稍突出させて設けられており、直立する。巾0.4m、長さ0.7m前後の不整隅丸長方形で、約1.25mの高さがある。これには、上部から磚・丸・平瓦が詰めこまれており、これらが本窯発見の端緒となったのは先述のとおりである。焼成室の状態からみて、これらが操業時の煙出し閉塞のためのものではないことは明らかである。

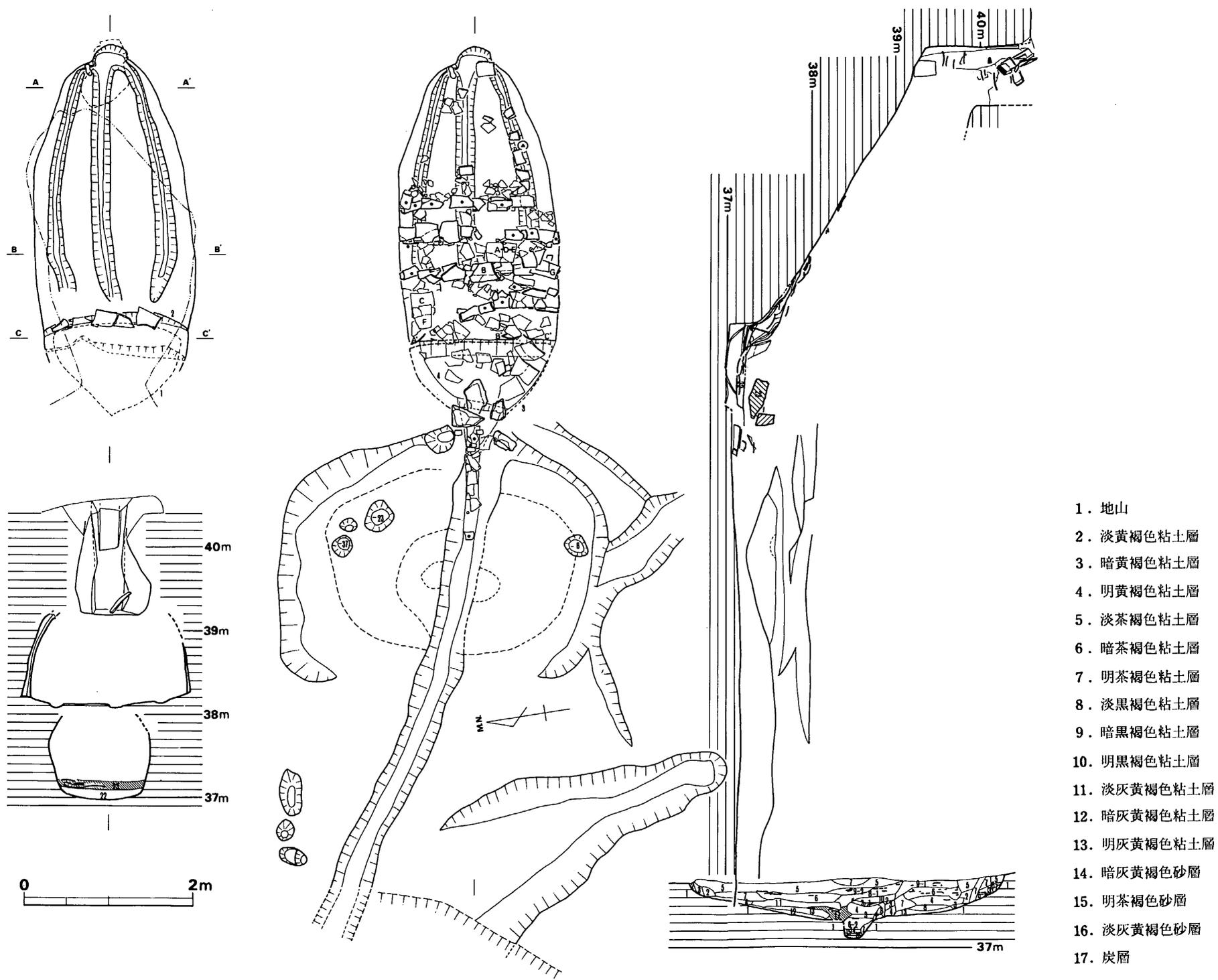


Fig. 72 剣塚第1号瓦窯実測図 (縮尺 $\frac{1}{80}$)

階部は少くとも4回にわたり補・改修が行なわれており (Fig. 80), これについては後述する。

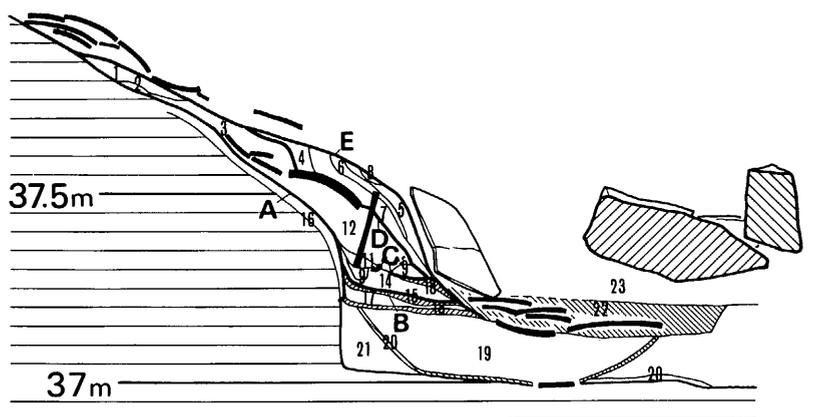
燃焼室は, 階部の補・改修と関連して各焼成時期によりその規模が異なる。構築時の床は巾0.9mで中央部が稍凹んでおり, 壁間最大巾は中位にあって1.2m。燃焼室から焚口部にかけて4個の石材が遺存しており, 作業時の閉塞に用いられたものとみられる。

焚口部には, 上端巾42~56cmの現存長5.9mに達する溝が接続する。形態・規模は, 排水溝を思わせるが, 現存部分の溝底は溝先端に当る西側が概して高く, 第1次燃焼室が最低となっている点に疑問が残る。

さらに, 焚口部の前面は, 巾3.8m, 長さ2.9mにわたって浅く掘りくぼめられている。灰原とするには, 焚口に近すぎる嫌いがあり, 現に折角の溝を土砂・炭化物・瓦等で埋めてしまっている。ただ, 溝底の第14~16層はいずれも砂層であり, これが意識的なものか否かはともかく, 溝が埋まっても水は流れ得たと思われる。

本窯は, 瓦を焼成するために営なまれているが, 若干の杯をも焼成している。焼成室内で略原位置を保って出土したのは1点 (ドットを付す) のみである。

3. 火入回数



- | | | | |
|-------------|---------------|----------|-------------|
| 1 茶褐色土層 | 2 黄褐色土層 | 3 黄褐色炭化物 | 4 明赤褐色 |
| 5 うぐいす色 | 6 暗赤褐色 (スサ混り) | 7 淡赤褐色 | |
| 8 黒色 (スサ混り) | 9 明黄褐色 | 10 燃焼部床面 | 11 淡赤褐色 |
| 12 赤黄褐色 | 13 炭化物層 | 14 灰白色 | 15 炭化物層 |
| 16 赤褐色 (床面) | 17 赤黄褐色 | 18 炭化物層 | 19 黄色土 (砂質) |
| 20 炭化物層 | 21 赤黄褐色 | 22 炭化物層 | 23 黄色土 |

Fig. 73 剣塚第1号瓦窯階部・燃焼室縦断面図 (縮尺 1/20)

補・改修は、燃焼室・焼成室のいずれの壁面にもその痕跡を留めないが、階部および燃焼室床面には顕著に認められ、またA～Dの計四面の高熱による変化を受けた面が確認されたので、以下これによって火入回数を検討してみたい。なお、斜線を付す層は炭化物層である。

第1回

A面を使用。ただし、熱変部は構築時燃焼室床面よりも20cm高位にある。従って燃焼室床面は第一回火入時にいったんこの高さまで埋め戻されたとみられる。

第2回

A面を使用。第1回の火入れ後にかき出された結果による孤状の薄い炭化物層（第20層）によって知られる。第18層の炭化物はこの時の残滓とみられる。

第3回

A面を使用。第15層が伴う。

第4回

A・B面を使用。焼成後のカキ出しは徹底している。

第5回

A・B面を使用。ただしB面を少しかさ上げしており、第13層がこれに伴う。

第6回

A・C面を使用。A面がくり返し使用されたことは、この下部のみが熱変が厚い（第16層は熱変層）ことによっても知られる。

第7回

D面を使用。D面は、C面の階部寄を一段掘り下げ、平瓦を斜めに立てて芯としている。

第8回

E面を使用。D面をスサ入粘土（第6層）等を用いて改修している。詰台一段分のスペースの拡大を意図したものかとも思われる。

第9回

E面を使用。第22層は炭化物層であるが薄い砂層があり、かつ第23層の表面が赤褐色を呈して熱を受けた形跡がある。

上記のごとく、確認された火入回数は計9回であり、さらにこれを数回上まわることを考えられる。ただし、一般的には火入回数と操業回数は同一ではなく、特に第1回目については空焚きの可能性が強い。本窯の場合は、瓦片が構築時の燃焼室床面に残っていたので当初から操業したとも考えられるが、一応最低8回の操業を想定しておきたい。とすると、周辺の瓦窯の倍以上の操業度となる。

註 1 氏の論述は多いが、小稿では『日本の古代瓦窯』1973年を直接用いた。

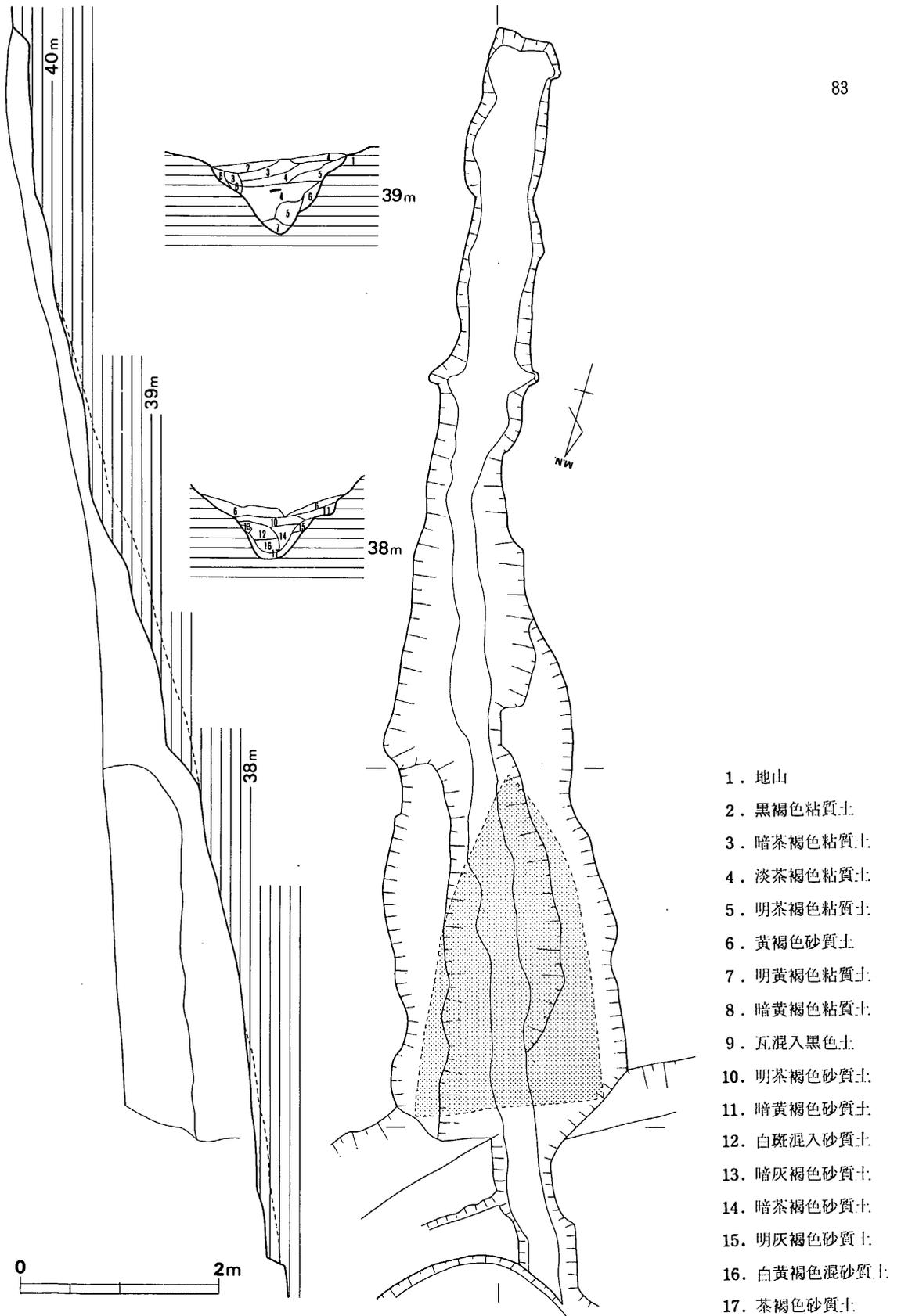


Fig. 74 溝状遺構実測図 (縮尺 $\frac{1}{60}$)

1. 地山
2. 黒褐色粘質土
3. 暗茶褐色粘質土
4. 淡茶褐色粘質土
5. 明茶褐色粘質土
6. 黄褐色砂質土
7. 明黄褐色粘質土
8. 暗黄褐色粘質土
9. 瓦混入黒色土
10. 明茶褐色砂質土
11. 暗黄褐色砂質土
12. 白斑混入砂質土
13. 暗灰褐色砂質土
14. 暗茶褐色砂質土
15. 明灰褐色砂質土
16. 白黄褐色混砂質土
17. 茶褐色砂質土

4. 溝状遺構 (Fig. 78)

第1号瓦窯に西接するが、これとは異なりコンター・ラインと平行して管なまれており、現存全長約13 mに達する。上端巾は高所にある先端部で約5 mの地点までは0.6~0.7 mと狭くて略一定であるが、これより手前は除々に巾を広げ、11 m前後のカットを受けた地点では2.35 mとなる。高低差は約2.4 mであるが、先端部から約1.7 mまでは略水平に近い。

この溝の間層をはさんだ上半には、夥しい量の瓦類の破片が堆積している。当初は第2の瓦窯跡を想定したのであるが、それらしき徴候・構造は全く認められない。

結果として、瓦の捨て場——灰原として利用されているのは明らかであるが、本来の性格・機能は不明とせざるを得ない。窯体のつくりかけにしては、形状・規模および斜面との関係からみて不適當である。窯体保持のための排水溝とするには位置に難がある。導・貯水のためとするには、目的が不明である。(石山 勲)

5. 土器 (Fig. 73)

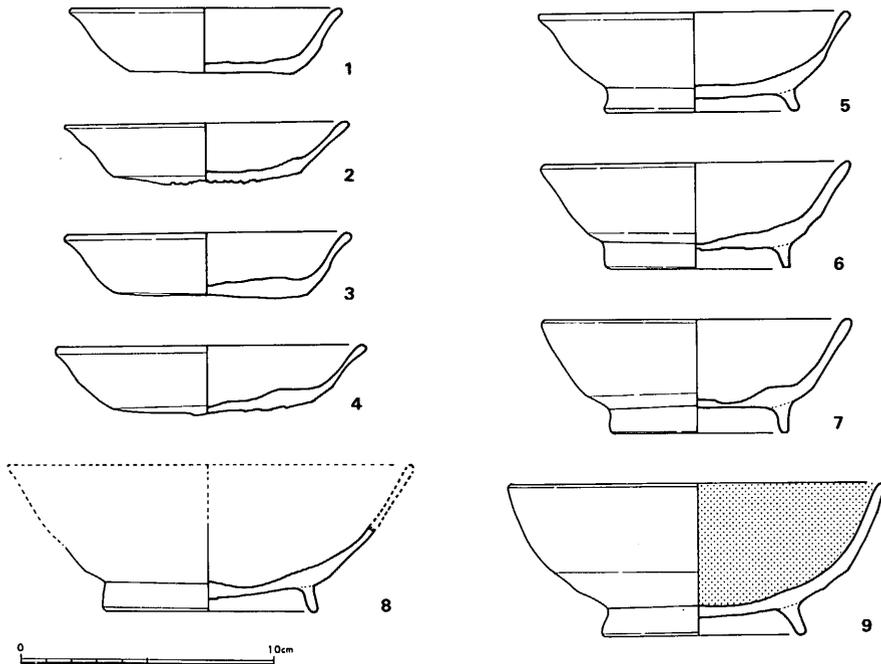


Fig. 75 剣塚第1号瓦窯窯内出土土器実測図 (縮尺 1/3)

第1号窯から出土した土器は土師器8, 黒色土器1である。この9点のうち床面に接して出土したものは1点 (Fig. 73—1, Fig. 72 ▲印, P L. 53—1) のみで、他は窯内埋土中

1 剣塚第1号瓦窯跡

から瓦と共に発見されたものである。底部切り離しは全て回転ヘラ切りである。

土師器 (1~8)

杯 (1~4)

口径10.8cm~12.3cm, 器高2.4cm~2.7cmを測る平底の杯である。底部切り離し後についた外底の板状圧痕は、あるもの(2・4)とないもの(1・3)があり、その板状圧痕と有機的関係にある内底のナデは2・4にはあり、1・3にはない。

小 椀 (5~7)

口径12.2cm~12.3cm, 器高4.0cm~4.6cmを測る高台付の椀である。5は体部中位で若干屈曲するが、6・7の体部は直線的に外上方へ延びる。6の外底には板状圧痕が残っており、また内底にはナデが観察できる。

椀 (8)

体部上半を欠失しているため、その全形は知り得ないが、直線的に外上方へ延びる体部を有する器形になると考えられる。体部内面は摩滅のため調整は不明であるが、外底には板状圧痕が観察できる。

黒色土器 (9)

内部器面をヘラミガキし、内面のみを燻した黒色土器である。体部中位で「く」字状に屈曲し、比較的高い高台を有している。体部内外面に黒漆を塗布している。その塗布のため、器体の成形、調整の方法を詳らかにしえないが、体部外面下半(屈曲部以下)には指頭圧痕らしい凹凸が観察できる。

以上の土器9点の年代は10世紀前後に相当すると考えられる。(森田 勉)

Tab. 1 剣塚第1号窯内出土土器法量表(1~8土師器・9黒色土器)

単位 cm

	杯			小 椀			椀			
	口径	底径	器高	口径	高台径	器高	口径	高台径	器高	
1	10.8	6.5	2.6	5	12.3	8.2	4.0	8	8.5	
2	11.3	7.4	2.4	6	12.2	7.3	4.3	9	14.9	6.1
3	11.4	7.6	2.4	7	12.2	7.0	4.6			
4	12.3	8.0	2.7							

6. 瓦類

今回の調査で出土した瓦類は、整理箱にして約80箱である。軒平瓦2点、若干の文字瓦、道具瓦、のほか大半が丸・平瓦である。

軒平瓦 (Fig. 76-1・2)

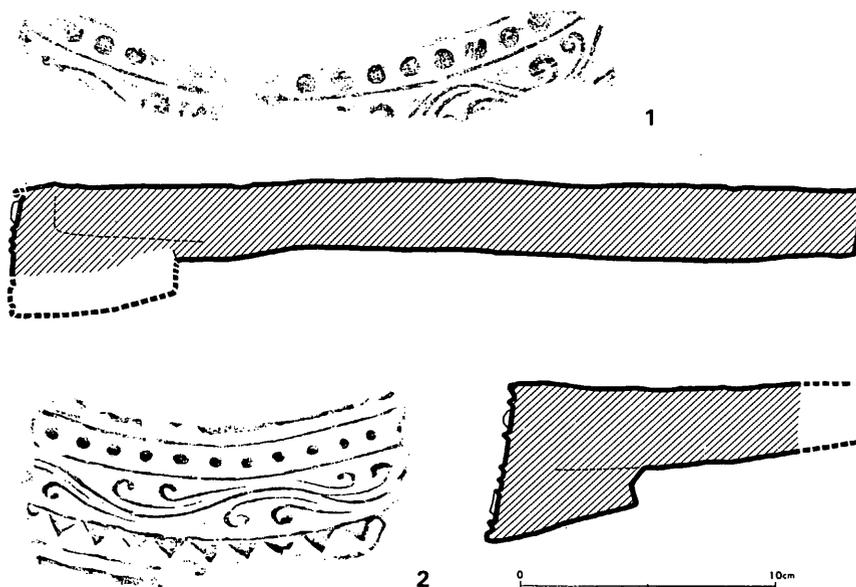


Fig. 76 剣塚第1号瓦窯跡・溝状遺構出土軒平瓦拓影・実測図 (縮尺 1/3)

1は1号窯跡出土の扁行唐草文軒平瓦で、顎部は欠損している。胎土に砂粒が多く、焼成は軟質である。凹面の布目痕は荒く、粘土板の継ぎ目が認められる。凸面はヘラケズリで一部縄目痕が残る。顎は段顎であろう。

2は溝状遺構から出土した。扁行唐草文軒平瓦で、胎土は精製され、外面は黒灰色をしている。凸面は細い縄目痕で、顎は段顎である。

文字瓦 (Fig. 77-1~3)

1は「平井瓦」銘で1号窯跡焼成部(5点)、灰原(1点)、溝状遺構(6点)の計12点が出土した。文字は逆字で、縦に長い斜格子目の叩きである。胎土は砂粒が多く、焼成は軟質である。大宰府政庁跡から出土したものがある。

2は「大」銘で溝状遺構から1点出土した。叩きは不規則な斜格子目を有しており、大宰府政庁跡に出土したものがある。

3は「口口瓦」銘で、最初の2字は判読できない。1号窯跡(11点)、溝状遺構(13点)の計24点が出土した。文字は逆字で、文字の上方は格子目で下方は平行線文の叩きである。焼成は硬質で、胎土に砂粒が多く含まれている。1号窯跡では焼成部に焼台として使用していた。大宰府学校院跡から出土したものがある。

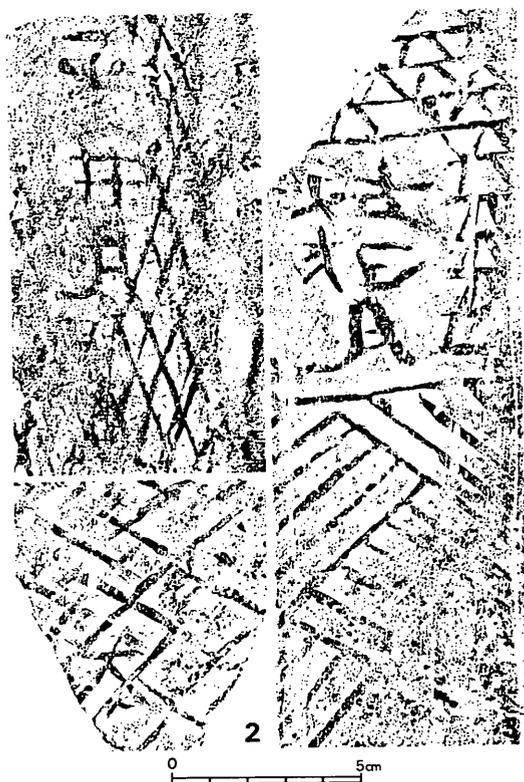


Fig. 77 剣塚第1号瓦窯跡・溝状遺構
出土文字瓦拓影（縮尺 1/2）

道具瓦（Fig. 78—2・3）

2と3は鬘斗瓦である。1号窯跡排水溝内から出土した。2は幅5cmで鬘斗瓦としては疑問が残る。

その他の瓦（Fig. 78—1・4・5）

4は埴に類似したもので、1号窯跡煙道部から1点出土した。幅11.9cm、厚さ6.1cm、現存長38.4cmで、4面共Fig.79—12の叩きがあり、一部ヘラケズリないし糸切痕が認められる。胎土は砂粒が多く含まれ、焼成は硬質で、全体的に赤褐色をしている。

1は幅6.6cm、厚さ4.7cm、現存長34.7cm、5は幅6.8cm、厚さ4.1cm、現存長21cmである。1号窯跡煙道部から3点出土した。その断面は直角をはさむ2面はヘラケズリないし糸切り痕が認められ、直角に対する角は丸く、それをはさむ2面はFig. 79—12が不規則に叩かれている。共に赤褐色を呈し、胎土は砂粒が多く、焼成は硬質である。

丸・平瓦（Fig. 79—1～14）

1～14は今回出土した丸・平瓦の叩き目を集成したものである。1号窯跡、溝状遺構から出土した丸・平瓦の大部分は赤褐色に焼成され、軟質のものが多い。1号窯跡は1～9・12・14の叩きが出土し、なかでも7が極めて多い。特に平瓦に叩かれたものが多く、丸瓦は焼台として使用されており、①、⑥、⑦、⑧、⑫、⑭の瓦が認められ、なかでも⑦と⑫は各々の焼台の列に認められた。又、A—Fの瓦、A'—C'の瓦は最終時の階の補強として用いられたもので、叩きはすべて⑦である。溝状遺構の瓦は①、②、④、⑦～⑭の叩きが認められ、これらの出土したなかでも、⑦が主体をなし、次いで②、⑭があげられる。⑨～⑪、⑬は1～3点の出土であった。（石松好雄・高橋 章）

7. 鉄器（Fig. 80）

溝状遺構から2点が出土している。

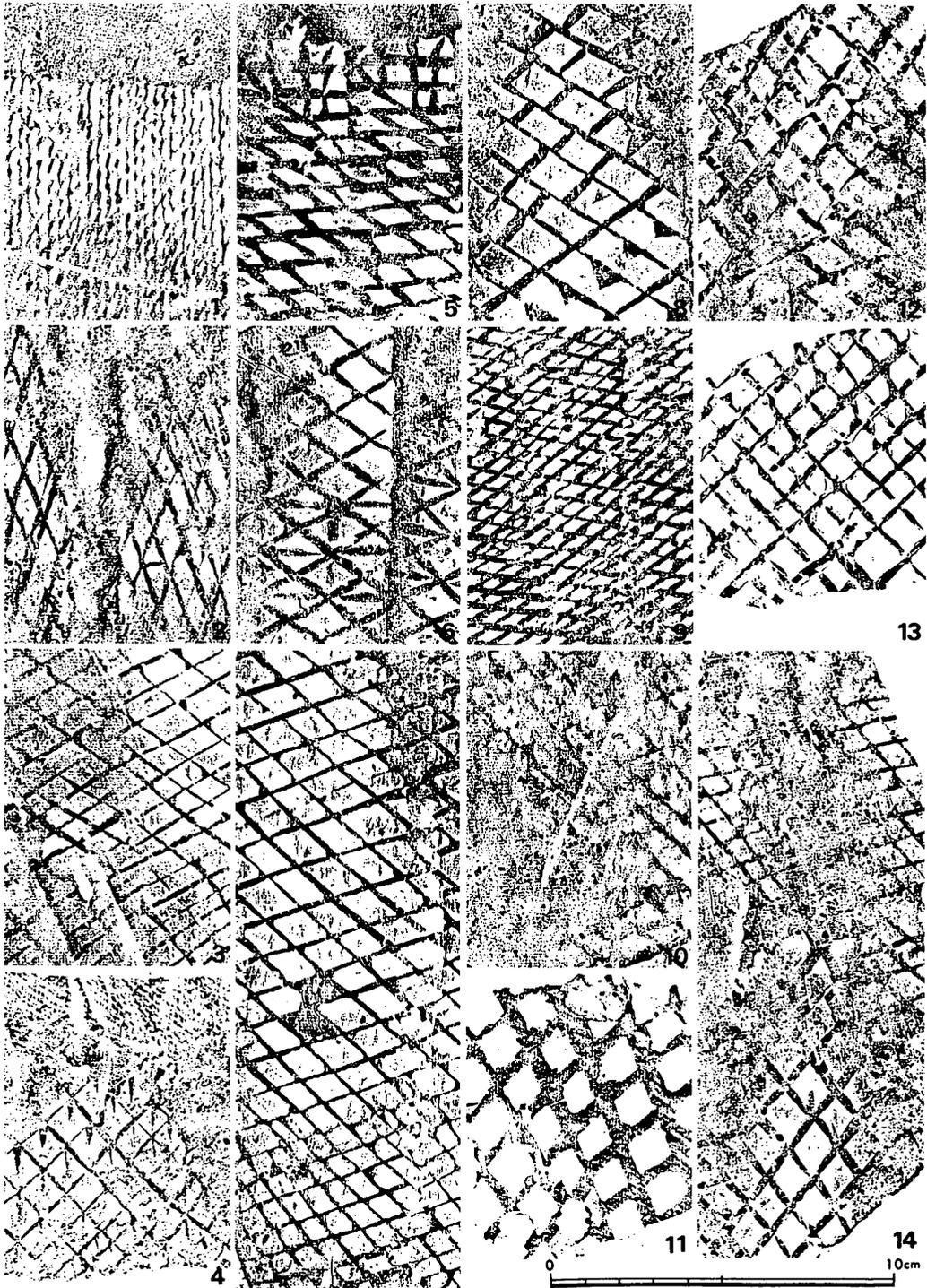


Fig. 79 剣塚第1号瓦窯跡・溝状遺構出土丸・平瓦拓影（縮尺 1/2）

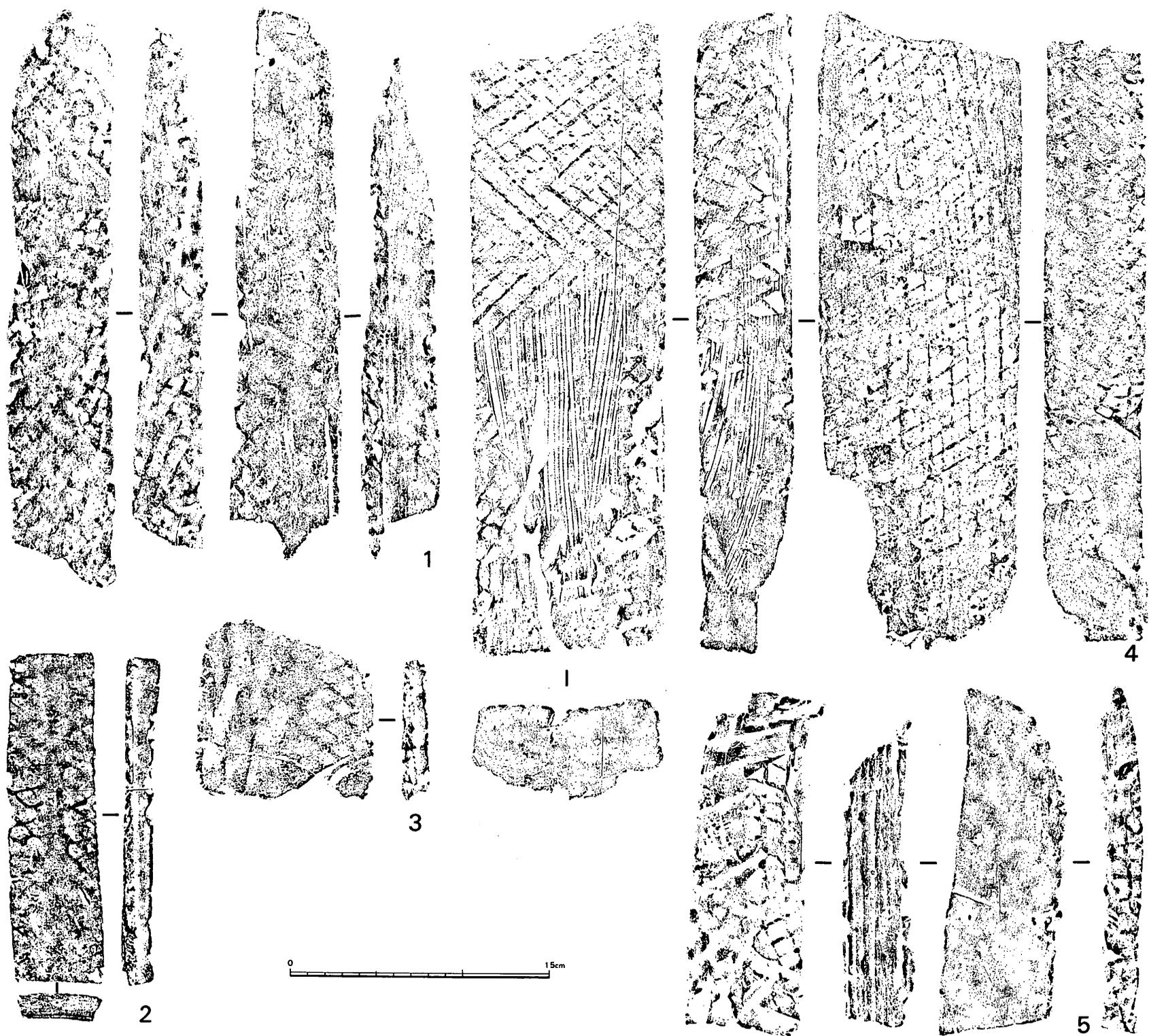


Fig. 78 剣塚第1号瓦窯跡・溝状遺構出土熨斗瓦・其他拓影（縮尺 1/3）

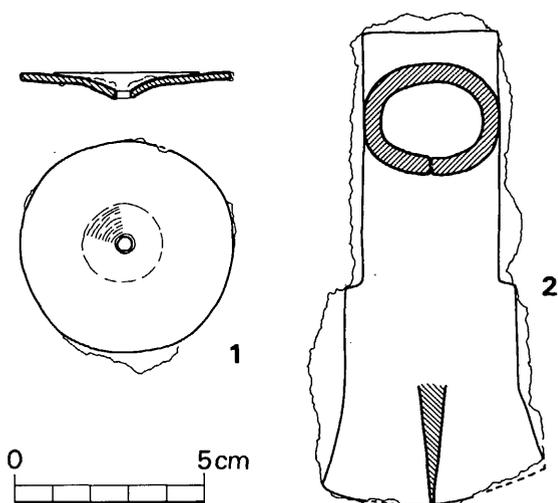


Fig. 80 剣塚第1号瓦窯跡・溝状遺構出土鉄器実測図（縮尺 1/2）

紡錘車

厚さ 1.5 mm，径 5.5 cm 前後の円板の中央部を突出させて，径 4 mm の一孔を穿つ。銹化が進行し，一部が脹れているが略完存する。

手斧鋏

全長 12.4 cm で，刃部の一部を欠く他は完存するが，著しく銹化が進んでいる。両肩式で，刃部の長さおよび最大巾はともに 5.9 cm。刃部には使用による摩滅がある。柄は着装されていない。

なお，鉄製紡錘車については，本例をも含めてその集成と考察を上野精志氏がなされているのでそれに拠らねたい（近刊の九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 X X III 掲載予定）。

（石山 勲）

8. 小結

今回出土した瓦の中のうち，Fig. 79-7 が圧倒的に多く 1 号窯跡では，全体の約 60 % 以上という際立った出土率を占めており，これは溝状遺構でも同様な出土傾向を示している。この瓦は 1 号窯跡の焼台ないし最終期の階に補強として使用されており，又初期の燃焼部（階も含む）にも⑦の瓦が認められることなどから，本窯において主体をなす生産瓦と考えられよう。その他の瓦については，叩き目などから，1 号窯跡，溝状遺構共に普遍的に出土しており，瓦生産の前後の差違は認められなかった。

これら格子目の瓦の供給地は定かでないが，「平井瓦」，「大」瓦銘は，大宰府政庁南門跡（HF-55・56）の瓦溜りから出土しており，又 Fig. 77-4 は筑前国分寺跡，大宰府政庁西脇殿跡などに同様な叩き目が認められ，これらの時期を 10 世紀中頃以前に求めることが可能である。よって閉窯時に検出された土師器の年代を勘案すると 10 世紀初頭前後の時期が考えられよう。（石松好雄・高橋 章）

V-2 平安時代木棺墓・土壇墓

平安時代に属する鉄釘を使用した木棺墓が7基検出された。それぞれは密集する類ではなく、北端部の瓦窯東側に1基、第3号住居跡を切って1基、4号住居跡を切って1基、前方後円墳西側周溝の南北に離れて2基、東側周溝側に2基が隣接平行して検出される如く、全体に点々と分布する。図示して番号を付した7基以外に、3号墳東南側周溝のトレンチ壁部、前方後円墳西側周溝底中央部、第25号袋状竖穴上層中、前方後円墳墳丘内、等の各所に木棺使用釘と看做されるものが数本ずつ出土したり、調査上の手違いにより機械力等によって遺構が飛んでしまったりしたが、同種の木棺の存在が推定された。

Tab. 2 剣塚遺跡平安時代木棺墓一覧表

(単位 cm)

No.	主軸方位	墓抔プラン	長 × 幅 × 深(棺身)	釘	副葬品	備考	調査時呼称
1	N 87° 30' W	不整長方形	225 × 84 ~ 94 × 26 (188) × (58) × (?)	20 ± α	須恵器長頸壺	第4号住居跡を切る	D-27
2	N 4 ° W	不整長方形	242 × 105 ~ 118 × 56 (176) × (53) × (20 + α)	32本	灰釉長頸壺 土師小皿2 土師鉢2	第3号住居跡を切る	
3	N 72° E	隅丸長方形	203 × 76 ~ 81 × 64 (169) × (44) × (22 + α)	28本	土師小皿1	3号墳排水溝を切る	最北端木棺
4	N 65° E	隅丸長方形	193 × 76 ~ 53 × 65 (164) × (37) × (?)	9本	白磁碗1, 土師小皿1, 土師碗(高台付)1	1号墳西周溝を切る	5区1号木棺
5	*N 56° 30' E	隅丸長方形	227 × 64 × 55 (166) × (45) × (?)	22本	土師小皿1 刀子2, 鎌子1	1号墳西周溝を切る	南隍4区 1号木棺
6	N 2 ° 30' W	隅丸長方形	211 × 79 ~ 93 × 46	5本	土師小皿1	1号墳東周溝を切る	東隍内1号木棺
7	N 2 ° 30' W	隅丸長方形	181 × 68 × 45	0		床面のみ残る	東隍内2号木棺

2 平安時代木棺墓・土塚墓

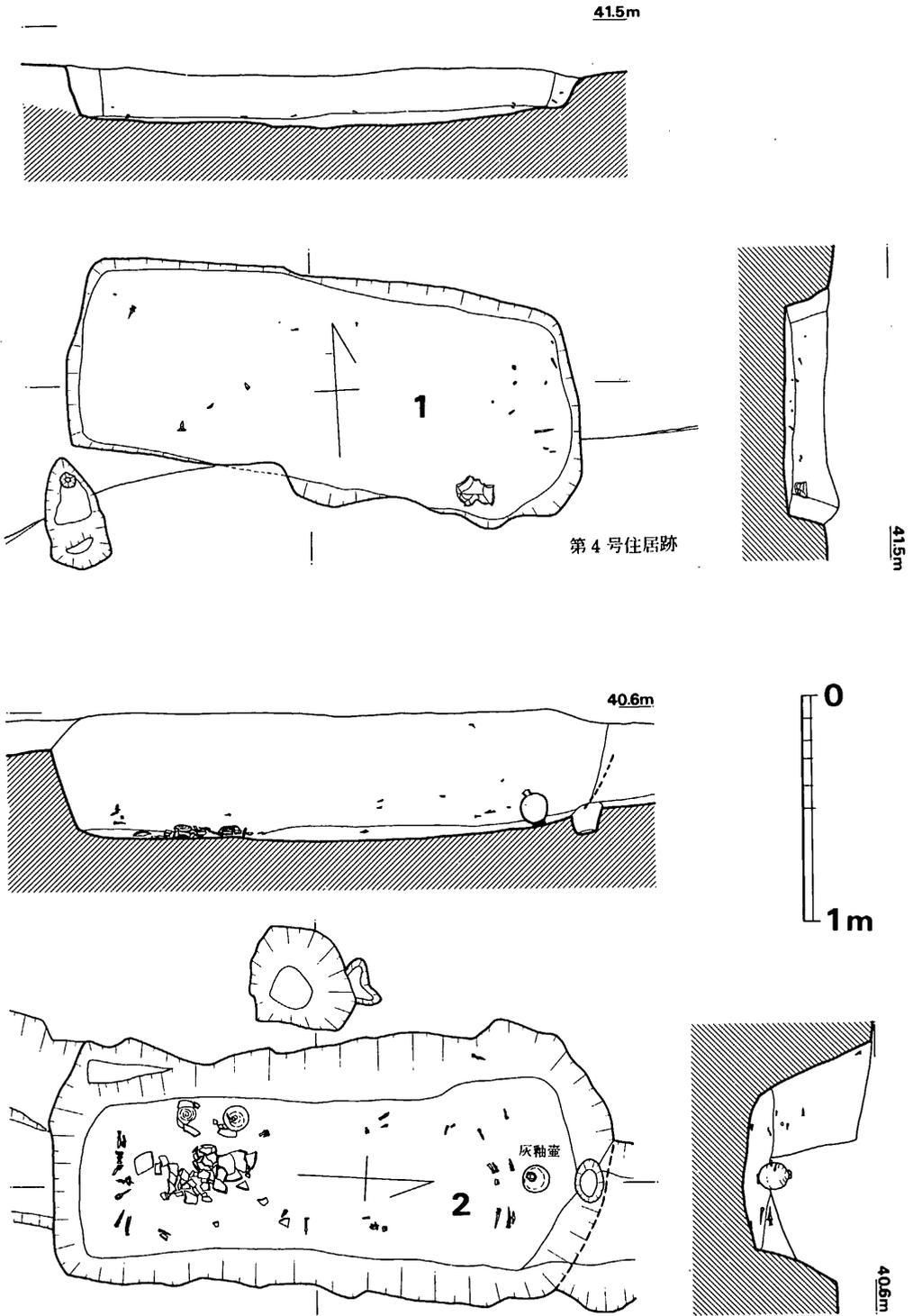


Fig. 81 第1・2号木棺墓実測図 (縮尺 1/30)

1. 第1号木棺墓 (Fig. 81)

第4号住居跡北辺を切って営なまれる。主軸をN89°30'Wにとり、長さ225cm、幅84~94cm、深さ26cmの長方形プランの土塚中に20±α本の鉄角釘を用いた木棺を掘える。釘が散乱しており棺身の規模は明確ではないが、推定長188cm、幅58cm程度と考えられる。東南壁際に焼きの著しく悪い長頸壺が副葬されていた。

出土釘に関しては、以下各木棺墓においても同様であるが、各々一覧表を付して特に説明を加えない。表中における「板組合せ」の項は、釘付着の棺材木質の柁目方向の組合せを示したもので、Aは釘頂部寄りに横方向の柁目で以下半が縦方向の柁目を示すもの、Bは下半が頂部寄りの柁目と直交する方向の類で、釘実測図中で細かい点を打った部分が上下孰れかに在る場合がそれである。Cは上下孰れも横方向柁目を示すものである。

Tab. 3 第1号木棺墓使用釘一覧表

(単位 cm)

No.	板組合せ	釘長	板厚さ	備 考	No.	板組合せ	釘長	板厚さ	備 考
1	C	4.8+α	?	頭部欠損	22	C	3.8+α	?	頭部・下半欠損
2	B	4.5+α	2.4	先端欠損	23	?	2.5+α	?	下半欠損
3	A	3.8+α	2.8	下半欠損	24	?	2.4+α	?	下半欠損
4	?	3.0+α	2.5	下半欠損	25	A	2.7+α	?	頭部・下半欠損
5	C	4.5+α	?	頭部・先端欠損	26	C	3.0+α	2.5	下半欠損
6	C	4.4+α	2.7	下半欠損	27	BorC	2.8+α	?	上半欠損
7	?	2.6+α	?	下半欠損	28	C	3.3+α	?	頭部・下半欠損
8	C	4.8+α	?	頭部・先端欠損	29	C	2.5+α	?	頭部・下半欠損
9	C	4.4+α	1.9	下半欠損	30	?	2.7+α	?	頭部・下半欠損
10	B	4.0+α	2.4	下半欠損	31	BorC	2.8+α	?	上半欠損(細手)
11	C	4.7+α	?	頭部欠損・中途で曲がる	32	BorC	2.7+α	?	上半欠損(細手)
12	?	5.0+α	?	頭部欠損(細手)	33	?	2.6+α	?	下半欠損
13	?	2.9+α	?	下半欠損(細手) 頂部直下で径3.5mm	34	?	3.0+α	?	上半欠損・下半に直角に曲がる
14	BorC	3.4+α	?	上半欠損(細手)	35	?	2.5+α	?	頭部・下半欠損
15	?	2.6+α	?	上半欠損(細手)	36	EorC	2.6+α	?	頭部・下半欠損 下半で丸く曲がる
16	A	3.9+α	?	上半欠損	37	?	2.0+α	?	下半欠損
17	A	4.0+α	?	上半欠損	38	BorC	2.5+α	?	上半欠損
18	BorC	4.0+α	?	上半欠損	39	?	2.0+α	?	下半欠損
19	BorC	3.7+α	?	上半欠損	40	BorC	2.0+α	?	上半欠損
20	BorC	3.2+α	?	頭部・下半欠損	41	C	10.0+α	2.1	頭部欠損 3ヶ所で屈曲
21	C	4.8+α	?	頭部欠損	※No.は41まで付したが実際の数はかなり少なくなる(20本内外)				

副葬品

須恵器長頸壺 (Fig.82)

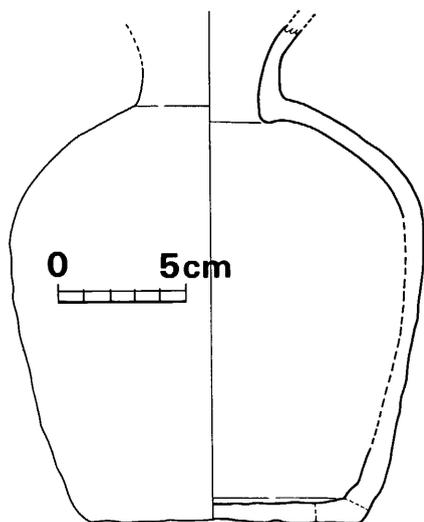


Fig. 82 第1号木棺墓副葬須恵器
実測図 (縮尺 1/4)

極めて焼成甘く、淡灰黄色を呈し、器表の磨滅も著しい。僅かな上げ底状をなす安定した底部に肩のやや角ばる風をみせる。頸部以上は中途で欠損するが、これは第2号木棺墓副葬の灰釉長頸壺と同種であり、日常品を打ち欠いて仮器となすという思想によるものであろう。胎土はかなり精良で、底径10.5cm、胴最大径16.1cmを測る。

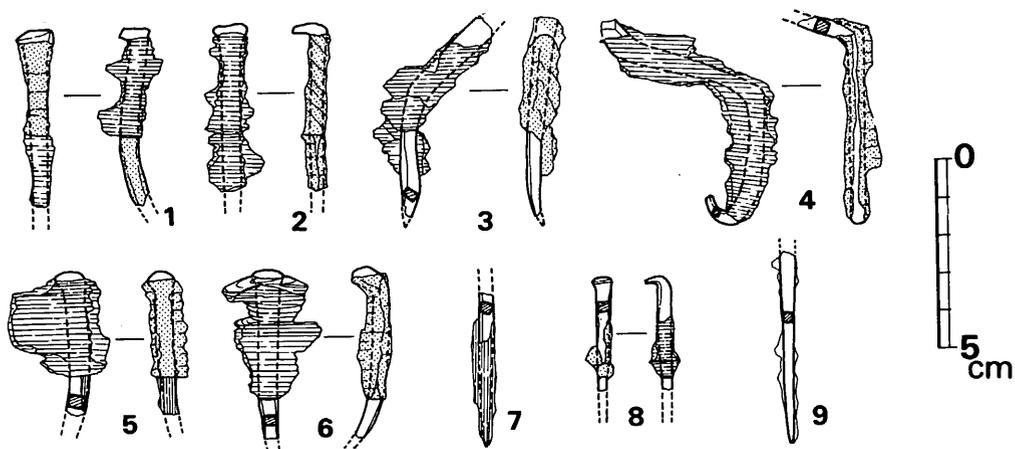


Fig. 83 第1号木棺墓使用釘実測図 (縮尺 1/4)

2. 第2号木棺墓 (Fig.81)

第3号住居跡を切り、主軸をN4°Wにとり、長さ242cm、幅118~105cm、深さ56cmを測る長方形土塚内に釘32本を使用した木棺を納める。棺身は釘の位置から、長さ176cm、幅53cmの大きさと考えられる。北端棺外の棺際に灰釉長頸壺1個が頸部中途以上を明らかに打ち欠かれて副葬されていた。また、南半の中央部床面に鉢形の黒色土器2点が完全に押し潰された状態で

みられ、更にもその西側棺外際に小皿2点が伏せた状態で副葬されていた。鉢形黒色土器2点はまず土圧で割れたのではなく、投げ割られたとしてもそれ程散乱していないので、棺埋置前に置かれ棺の下に押し拉がれた類と考える。

副葬品 (Fig.84)

小皿 (1・2)

口径12.2~12.3cm, 器高3.4~3.2cm, 底径7.5cmを測り, 口縁は体部から僅かに外反し, 端部は丸くおさめる。底部はヘラ切りにより, 1にはスノコ痕を残す。孰れも口縁~体部内外面に回転横ナデを施し, 底内面は一方向へのナデつけを行なう。1・2ともに, 胎土に砂粒僅かに含み, 焼成良好で, 淡灰褐色を呈する。

土師器碗(3)

覆土中出土品で明確な副葬品ではない。やや長めの外開き高台を付す類で, 底径10.0cmを測り, 高台部内外面は横ナデによるが, 他面は剥落著しく調整不明である。胎土精良で焼成やや不良, 淡黄褐色を呈する。

黒色土器鉢(4・5)

口縁短かく外反する深い丸底の盃状の器形をなす類で, 口径17.6~18.9cm, 器高10.4~11.0cmを測る。4の内面は横ナデの上に黒色炭化物を付着させ横方向ヘラ磨きを行ない, 外面は黒

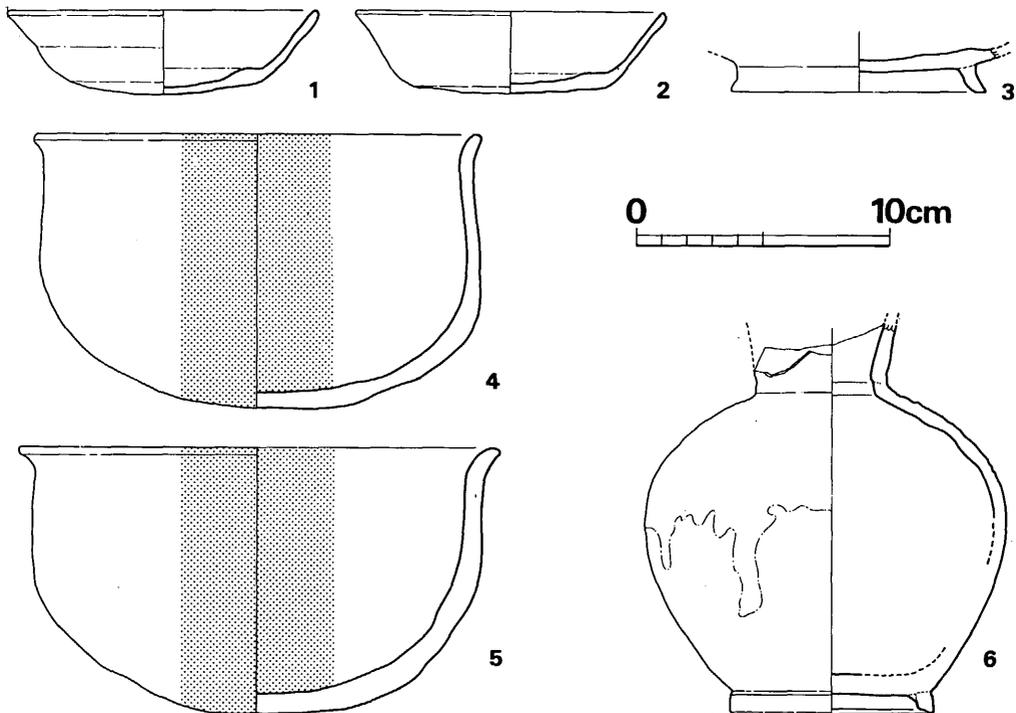


Fig. 84 第2号木棺墓出土土師器・灰釉陶器実測図(縮尺 1/3)

2 平安時代木棺墓・土塚墓

色炭化物を付着させ器表の剝落部が多いが、旧状は内面と同一の黒色に研磨されたものと考えられる。5の内面も横方向ヘラによる黒色研磨で、外面上半は横ナデ、中位に横ヘラ磨きがみられ、底面には部分的に強い指ナデつけ痕があり凹凸かなり著しい。孰れも胎土に細砂少量含むがかなり精良で、焼成は土師質でやや良好である。

灰釉長頸壺(6)

球形に近い胴部に、殆んど開かない短かい高台を付ける、やや小ぶりの器形をなす。頸部内面から胴部上半までに灰釉をかけ、部分的に下半まで釉垂れがみられ、胴片側半分は釉黒緑化してケロイド状の凹凸がみられるが、他面は、淡緑色をみせる。底部は糸切り離しの後、高台を付け、回転ナデを行なう。胴下半には淡い褐色釉を薄く荒く塗っている。胎土は灰白色のやや粗い陶土を用い、器壁は全体に薄手で精製なつくりである。

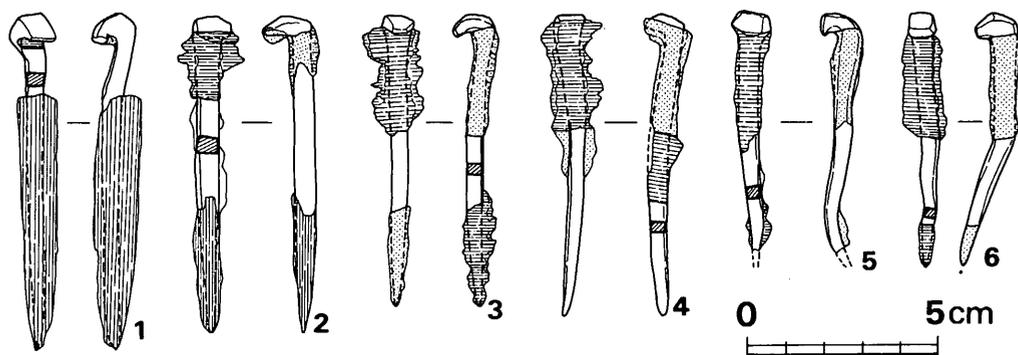


Fig. 85 第2号木棺墓使用釘実測図(縮尺 1/2)

Tab. 4 第2号木棺墓使用釘一覧表

(単位 cm)

No.	板組合せ	釘長	板厚さ	使用箇所	備考
1	A	8.8	1.6	(下) 南小口板 → 底板	
2	B	7.6	2.8	(下) 東側板 → 底板	
3	B	7.8	2.6	(上) 蓋板 → 南小口板	
4	A	8.3	1.5	(下) 南小口板 → 底板	
5	?	2.5+ α	?	(上) (蓋板 → 南小口板)	下半欠損
6	A	4.4+ α	1.5	(下) 南小口板 → 底板	下半欠損
7	B	4.5+ α	1.8	(上) 蓋板 → 南小口板	下半欠損
8	C	6.2+ α	2.4	(下) 西側板 → 底板	先端欠損
9	A	5.5+ α	1.8	(下) 西側板 → 南小口板	先端欠損
10	C	6.7	2.6	(下) 東側板 → 底板	

V 歴史時代の遺構と遺物

No	板組合せ	釘長	板厚さ	使用ヶ所	備考
11	C	$3.2+\alpha$?	(上) 蓋板 → 東側板	下半欠損
12	(C)	$2.8+\alpha$?	?	下半部のみ(11か13の下半部)
13	C	$4.5+\alpha$	2.8	(下) 東側板 → 底板	先端欠損
14	C	$3.2+\alpha$?	(下) (東側板 → 底板)	下半欠損
15	C	$6.2+\alpha$	2.6	(上) 蓋板 → 東側板	先端欠損
16	A	$6.2+\alpha$	1.8	(下) 北小口板 → 底板	先端欠損
17	C	$3.8+\alpha$?	(下) (東側板 → 底板)	頭部・先端欠損
18	B	$4.5+\alpha$	1.9	(上) 蓋板 → 北小口板	先端欠損
19	A	$3.5+\alpha$?	(下) (北小口板 → 底板)	下半部のみ
20	?	$2.2+\alpha$?	(下) (蓋板 → 西側板)	頂部・下半欠損
21	C	6.4	2.5	(上) 蓋板 → 西側板	
22	C	$4.4+\alpha$	2.4	(下) 西側板 → 底板	先端欠損
23				?	上部にかなり浮く
24	C	$3.6+\alpha$	2.2	(下) 西側板 → 底板	下半欠損
25	C	$3.5+\alpha$	1.9	(下) 西側板 → 底板	下半欠損
26	C ?	$1.0+\alpha$?	(上) (蓋板 → 西側板)	頂部直下のみ
27					25と同一個体か
28	} C ?	$3.0+\alpha$?	(下) (西側板 → 底板)	下半欠損
29					
30	} C	$2.9+\alpha$?	(下) (西側板 → 底板)	同一個体か
31					
32	C ?	$2.8+\alpha$?	(上) (蓋板 → 東側板)	下半部のみ

3. 第3号木棺墓 (Fig.86)

3号墳の排水溝が北へ延び、その北端にこの溝を切って営なまれる。主軸をN72°Eにとり、長さ203cm、幅81~76cm、深さ64cmの隅丸長方形土壇の中に釘28本を用いた木棺を納める。棺体部分は土質が異なり、明確に長方形にその大きさを掴む事ができた。即ち、長さ169cm、幅44cmを測り、釘はその内際に並ぶ。中央部のやや西寄りの床面より幾らか浮いた状態で、土師器小皿1点が副葬されていた。これはその出土状況により、棺内副葬の類かと推定される。

副葬品

小皿 (Fig.87)

口径11.6cm、器高3.0cm、底径7.5cmを測る底部へラ切り離しの類で、口縁~体部内外面横ナデを施す。底部外面にはスノコ痕が若干残る。胎土に粗砂を極く僅かに含み、焼成やや不良で灰褐色を呈する。

2 平安時代木棺墓・土坑墓

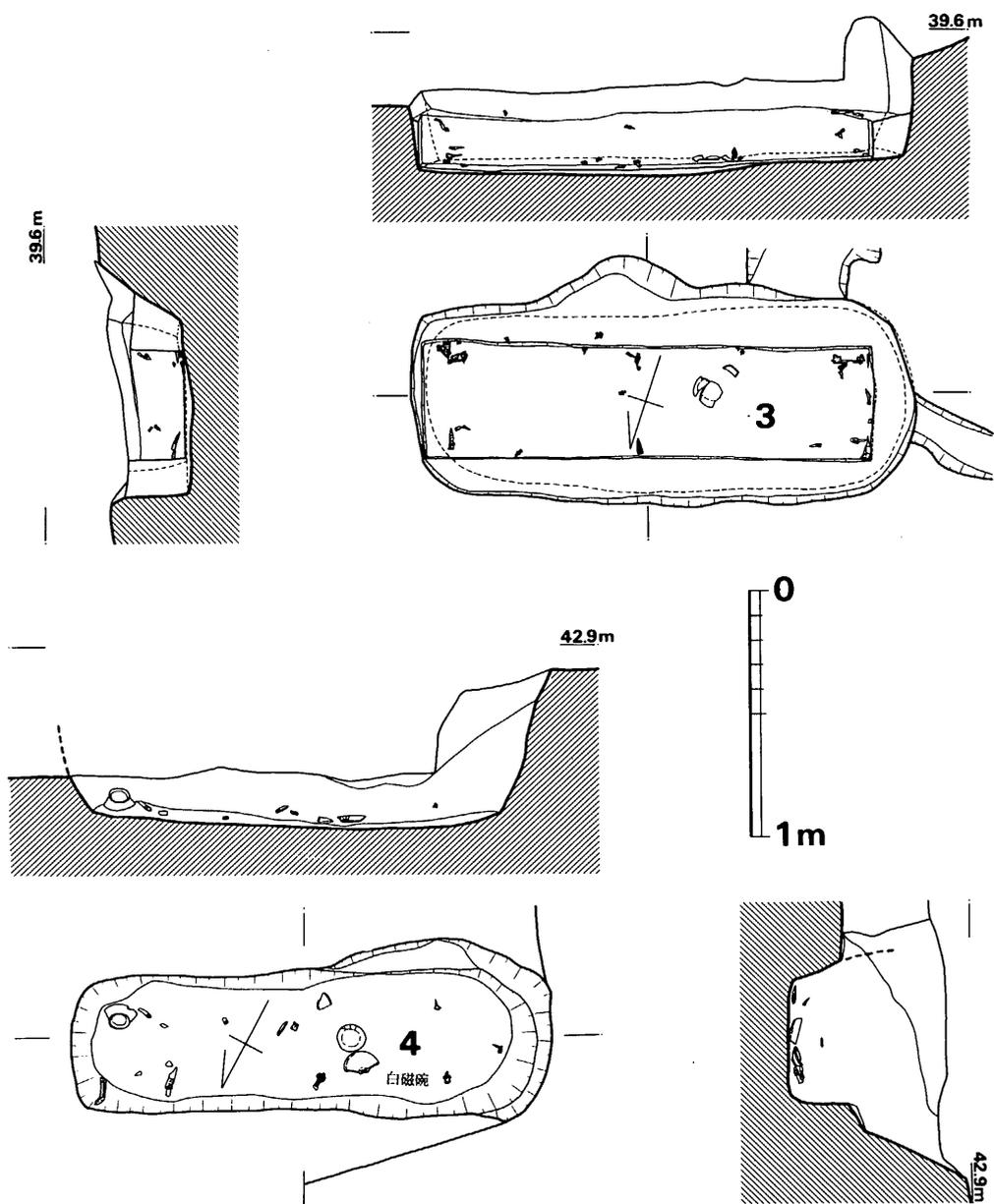


Fig. 86 第8・4号木棺墓実測図(縮尺 1/30)

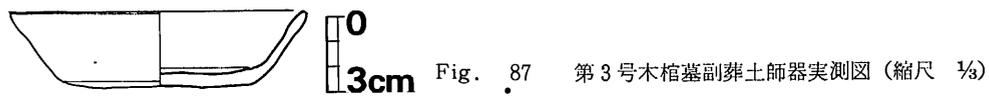


Fig. 87 第3号木棺墓副葬土師器実測図(縮尺 1/4)

V 歴史時代の遺構と遺物

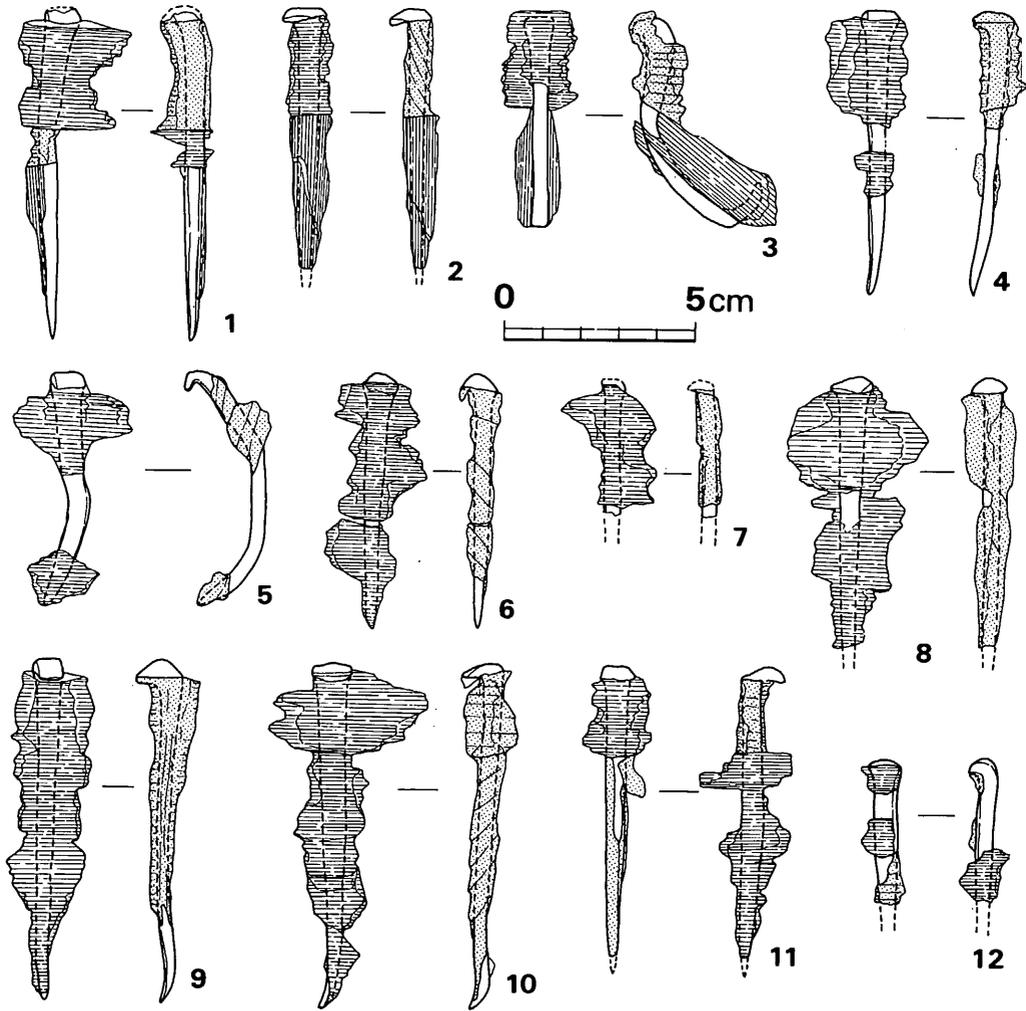


Fig. 88 第3号木棺墓使用釘実測図 (縮尺 1/2)

Tab. 5 第3号木棺墓使用釘一覧表

(単位 cm)

No.	板組合せ	釘長	板厚さ	使用箇所	備考
1	C	9.1	2.0	(下) 底板 → 南側板	先端部のみ僅かに曲がる
2	C	7.5	2.3	(下) 底板 → 南側板	(下) 東小口板 → 南側板の可能性もある
3	C	9.1	?	(下) 底板 → 北側板	先端のみ僅かに曲がる
4	C	3.3+ α	1.5	(下) 底板 → 南側板	下半欠損
5	C or B	3.0+ α	?	(下) 不明 (中心部)	上半欠損
6	C'	約 8.0	?	(下) 底板 → 南側板	丸く曲がり先端と頂部に木質あり

2 平安時代木棺墓・土塚墓

No.	板組合せ	釘長	板厚さ	使用個所	備考
7	C	$4.6+\alpha$	2.3	(下) 底板 → 南側板	下半欠損
8	C	6.8	?	(下) 底板 → 南側板	
9	A'	約 8.0	1.5	(下) 西小口板 → 底板	丸く曲がり斜めに打ち込む
10	C	$7.1+\alpha$	2.5	(下) 底板 → 北側板	先端欠損
11	B	$6.2+\alpha$	2.3	(上) 蓋板 → 東小口板	先端欠損
12	B	$4.9+\alpha$	2.3	(上) 蓋板 → 東小口板	下半欠損
13	A	$2.3+3.0+\alpha$	2.3	(上か中) 南側板 → 東小口板	
14	?	$2.9+\alpha$?	?	頂部のみ
15	?	$2.1+\alpha$?	?	頂部のみ
16	B	$3.8+\alpha$	2.0	(上) 蓋板 → 南側板	下半欠損
17	A	$7.7+\alpha$	2.3	(上か中) 南側板 → 西小口板	先端欠損
18	B	$5.0+\alpha$	2.0	(上) 蓋板 → 西小口板	先端欠損
19	?	$3.0+\alpha$	2.3	?	下半欠損
20	C	$4.8+\alpha$	1.5	(上) 蓋板 → 西小口板	先端欠損
21	A	6.7	2.5	(上) 北側板 → 東小口板	先端欠損
22	C'	$5.0+\alpha$?	(上) 蓋板 → 北側板	丸く曲がり 6 と同様
23	?	$2.7+\alpha$?	(上) 蓋板 → 北側板(?)	下半欠損
24	? (A)	$3.7+\alpha$	2.5	(上) 蓋板 → 北側板(?)	下半欠損
25	B+A	9.0	2.7, 1.0	(上) 北側板 → 西小口板	頭部僅かに欠損
26	B	7.6	2.0	(上) 蓋板 → 西小口板	
27	B	$4.1+\alpha$	1.7	(上) 蓋板 → 西小口板	下半欠損
28	?	$2.1+\alpha$?	(上) ?	上下欠損

4. 第4号木棺墓 Fig. (86)

前方後円墳後円部の西側周溝を切って営なまれ、 $N65^{\circ}E$ に主軸をとる。長さ193cm幅76~53cm、深さ65cmの隅丸長方形の土塚を掘り、中に釘9本を用いた木棺を埋置する。棺身は出土釘の位置から復元すると、長さ164cm、幅37cmの大きさとなろう。棺中央よりやや西寄りの床面より僅かに浮いて土師器小皿1点、白磁碗(半截品)、安山岩製スクレイパー1点が出土した。また、東端部棺外際には、土師器高台付碗1点が副葬されていた。

(中間研志)

なお、本木棺出土の土器類については、後述する。

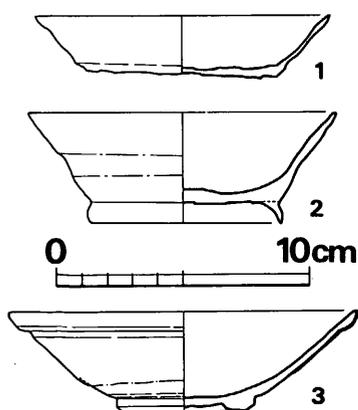


Fig. 89 第4号木棺墓出土土師器・白磁実測図(縮尺 1/3)

V 歴史時代の遺構と遺物

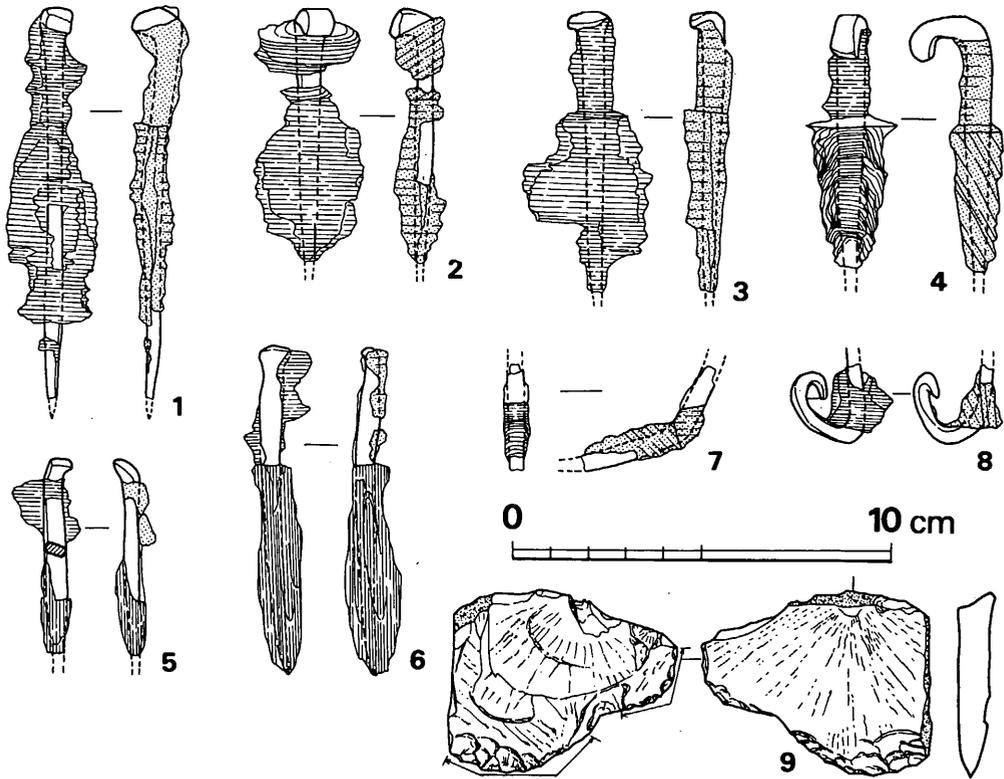


Fig. 90 第4号木棺墓使用釘・出土石器実測図(縮尺 1/2)

Tab. 6 第4号木棺墓使用釘一覧表

(単位 cm)

No.	板組合せ	釘長	板厚さ	使用箇所	備考
1	C	2.9+ α	?	(下) (南側板 → 底板)	上半・下半欠損
2	C	10.0	2.5	(下) 北側板 → 底板	
3	C	7.3+ α	2.3	(下) 北側板 → 底板	先端欠損
4	C	6.5+ α	2.0	(下) 北側板 → 底板	先端欠損
5	C	6.5+ α	2.5	(下) 北側板 → 底板	先端欠損
6	A	5.2+ α	2.3	(下) 西小口板 → 底板	先端欠損
7	A	8.5	2.6	(下) 南側板 → 東小口板	
8	C'	4.5+ α	?	(下) 南側板 → 底板	頂部先端欠損
9	C' ?	4.0+ α	?	(下) 南側板 → 底板	頂部欠損, 先端丸く曲がる

Tab. 7 第4号木棺墓出土石器一覧表

(単位 mm, g)

Fig. No.	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚さ	重量	刃部長	分類	備考	台帳番号
90の9	スクレイパー	安山岩	46.5	60.6	10.0	35.5	77.0	A	原石粗面あり, 両面よりリタッチ	3

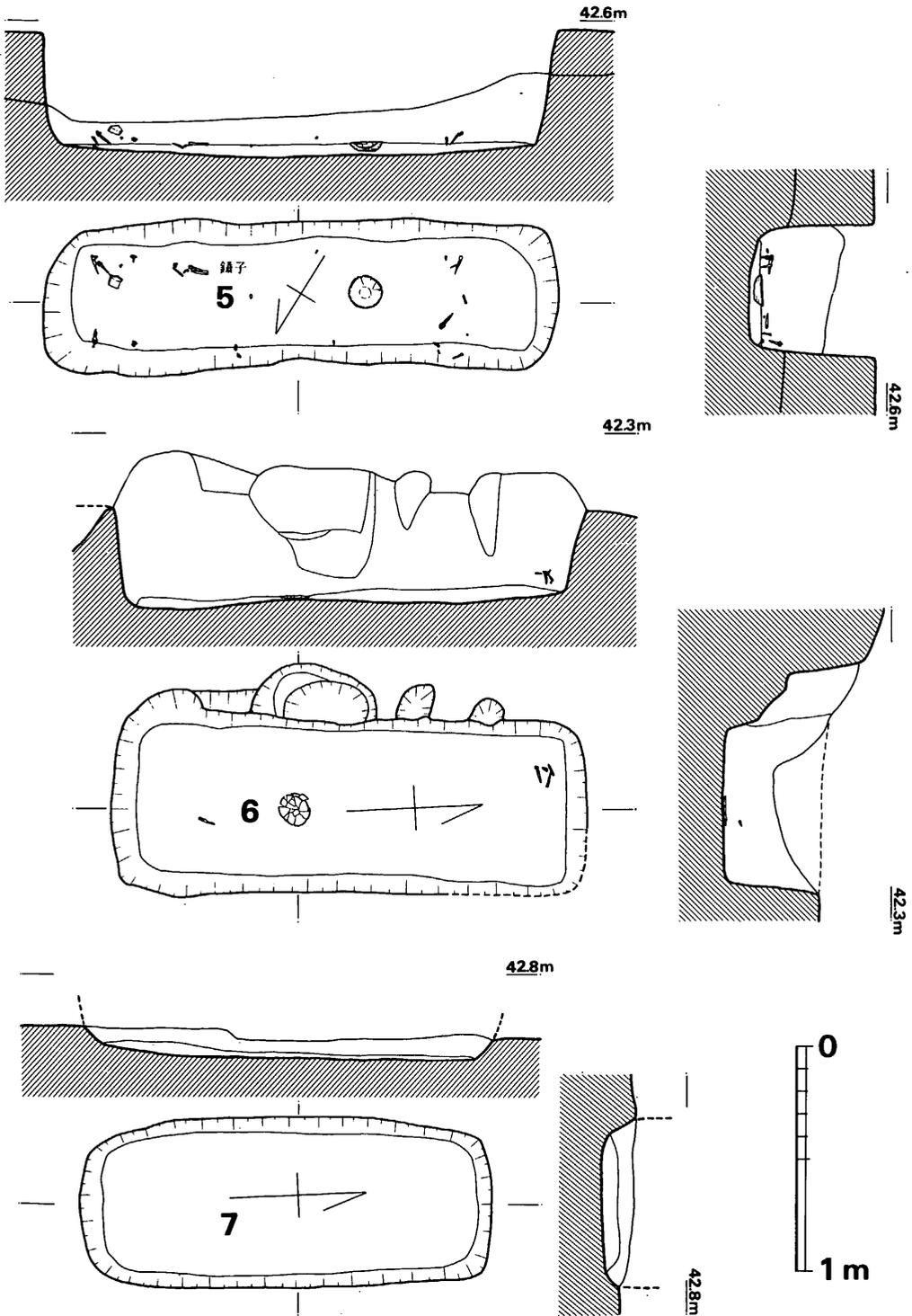


Fig. 91 第5・6・7号木棺墓実測図(縮尺 1/30)

5. 第5号木棺墓 (Fig.91)

前方後円墳前方部西側周溝の北端近くに周溝を切って営まれる。主軸をN56°30'Eにとり、長さ227cm、幅64cm、深さ55cmの土塚の中に釘22本を使用した木棺を埋置する。釘の出土位置から推定して、長さ166cm、幅45cmの大きさの棺身が考えられる。中央付近床面から僅かに浮いて土師器小皿1点が出土し、また東寄り棺内際にあたる部位に鉄製刀子2口、鑷子1点が副葬されていた。更に、東端近くの床面より7cm浮いて須恵器碗 $\frac{1}{4}$ 破片が出土したが、その状況を見ると副葬品とは言い難い。

副葬品

土師器小皿 (Fig.92-2)

口径13.3cm、器高3.8cm、底径7.0cmを測り、全体に薄手で、口縁から体部の内外面は回転ナデ、底部内面はナデつけ、外面はヘラ切りによる。体部外面には横ナデによる凹凸がみられ僅かな不明瞭な稜をなす。胎土に極く少量の砂粒を含み、焼成不良で淡灰褐色を呈する。

須恵器碗 (Fig.92-1)

前述の如く、副葬品とは言い難いが一応ここで述べておく。口径10.9cm、器高3.8cm、高台径7.5cmを測る小型品である。底部と体部の屈曲部はヘラ削りの上をナデ、やや直線的に開く体部～口縁内外面は回転ナデを施す。高台は短かく外へ開く。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成堅緻で淡青灰色を呈する。

刀子 (Fig.93-9)

2口が刃部を向かい合わせて銜着する。閔側の身幅が広く先端に尖る類で2口とも同類であろう。茎部を欠損するので全長は明らかでないが、身長6.1cm、最大身幅1.8cm、棟幅0.35cm、茎幅0.5cmを測る。

鑷子 (Fig.93-10)

断面蒲鉾形の鉄棒を折り曲げ、先端を孰れも耳搔き状に僅かに内湾させた類で、三島格氏分類(註1)の「丙型」(頭部に突起を作らず、また、花形輪状ともならないタイプ)に含まれ、また長さは通常6～8cmであるのに対して長く、氏の最古例とされる臼杵市下山古墳出土例に最も近い類である。長さ11.9cm、幅0.55cm、厚さ0.25cmを測る。時期が明確であり、確実な木棺内副葬品であるという点など、貴重な資料となり得る類であろう。

また、Fig.93-11は小鉄片ではあるが、扁平なものを曲げた状態がみられ、木質等全く付着せず、やはりこれも鑷破片かと考えられる。

註 1 寺師見國・三島格「鑷及びタカラガイ副葬の藏骨器について」<人類学研究Ⅶ-1～2>1960年

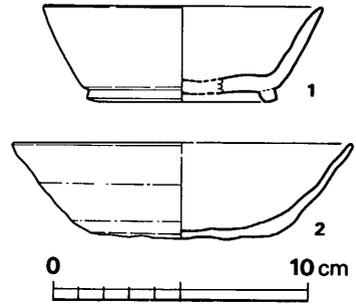


Fig. 92 第5号木棺墓出土
土器実測図(縮尺 $\frac{1}{2}$)

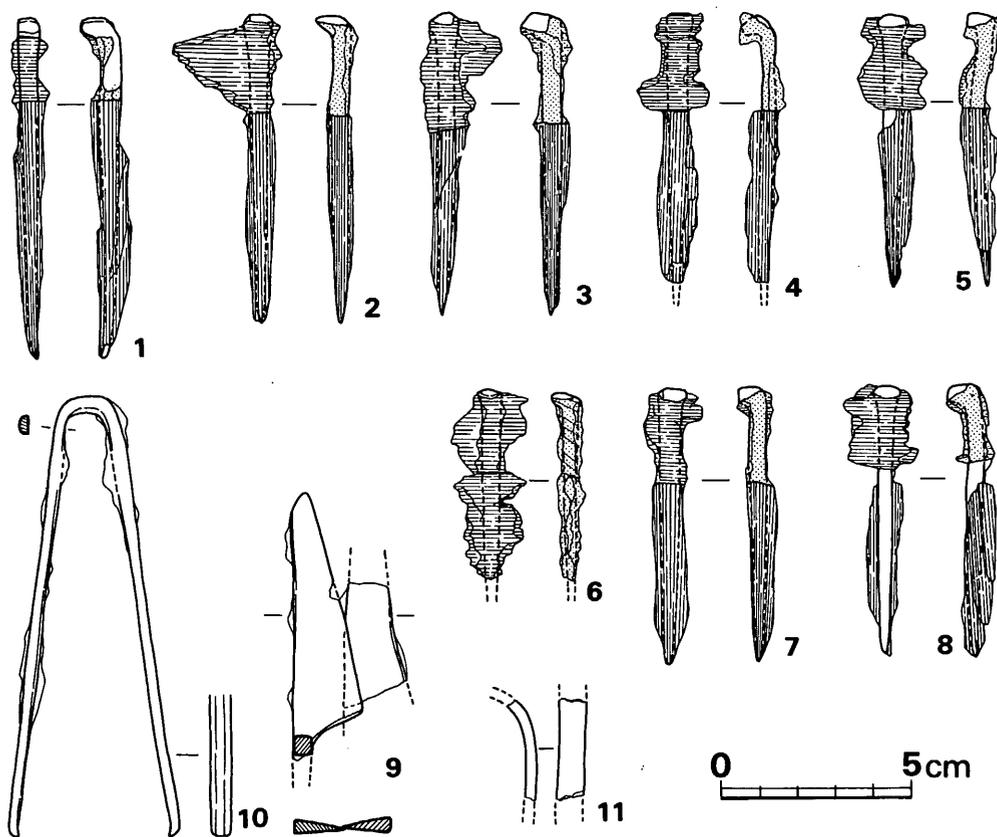


Fig. 93 第5号木棺墓使用釘及び出土鏝・刀子実測図(縮尺 1/2)

Tab. 8 第5号木棺墓使用釘一覧表

(単位 cm)

No.	板組合せ	釘長	板厚さ	使用箇所	備考
1	A	8.9	1.5	(上) 北側板→西小口板	
2	C	3.5+ α	2.5	(蓋板→北側板)(北側板→底板)	下半欠損
3	A	7.1	2.2	(下) 北側板→西小口板	
4	B or C	2.8+ α	?	(下)(底板→西小口板)(底板→北側板) 上半、下半	上半・下半欠損
5	B	3.7+ α	2.0	(下) 底板→西小口板	下半欠損
6	A	7.9	2.6	(下) 南側板→西小口板	
7	A	7.1	2.5	(上) 南側板→西小口板	
8	?	1.8+ α	?	?	頂部のみ
9	?	1.0+ α	?	? (南側板→底板)	先端のみ
10	A	5.6+ α	?	(下) (南側板→底板)	頂部欠損
11	?	3.6+ α	?	(下) (南側板→底板)	下半欠損

No.	板組合せ	釘長	板厚さ	使用箇所	備考
12	A	7.1	1.6	(上) 南側板→東小口板	
13	A	8.0	2.0	(下) 南側板→東小口板	
14	A	$6.1+\alpha$	2.5	(下) 北側板→東小口板	先端欠損
15	C	$4.9+\alpha$	2.6	(下) 北側板→底板	先端欠損
16	C	$6.7+\alpha$?	(下) 北側板→底板	中間欠損
17	C	$4.7+\alpha$?	(下) 北側板→底板	先端欠損
18	C	$3.5+\alpha$?	(下) 北側板→底板	先端欠損
19	?	$2.8+\alpha$?	(下) (北側板→底板)	下半欠損
20	?	$1.5+\alpha$?	?	頂部のみ
21	A	$6.9+\alpha$	2.4	(下) 北側板→東小口板	先端欠損
22	B or C	$3.2+\alpha$	2.2	(下) 底板 →東小口板	下半欠損

6. 第6号木棺墓 (Fig.91)

前方後円墳東側周溝内に第7号木棺墓と前後して並ぶものである。主軸を $N2^{\circ}30'W$ にとり、長さ211cm、幅93~79cm、深さ46cmの土坑内に木棺を納める。使用釘は5本残るのみで他は攪乱等により失なったものであろう。中央部やや南寄りの床面に密着して押し拉がれた様な状態で、土師器、小皿1点が副葬されていた。その状況からみて、棺下に埋置された類であろう。副葬品

小皿 (Fig.94)

底部ヘラ切りで、口径11.5cm、器高3.1cm、底径6.6cmを測り、体部は僅かに内反り気味に開き端部は丸くおさめる。口縁~体部内外面は回転ナデを施す。胎土に粗砂少量含み、焼成やや不良で暗白褐色、一部で黒色を呈する。

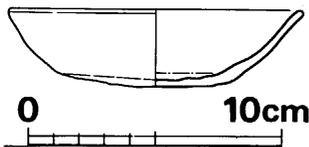


Fig. 94 第6号木棺墓出土
土師器実測図 (縮尺 1/3)

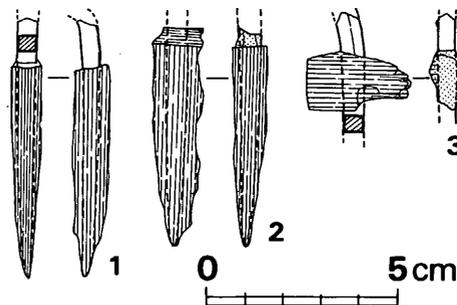


Fig. 95 第6号木棺墓使用釘実測図 (縮尺 1/2)

Tab. 9 第6号木棺墓使用釘一覽表

(単位 cm)

No.	板組合せ	釘長	板厚さ	使用ヶ所	備考
1	A	$5.6+\alpha$?	(下)西側板→北小口板北小口板	上半欠損
2	A	$3.2+\alpha$?	(下)西側板→北小口板	上・下半欠損
3	A	$6.7+\alpha$?	(下)西側板→北小口板	上端欠損
4	A	$5.8+\alpha$?	(下)西側板→北小口板	上半欠損
5	?	$2.5+\alpha$?	(下)西側板→北小口板	下半欠損

7. 第7号木棺墓 (Fig.91)

第6号木棺墓の東南隣に、主軸を全く同じにとって営まれる。長さ181cm、幅68cm、深さ45cmの土塚を掘り、その中に木棺を納める。木棺使用釘は、上半の殆んどを削平してしまった為残らないが、第6号木棺墓との関係から考えて、釘を用いた木棺であったろうことは容易に推定できよう。副葬品は削平の為か全く認められない。

以上述べた各木棺墓の他に先に述べたような位置に、同種墓制の存在が推定されており、そのうち前方後円墳前方部盛土中から出土した釘をここに図示しておきたい (Fig.96)。

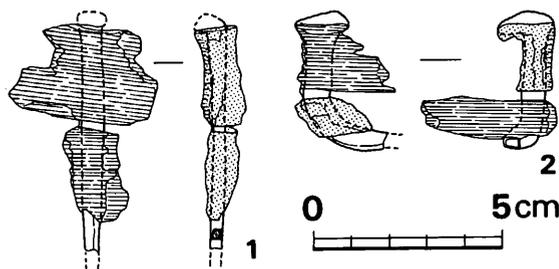


Fig. 96 第1号墳東掘出土釘実測図 (縮尺 1/2)

8. 第1号土坟墓 (Fig.97)

ここでは明らかに木質付着釘の出土しない類の土坟墓状のものをまとめて述べる。第1号土坟墓は、第8号住居跡の東側に、主軸をN1°Wにとって営まれる。長さ206cm、幅62cm、現存深さ27cmの隅丸長方形をなす。土層断面等の観察により、木棺を使用した痕跡は認められず、土坟墓と判定した。北端部近くの西壁際に、土師器小皿4点が、2個ずつ蓋をかぶせた状態で副葬される。

副葬品

土師器小皿 (Fig.98)

1は、口径11.5cm、器高3.5cm、底径6.7cmを測り、底部へラ切りで、体部が全体に外反り

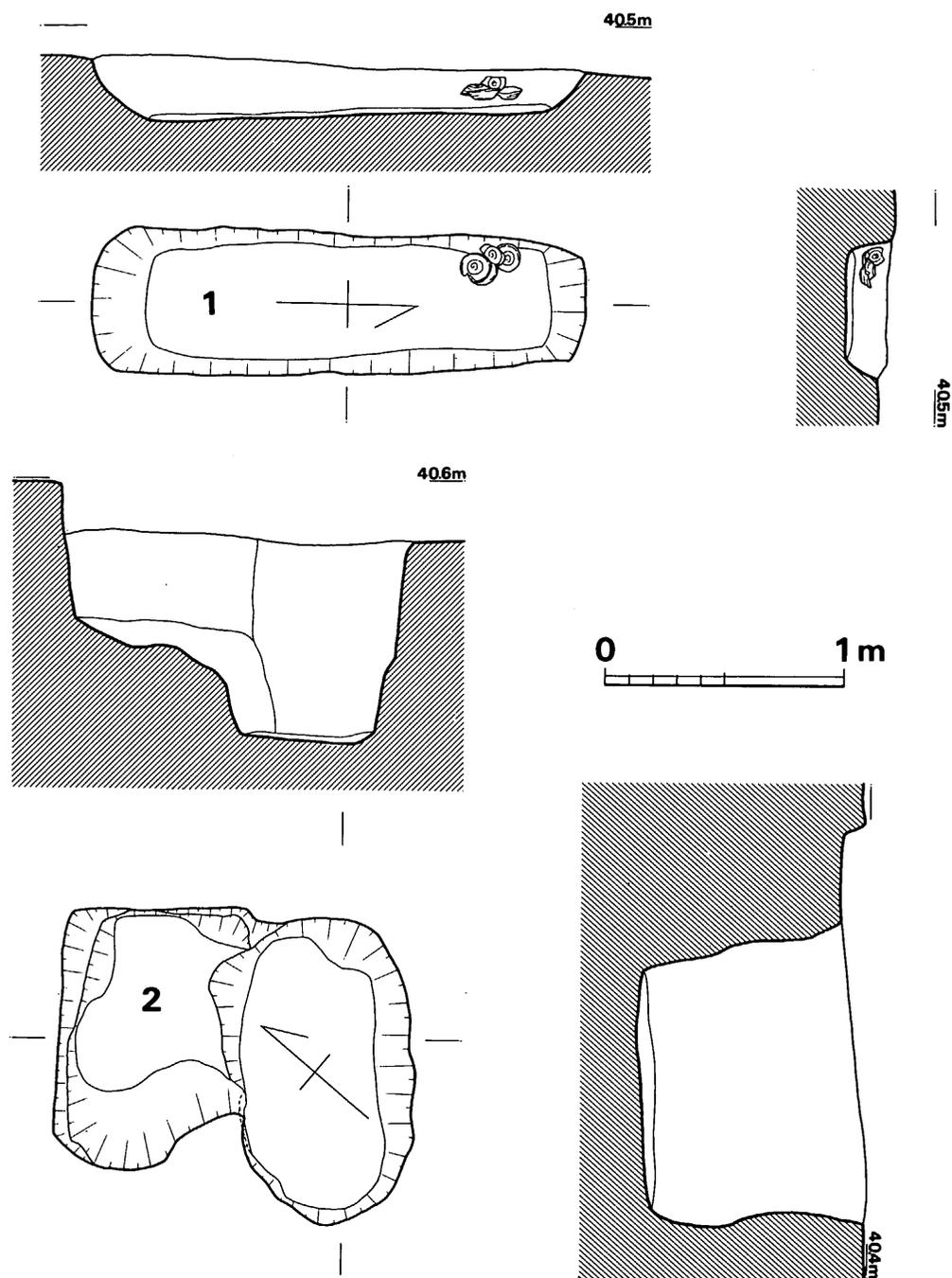


Fig. 97 第1・2号土塚墓実測図 (縮尺 1/30)

2 平安時代木棺墓・土塚墓

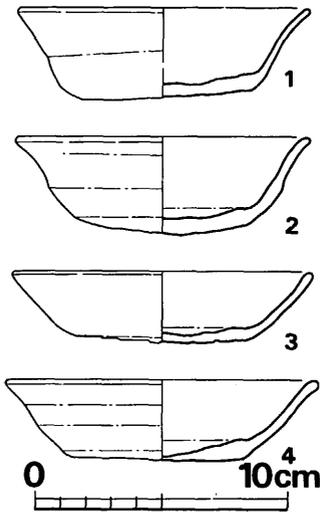


Fig. 98 第1号土塚墓出土
土器実測図(縮尺 1/4)

になる類である。口縁～体部内外面は横ナデ、底部内面には強いナデつけによる凹部がみられ、底外面中央に幅6mmのヘラ起こし様の圧痕がみられる。胎土に僅かに砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈する。2は、口径11.6cm、器高3.8cmを測り、直径6.8cm底部ヘラ切りで、体部上半以上が外反りになり、端部は丸く収める。口縁～体部内外面は横ナデ、底部内面には1方向へのナデつけがみられる。胎土に少量の砂粒を含み、焼成良好で暗黄褐色をなす。3は、口径11.8cm、器高2.8cm、底径6.5cmを測るやや浅めの器形をなす。底部は右廻り方向ヘラ切りで、口縁体部内外面は横ナデ、底部内面中心寄りではナデつけを行なう。他例と異なり、体部～口縁が外反りになる類ではなく、僅かに内反り気味に開き、端部は丸くおさめる。胎土は精良で、焼成良好、外面灰褐色、内面灰黒色を呈する。4は、口径12.4cm、器高3.2cm、底径6.5cmを測り、口縁～体部上端で僅かに外反りとなる。底部はヘラ切りで、幅7mmのスノコ様圧痕がみられる。端部は丸くおさめ、底部中心部は極めて薄くなる。口縁～体部内外面は横ナデ、底内面には1方向へのナデつけがみられる。胎土に僅かに砂粒を含み、焼成良好で淡褐色を呈する。

9. 第2号土塚墓 (Fig. 97)

第8号住居跡の東側、第1号平安時代土塚墓の北隣に位置する。長さ1.3m、幅0.77m、深さ1.1mの長楕円形プランの土塚と、長さ1.1m、幅0.7m、深さ0.7mの不整形土塚とが一緒になって、後者が前者の段部をなす様な形態をなす。両者に切合い関係は無い。出土遺物には古墳期以降に比定され得る須恵質土器小片のみがみられる。この土塚の覆土と第1号土塚墓の覆土とがやや柔かい黄茶褐色土で同一であり、略同じような時代の所産ではなかろうかと推定して、墓である決め手は無いのであるが、一応この土塚墓の項に入れて説明を加えた。

10. 第3号土塚墓 (Fig. 99)

第8号住居跡の西方に、第6号袋状堅穴を切って営まれる。上面を殆んど削平されるが、全体的に平面形をみてみると、2段掘りの木棺墓状の形態に看做されよう。全体に炭化物と灰とが散布し、北西端寄りの中央付近からは人骨と考えられる骨粉状のものが認められた。長さ155cm、幅50cmの木棺様の中央部長方形土塚が認められ、木棺を置き、茶毘に付した跡であろうかと考えられる。

V 歴史時代の遺構と遺物

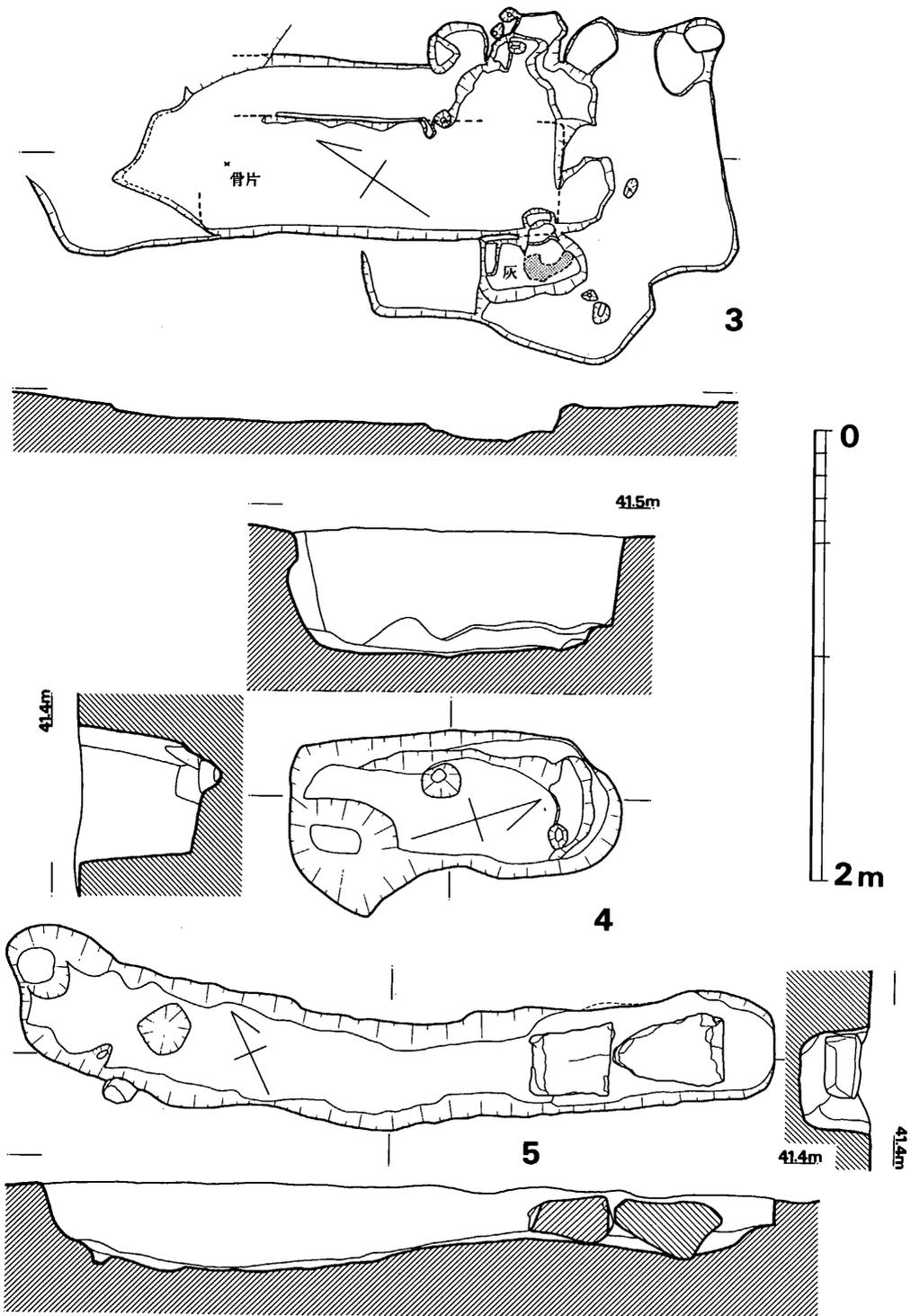


Fig. 99 第3・4・5号土塚墓実測図 (縮尺 1/30)

2 平安時代木棺墓・土塚墓

1.1. 第4号土塚墓 Fig. 99

3号墳の北西側，第2号火葬墓の東隣に位置する。主軸をN18°Eにとり，不整楕円形のプランをなす。〔長さ145cm，幅60cm，深さ55cmを測り，南端にやや深いピット，中央西側と北端に各々小ピットがみられる。明確に墓といえる確証は無いが，その形態より，一応土塚墓の項に入れて説明を加えた類である。〕

1.2. 第5号土塚墓 (Fig. 99)

前述の第4号土塚墓の東隣，第2号円形周溝の西隣に位置する。一見弧状となり溝かと思うが，両端で完結しており，確証は無いが一応土塚墓の項に入れて記録に残すこととする。長さ3.3m，幅4.5～5.5m，深さ0.39mを測り，東南端に2個の花崗岩を直列させている。床面は西北へ深くなり，一定ではない。出土遺物等全くなく，年代や性格等全く判断に苦しむ類である。(中間研志)

1.3. 剣塚遺跡出土木棺材の樹種について

九州大学農学部

教授 松本 勲

〃

助手 林 弘也

I 資料リスト

資料名	資料数
・第一号木棺墓出土鉄釘付着木材	2
・第二号木棺墓出土鉄釘付着木材	2
・第三号木棺墓出土鉄釘付着木材	2
・第四号木棺墓出土鉄釘付着木材	2
・第五号木棺墓出土鉄釘付着木材	3
・第六号木棺墓出土鉄釘付着木材	2

II 資料外観

資料はいずれも金属製の四辺形断面をもつ釘に木棺材が付着したものである。資料の色は金属の錆びた赤茶色乃至黒褐色を呈している。

付着木材片は脆く，指先で容易に割れる程度である。

木材片を顕微鏡で見ると，表面に露出された細胞は細胞内腔に金属の錆或いは細胞の破片が充填している例が多い。内部にある細胞は，内腔が中空である例がほとんどあるが，内腔に灰色をした充填物を含む細胞が認められた。

細胞壁の表面は多数の割れを生じていることが多い。

III 木棺材の観察

各資料から小破片を採取し，金属顕微鏡を用いて木棺材を観察した。

V 歴史時代の遺構と遺物

観察の結果全資料とも同じ組織構造をもっており、同一の樹種である。これらの観察結果をまとめて次に記す。

a 横断面——細胞は放射方向に配列し接線方向の幅は同一列内ではほぼ揃っている。細胞の接線壁の厚さは年輪内では比較的揃っているが、年輪界近くの数細胞列では壁厚さが急激に増加し晩材を形成する。道管、垂直樹脂道は存在しない。

b 半径面——有縁壁孔をもつ仮道管や軸方向柔細胞、放射組織が認められた。仮道管の有縁壁孔は大部分の細胞が単列であるが、2列に配列した細胞もある。軸方向柔細胞は晩材部および晩材に近い材部にある。これは細胞の形状、端壁、壁孔などによって判定した。

放射組織は横臥状の柔細胞からなっており放射仮道管はない。分野壁孔は小さな円型状をしており、1分野に1～4個分布するが、大部分の分野は2～3個である。しかし、ヒノキ型あるいはスギ型といった詳細な組織は判定できなかった。放射柔細胞は水平壁が厚く、壁孔が認められた。端壁は薄く肥厚は認められなかった。

C 接線面——放射組織は単列であり、その細胞数は15細胞以下であるが、大多数の放射組織は5～10細胞である。水平樹脂道は認められなかった。

IV 樹種について

上述した組織観察の結果に基づき、次の諸点に注目して判定した。

- 1 垂直および水平樹脂道がない。
- 2 仮道管にはらせん肥厚はない。
- 3 放射組織は放射仮道管をもたない。
- 4 結晶を含む柔細胞はない。
- 5 軸方向柔細胞がある。
- 6 放射柔細胞の形態。
- 7 仮道管の形態。

これらの点を比較検討して、本資料の木材はヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.) に属すると判定した。

ヒノキ属には

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa*

サワラ *Chamaecyparis pisifera*

などの有用樹種が含まれているが、資料の劣化が著しく、微細な組織構造の観察が不可能なため判定できなかった。

V 同定結果

本資料(6種 13点)は全て同一樹種であり、ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.) に属する樹木であると思われる。

(なお、資料に用いた分は、P L. 59—6に掲載した。)

14. 第4号木棺墓出土土器について

土師器杯 (Fig.89—1)

口径11.6cm～11.2cmの長円形で、高さは2.5～2.2cmを測る杯形品である。体部はほぼ直線的にのび、器肉は薄く、中位では0.2cmで、ヨコナデの痕跡がみとめられる。底部は不規則な凹凸を残す粗い調整で、外底に板目痕(巾0.4～0.5cm)がある。体部との境界は面取り状のヨコナデによって明らかである。胎土に石英粒を含み、焼成は軟質で黄褐色を呈する。

この杯の法量および形態は、大宰府第35次調査(政庁東側の月山南地区) SK 678出土品と類似している。

土師器杯 (Fig.89—2)

黄褐色の軟質の土師器であり、復元口径12.0cm、器高4.5cmをはかる。ほぼ直線的にのびる体部は、中位でやや強くおさえられて、凹部をつくる。高さ0.7cmの付高台は、やや内湾気味であり、外底部に幅1.3cm前後の板状圧痕をのこしている。内外面ともヨコナデ調整がされているが、焼成が悪く器面の剝落している部分が多い。胎土は黄白色の細土がつかわれているが、杯と同様に石英粒が混在している。この碗もまた前述のSK 678出土品に近い法量と形態であり、大宰府の土師器編年では9世紀後半に位置づけている。

白磁碗 (Fig.89—3)

ほぼ中央で半裁された小形の白磁碗である。わずかに内湾させてのびる体部は、口縁部で折り返して小形の玉縁につくる。底部は幅広の低い高台の形式で、いわゆる蛇の目につくるが、その削り出しはこの種の碗に共通するあらい手法である。素地は白色の精製土であるが、土中でやや黄色になっている。純白色の釉は厚さ0.5mmで内外面にかけられるが、腰以下の外底部は露胎のままである。土中のため釉も淡黄色に変化している部分がみられる。

この種の白磁碗はすでに論じたことがあるので再説はさけるが(亀井明德「平安期輸入陶磁器の名称と実態」考古学雑誌61—1 1975年)、現在わが国の約20遺跡から発見されている。その多くは越州窯青磁と共伴することであり、9世紀から11世紀の間に輸入されているが、年代の明らかな例をとると9世紀後半から10世紀後半が多い。この剣塚第4号木棺墓の場合も、共伴する土師器の形式からみて、9世紀中葉から後半の年代が与えられる。生産窯については判然としないが、広東を中心とする江南地方窯が想定される。(亀井明德)

V 歴史時代の遺構と遺物

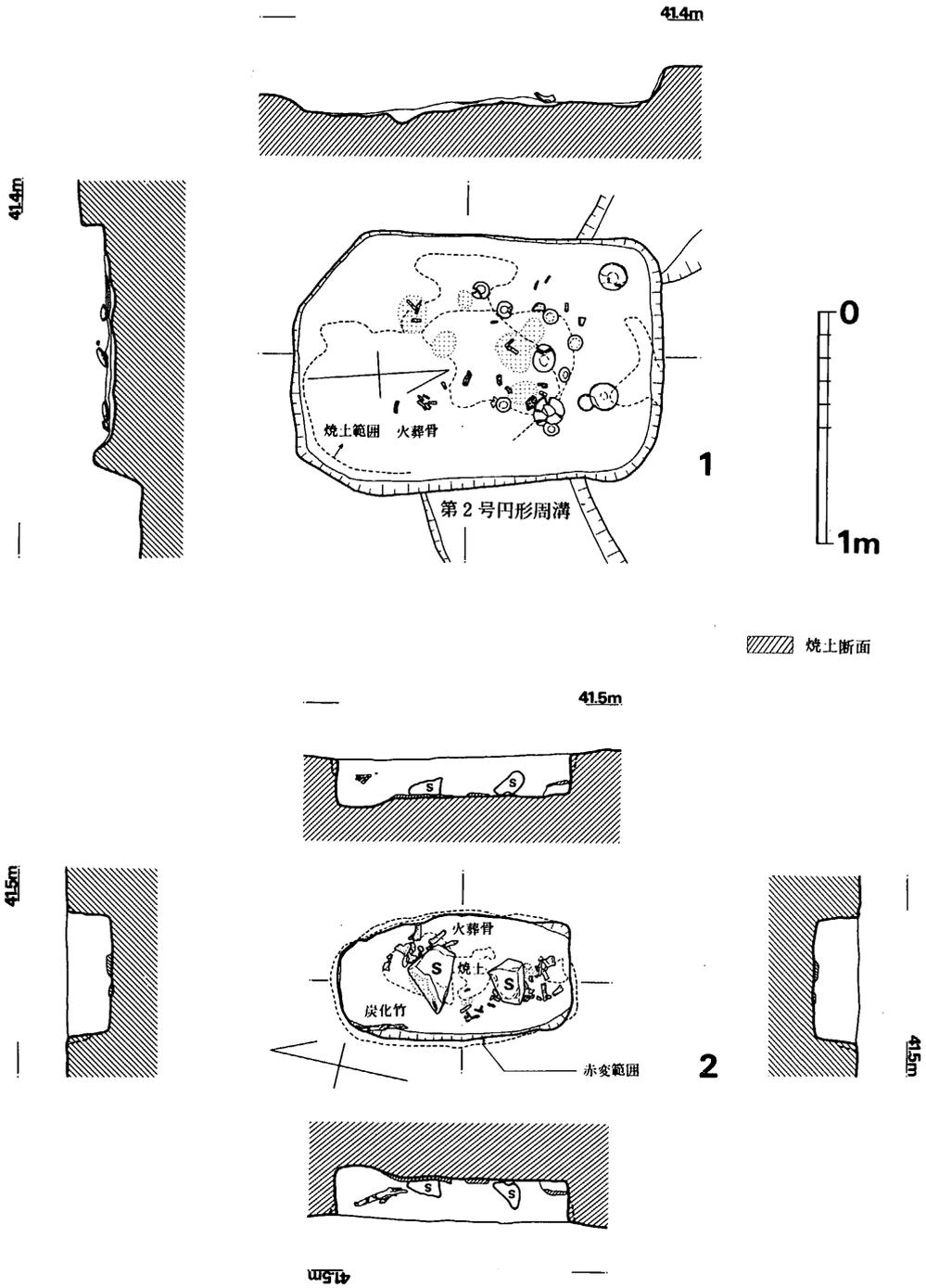


Fig. 100 第1・2号火葬墓実測図(縮尺 1/30)

V-3 火葬墓・円形周溝（墓）・不明土坑群

1. 第1号火葬墓 (Fig.100)

第1号円形周溝墓の南側周溝部を切って営なまれる。主軸をN4°30'Eにとり、長さ158cm、幅110cmを測る略長方形をなす。床面が真赤に焼け、焼土の上に炭化物層が各所にみられ、骨片、骨粉等が散乱する。土師器皿4点と、特小皿9点が火を受けて赤変して北半に散乱する。

副葬品

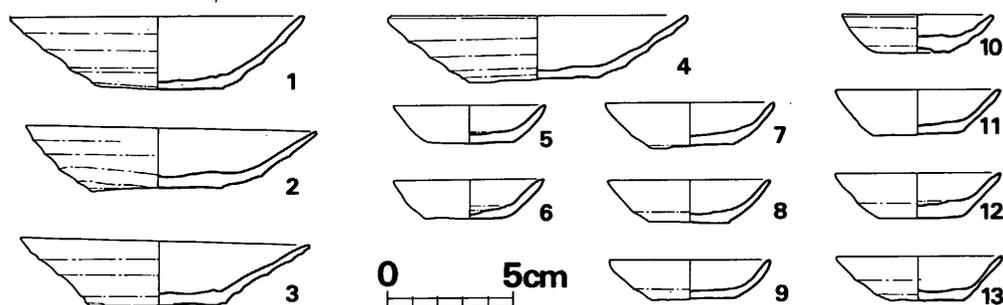


Fig. 101 第1号火葬墓出土土器実測図（縮尺 1/3）

土師器杯 (Fig.101-1~4)

1は、口径11.6cm、器高2.9cm、底径5.1cmを測り、体部は僅かに内反り気味に開き、底部は糸切り離しを行なう。口縁～体部内面は横ナデ、外面は強いナデで3～4本の稜をつくり、全体に薄手の器壁につくる。内面は二次焼成を受けて赤変する。胎土に粗砂僅かに含む。全体に幾らか歪む。2は、口径11.5cm、器高2.6cm、底径5.1cmを測る。内外面強いナデで外面に稜4本をつくり、底部はヘラ切りである。全体に薄手で、かなり歪み、外面は二次焼成を受けて赤黄褐色変する。胎土精良であるが僅かに粗砂を含み、焼成不良で軟質、内面黄褐色を呈する。3は、口径11.4cm、器高2.7cm、底径5.3cmを測り、全体に薄手で、作りの技法は前2者と全く同一である。外面の一部と内面は二次焼成を受けて赤黄変する。胎土精良であるが、粗砂少量を認める。一次焼成は不良で軟質である。全体に著しく歪み、上からみると楕円形気味をなす。4は、口径11.8cm、器高2.5cm、底径5.2cmを測る。作りは全く他列と同種である。二次焼成を受け一部が赤変する。胎土に粗砂粒を僅かに含む、焼成良く淡黄褐色をなす。

特小皿 (Fig. 101-5~13)

底部糸切り離しの、口径6.5~5.9cm、器高1.8~1.5cm、底径3.5~2.9cmを測る類で、いずれも内外面に二次焼成を受けて、一部或いは全体に赤~黄白変する。体部外面と内面は一気にナデて、作り上げる。胎土は精良で、焼成軟質である。

2. 第2号火葬墓 (Fig. 100)

第4号土塚墓の西側に位置し、長さ105cm、幅59cm、深さ20cmの隅丸長方形気味のプランをなす。周壁が真赤に焼け、床面に2個の塊石を据えている。小骨片や骨粉が散乱し、焼土層が床面にみられ、壁際や各所に炭化した細身の竹がみられる。これらの状況を観察した結果、両石の上に棺を置き、竹を燃料として茶毘に付したものと推定されよう。副葬品等は全く見られない。

3. 第1号円形周溝墓 (Fig. 102)

3号墳の北側に3号墳排水溝を切って占地する。周溝部南側を第1号火葬墓に切られる。径3.85~3.5m、幅0.6m前後、深さ15~25cmの周溝を廻らし、北側から周溝と中央の土塚部とが継がる。中央の土塚部は径75cmの不整円形をなし、その中に少量の骨粉と炭化物や灰等が検出された。しかし、土塚壁や床面は焼けた様子はみられない。少なくともこの土塚内で茶毘に付したのではなく、焼骨を灰、炭等と一緒に運んできて、再埋葬したものと考えられる。副葬品等は全くみられない。

4. 第2号円形周溝(墓) (Fig. 102)

第1号円形周溝墓の南隣に、3号墳周溝及びその排水溝を切って営まれる。長径3.75m、短径3.2m、幅0.4~0.25m、深さ0.45~0.15mの楕円形溝を廻らす。精査したが、周溝内には何らの施設も検出されず、全く意味不明の遺構となった。周溝中からも遺物全く見出されず、時期も3号墳より新しいというに留まる。ただ、第1号円形周溝墓の如く、中央に土塚をつくり、後世の削平により失なわれたと考えると、「墓」であった可能性も棄てることはできない。近年北部九州において、このような意味不明の遺構が各所で発見されつつあるが、時期も弥生時代のものから在り、その性格を決定づける類ではない。今後の明確な類例の増加を待ちたい。

5. 不明土塚群

前方後円墳と3号墳の間の住居跡群の周辺に約20個の不整形の土塚が散在する。これらのうち殆んどは時期・性格等も全く明らかでない類である。弥生式土器・石器等を出土するもの

3 火葬墓・円形周溝（墓）・不明土坑群

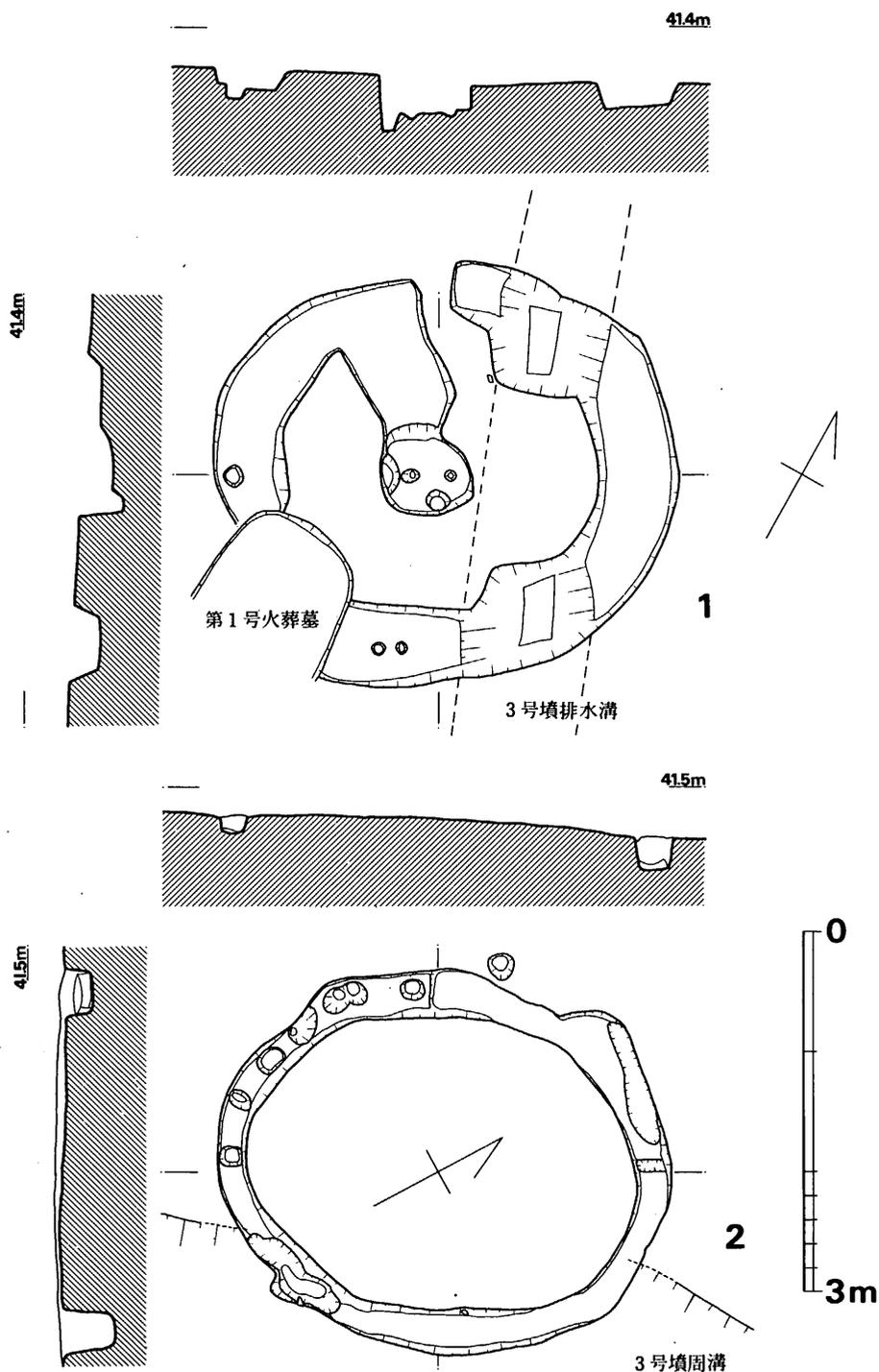


Fig. 102 第1・2号円形周溝（墓）実測図（縮尺 1/60）

に関しては、下巻々末近くに記述した。ここでは、歴史時代の出土遺物に関して述べたい。

石 帯 (Fig. 103-1)

この後で述べる不明青銅製品と同じく、第6号住居跡の南側の第8号土坑出土のものである。完形品で、灰黒色を呈し硬質の頁岩質で、やや明瞭な原材の縞がみえる。4.1×4.0cmの方形をなす「巡方」の類である。重量23.4gを量り、表・側面は丁寧に研磨し、裏面と側面との稜を削り、僅かな面取りをなす。裏面には四隅に孔を穿ち、各々、通有の如く2孔ずつがトンネル状に連結貫通したものである。裏面の四隅付近のみ粗く研磨し、中央寄りの殆んどは凹状となり研磨を施さない。表面はやや凸面状をなす。

九州地方に於いては、その分布状況を見ると、圧倒的に太宰府史跡を中心としてその近隣遺跡出土例が集中しており、次に国府関係、更に集落からの出土例が散見される。近年調査が進行しつつある太宰府史跡関係の例を除くと、太宰府近隣出土例が4遺跡5例、その他が佐賀県を含めて5遺跡7例である。我剣塚遺跡例は太宰府との関係も直接的な位置の出土例であり、太宰府官人の生活・葬礼等との関係の深い遺跡であることを物語るものであろう。

青銅製品 (Fig. 103-2)

前記の石帯と同じ浅く不整形な第8号土坑出土のもので、縁辺が円弧状となり、縁は幅0.9cmがやや蒲鉾状に肥厚し、内側は厚さ1.5~1.0mmで平坦となる。縁辺に薄くなりやや鋭くなる。現存重量は8.8gで、鏡の可能性も残り、鏡とすれば、六花系の湖州鏡式系の類になるものかとも推定される。

鉄製鎌 (Fig. 103-3)

第3号土坑墓出土品であるが出土位置は明確でない。内湾する類で、内側に刃をつくる。幅3.1cm、棟厚さ0.3cmを測り、外面に細かい目の布が5枚重なって錆着する。この布は鎌を包んだものではなく、布にくるまれていた他個体が接着していたものであろうと考えられる。

(中間研志)

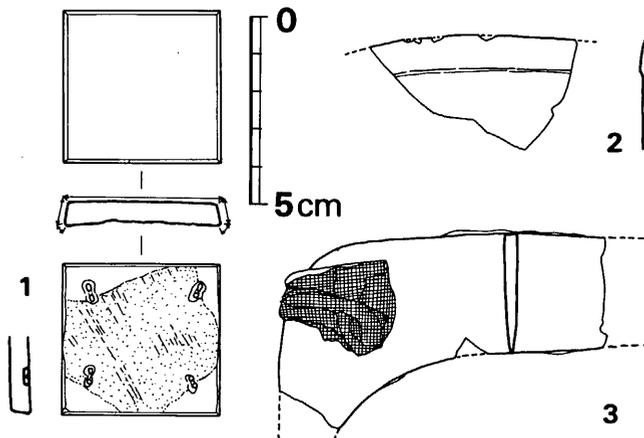


Fig. 103 第6・8号土坑出土鉄器・青銅製品・石帯実測図 (縮尺 1/2)

V-4 竖穴式小石室

地山を穿った長方形の墓坛底に営なまれた小石室である。墓坛は巾1.2m（上端値），長さ1.8m強で，南西側短辺で深さ約0.5mとみられる。基部に大きめの石を腰石風に立て，この上に現存2段が積み上げられ，現存高は40cm強。床面長は95cmで，巾は北東側67cmに対して南西側は50cmと狭まくなっている。床面には礫を敷く。（石山 勲）

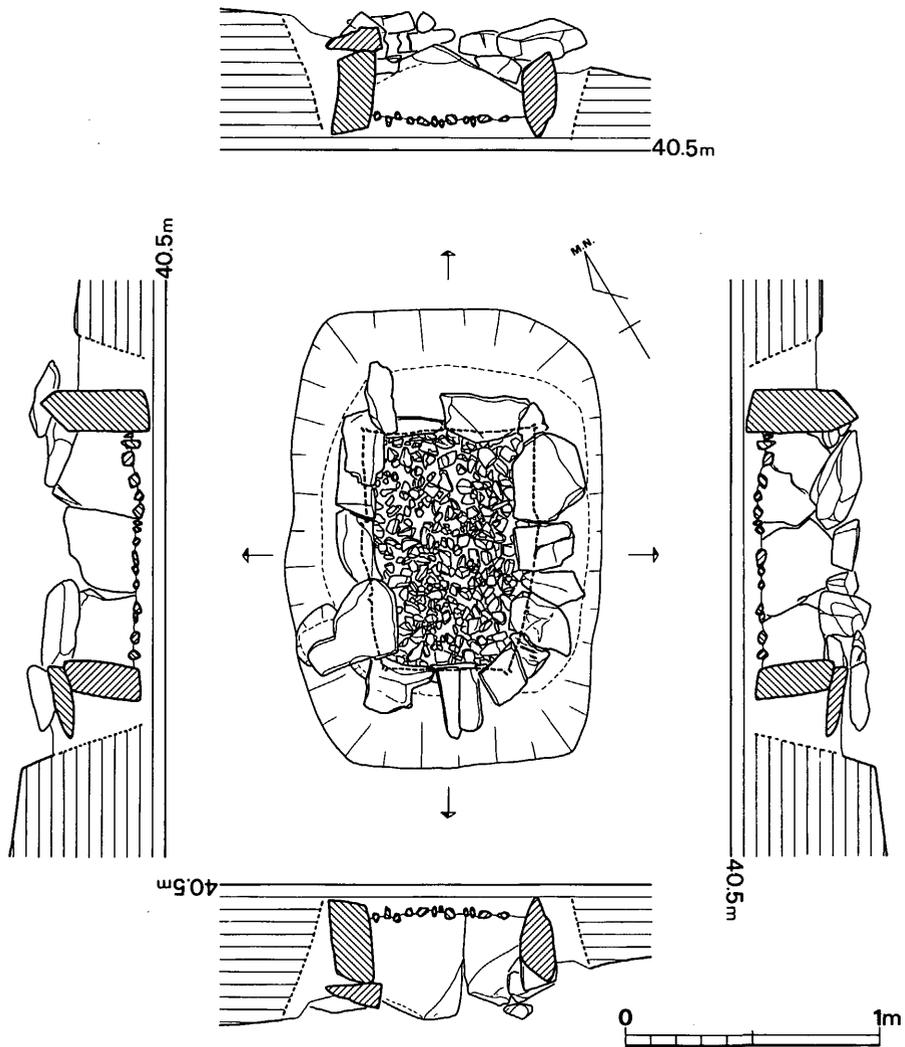


Fig. 104 第1号竖穴式小石室（縮尺 $\frac{1}{30}$ ）

V-5 表採の歴史時代遺物

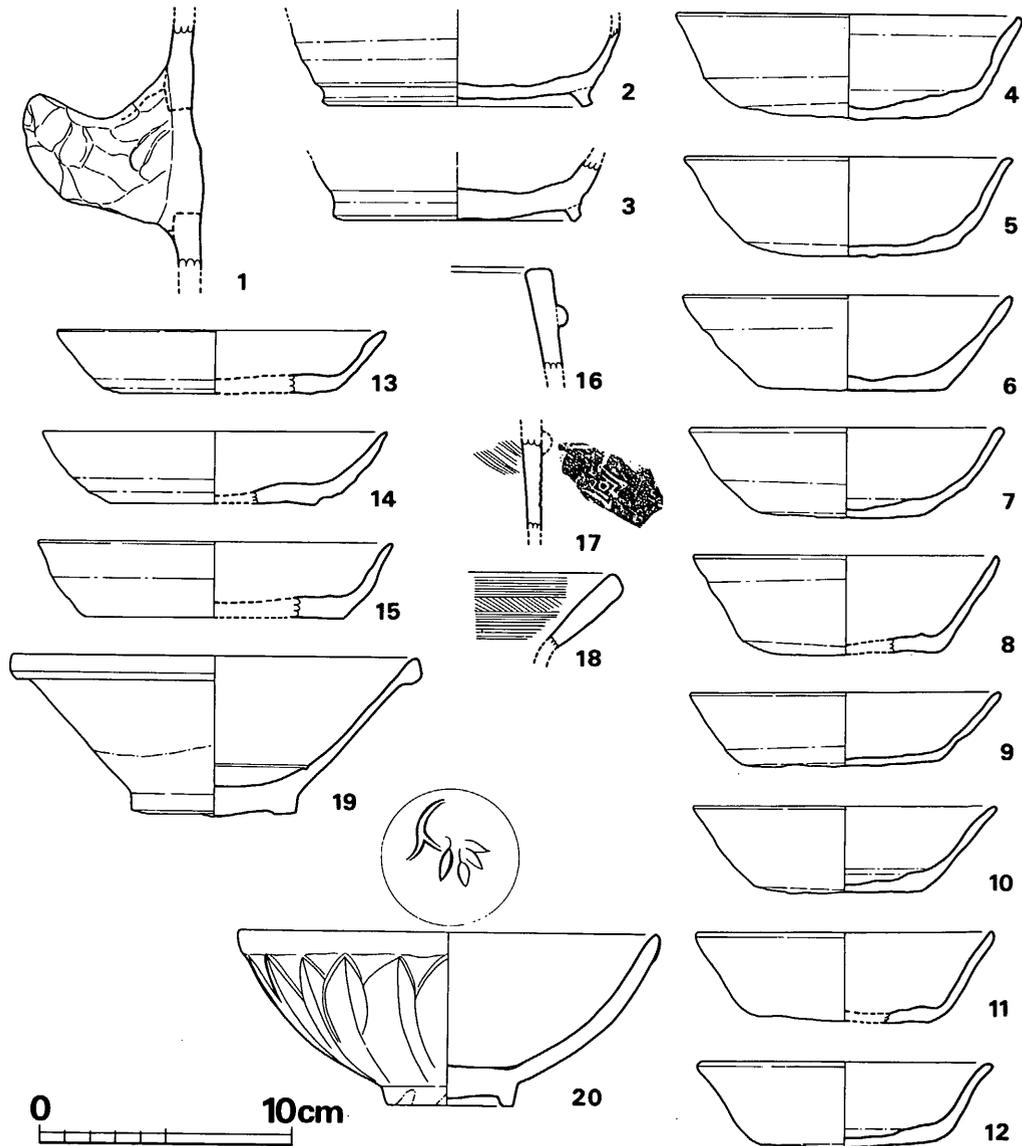


Fig. 105 表土・1号墳盛土・周湟出土土師器・火舎・土鍋・青磁・白磁実測図(縮尺 1/3)

5 表採の歴史時代遺物

以上述べてきた、各遺構に伴なうと考えられる遺物に対して、表面採集・耕作土中・1号墳盛土中・1号墳周溝等から得られた歴史時代の遺物を記録しておきたい。またこの中には、遺物整理終了までの間に何らかの理由により出土位置等が判からなくなった（不明）のものも含まれる。

把手部 (Fig. 105-1)

表採品で、太い把手を器壁に「ヘソ挿入法」により接合する類で、古墳時代に含まれる可能性も強い。把手部外面には全面に指オサエ痕著しい。胎土に粗砂かなり含み、焼成良好で茶褐色を呈する。

土師器椀 (Fig. 105-2・3)

2は、所謂出土地不明品で、短かい高台を付ける類である。高台径10.6cmを測り、高台は外開きとなり、内端のみで接地し、外端はやや張り出す。体部内外面及び高台内外面は横ナデ調整による。胎土精良で、焼きは良く茶褐色を呈する。3も、不明品で短かい高台を付ける類で、高台径9.2cmを測る。内面は一方向へのナデつけが行なわれ、体部下端から高台内外面は横ナデ調整を施す。胎土に僅かに砂粒を含み、焼きは良く淡黄褐色を呈する。

土師器小皿 (Fig. 105-4~12)

いずれも底部ヘラ切りで、口径13.8~11.6cm、器高4.1~2.9cm、底径9.4~6.5cmを測り、孰れも口縁~体部内外面に横ナデ調整を行なう。4は不明品で、内面口縁下にナデによる稜をつくり、体部外面途中で内へ屈折して僅かに外反り様に開く。胎土に粗い砂粒を幾らか含み、焼きは良く茶褐色をなす。5は、3号墳周溝北側第2層出土品で内湾気味に開き、口縁端部で短かく外反する類で、底部にスノコ痕を残す。胎土に砂粒少量含み、淡黄褐色をなす。6は、3号墳周溝上層出土品で口縁下外面にナデによる稜(段)をつくり、直線気味に開く類である。胎土精良で焼きも良く、赤茶色を呈する。7は、1号墳南周溝第2層出土品で体部途中で内へ屈折して全体として内湾気味に開く類で、底部に1cm幅のスノコ状圧痕が残る。胎土に僅かに砂粒を含み、焼成良好で淡白褐色を呈する。8は、不明品で、体部下半で僅かに外反り様にみせる類で、胎土に少量の砂粒を含み、焼きは良く淡褐色をなす。9は、1号墳南側周溝出土品で全体に薄手で、器高浅く、胎土精良で、焼成良好淡白褐色を呈する。10は、不明品で体部上半で僅かに外反する様相をみせるもので、胎土精良で僅かに砂粒を含み、暗灰褐色を呈する。11は、不明品で、直線的に開く類で、胎土に少量細砂粒含み、焼きは良く淡褐色を呈する。12は、不明品で、体部から外反する類で、胎土に僅かな砂粒を含み、淡褐色を呈する。

土師器杯 (Fig. 105-13~15)

口径14.0~11.5cm、器高3.0~2.5cm、底径10.2~7.5cmを測る底部糸切り離しの類である。13は、1号墳くびれ部盛土中出土品で、口縁~体部内外面横ナデを施し、胎土に僅かに砂粒を含み、焼きは良く淡茶褐色を呈する。14は、13と同じ出土品で、口縁~体部内外面横ナデを行

なう。胎土に粗砂少量含み、淡茶褐色を呈する。**15**も**13**と同じ出土品で、口縁～体部内外面横ナデを行なう。胎土に砂粒僅かに含み、淡白褐色を呈する。

火 舎 (Fig. 105—16・17)

16は、1号墳南側周濠内出土品で、内傾気味になる口縁外面に断面半円形凸帯を巡らす。口縁内上端と外面は横ナデ、内面は右下がり斜めナデを施す。胎土精良で外面黒色、胎は灰白色瓦質を呈する。**17**は、1号墳々丘内出土品で、口縁下外面に凸帯を巡らしその下に印文を押す類である。破片上端に凸帯の剥げた跡がみられ、印文は3重の菱形をなす。内面には右下がり斜めのハケ状痕がみられ、胎土精良で、焼成瓦質、内外面灰色を呈する。

土 鍋 (Fig. 105—18)

1号墳南濠出土品で、口縁が屈折して外反し、胴～底部に丸く鉄青状になる類であろう。内面には横ハケが施され、外面には煤付着する。胎土に少量の粗砂を含み、焼成やや軟質で内面灰色を呈する。

白磁碗 (Fig. 105—19)

口縁外面を肥厚させ、所謂玉縁状につくる類で、1号墳盛土中出土品である。口径16.0cm、器高6.3cm、削り出しの高台径6.5cmを測る。内面体部下半に沈圈を巡らし、内面と外面上半にややヨゴれた乳褐色の釉をかける。胎は密で乳白色を呈する。

青磁碗 (Fig. 105—20)

1号墳前方形部盛土中より出土したもので、外面に鑄ぎ蓮弁を施し、見込みに草花文をつくる類である。口径16.4cm、器高6.9cm、削り出しのやや低い高台径5.0cmを測る。口縁外面に釉溜りがみられ、高台外面の4ヶ所、高台内面の殆んどを除き、他全面に淡青色釉をかける。胎は密で白色を呈する。

瓦質土器 (Fig. 106—1)

線香立て状の器形の瓦質の土器で近世以降の所産と考える。口縁直下から内面までは横ナデを施し、胴外面に細かい凸点が打たれ、下半には型押し of 山水様の文様が付される。台部に4個の穿孔を行ない、下端部外面には目の細かい布目圧痕がみられる。胎土に砂粒極少量含み、焼成やや軟質で胎は暗茶色を呈し、外面は黒色で瓦質となる。

陶 器 (Fig. 106—2・3)

2は、内面から外面に黄灰色釉をかける碗形陶器で、出土地不明の類である。高台内外面から底外面は露胎で、胎は黄白色を呈する。**3**は、内外面ともに淡黄褐色の薄い釉をかけ、全面に細かい貫入がみられる。底外面は静止糸切りで露胎となる。胎は黄白色をなし、焼きは陶質である。

(中間研志)

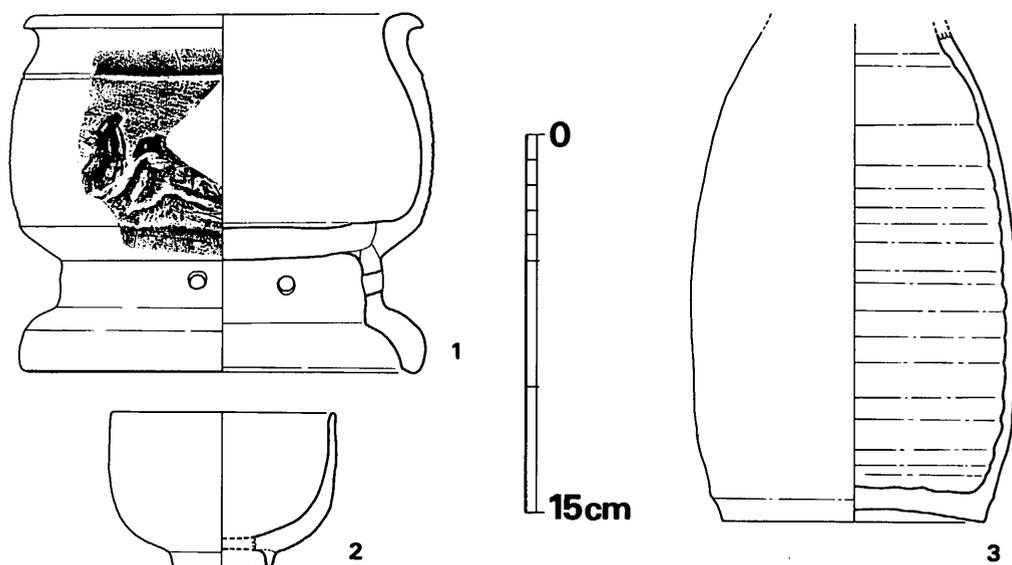


Fig. 106 表土中出土近世陶器実測図（縮尺 1/3）

V—6 小 結

1. 木棺墓副葬土師器

本遺跡では7基の釘使用木棺墓が検出されたが、それらの年代等は副葬土師器類によって推定される。太宰府町御笠川南条坊遺跡において分類・編年されている（註1）方法に従って、法量分布状況を示した（Fig. 107）。底部へラ切り離しの土師器（表採品も含む）を総て点に落してある。これによると、即ち口径と器高との相関によって大きく3群に分類できる。更に口径と底径との相関によって中位のものが2類に細分され、計4類に分けられる。前川氏の分類呼称に従ってI-1A類以前、I-1A類、I-1B類、I-1Bの新しい類、とする。

I-1A類以前

口径13.6~12.8cm, 器高4.1~3.8cm, 底径8.3~7.0cmを測る類で、第5号木棺墓副葬品1点と、他3点を含む。この種は大宰府史跡第43次調査（観世音寺僧坊推定地）SK1084（註2）出土杯の法量に最も近い類で、同報告中では奈良時代後半（8世紀後半）に位置づけている。

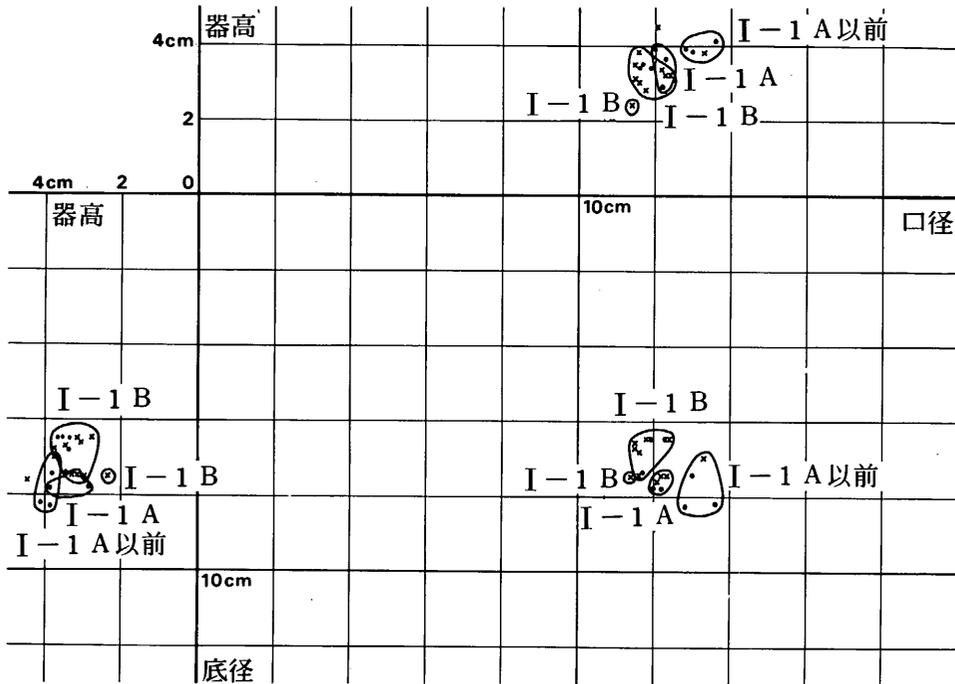


Fig. 107 木棺墓・土塚墓・表土中出土土師器の法量

I-1 A 類

口径12.3~12.0cm, 器高3.9~2.9cm, 底径7.5~7.8cmを測る類で, 第2号木棺墓副葬の2点と, その他2点を含む。これは次のI-1 B類と, 口径↔器高の相関ではグループとしては, やや大きめの類程度の差しか無いが, 口径↔底径の相関において明確に底径が大きくなり, グループを分けるものである。

I-1 B 類

口径12.4~11.5cm, 器高3.8~2.8cm, 底径7.5~6.5cmを測る類で, 第1号土塚墓副葬の4点, 第3号木棺墓副葬の1点, 第6号木棺墓副葬の1点, 及びその他の4点を含む。

I-1 Bの新しい類

口径11.4cm, 器高2.4cm, 底径7.5cmを測る類である。第4号木棺墓副葬の1点のみであるが, I-2A類には入れ難く, I-1B類のうちでも器高が低くなるものである。

以上の分類に対する推定年代として前川氏によって与えられるものは, 下記の如くである。

6 小 結

- I-1 A 以前の類——8世紀後半——第5号木棺墓—鍬子・刀子
 I-1 A 類——8世紀～9世紀初頭—第2号木棺墓—黒色土器針・灰釉長頸壺
 I-1 B 類——9世紀～9世紀中頃—
 第3・6号木棺墓ノ第1号土坑墓
 第4号木棺墓—白磁碗
 I-2 A 類——9世紀～10世紀初頭

これによって共伴遺物との関連をみてみよう。まず、鍬子は奈良時代後半の時期の限られる年代の例を増加させたものとして貴重であろう。I-1 A 類に位置づけられる灰釉長頸壺は、胴部が球形に近く張る類で、灰釉長頸壺編年の中でも古式に含まれるものである。ただ、その生産地の比定に関しては、胴の張り具合・胎土・細部に於ける技法等の違いによって猿投地区古窯跡群のものでは無いのではないかという意見（註3）もあったことを付記して、今後の類例の増加を持ちたい。白磁碗に関しては、各遺構の項で亀井氏の詳説が在るのでここでは除く。また、第1号木棺墓出土の須恵器長頸壺は、器表の調整等全く不明であるが、その器形が御笠川南条坊遺跡 S E 614 井戸（註4）出土品と酷似する。共伴する土師器が I-1 B 類に比定されており、剣塚第1号木棺墓もそれ位の年代に位置付けて大過ないものとする。

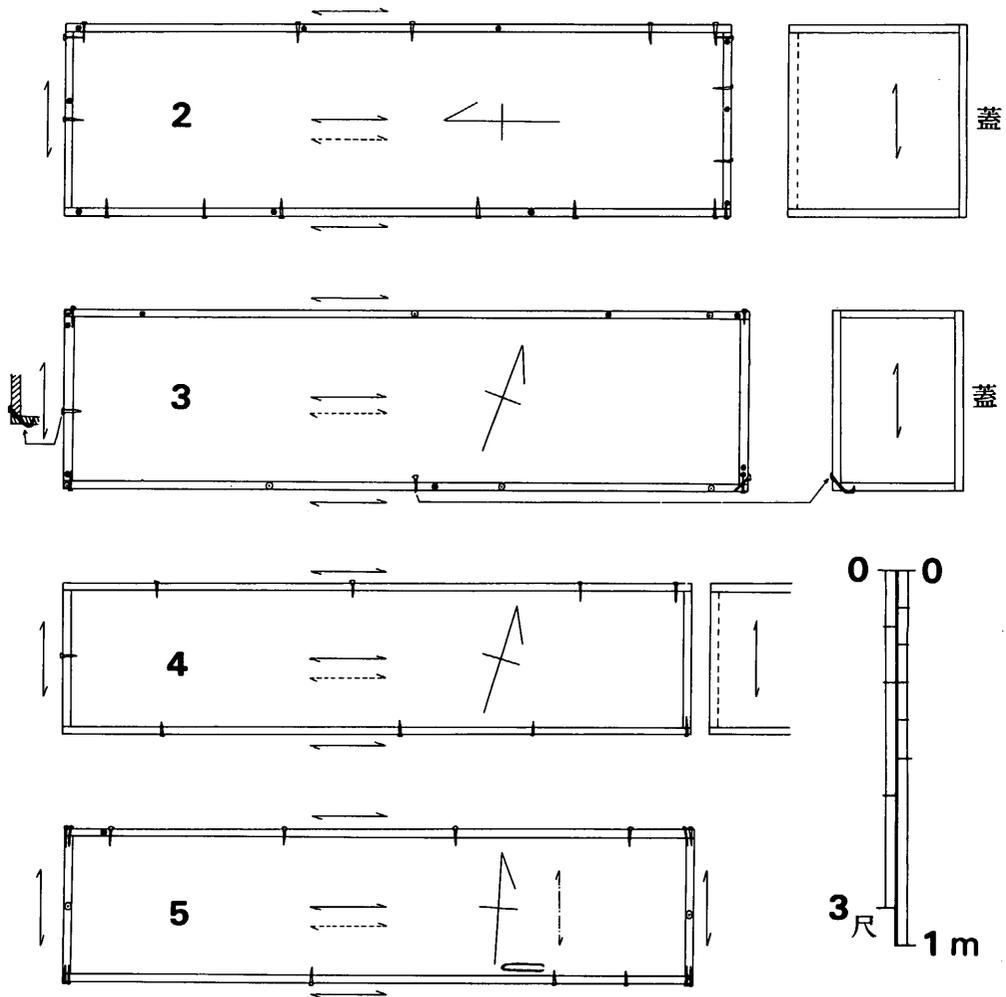
以上の副葬品の出土状況を見ると、須恵器長頸壺・灰釉長頸壺いずれも頸部を打ち欠いており、また白磁碗も半截されたものを副葬品に用いており、生活の器から仮器への転化が考えられる。（註5）

2 木棺墓の構造

木棺墓の棺材については松本・林岡先生による鑑定結果を掲載したが、その棺の規模・板の組合せ等に関して、釘の位置と付着木質の柁目方向によって復元を試みた。（Fig. 108）

（註6）

矢印は柁目方向を示すものであり、釘位置は釘形の黒く塗り潰したものが上端で側板材とし、塗り潰さないものは下端において側板と底板とを打ちつけた類であり、黒丸は蓋材から側板材へ下向きに、点丸は底板から側板へ上向きに打たれた類を示す。これによると、釘の多少の差はあるが、四隅で各々打っているのは勿論、長側板の途中で底板へ打込むもののがかなりみられる。更に、小口部中途においても補強を行なうものもみられる。全体に厚い板を頑丈に打ちつけた棺であったことがわかる。棺の大きさについては、大小2種に大別できる。即ち2・3号は長さ175～181cm、幅51～48cmの大型で、4・5号は長さ166cm、幅40cmの小型であり、大宰府史跡第4次調査（註7）で出土した物尺の平均を1寸≒3.0cmを考えると、2号木棺は長さ5尺8寸余、幅1尺7寸、3号木棺は長さ6尺、幅1尺6寸、4・5号木棺は長さ5尺5寸、幅1尺3寸余となる。これにも或る程度の規格品が在ったことが推定される

Fig. 108 第2～5号木棺墓棺復元図（縮尺 $\frac{1}{20}$ ）

3. 火葬墓副葬土師器

第1号火葬墓出土の土師器について、底部ヘラ切りの類の場合と同様に法量を図示してみた（Fig. 109）。杯類（c）においても小皿類（b）においても、かなり纏まり良いが、これらの出土遺物と法量において同グループをなすものは数少ない。浦城Ⅱ-3類（註8）の杯が、その荒い轆轤整形などの点においても同類である。この一群より古く、大きいものを探すと、前川氏編年中のⅡ-6類がある（註9）。これは大宰府史跡第33次調査のSK624（註10）出土品がそれに当たるとされる。この法量分布範囲のみを図示してみると、当剣塚例と口径と

器高との相関については杯において器高が僅かに小さくなる程度で、それ程明確な差はみられないが、口径と底径の相関、及び器高と底径との相関においては明確に分布を異にする。これらの法量変化をⅡ-6類以前と同様に漸移的なものと考え、更に、この両者間に少なくとも1段階の空間がみられる。(点線で示した部分)。そして、これをⅡ-7類とすると、以上の観察により、剣塚例をⅡ-8類と称することができよう。この類はまだまだ良好な一括出土例も少なく、今後の資料の増加が期待される場所である。鎌倉時代における分類数等により、1期が約30年強と推定されており、それによるとⅡ-8類は15世紀初頭～前半代の年代が与えられよう。(中間研志)

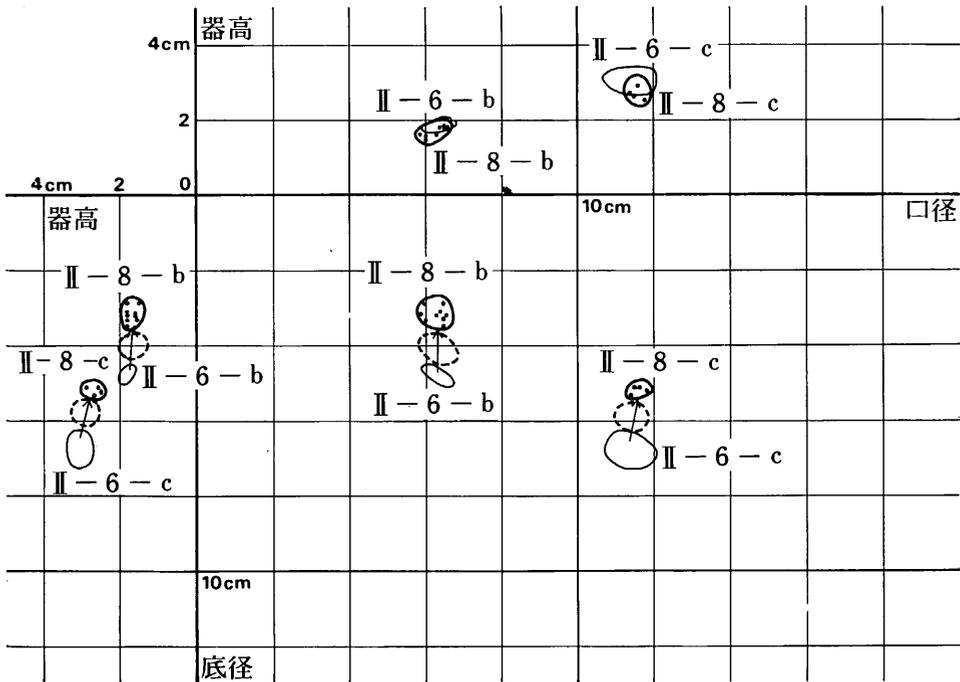


Fig. 109 第1号火葬墓副葬土師器の法量

註 1) 前川威洋・新原正典・馬田弘稔<福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2・3・6・7集>福岡県教育委員会 において、1970年の浦城跡調査の成果を出発点とした、平安～鎌倉時代土師器編年が、その後の大宰府史跡関係の調査成果と自からの御笠川条坊遺跡調査成果を踏まえて完成されつつある。その法量による編年法が全く最終的に完全なものとは断定できないが、ここでは現時点における最善の方法と判断して採用した。尚、この項の全域にわたっては前川威洋氏の全面的御指導を仰いだものである。記して謝意を表したい。

- 2) 九州歴史資料館<大宰府史跡一 昭和51年度発掘調査概報>1977年。このSK1084出土杯の特徴とされる、体部の横ナデ調整の上をヘラで磨く、という点においては、本剣塚遺跡出土例では器壁に明らかにヘラ磨きを行なうものはみられない。点数が少なく、調整不明のものもあるが、若干の問題が残る。
- 3) 常滑市教育委員会社会教育課赤羽一郎氏、及び名古屋市教育委員会猪俣周氏等の御意見を伺ったもので、美濃地方でも最近古窯跡調査が行なわれており、もしかするとそれらの中に見出せるかもしれないとのことであった。各氏に紙上を借りて深く謝意を表する次第である。
- 4) 前川威洋<福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集>福岡県教育委員会 1977年
このS E614井戸出土品も、底部やや上げ底となり、肩が僅かに張り、また偶然の一致ではあろうが縁の打ち欠き状況までもそっくりである。ただS E614井戸出土例の方がひとまわり大振りの法量を示す。
- 5) 桐原健「仮器の系譜」<古代文化25-12>1973年において多くの事例を指摘されている。
- 6) 木下修<山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集>福岡県教育委員会 1977年において、門田遺跡木棺墓使用釘から棺の復元を試みており、全く氏の研究成果に負うところである。
- 7) 『大宰府史跡』<福岡県文化財調査報告書第47集> 1971年
- 8) 前川威洋『浦城跡』<福岡県文化財調査報告第45集> 1970年
- 9) 現在<南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集>の編集が進められており、その中に於いて法量変化が既発表分のⅡ-5類から連続するものとして、このⅡ-6類をとらえて編年の補強が行なわれている。氏の御厚意により「Ⅱ-6類」の呼称を使用させて頂いた。
- 10) 九州歴史資料館<大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報>1975年

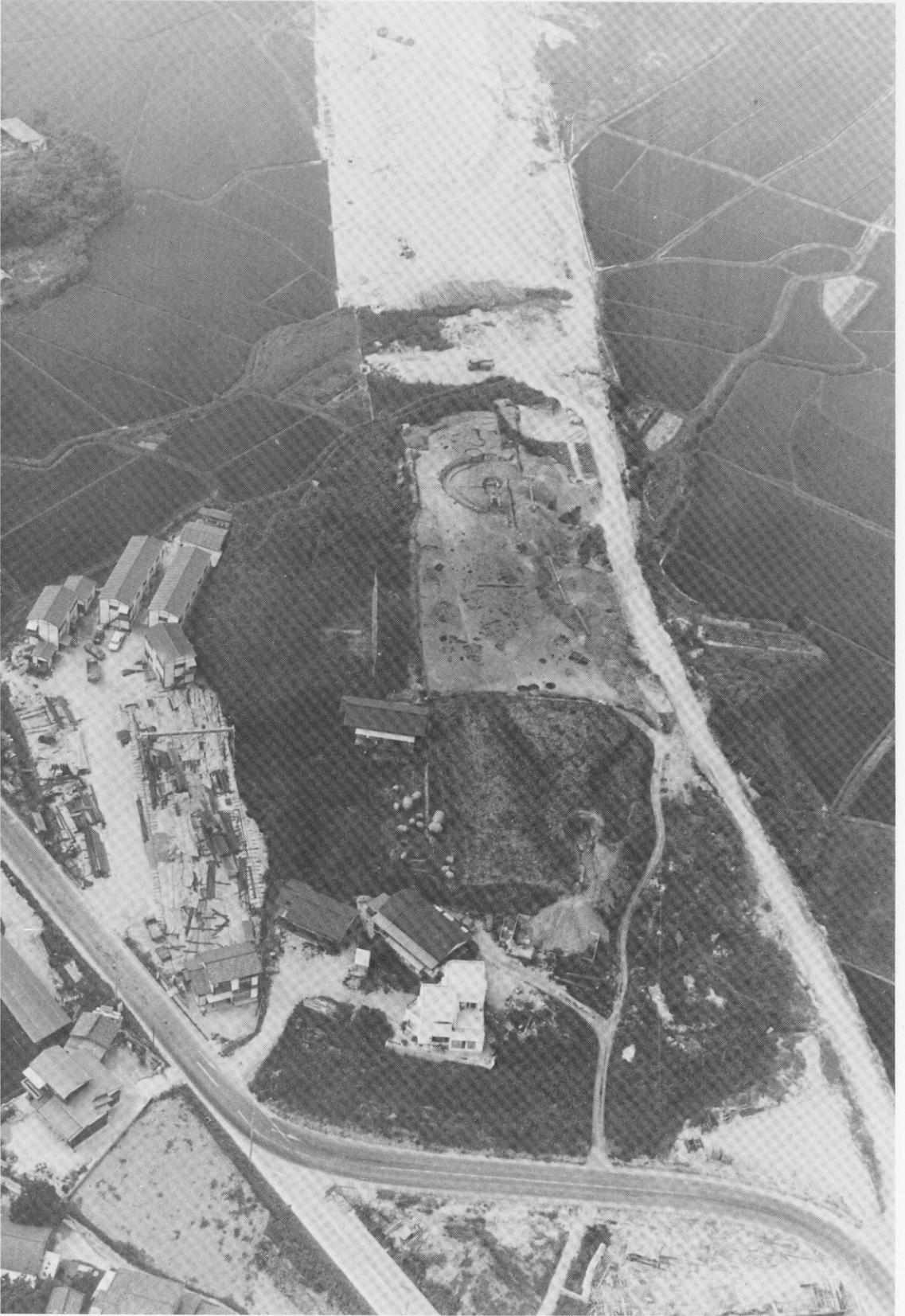
PLATES



(1) 剣塚遺跡群と水城 (1—剣塚遺跡群, 2—水城, 3—成屋形遺跡)



(2) 剣塚遺跡と周辺の遺跡 1. 唐人塚 2. 桶田山 3. 道場山



剣塚遺跡群全景 (南東上空から)



(1) 剣塚遺跡群全景（東側上空から）



(2) 同上 赤外線写真



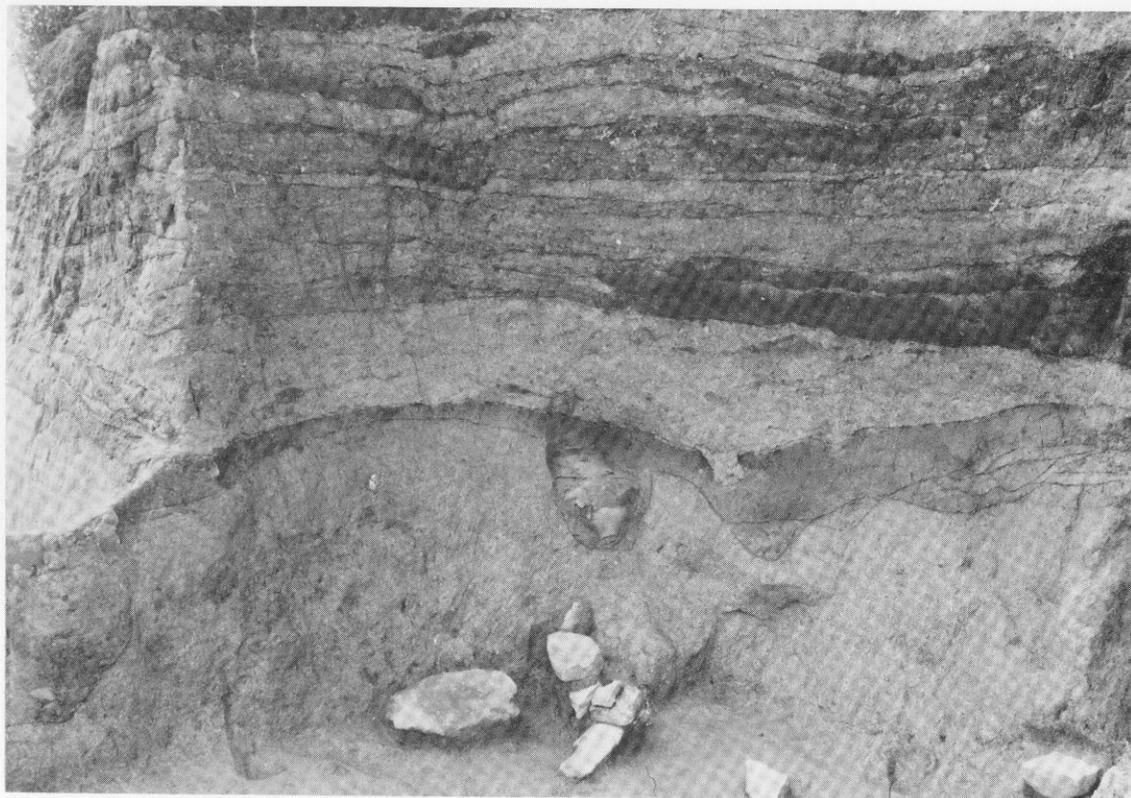
(1) 剣塚第1号墳伐採直後全景(北東から)



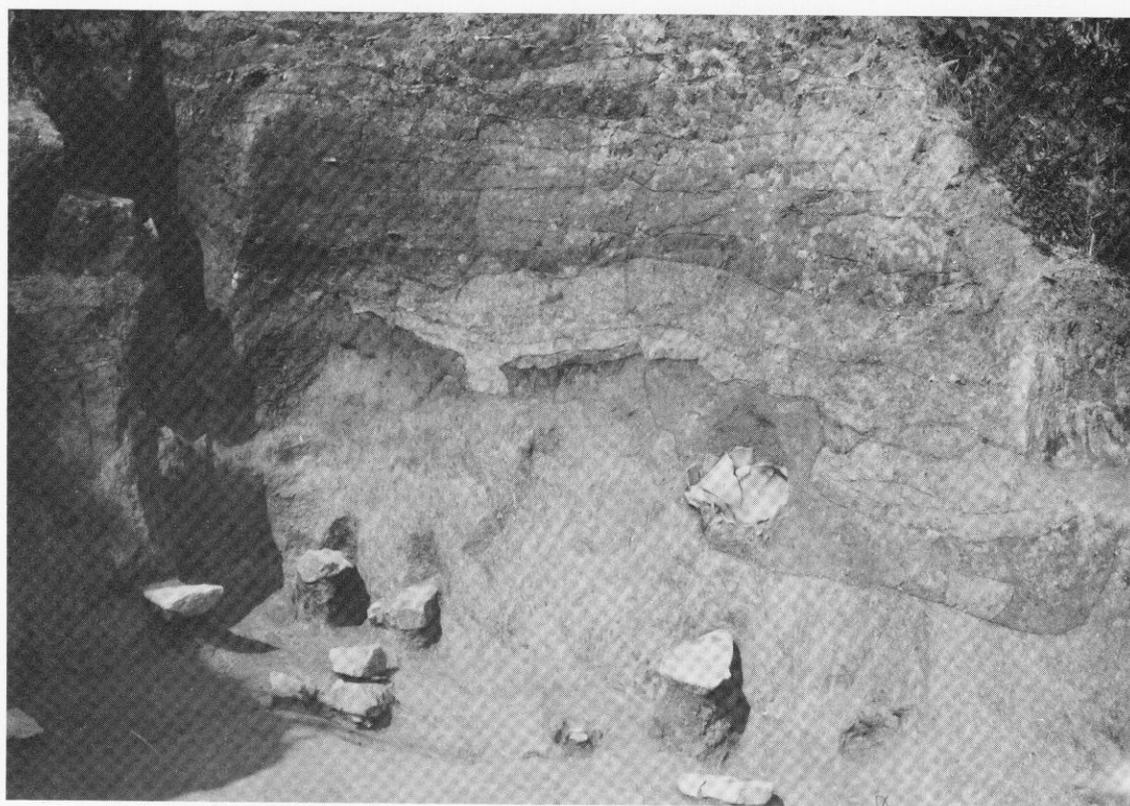
(2) 剣塚第1号墳前方部(北西から)



剣塚第1号墳石室全景



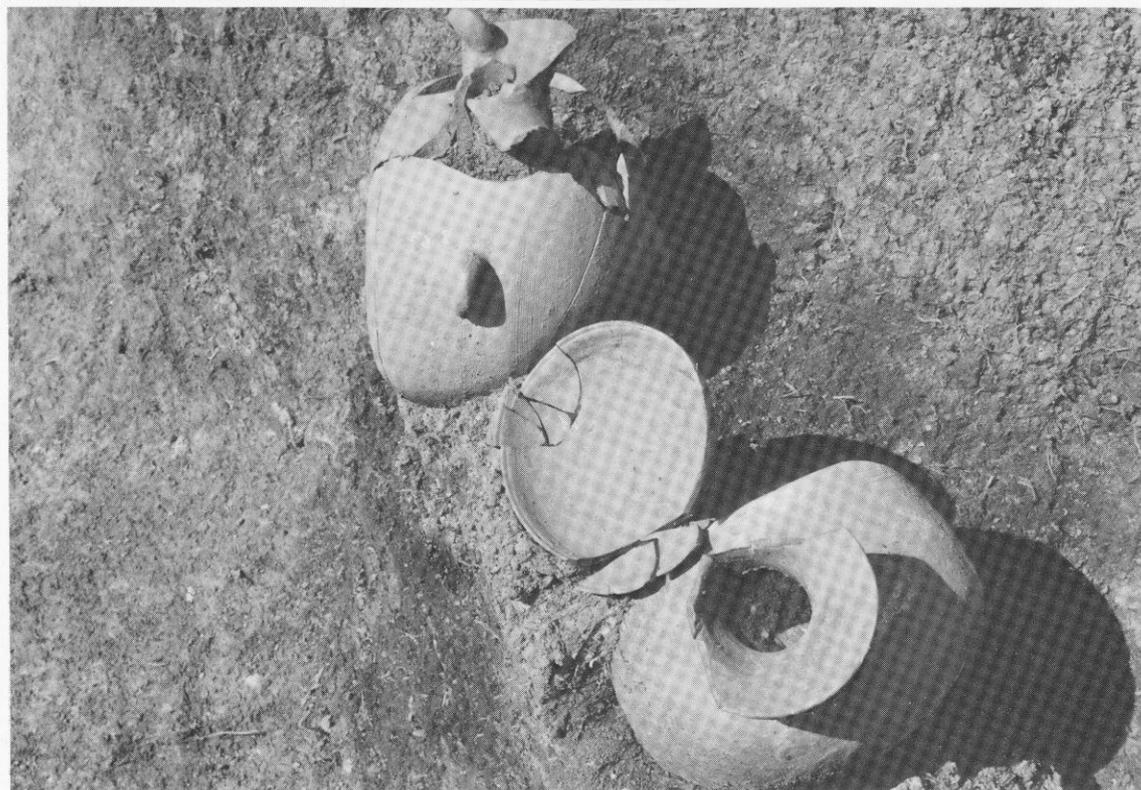
(1) 劍塚第1号墳墓坛北西隅



(2) 劍塚第1号墳墓坛北隅



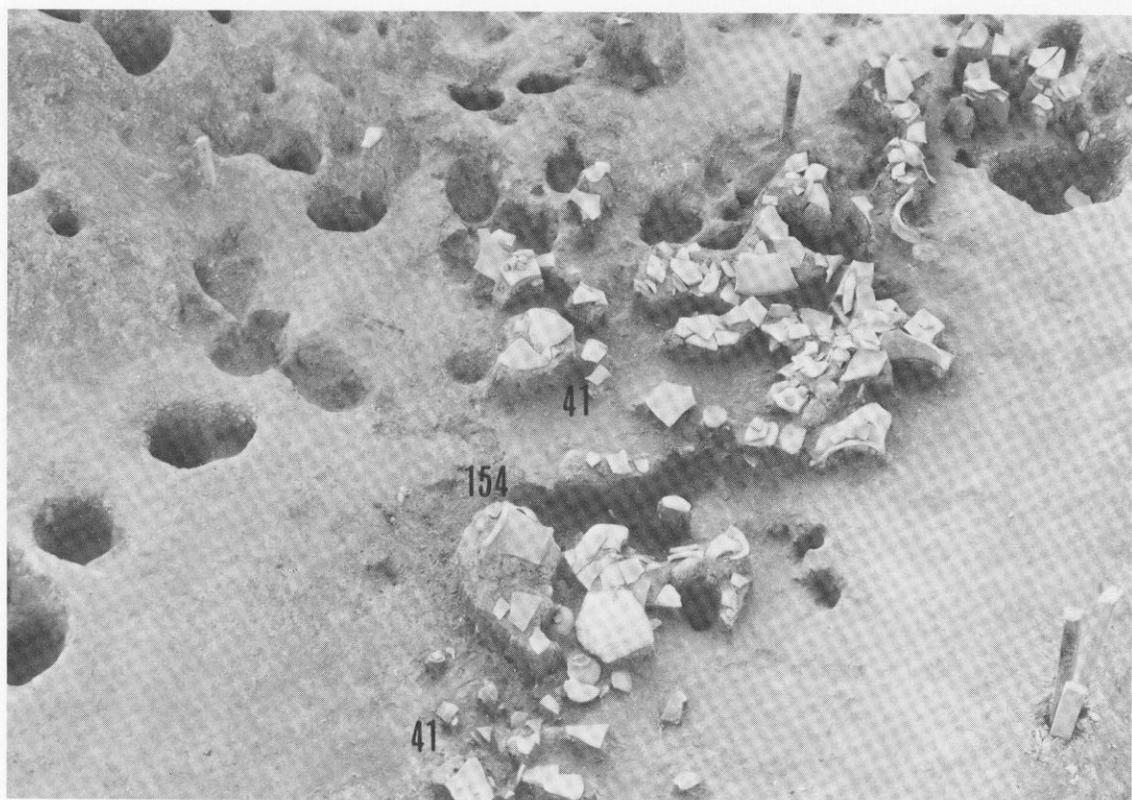
(1) 剣塚第1号墳石室全景(北西から)



(2) 剣塚第1号墳石室墓道出土須恵器



(1) 劍塚第1号墳東側周滄土器出土状態 (中央は古劍塚第3号墳)



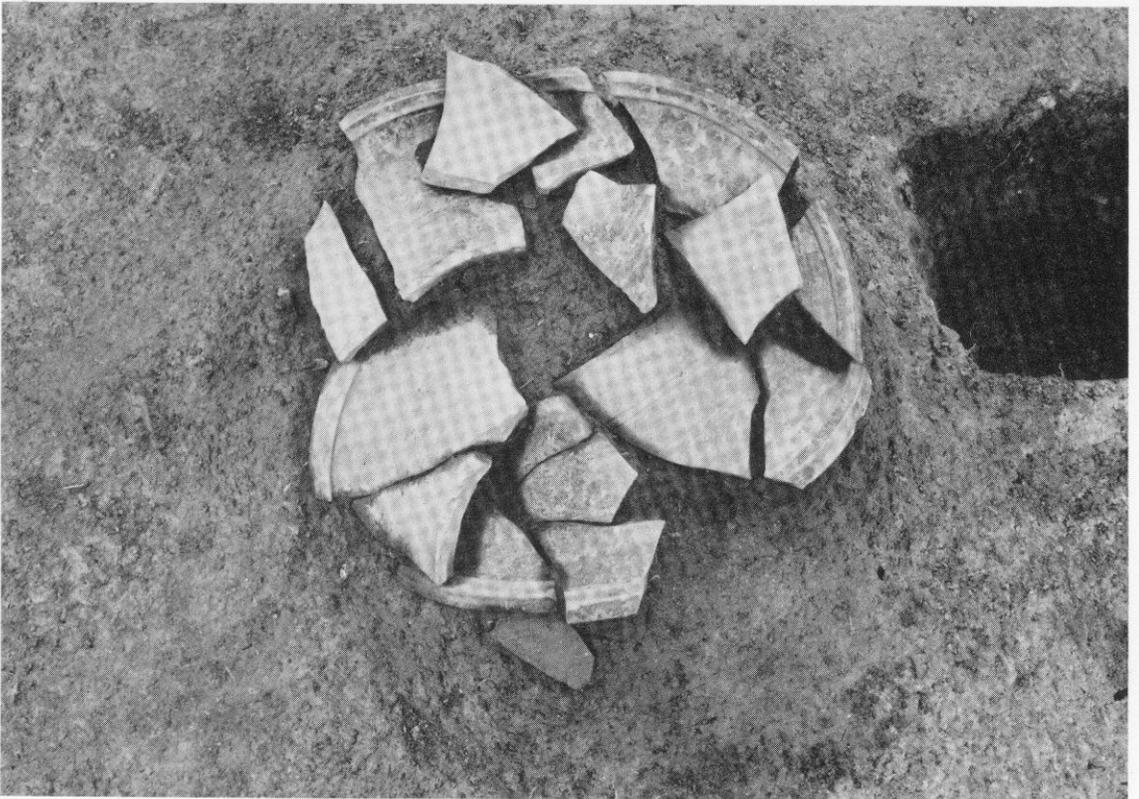
(2) 劍塚第1号墳東側周滄土器出土状態 近景



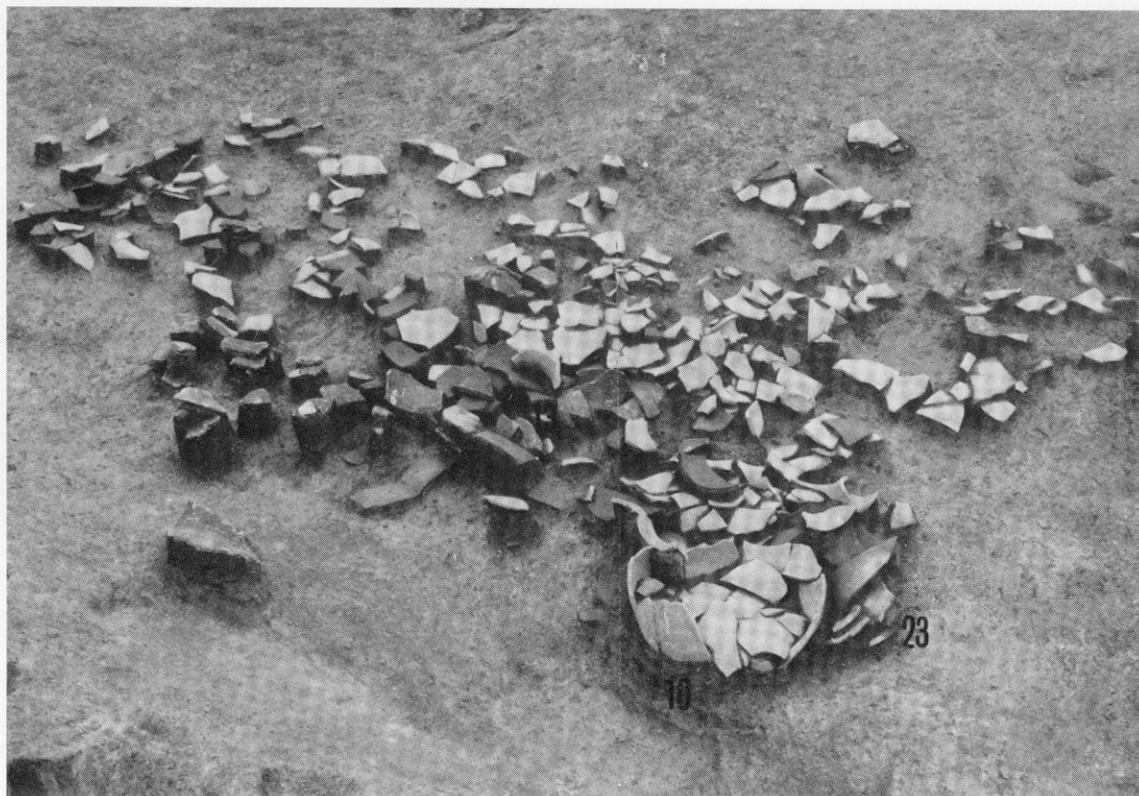
劍塚第1号墳西側周湟須恵器出土状態全景（北西から）



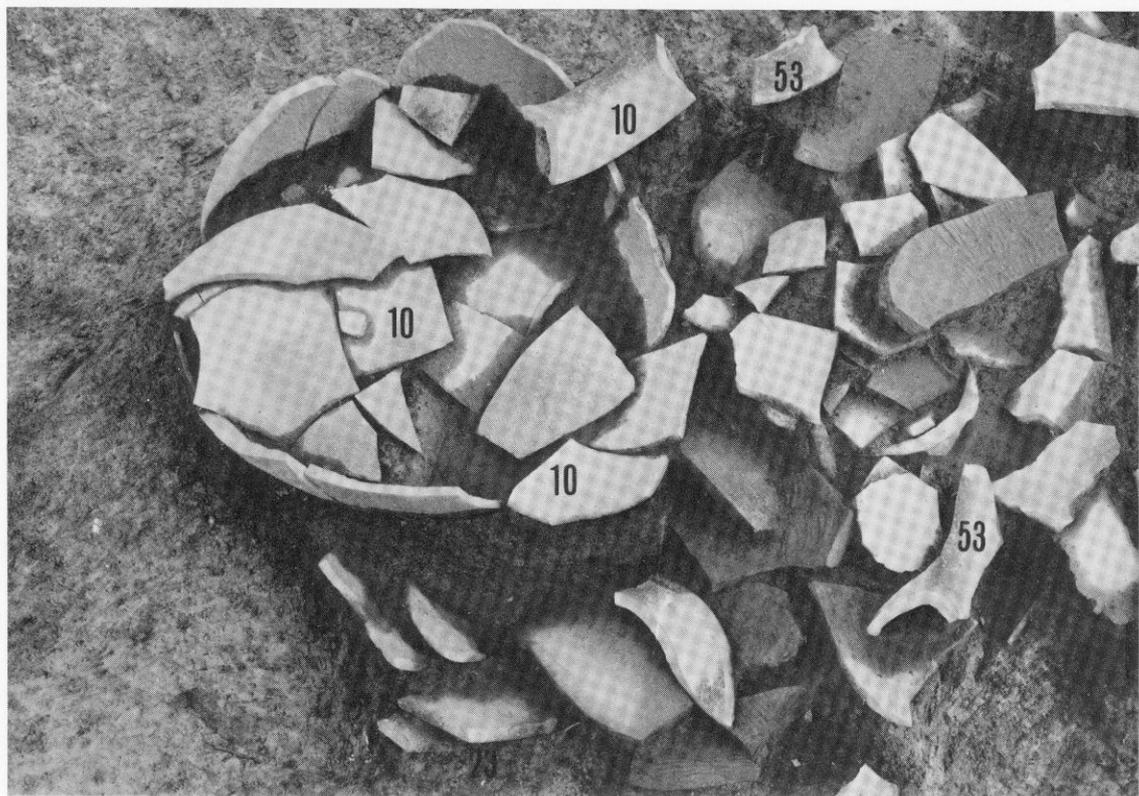
(1) 劍塚第1号墳西側周湟北半須惠器出土狀態



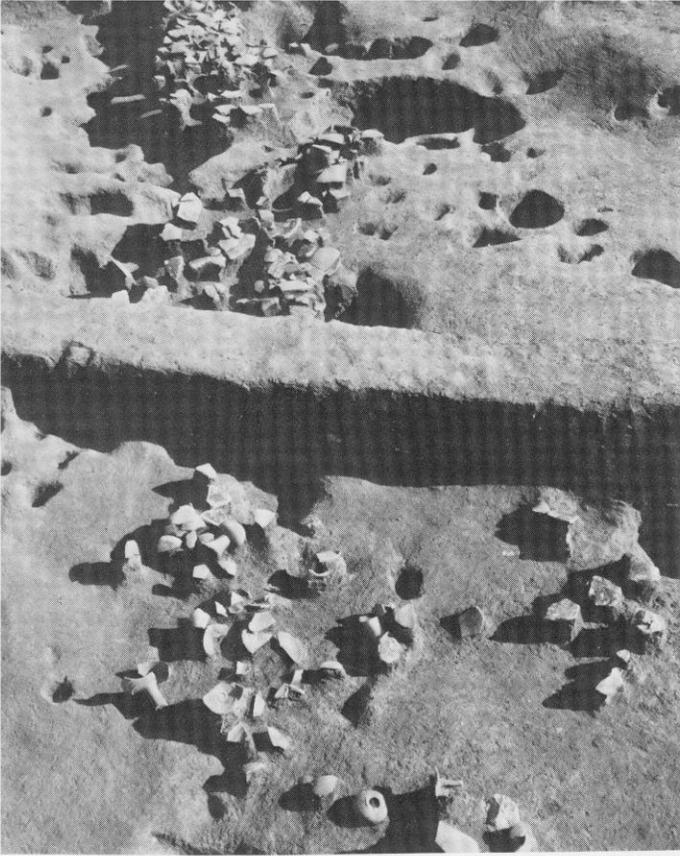
(2) 劍塚第1号墳西側周湟北半土器20出土狀態



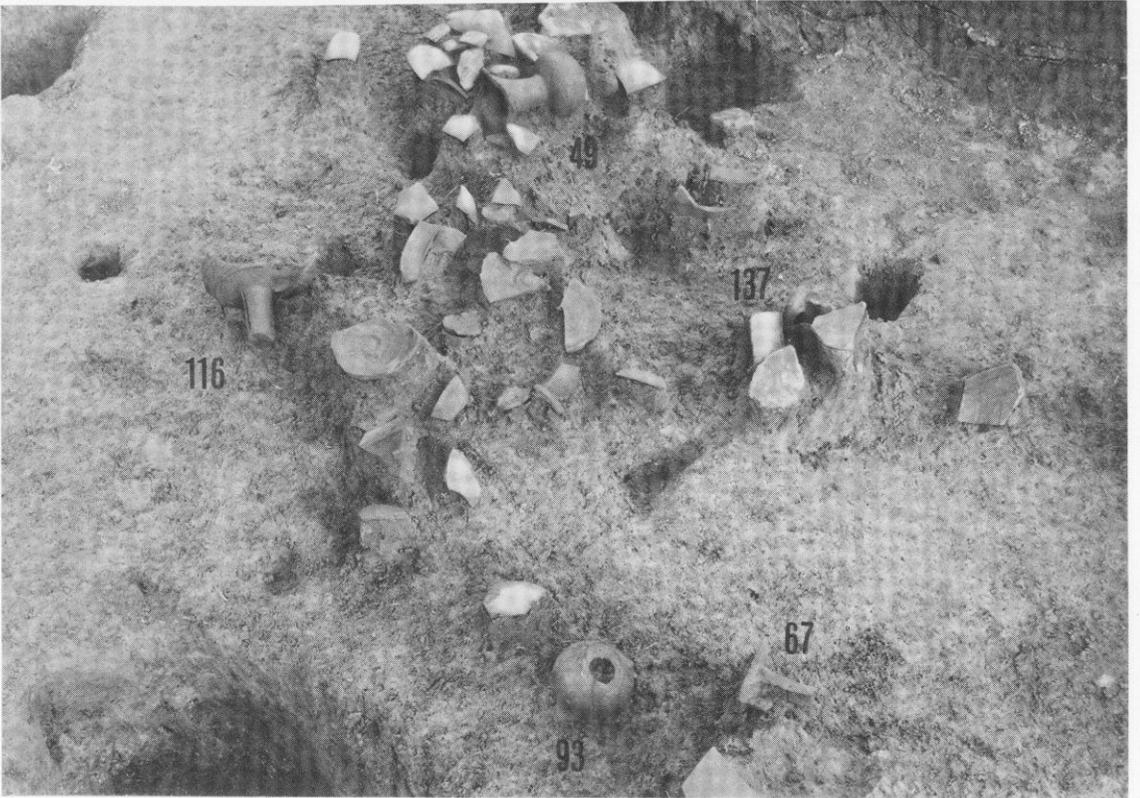
(1) 劍塚第1号墳西側周滄北半土器群出土狀態



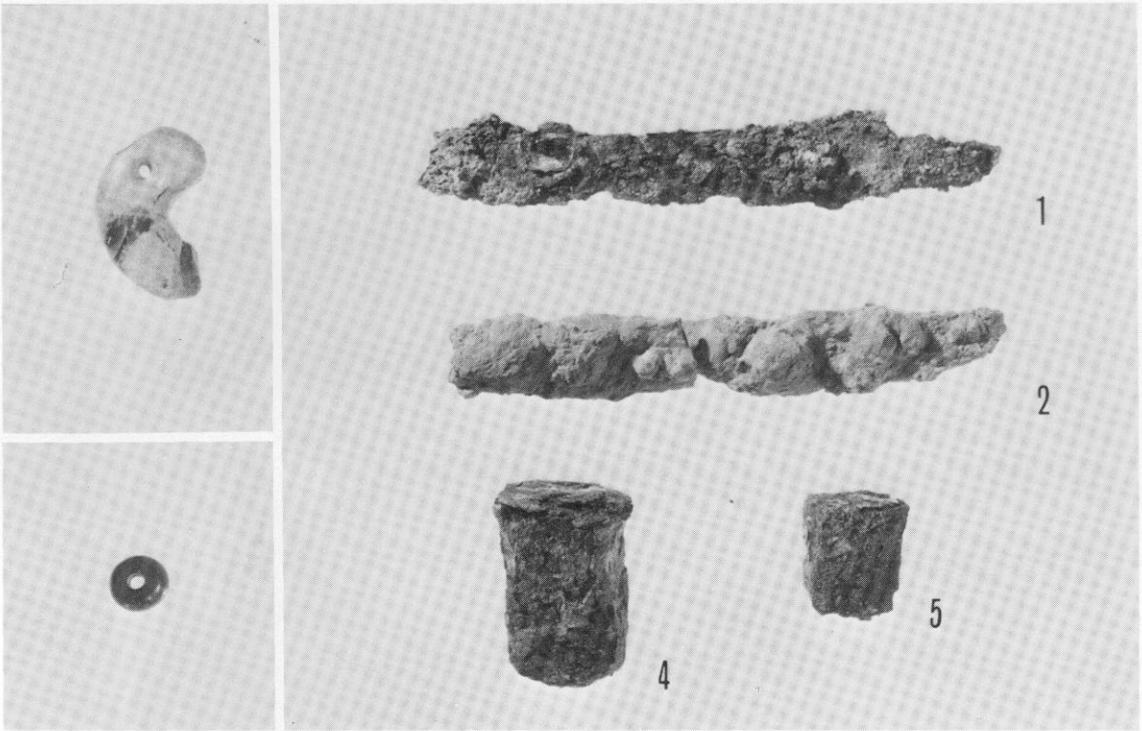
(2) 劍塚第1号墳西側周滄北半土器10他出土狀態



(1) 劍塚第1号墳
西側周湟南半土器出土狀態全景



(2) 劍塚第1号墳西側周湟南半土器出土狀態

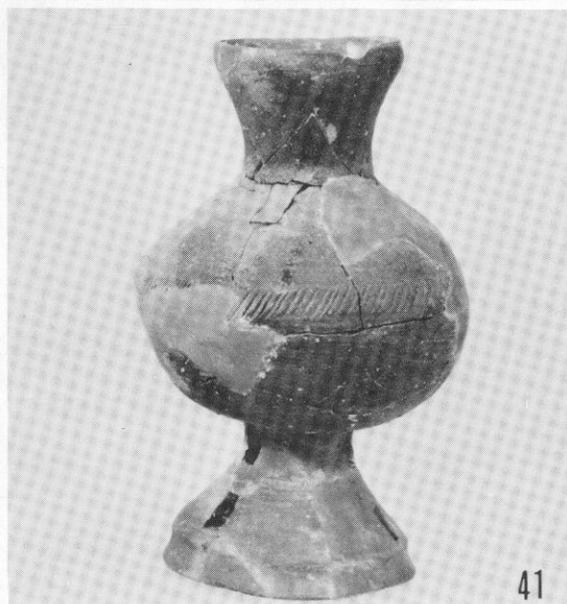


(1) 劍塚第 1 号墳出土玉類

(2) 劍塚第 1 号墳出土鉄製工具

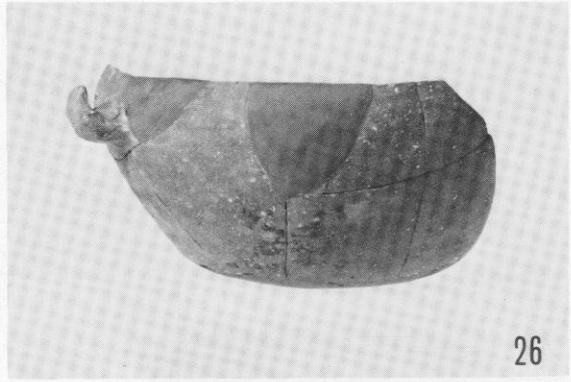


(3) 劍塚第 1 号墳出土三累環式環頭柄頭





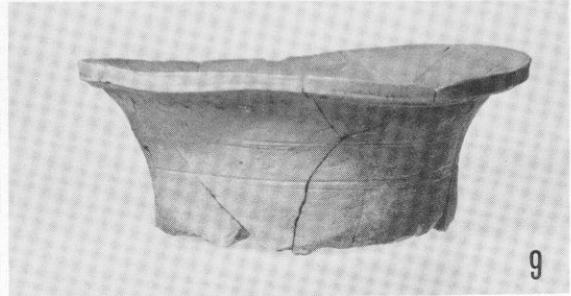
147



26



103



9



15



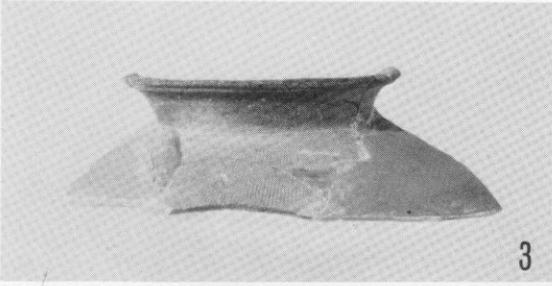
17



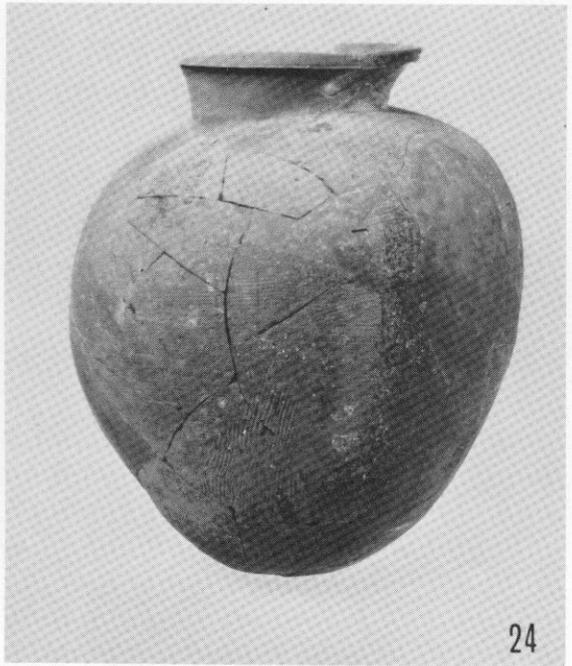
134



154



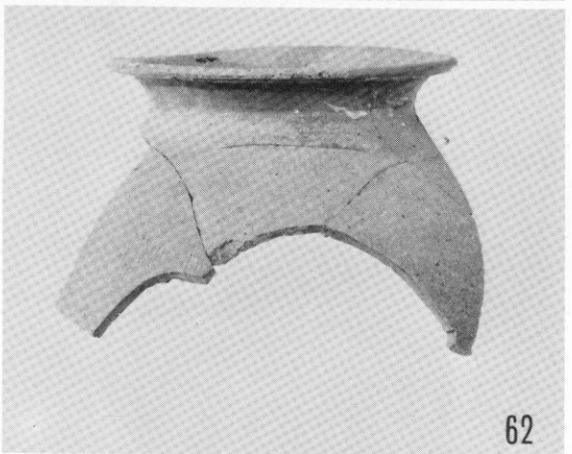
3



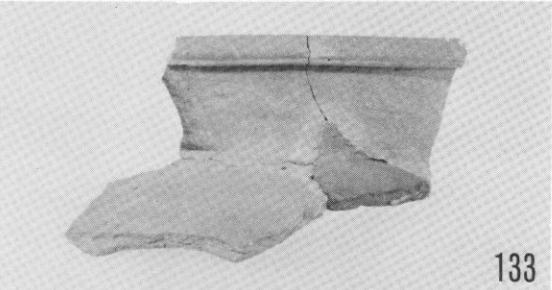
24



25



62



133

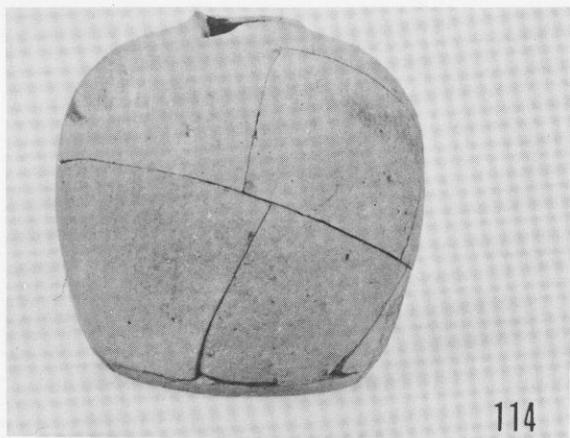


63

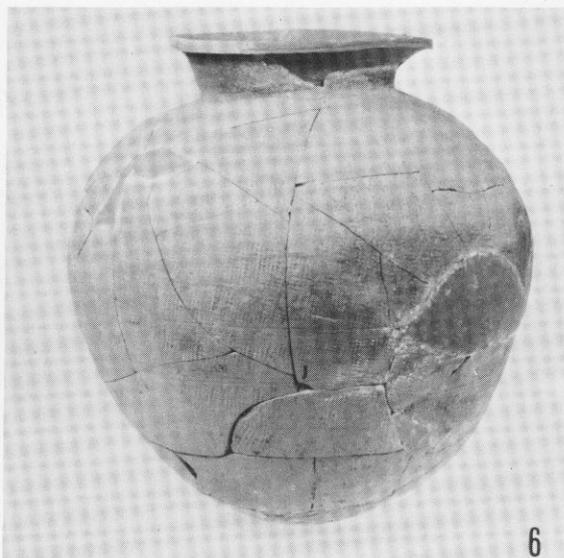


55

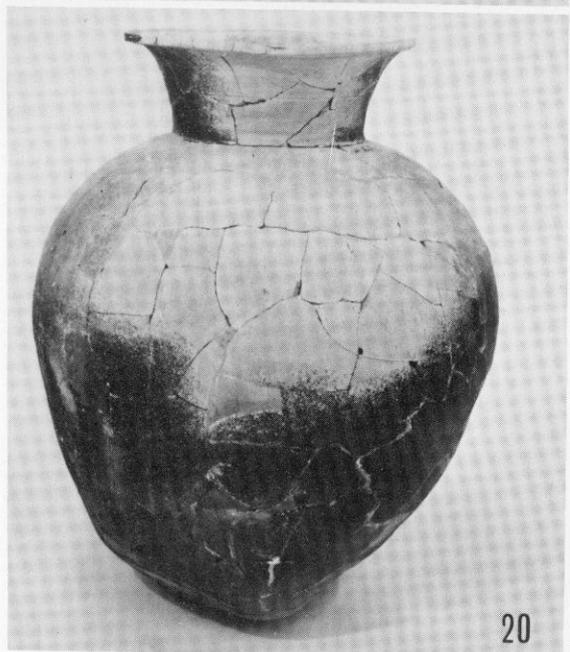
劍塚第1号墳東湟出土土器 3、西湟北半出土土器 1 (最下段)



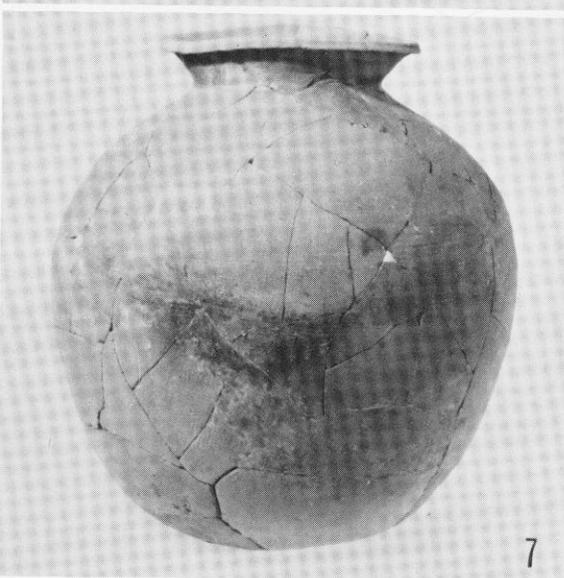
114



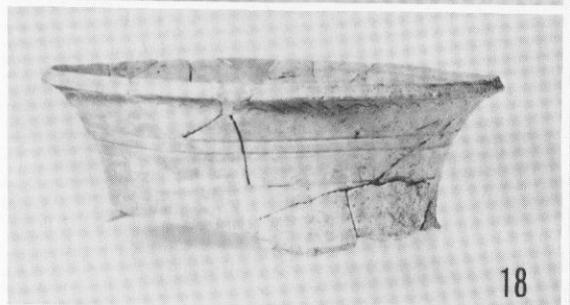
6



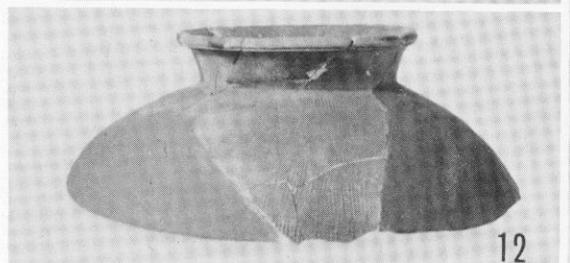
20



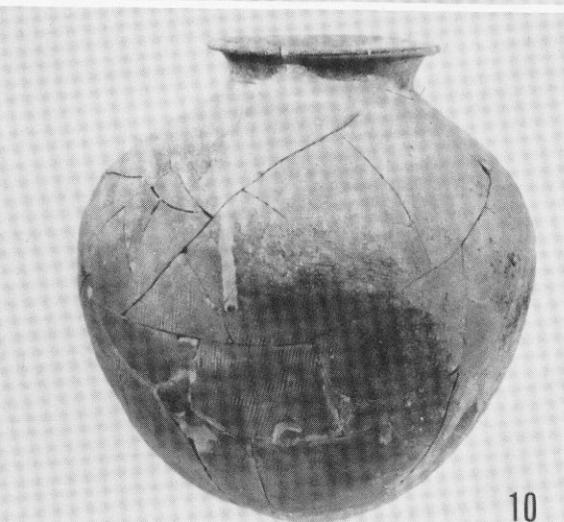
7



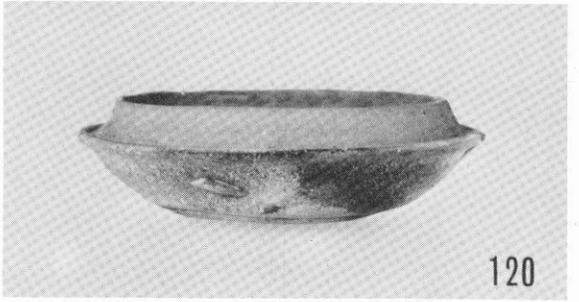
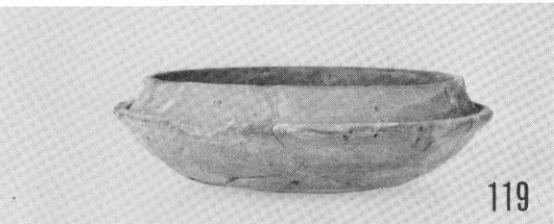
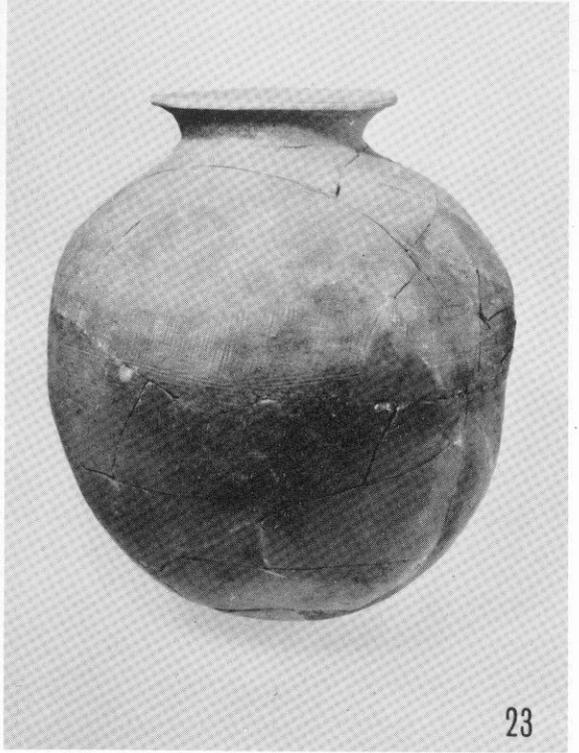
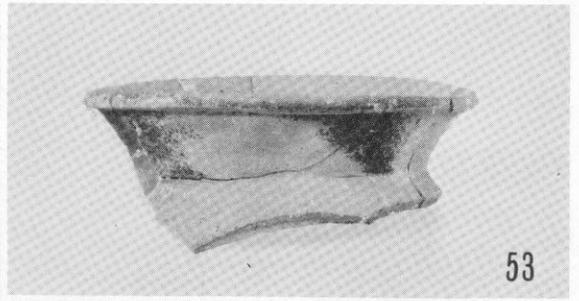
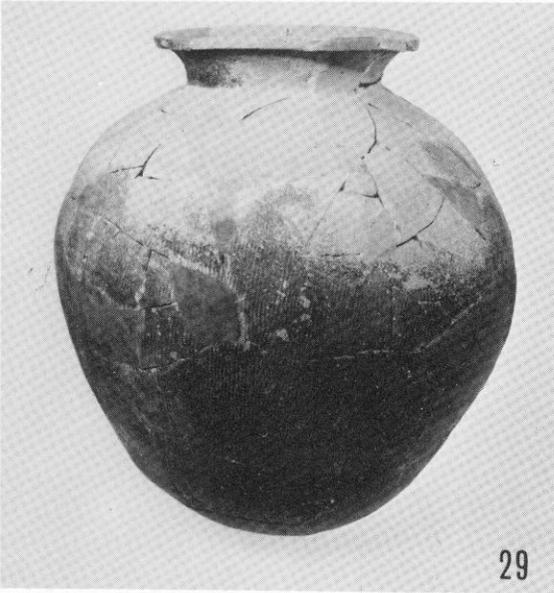
18



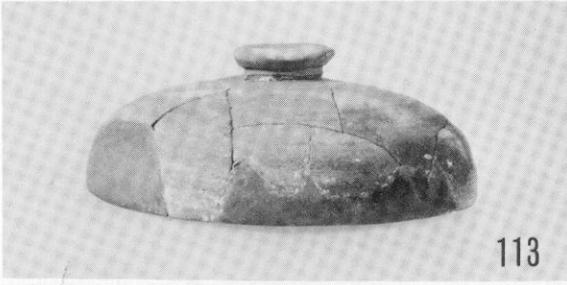
12

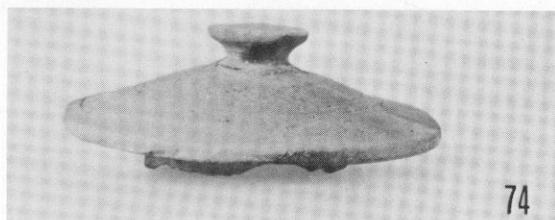


10



劍塚第1号墳西湟北半出土土器 3 , 西湟南半出土土器 1 (下2段)





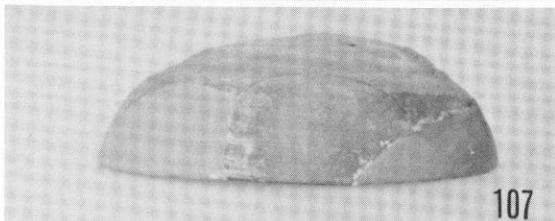
74



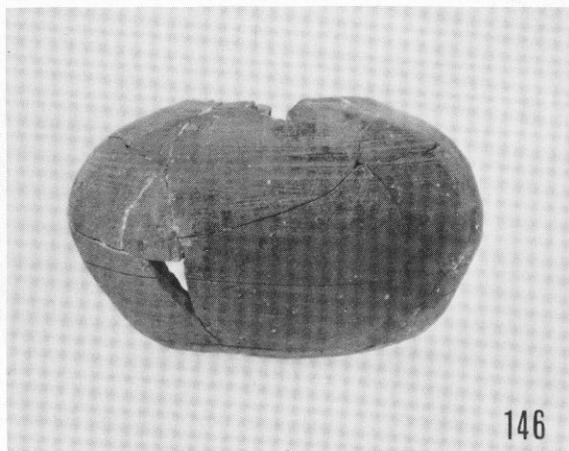
93



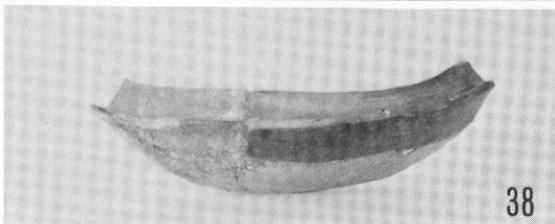
1



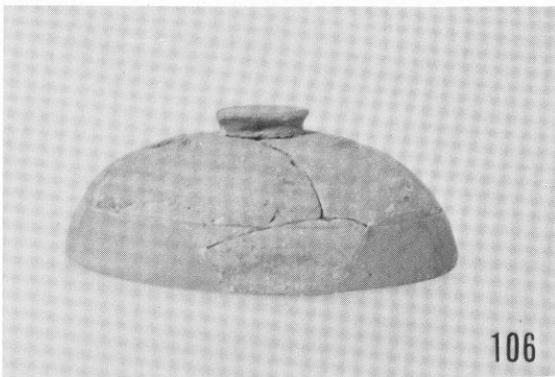
107



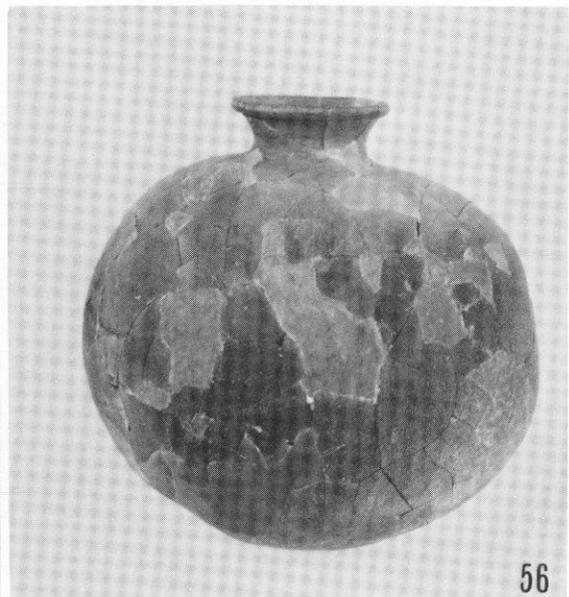
146



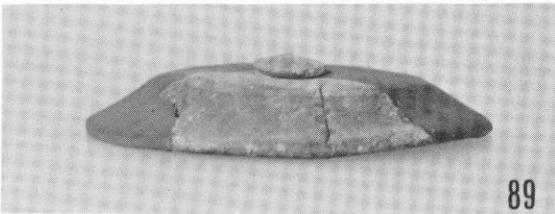
38



106



56



89

劍塚第1号墳西湟南半出土土器 3, 西湟出土土器



(1) 劍塚第2号墳墳丘遺存狀態



(2) 劍塚第2号墳南側竪穴



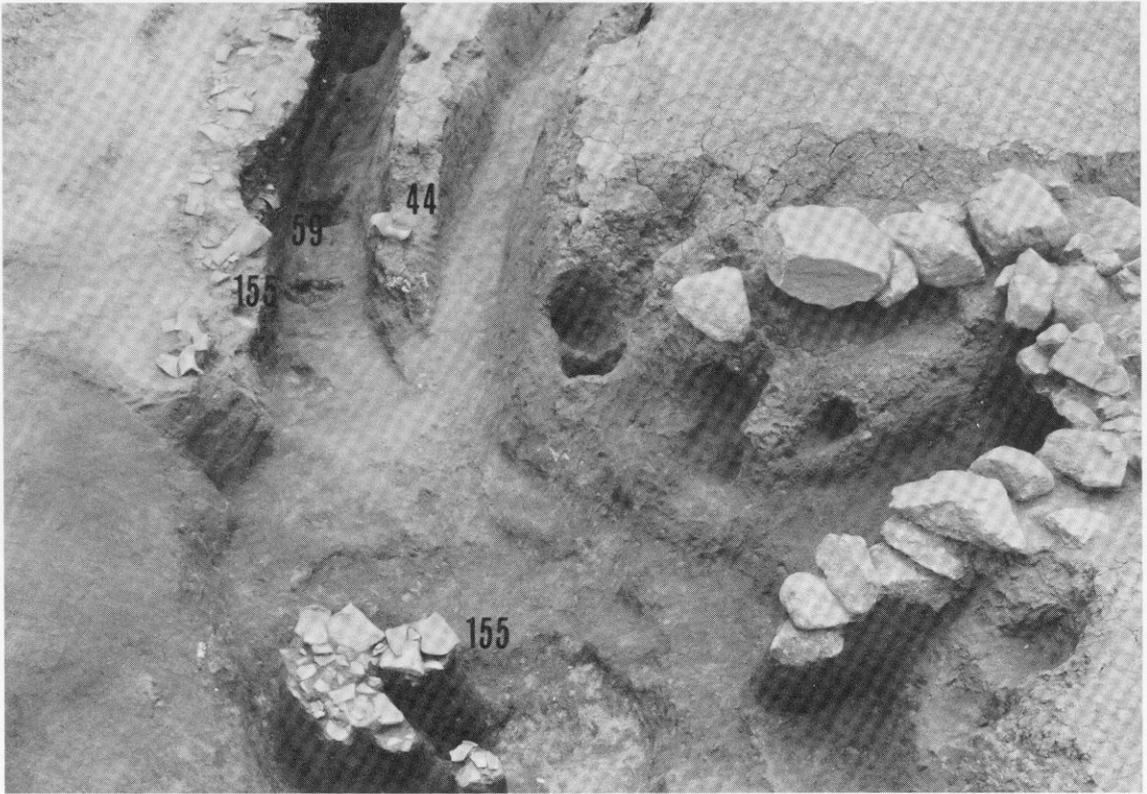
(3) 出土土製模造鏡



(1) 剣塚第3号墳全景 (右は第2号墳)



(2) 剣塚第3号墳石室全景



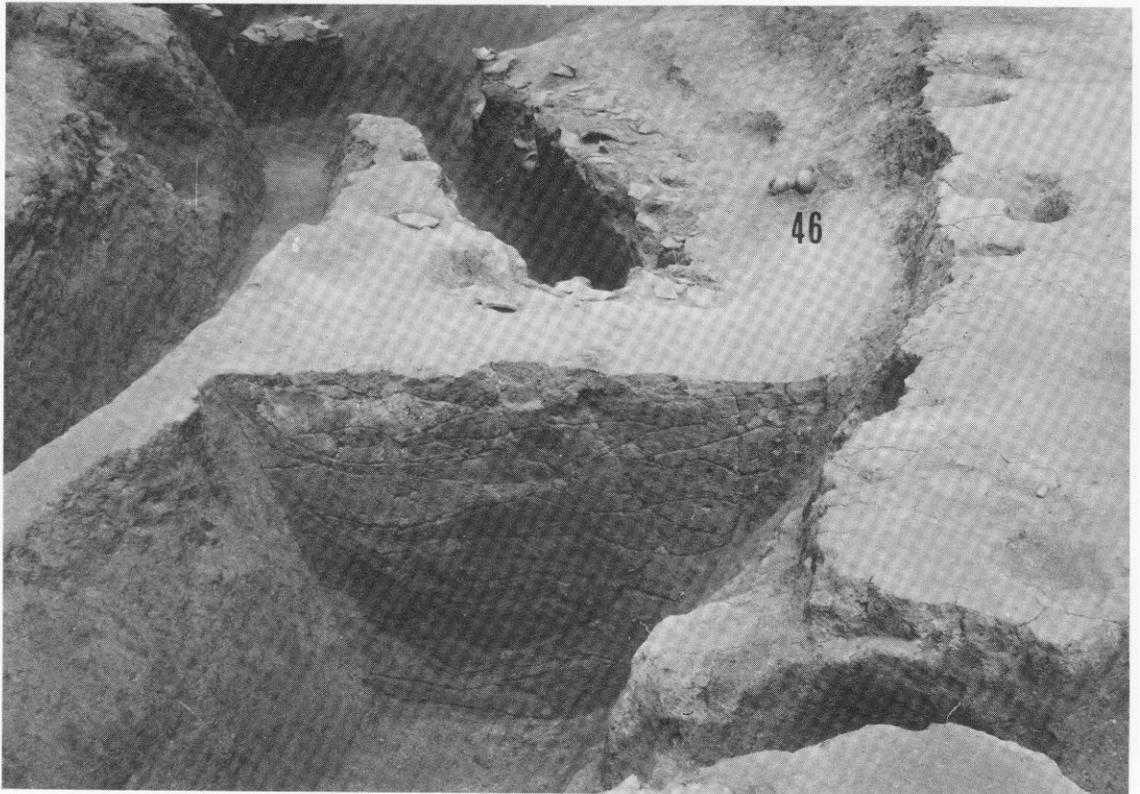
(1) 剣塚第3号墳墓道先端と土器出土状態(北東から)



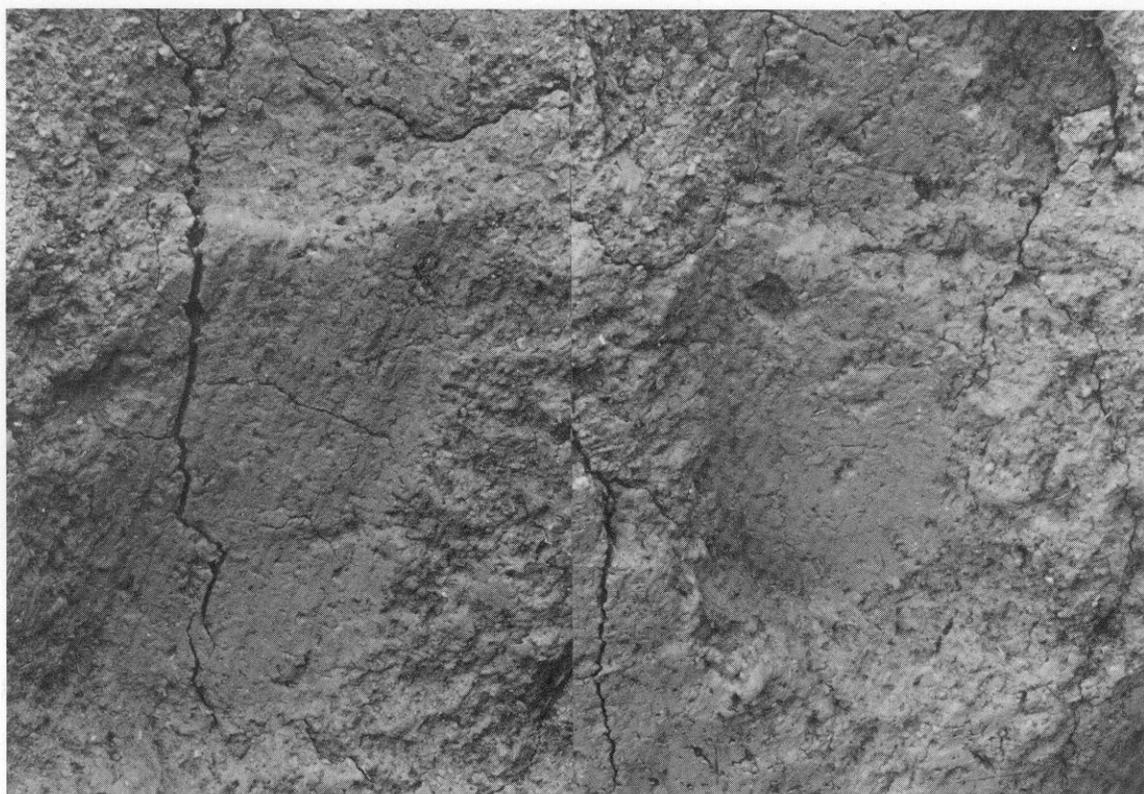
(2) 剣塚第3号墳周湟土器出土状態



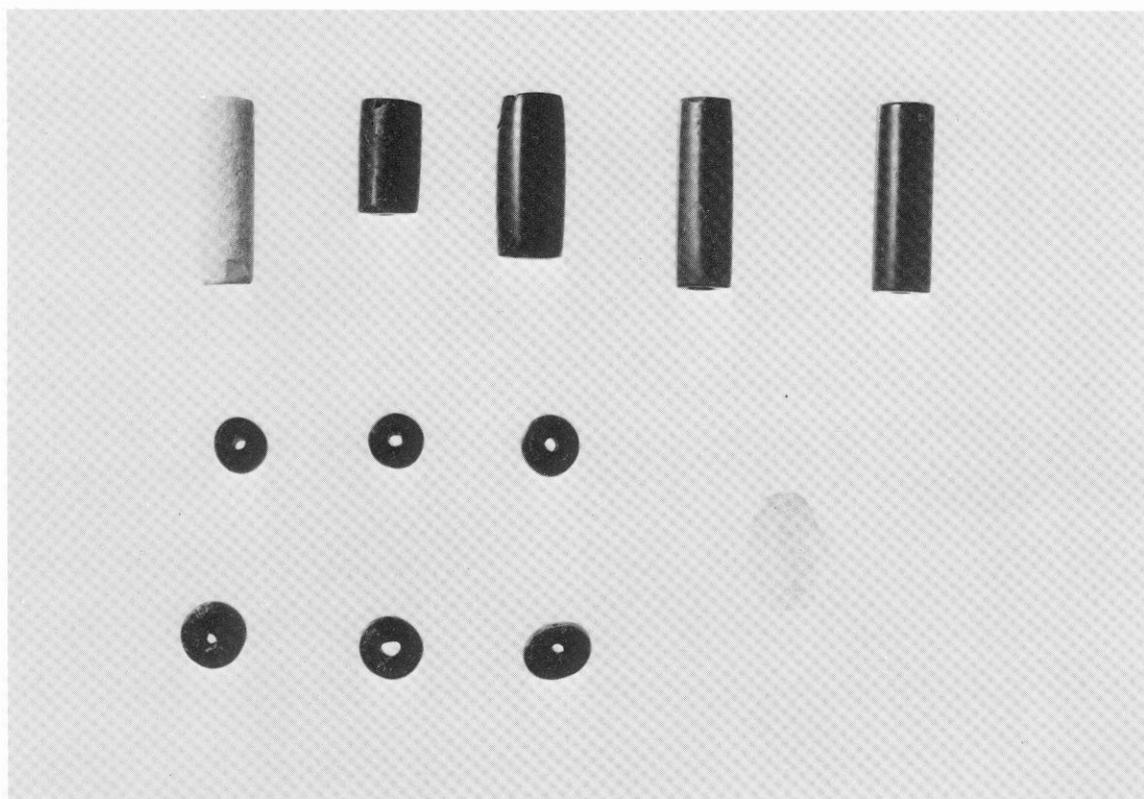
(1) 剣塚第3号墳羨道先端部(南西から)



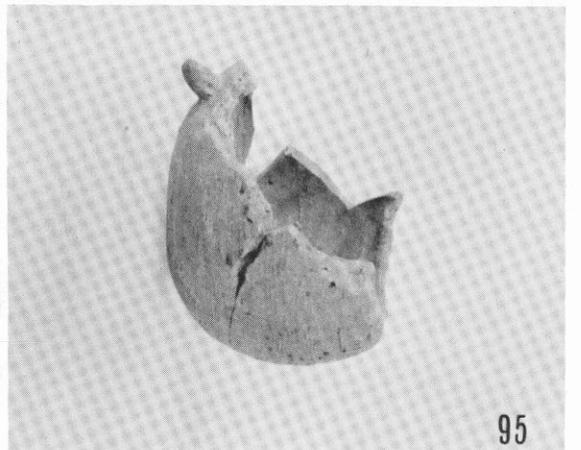
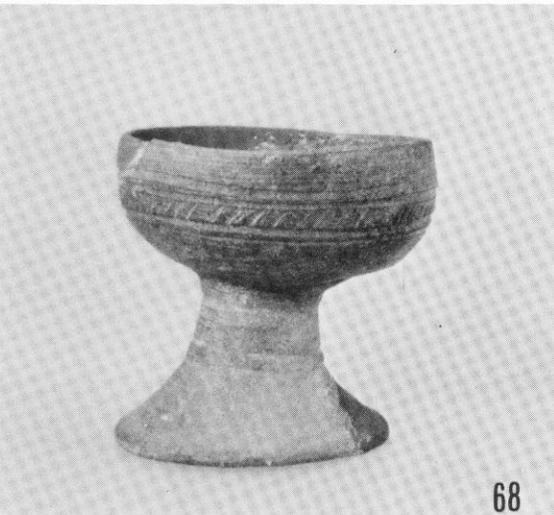
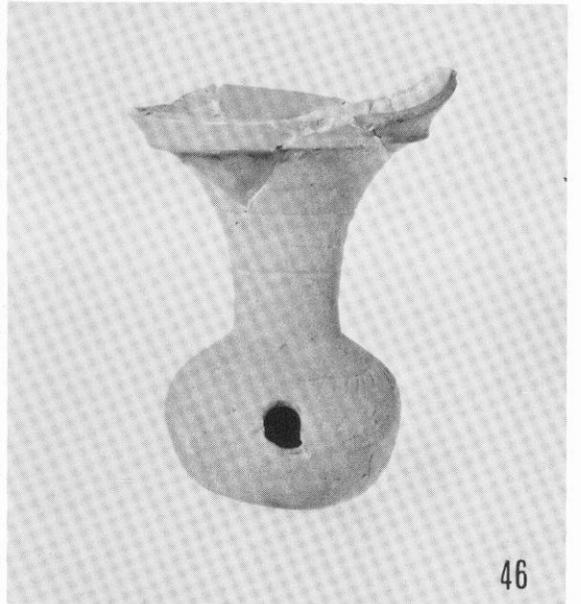
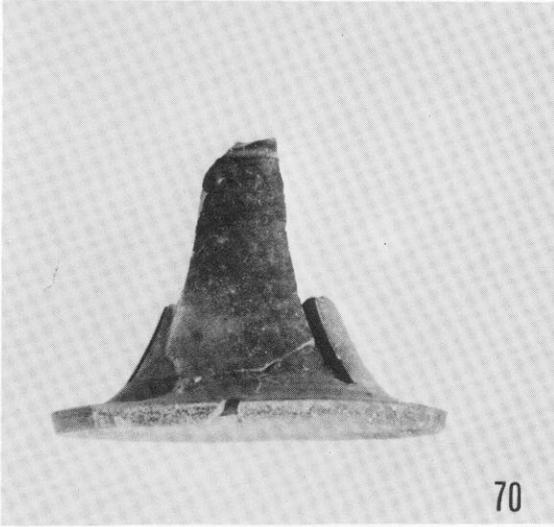
(2) 剣塚第3号墳周溝堆積状態と土器出土状況



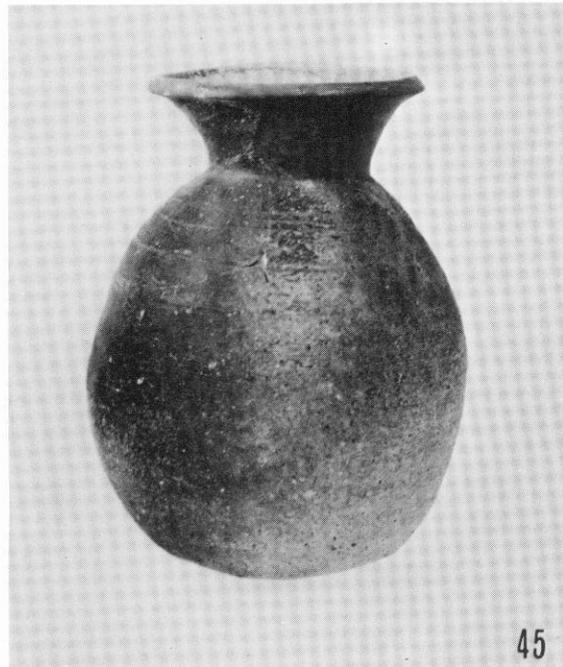
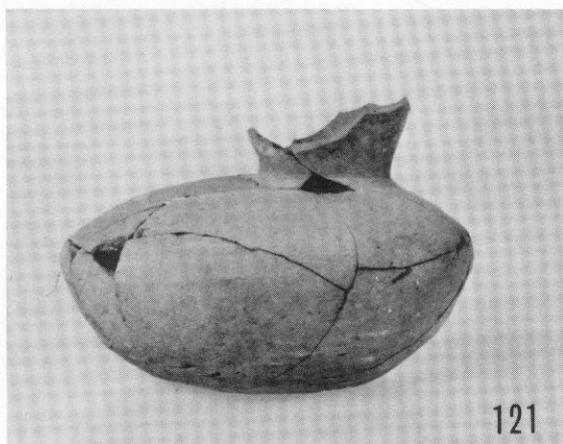
(1) 劍塚第3号墳墓坵壁工具痕

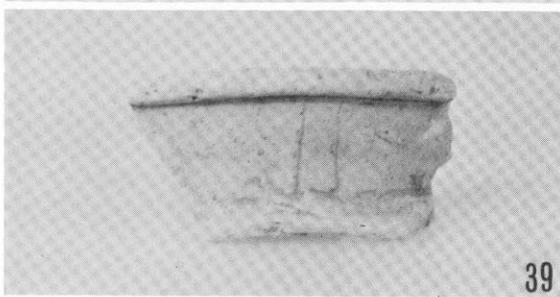
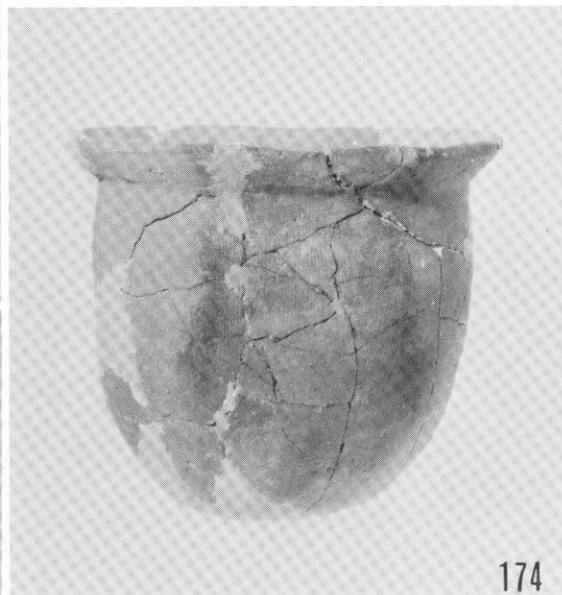
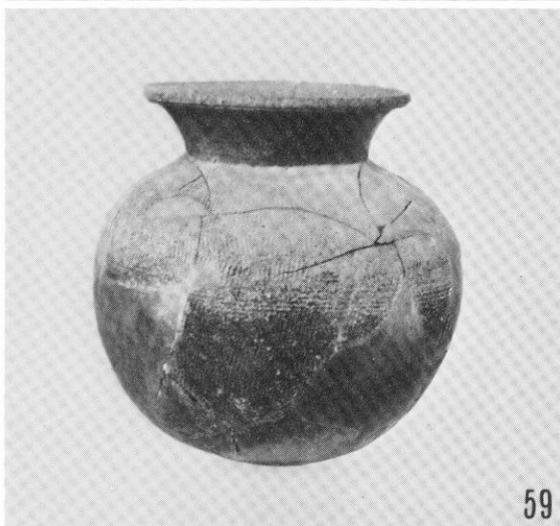
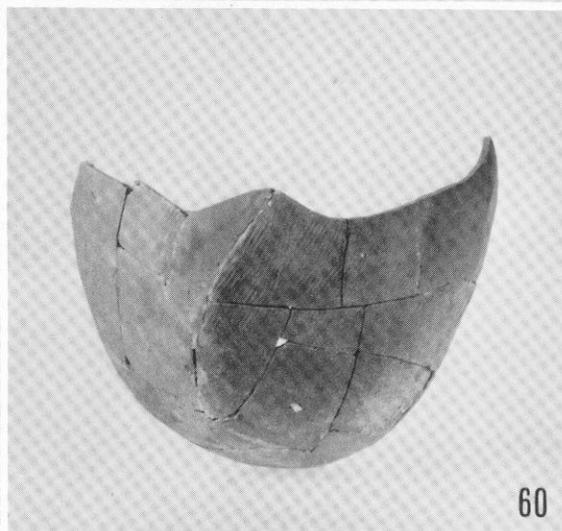
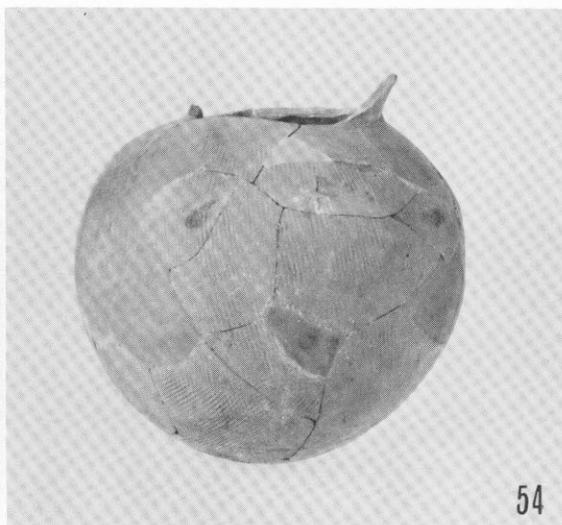
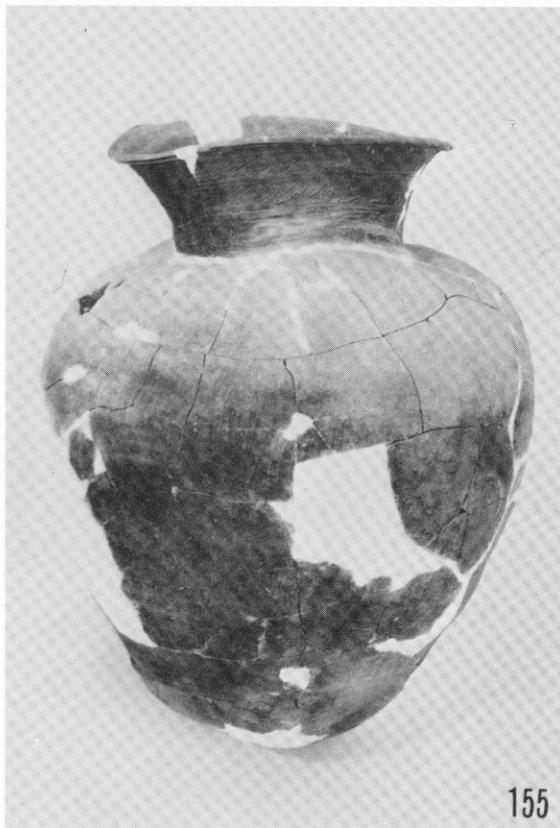


(2) 劍塚第3号墳出土玉類



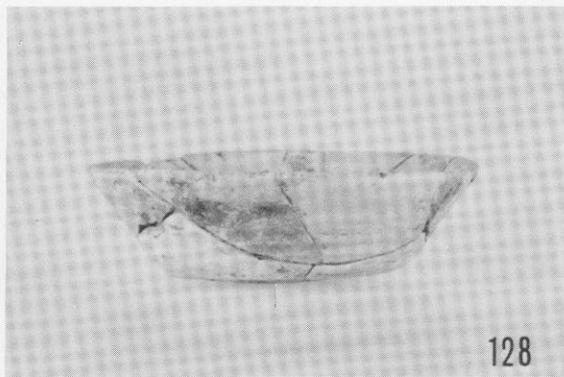
剣塚第3号墳出土土器 1







84



128

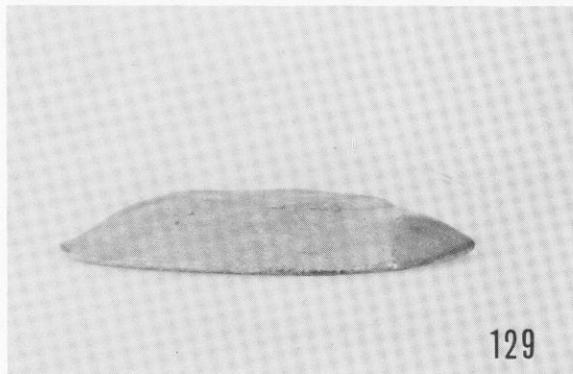
劍塚第3号墳出土土器 4



78



100

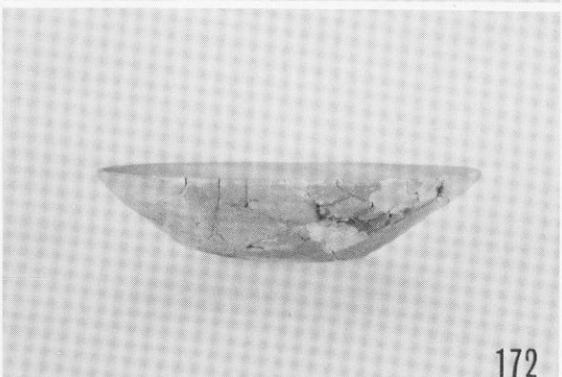
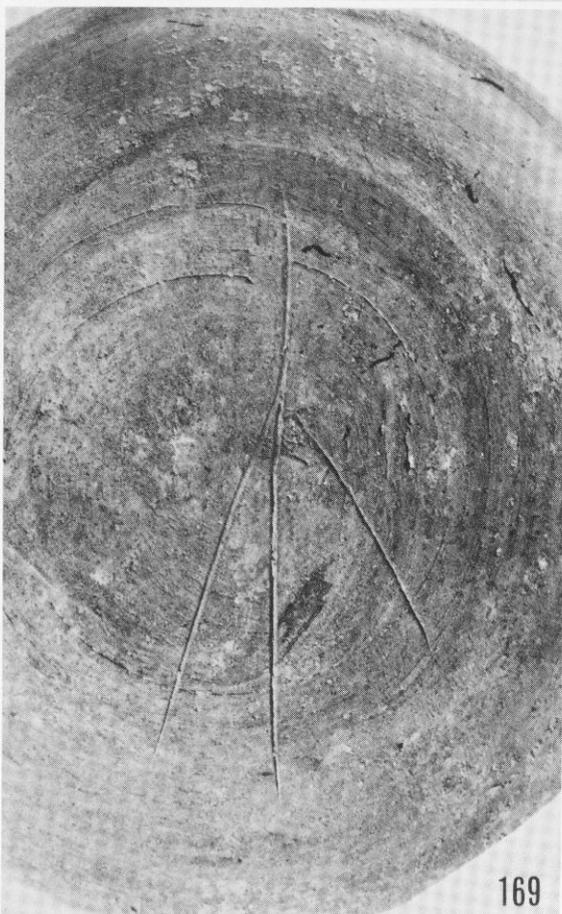
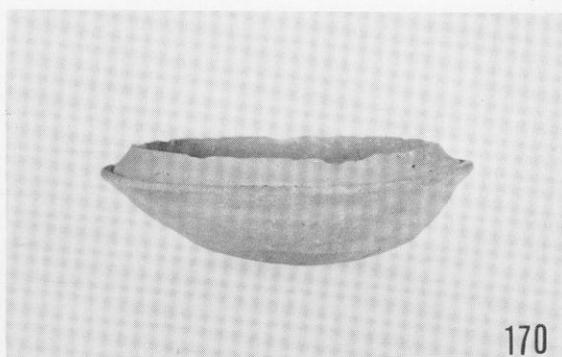


129

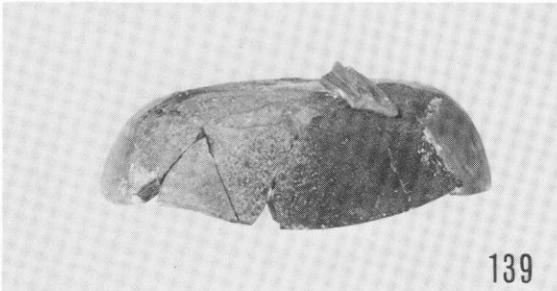
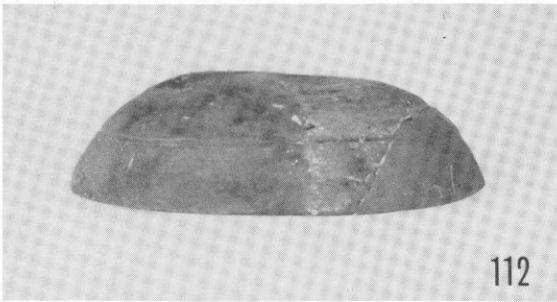
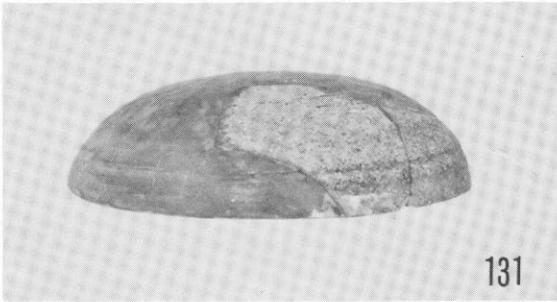
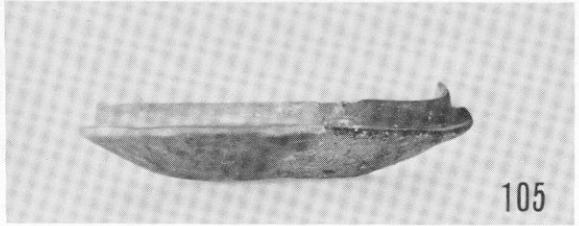
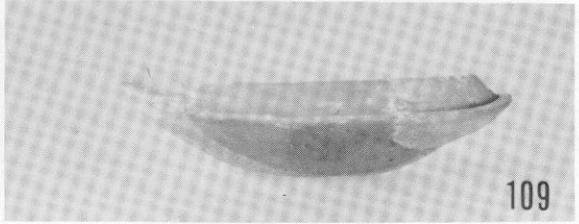
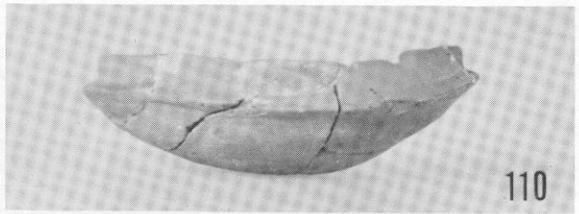


141

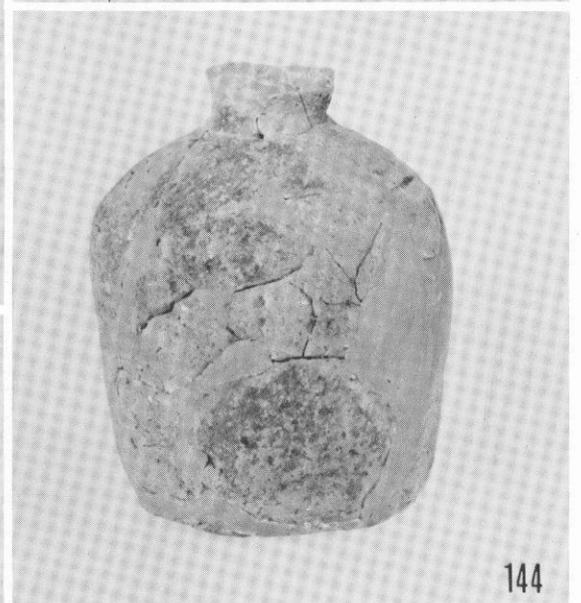
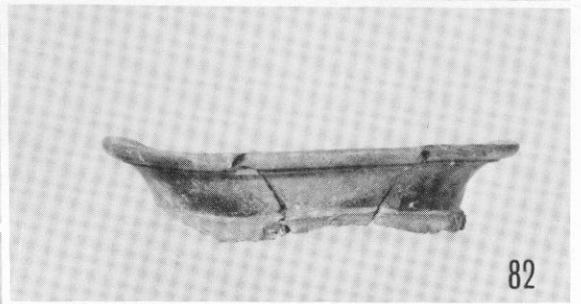
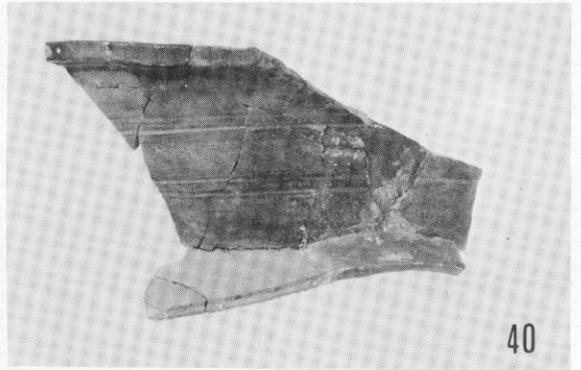
劍塚第3号墳周辺出土土器

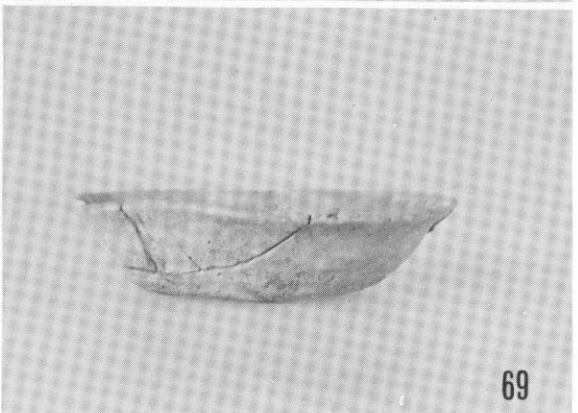
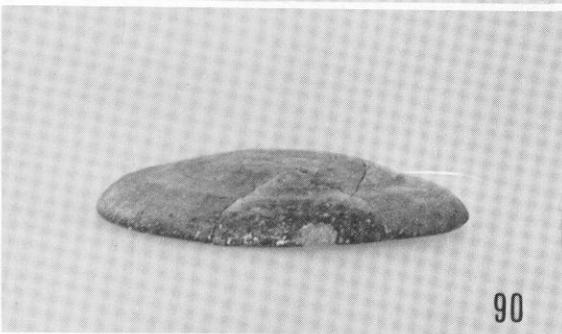
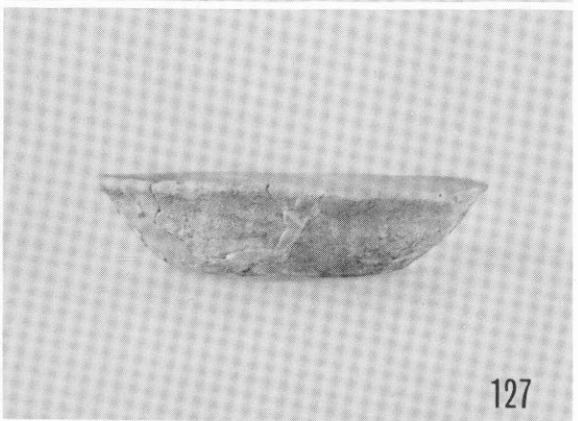
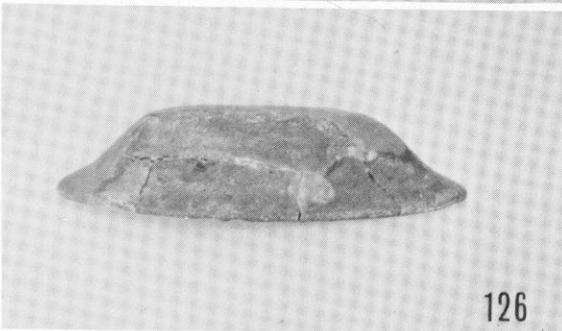
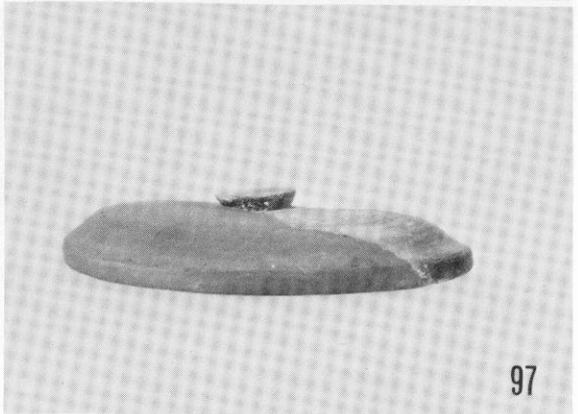
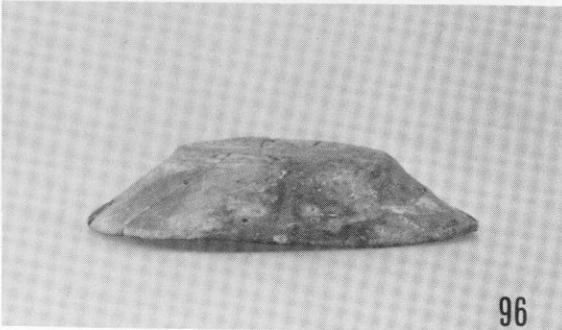
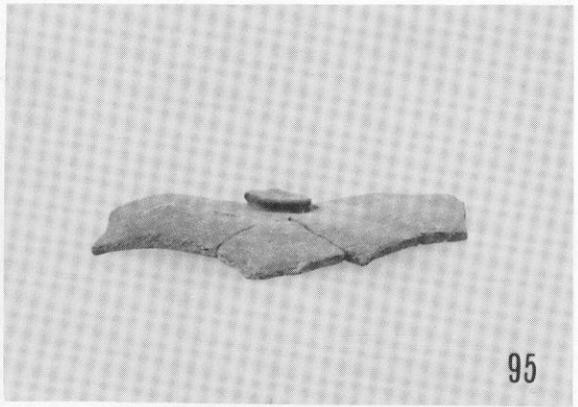
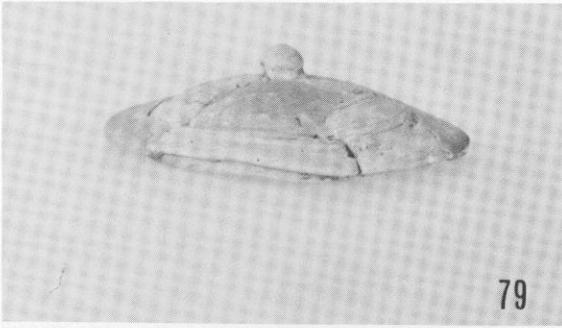


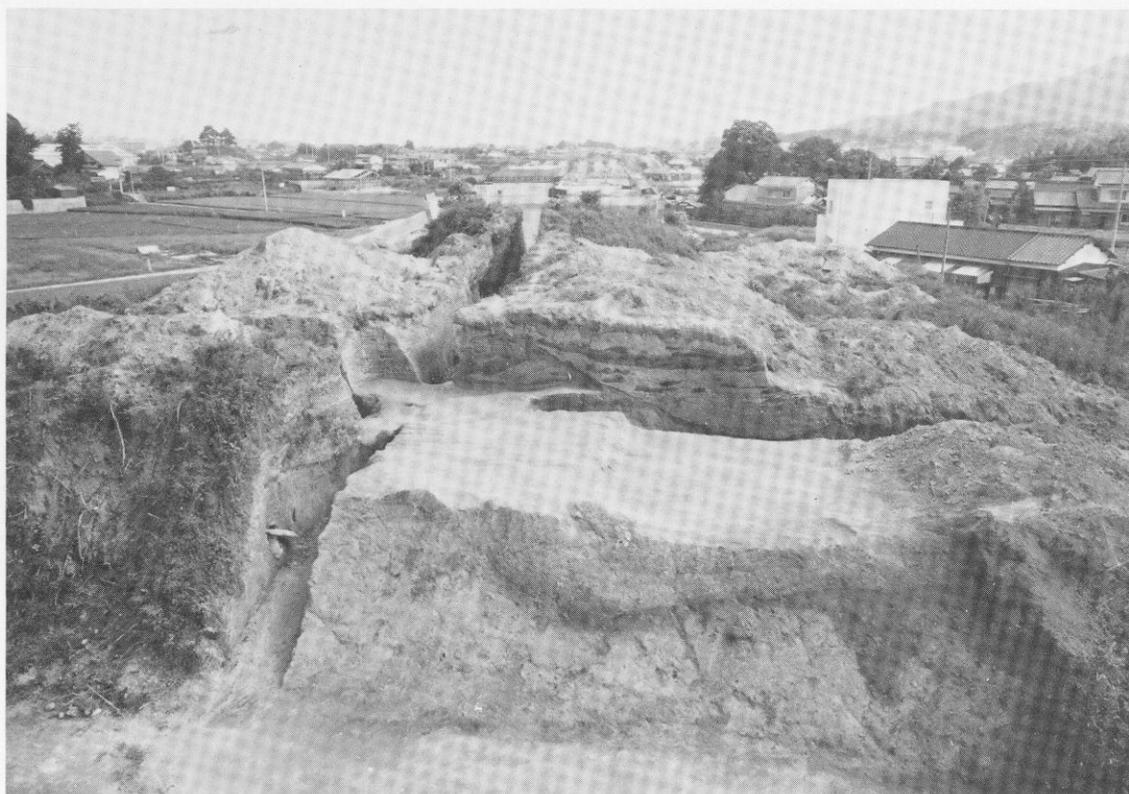
剣塚第11号住居跡出土土器



劍塚第 1 号墳出土土器 (左列最上段), 劍塚遺跡群出土土器 1



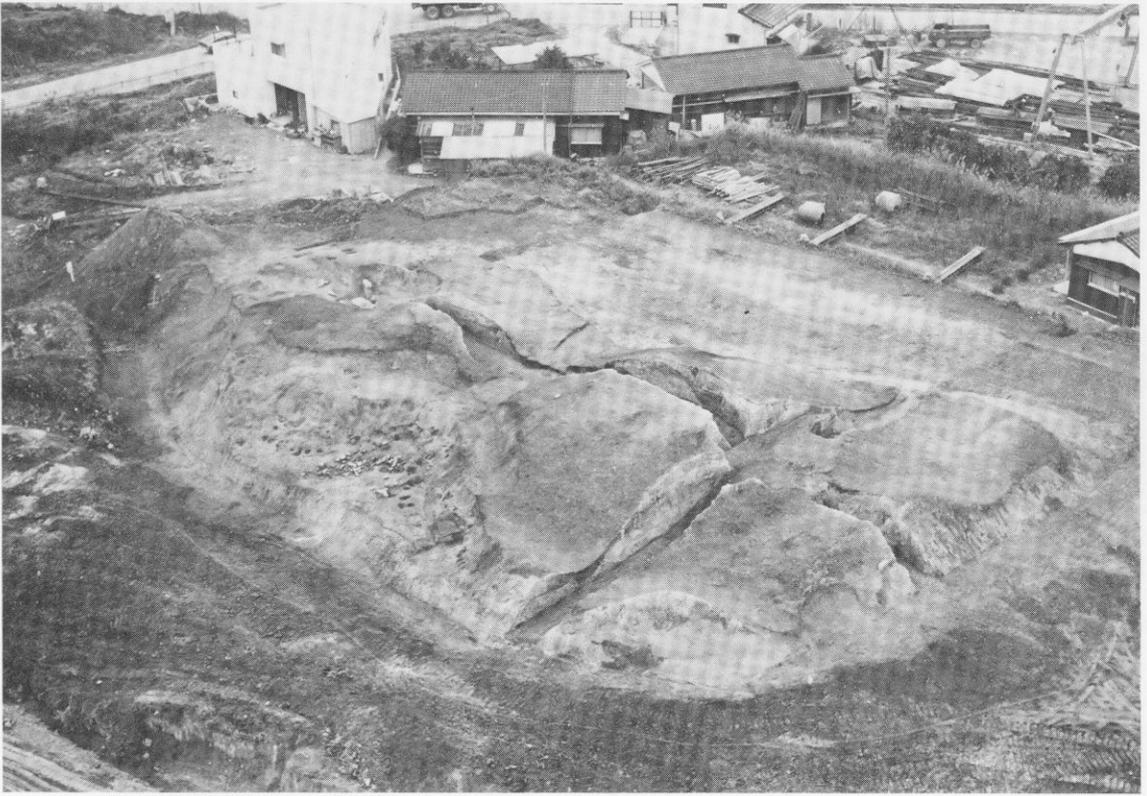




(1) 剣塚第1号墳前方部下の古剣塚第1号(A), 第2号墳(B)墳丘断面



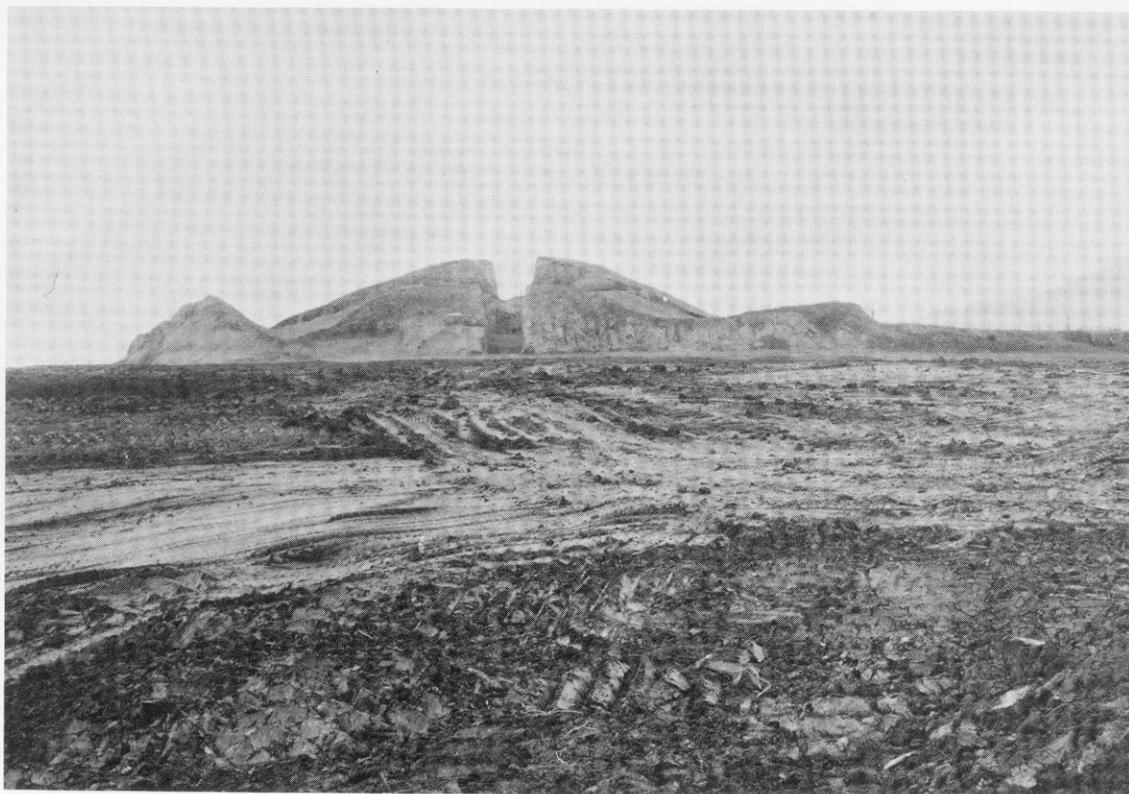
(2) 剣塚第1号墳前方部下の古剣塚第1号墳丘断面(A)



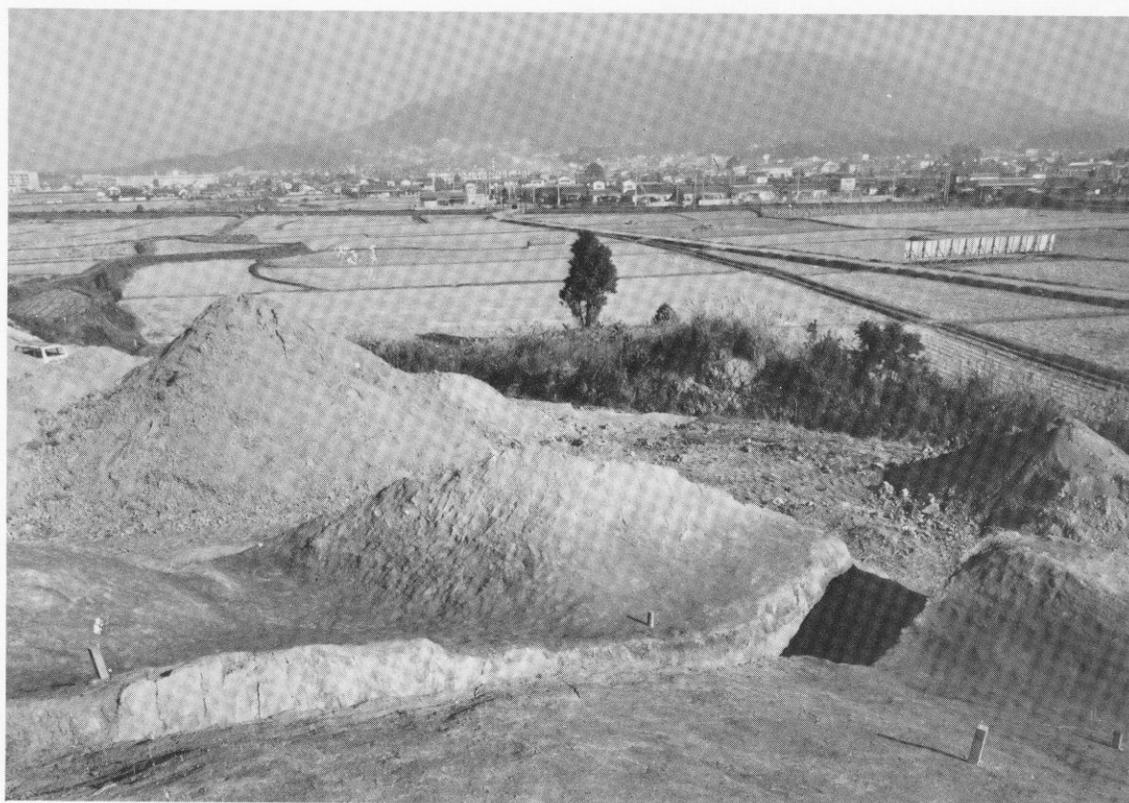
(1) 古剣塚第1～5号墳全景(北から)



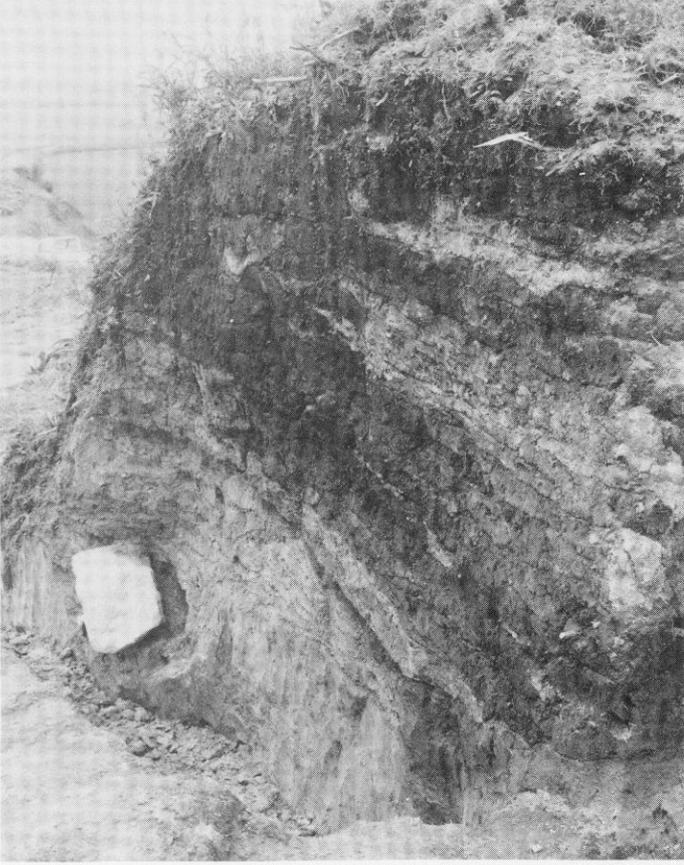
(2) 古剣塚第1～5号墳全景(南東から)



(1) 古剣塚第1～5号墳全景(北西から)



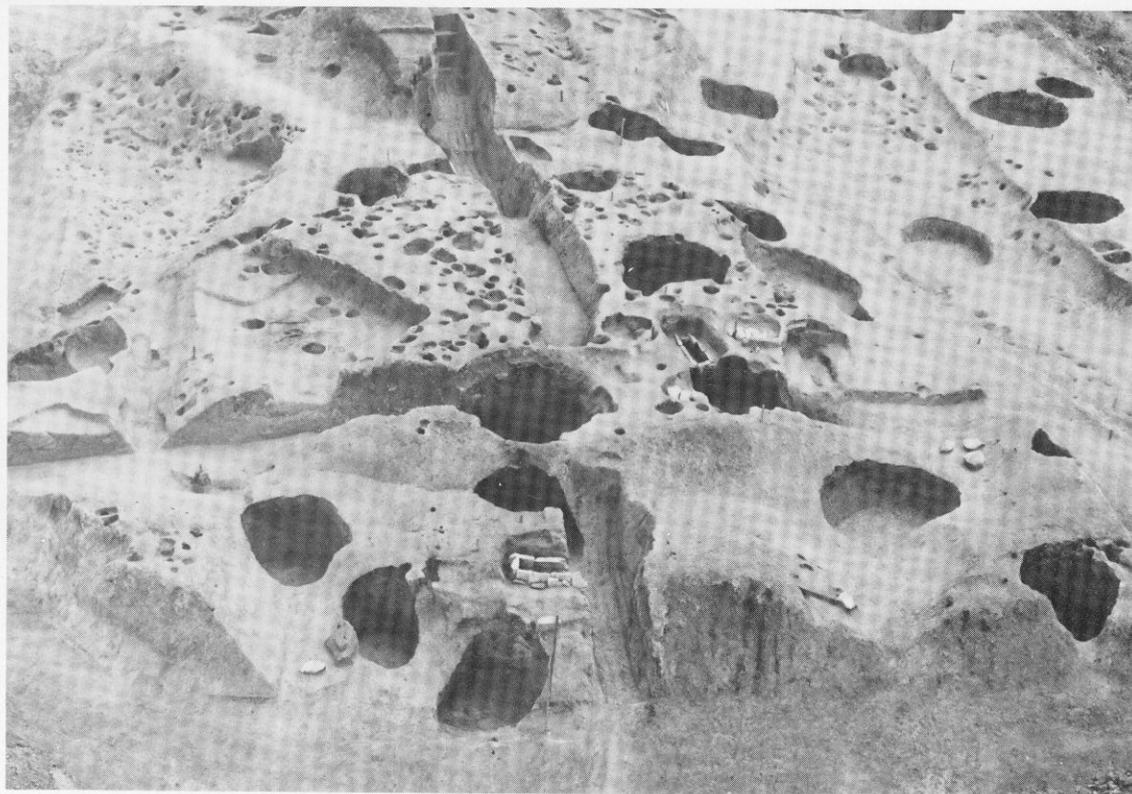
(2) 古剣塚第4号墳墳丘(第2号墳から一上方は四王寺山)



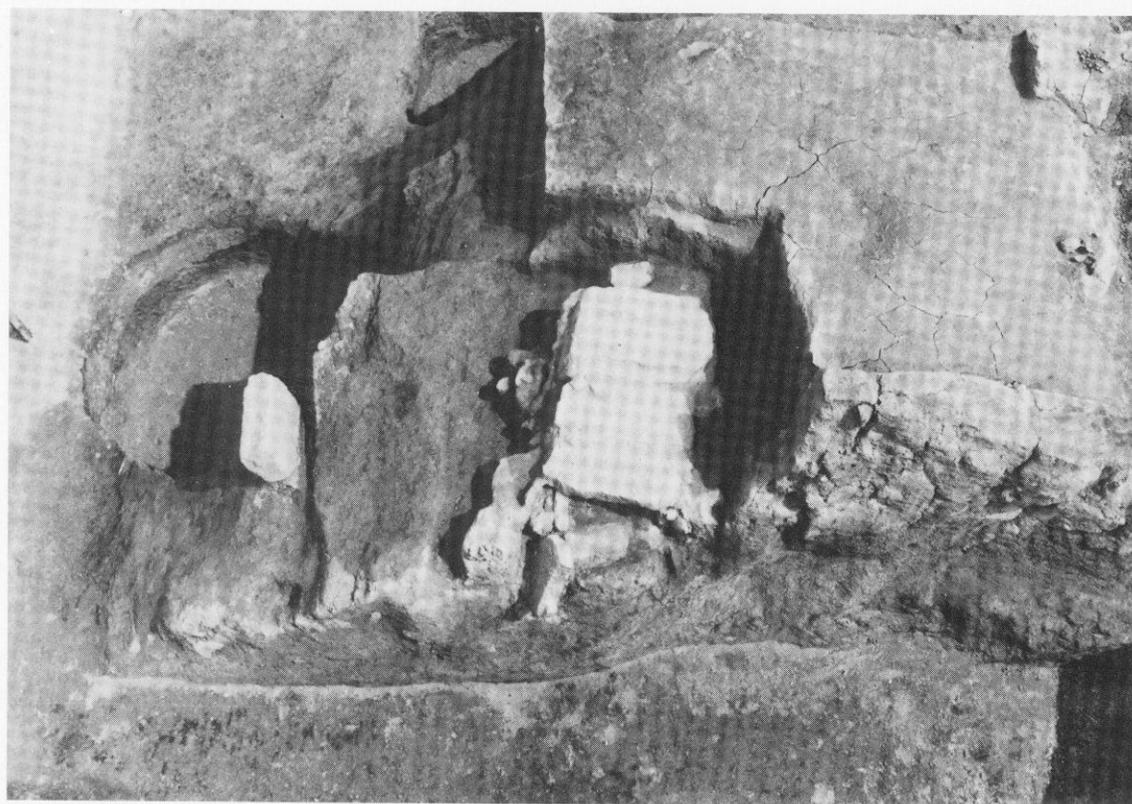
(1) 古剣塚第1号墳主体発見状況
(上部盛土は剣塚第1号墳前方部)



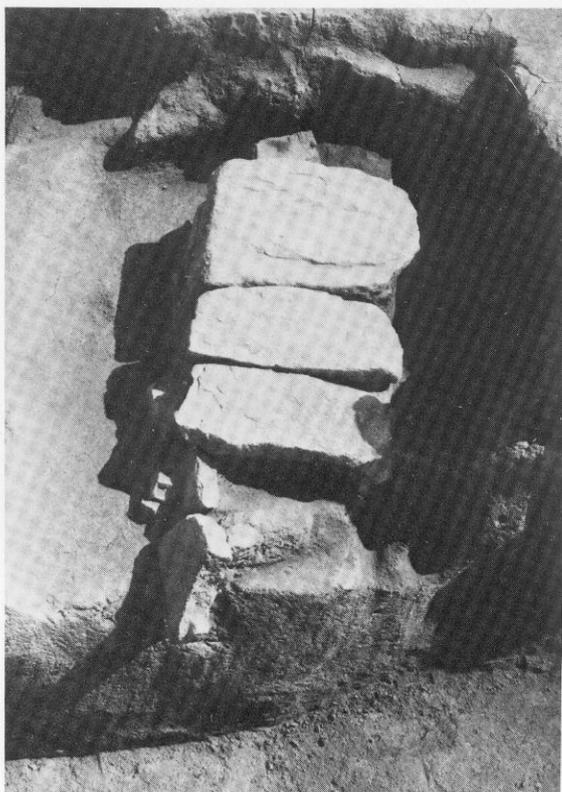
(2) 古剣塚第1号墳主体横断面



(1) 古剣塚第1号墳丘全景(上方は古剣塚第3号墳—北西から)



(2) 古剣塚第1号墳主体部全景(南西から)



(1) 古劍塚第1号墳第1号箱式石棺



(2) 同 (蓋石除去後)



(3) 同 側面補強状態



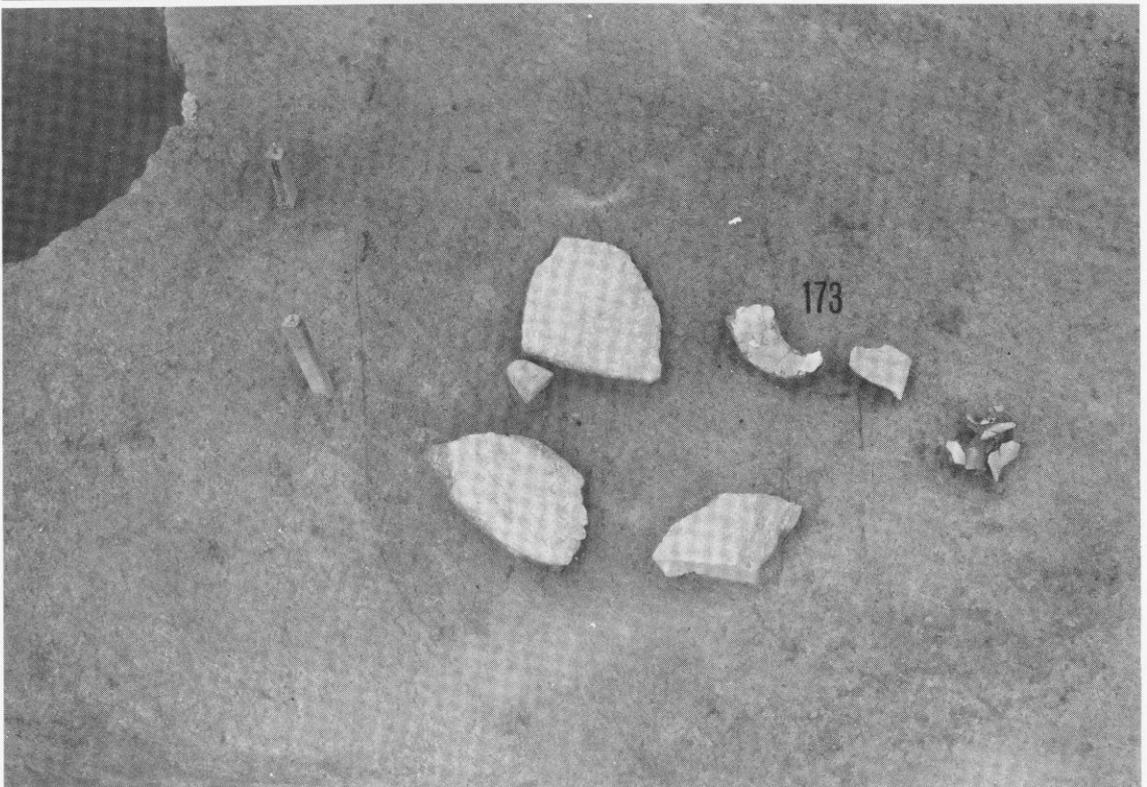
(1) 古剣塚第1号墳(右上方), 第2号墳(左), 第4号墳(右手前), 墳丘(北東から)



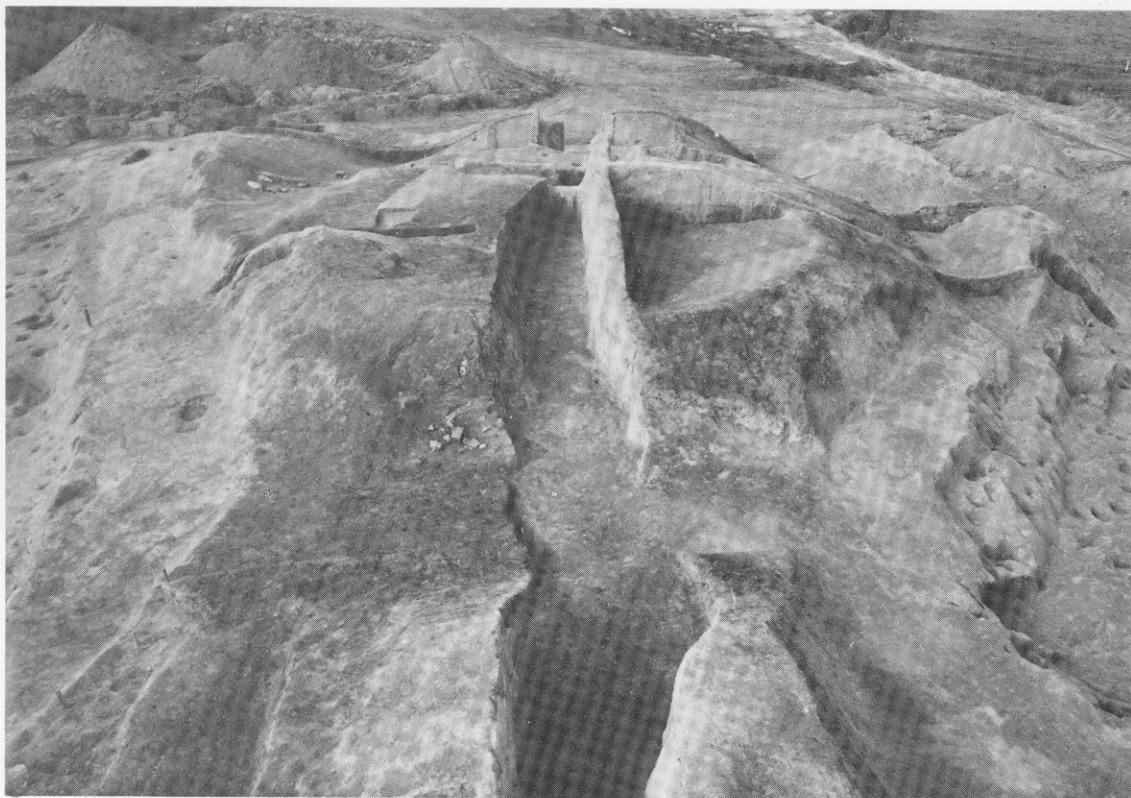
(2) 古剣塚第1・2号墳境溝堆積状態と高杯脚部出土状態



(1) 古剣塚第1・2号墳溝
および石材土器出土状態



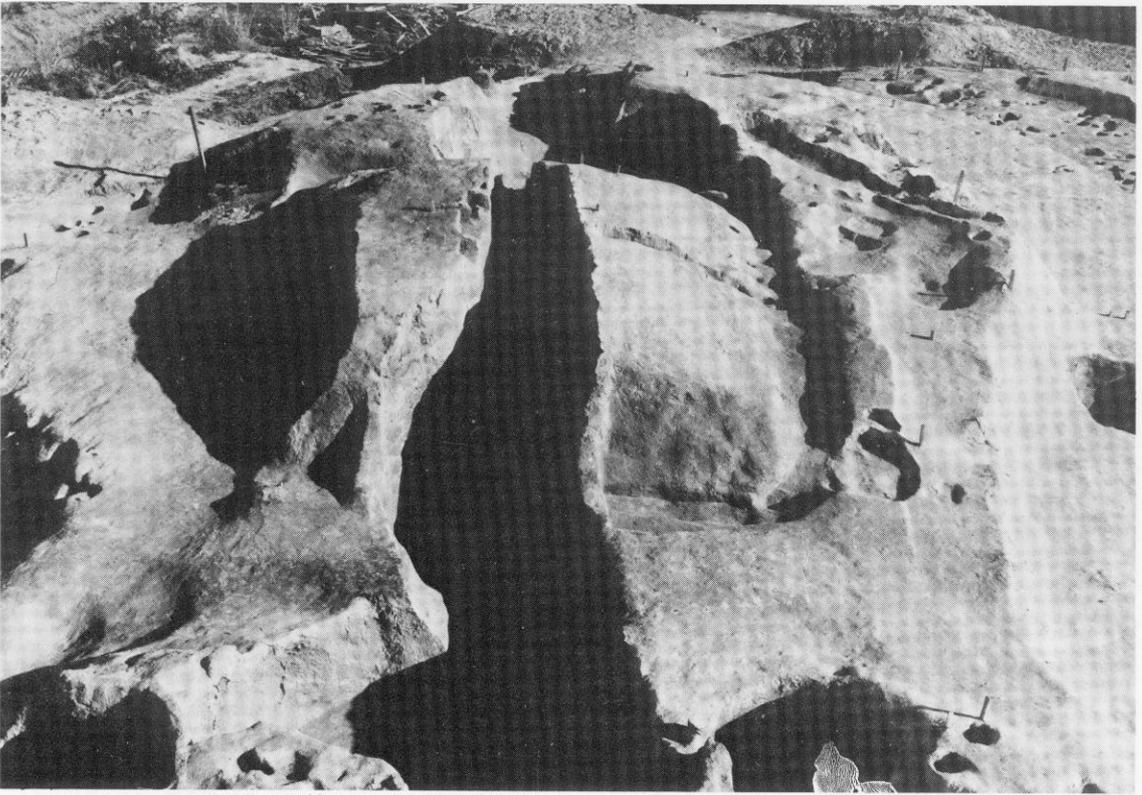
(2) 古剣塚第1・2号墳西側裾部石材および土器出土状態



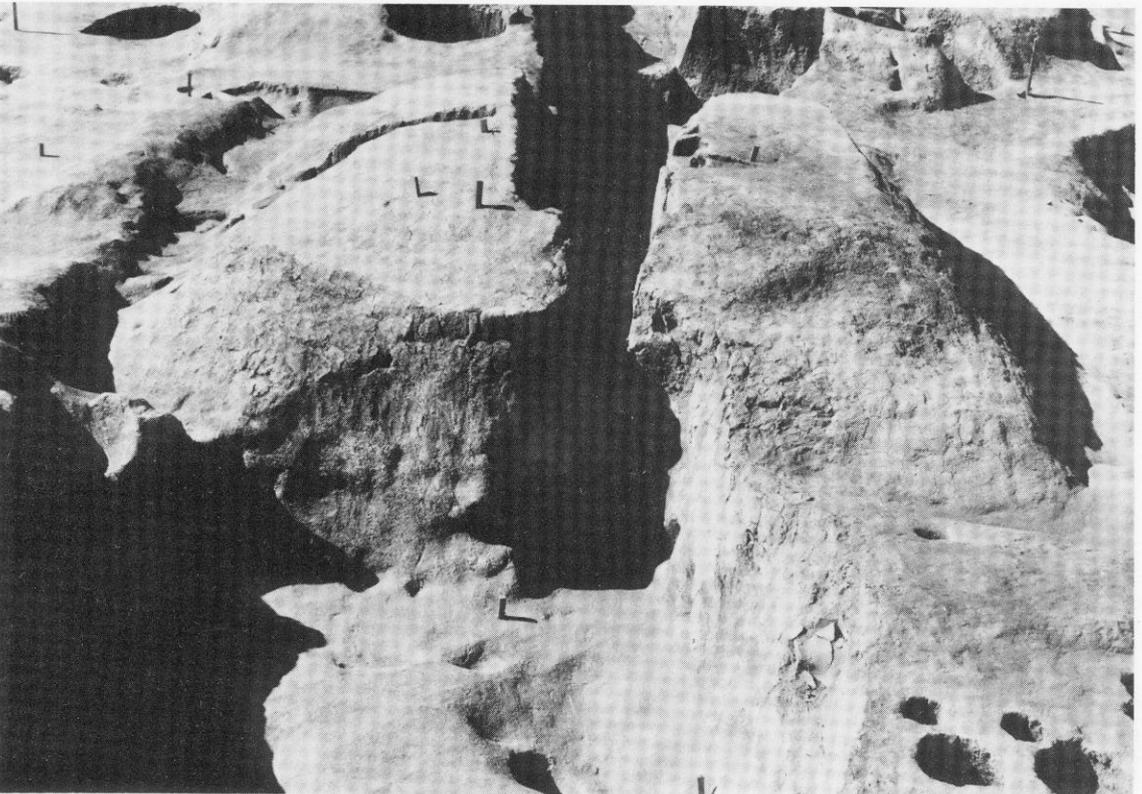
(1) 古剣塚第2号墳填丘カルデラ部



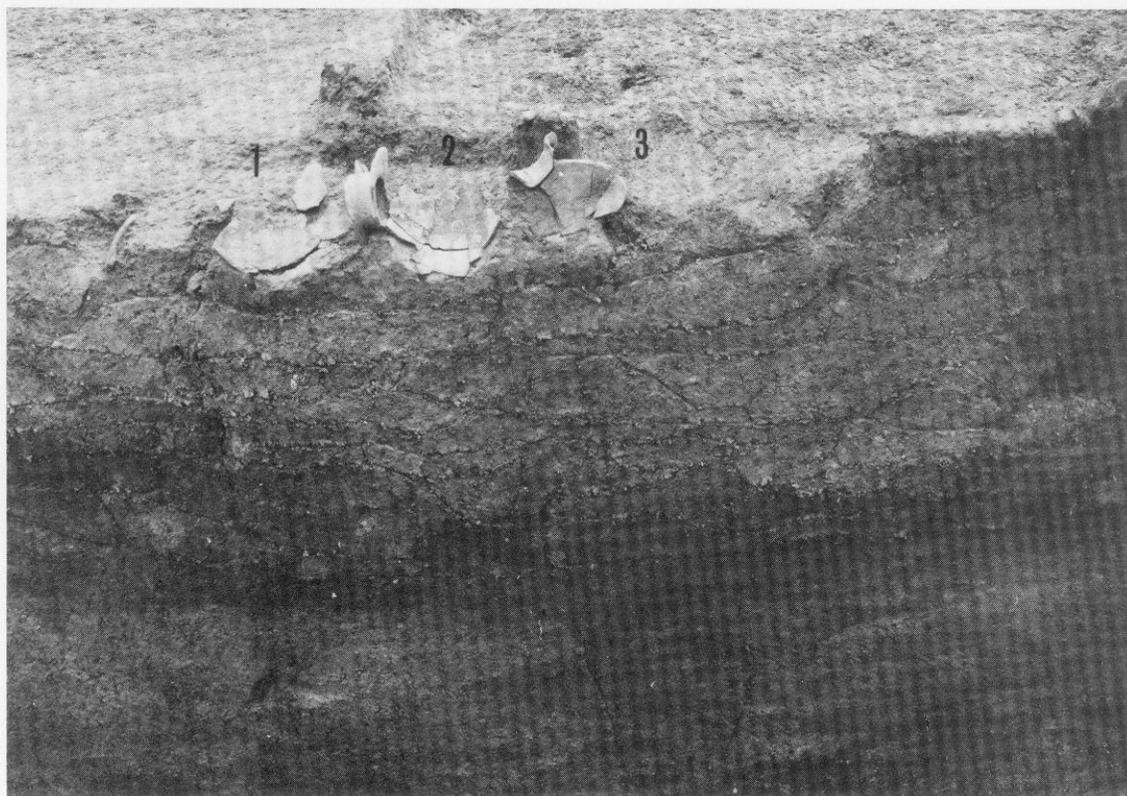
(2) 古剣塚第3号墳填丘全景(古剣塚第2号墳から)



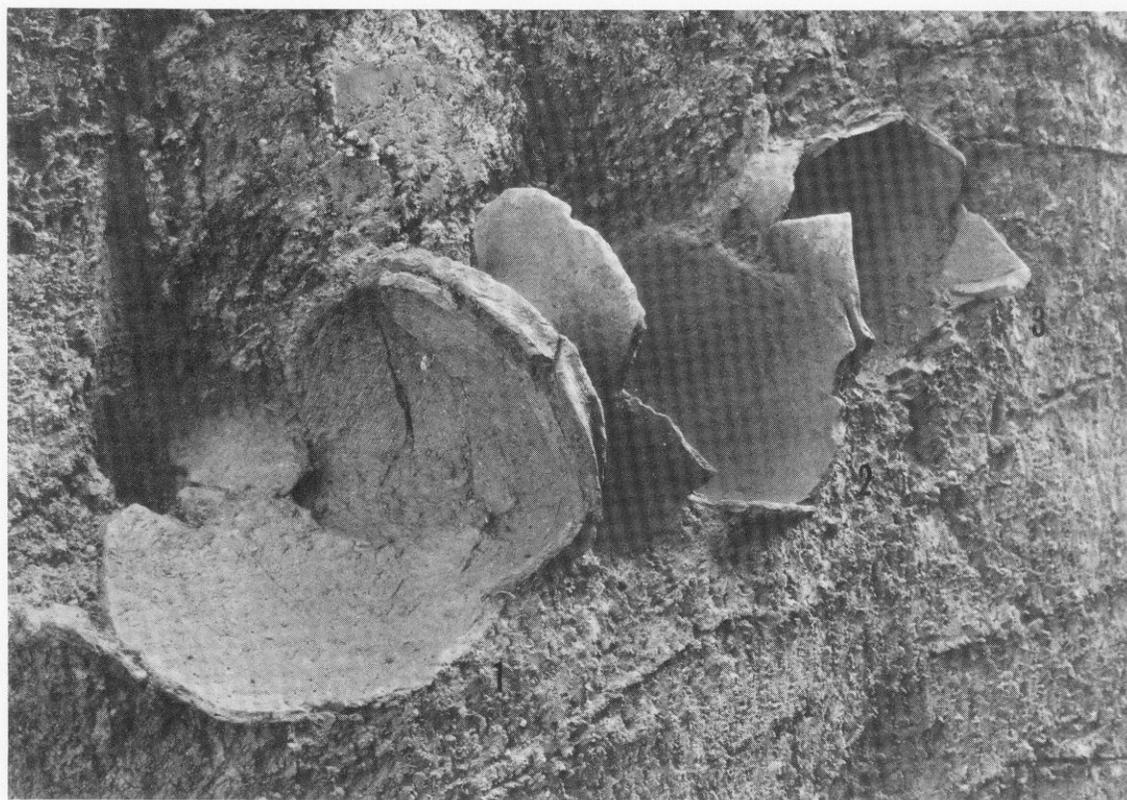
(1) 古剣塚第3号墳全景(周溝完掘後)



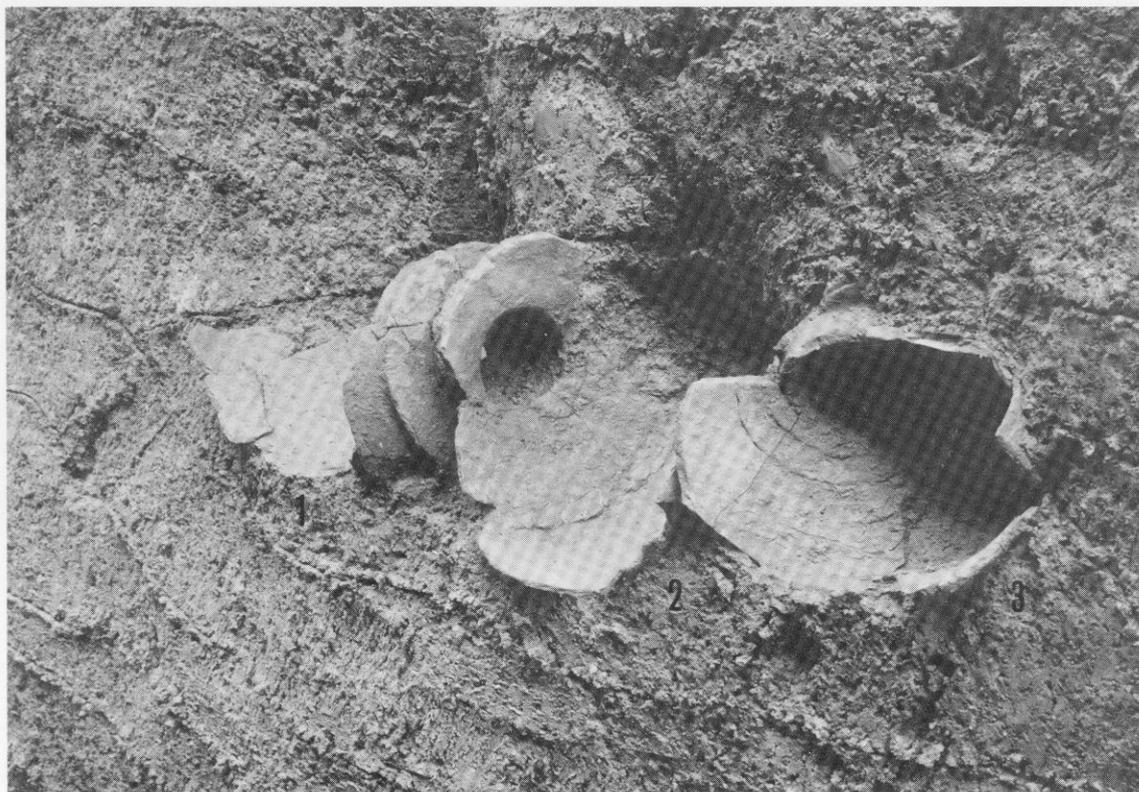
(2) 古剣塚第3号墳全景(手前は剣塚第1号墳墓壇)



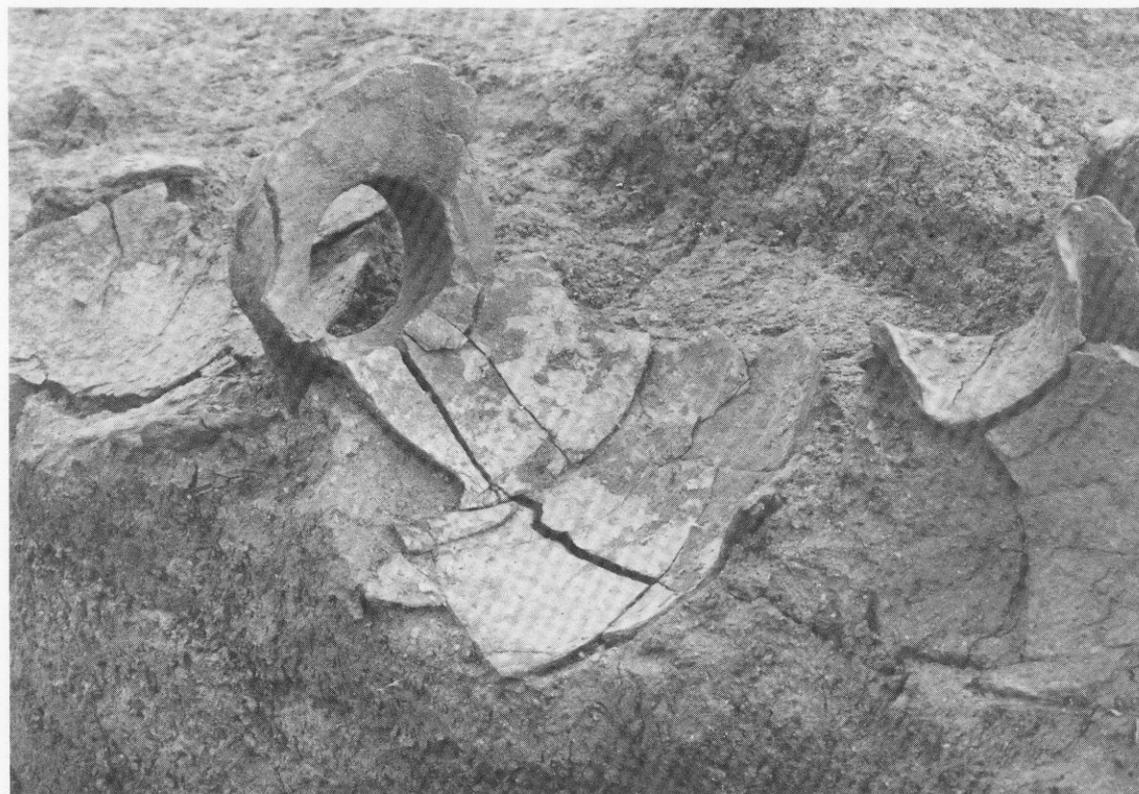
(1) 古劍塚第3号墳供献土器出土状態全景



(2) 古劍塚第3号墳供献土器近景 1



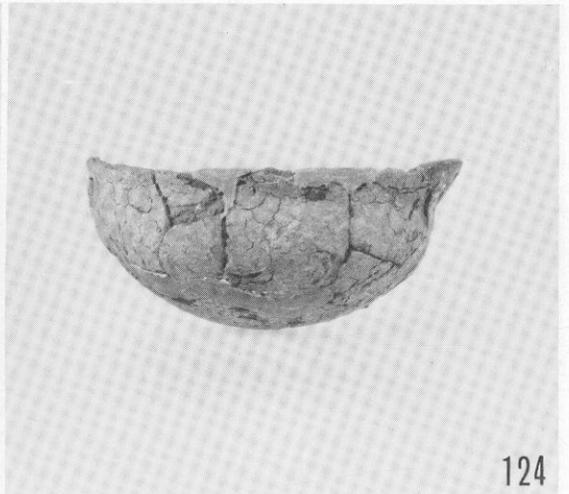
(1) 古劍塚第3号墳供献土器近景 2



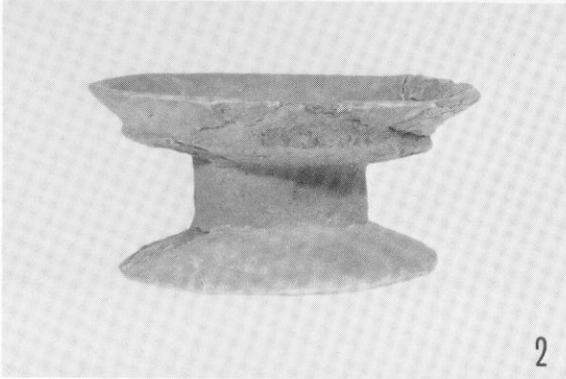
(2) 古劍塚第3号墳供献土器近景 3



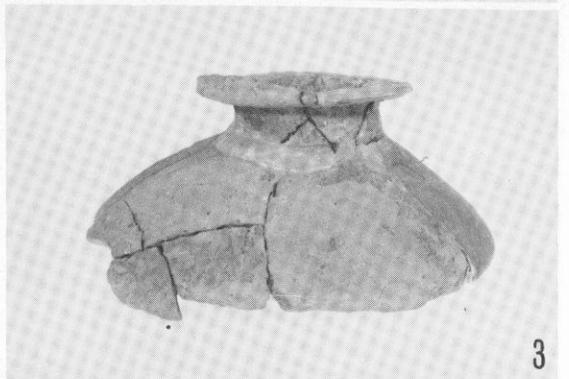
123



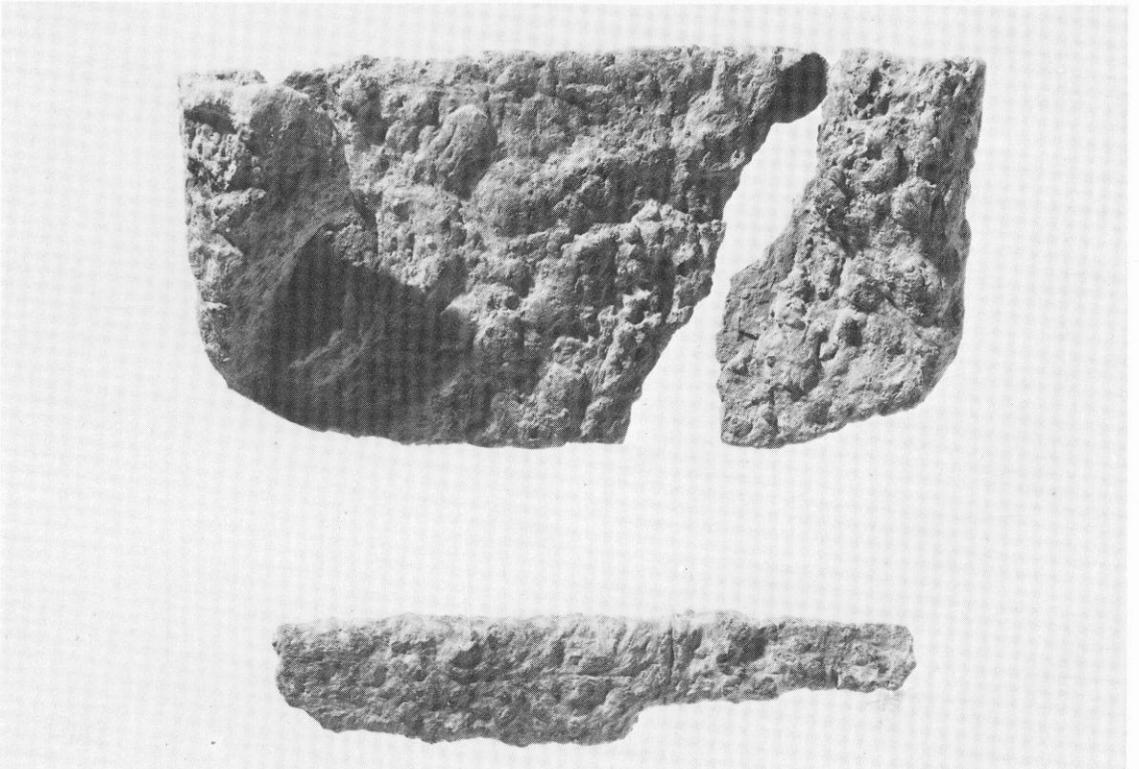
124



2



3

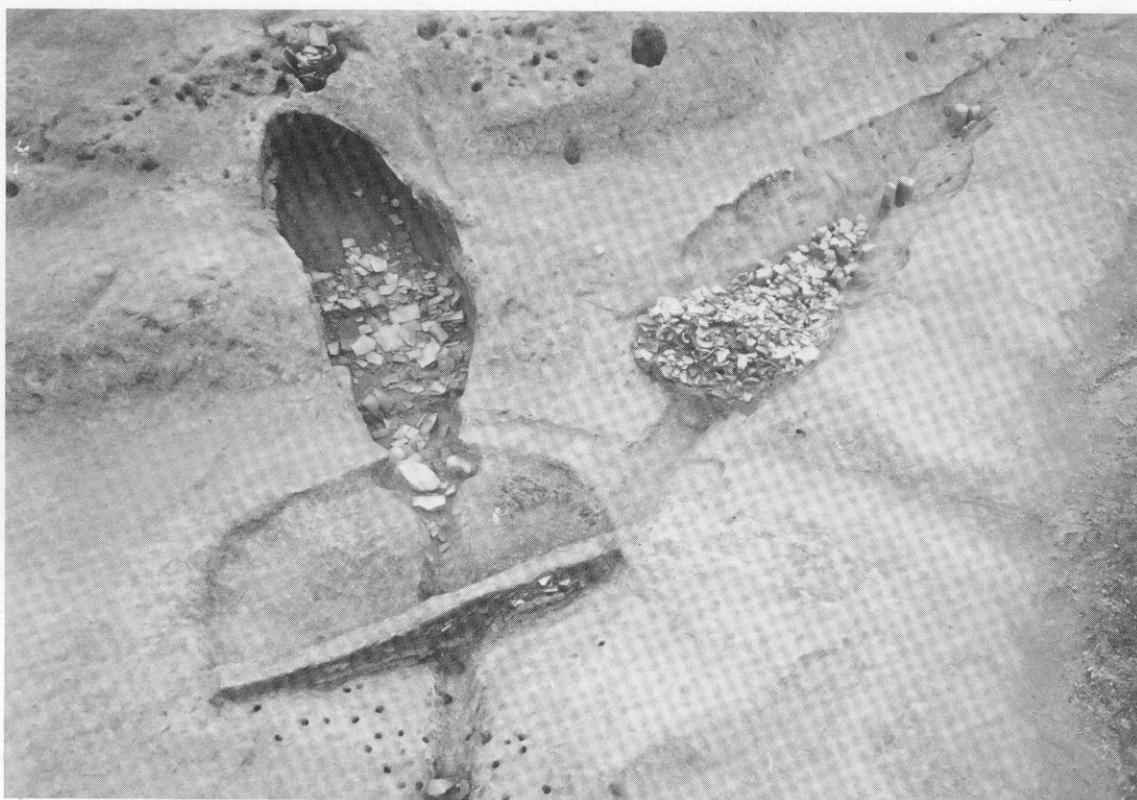


古劍塚第1・3号墳出土遺物

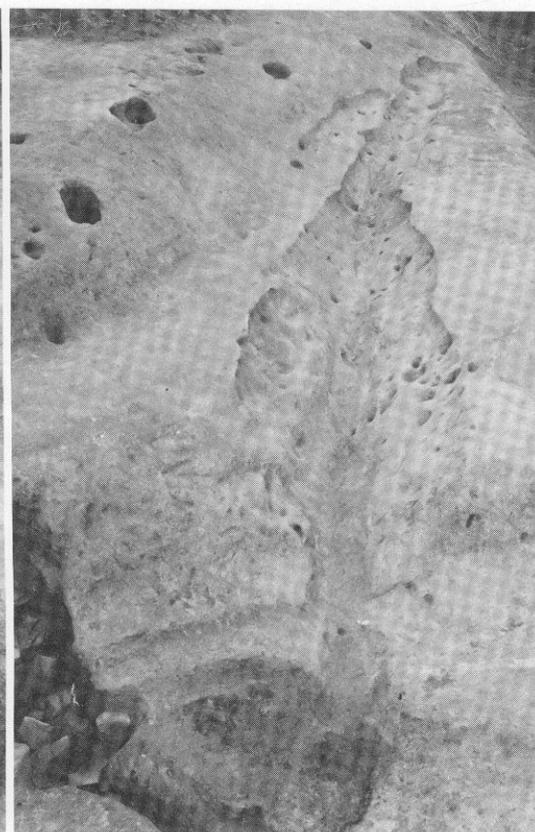
上段——古劍塚第1号墳出土土器

中段——古劍塚第2号墳出土土器

下段——古劍塚第2号墳填丘盛土内出土鉄器



(1) 劍塚第1号瓦窯全景



(2) 劍塚第1号瓦窯西側溝狀遺構瓦堆積狀態 (3) 同 瓦除去後



劍塚第1号瓦窯全景



(1) 剣塚第1号瓦窯
煙道先端



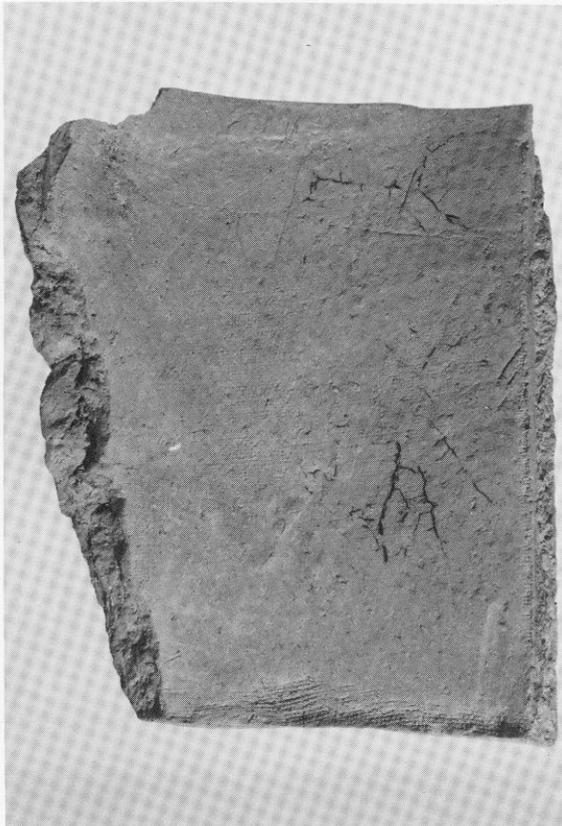
(2) 剣塚第1号瓦窯
焼成室床面の構造
(手前は階部)



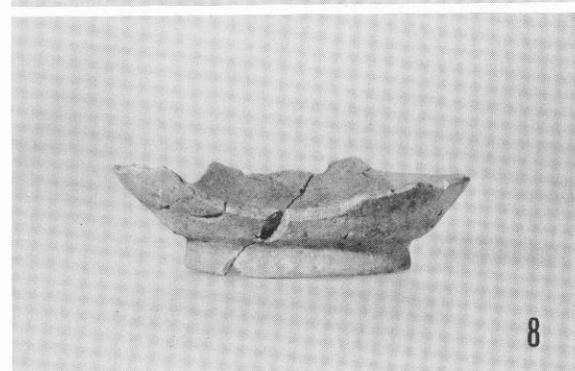
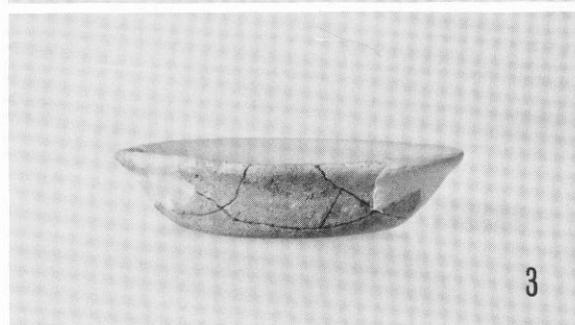
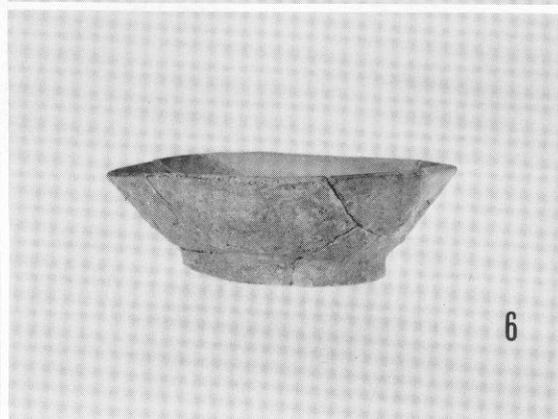
剣塚1号瓦窯跡・溝状遺構出土軒平瓦・文字瓦・その他



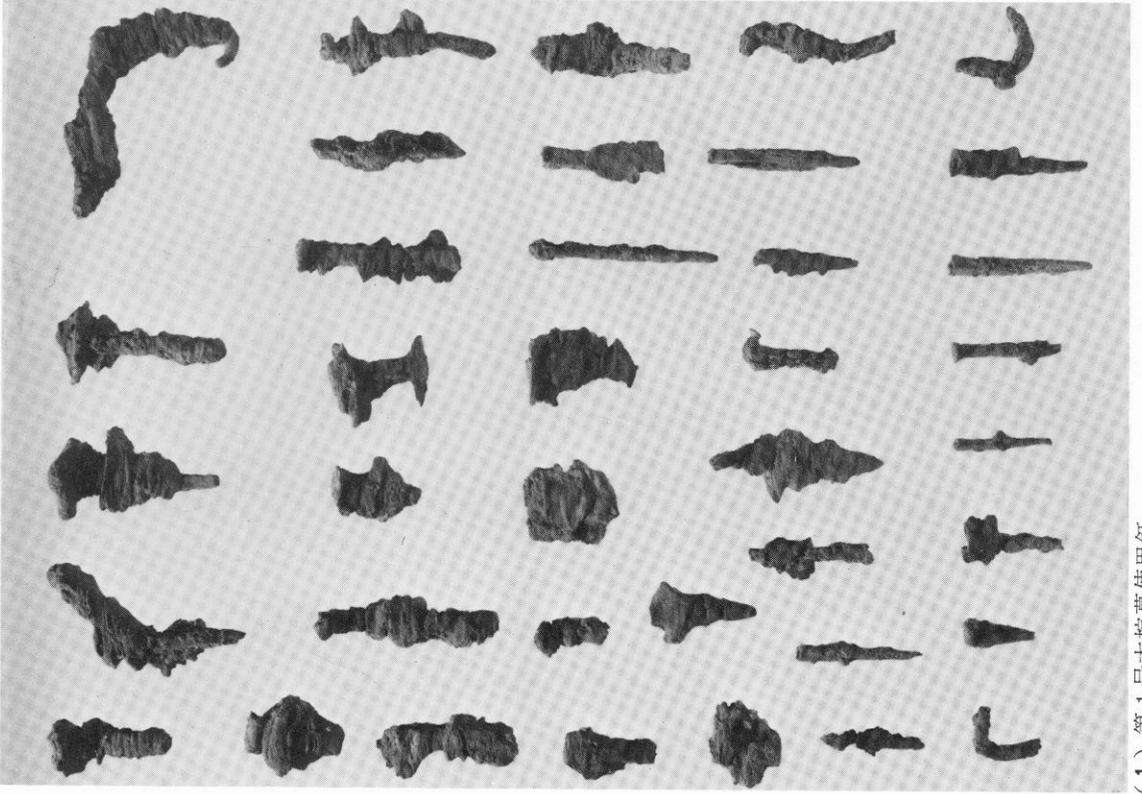
劍塚 1 号瓦窯跡出土瓦類



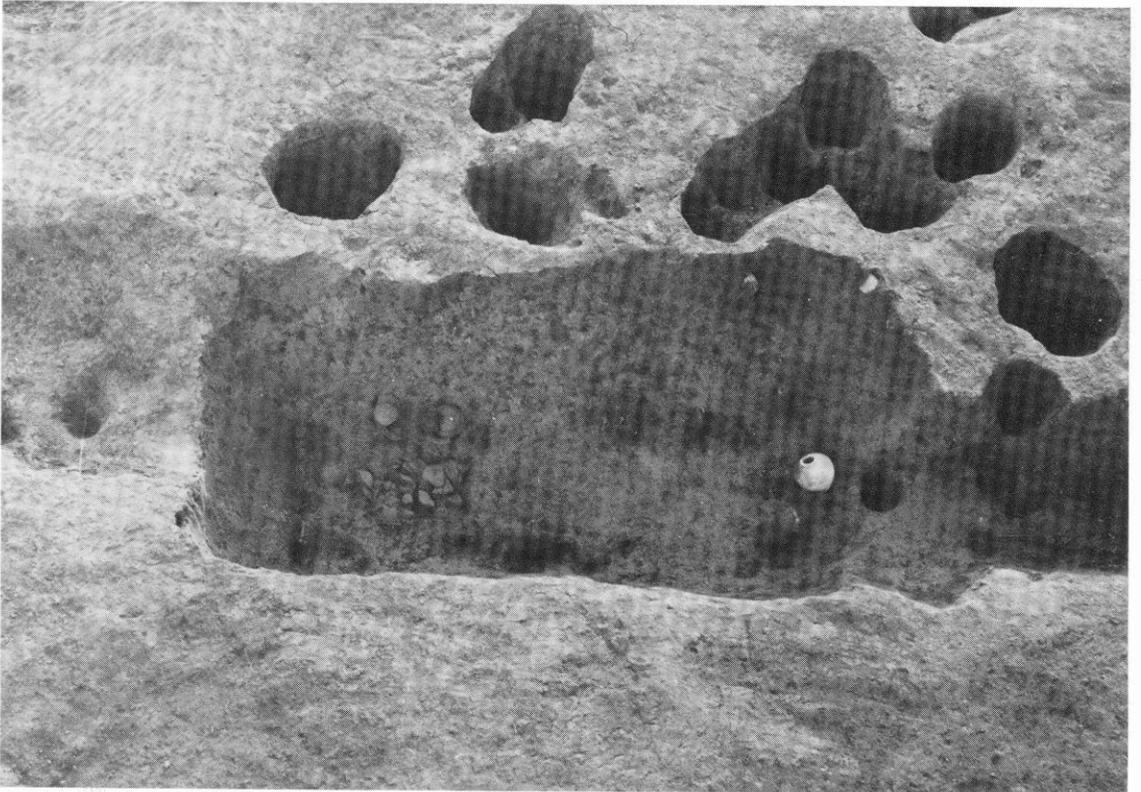
剣塚 1号瓦窯跡出土丸・平瓦



剣塚第1号瓦窯内出土土器



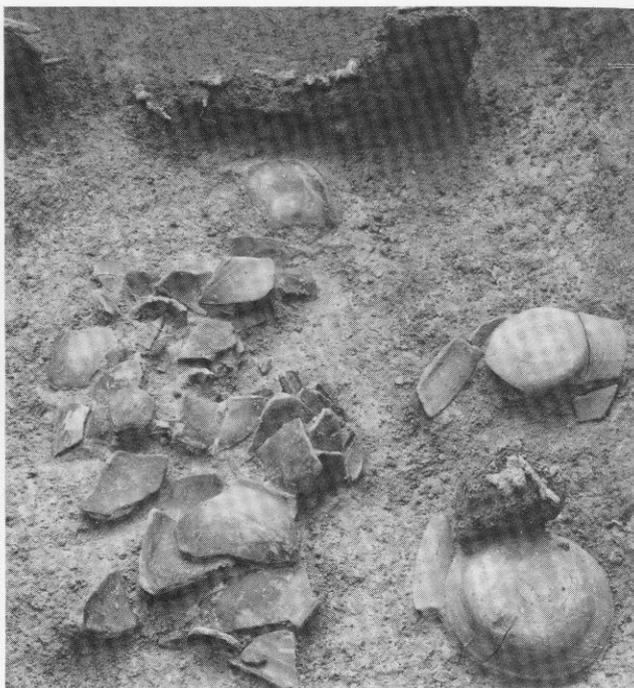
(1) 第1号木棺墓使用釘



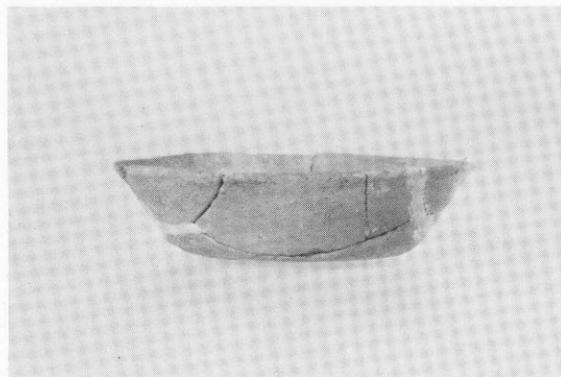
(2) 第2号木棺墓(東から)



(2) 第2号木棺墓副葬灰釉長頸壺



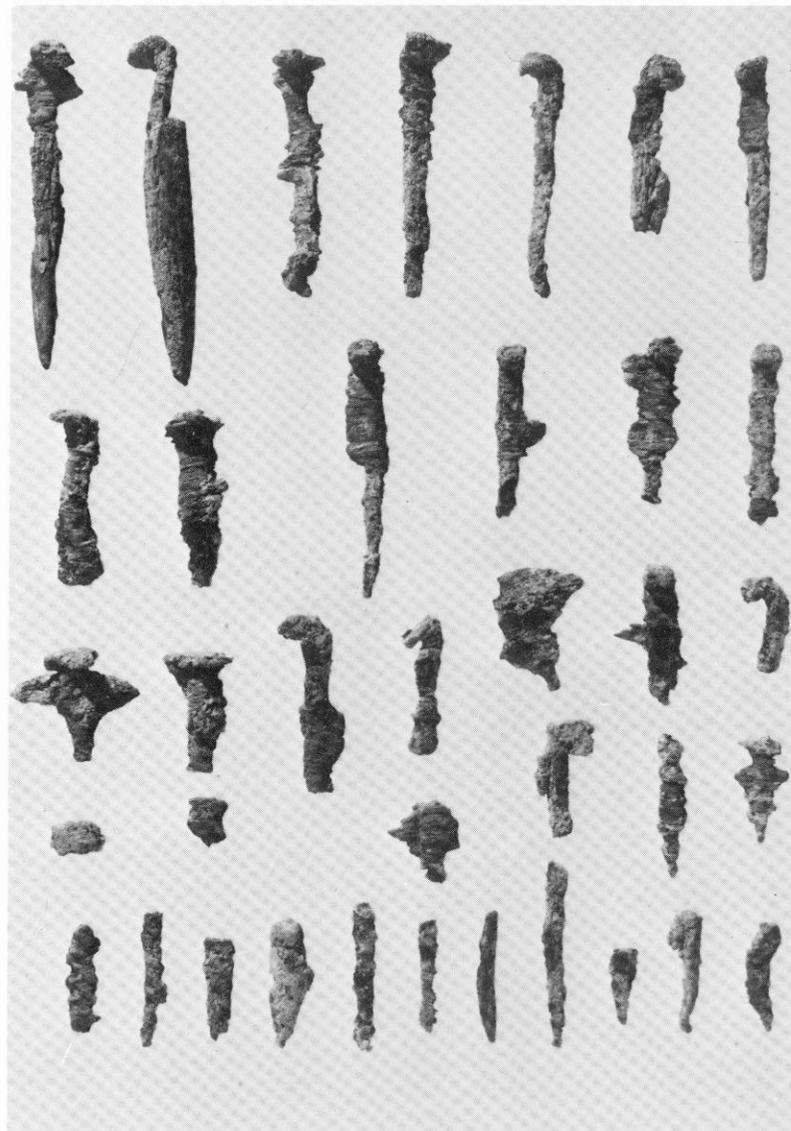
(1) 第2号木棺墓副葬品出土狀況 (南半)



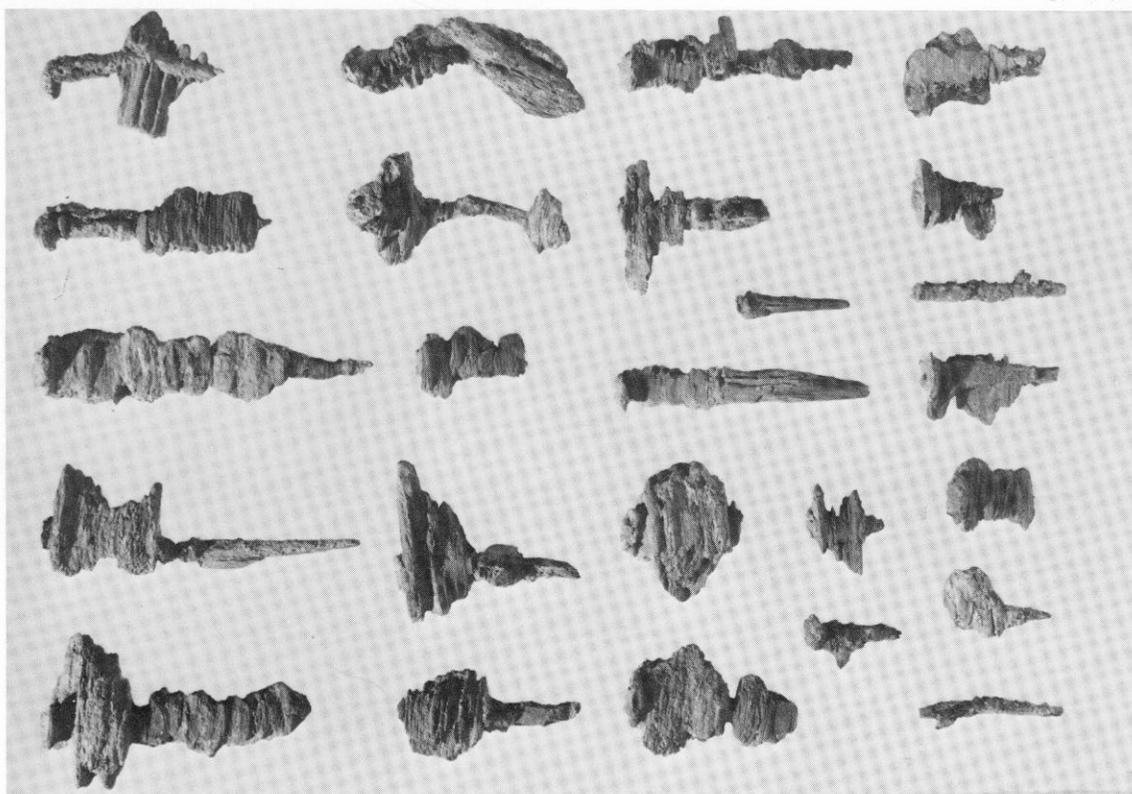
(3) 第2号木棺墓副葬土師器・黒色土器



(2) 第3号木棺墓 (北から)



(1) 第2号木棺墓使用釘



(1) 第3号木棺墓使用釘

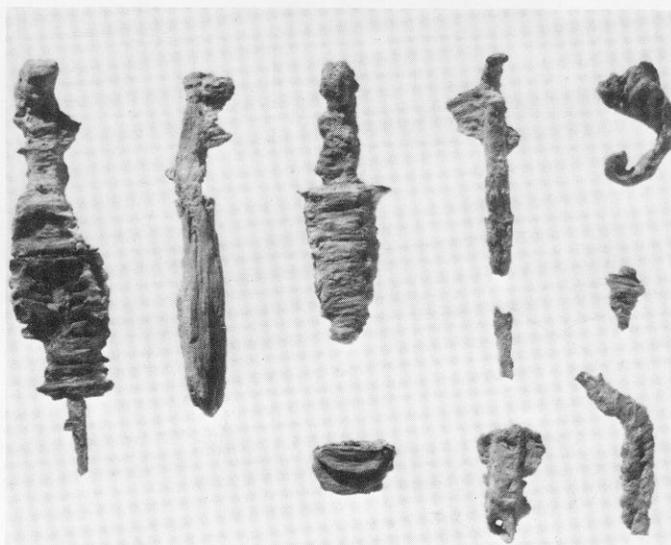
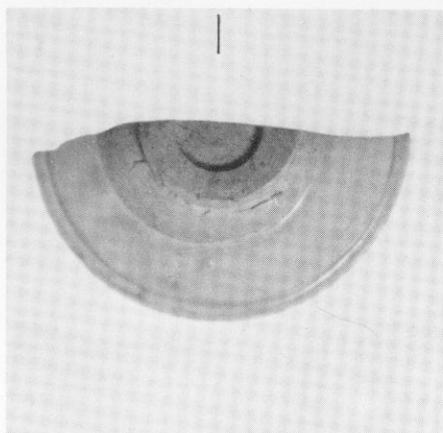
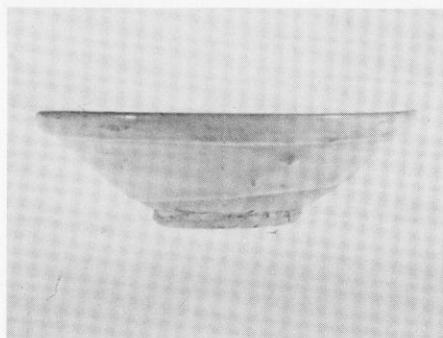
(2) 第3号木棺墓副葬土師器



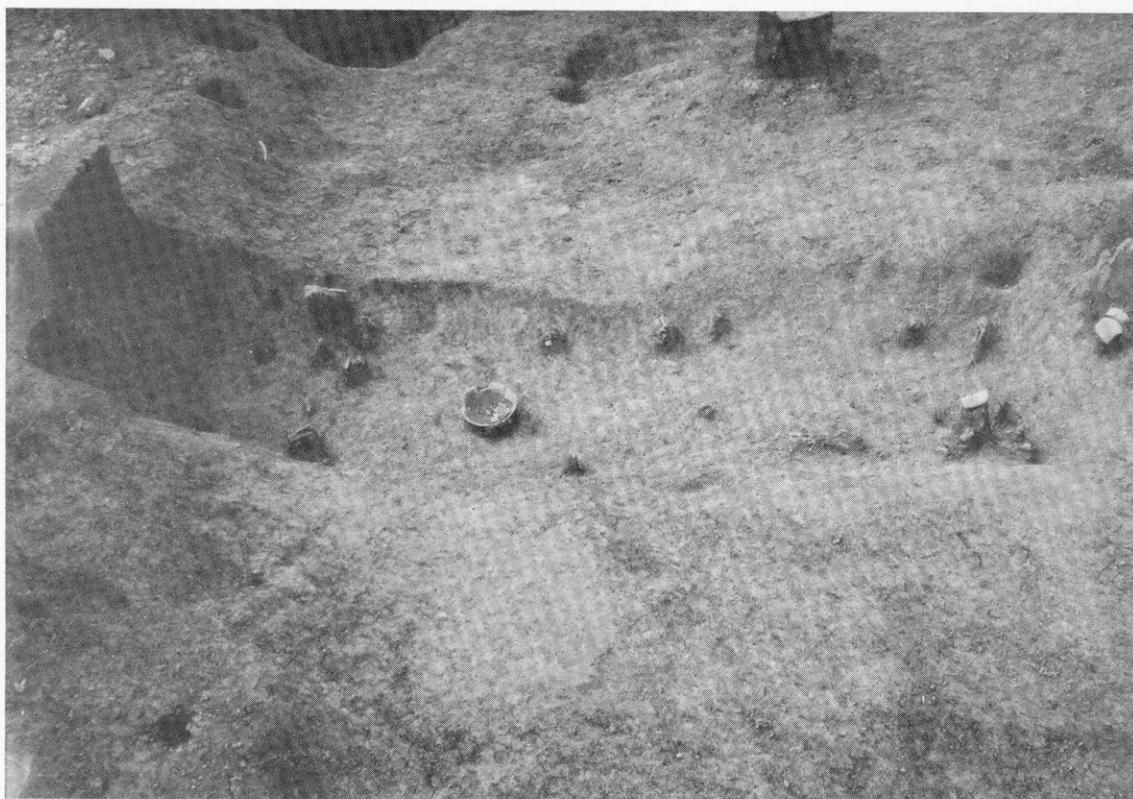
(3) 第4号木棺墓出土スクレイパー



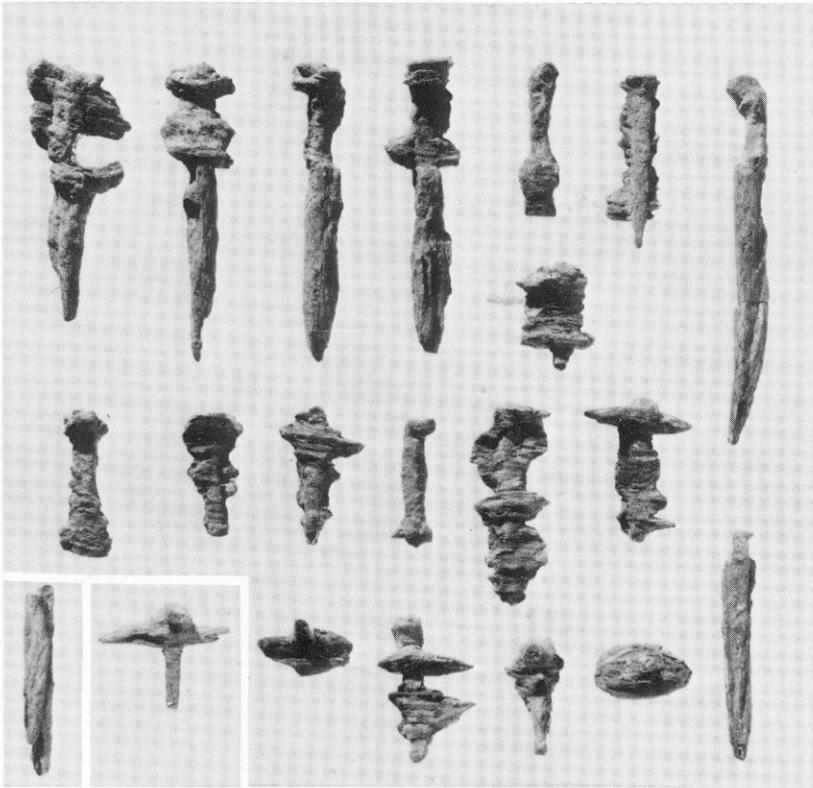
(4) 第4号木棺墓 (東から)



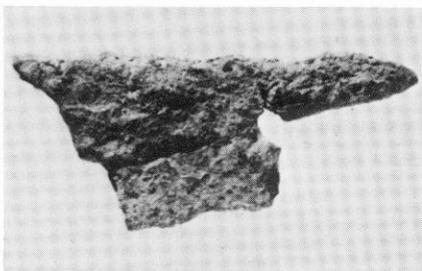
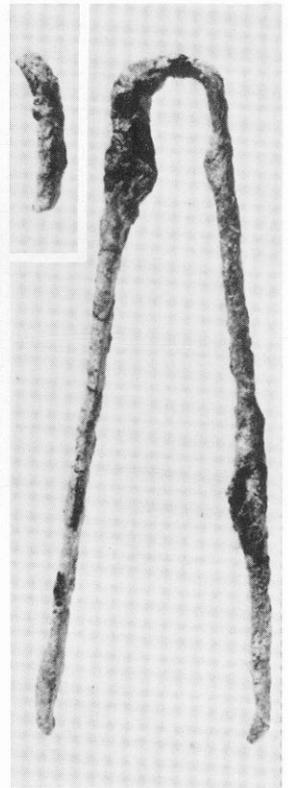
(1) 第4号木棺墓副葬白磁碗・土師器碗・使用釘



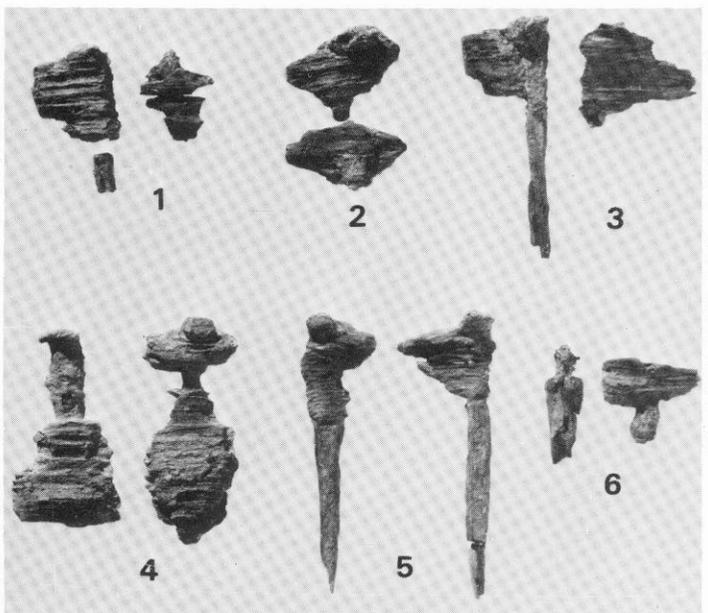
(2) 第5号木棺墓



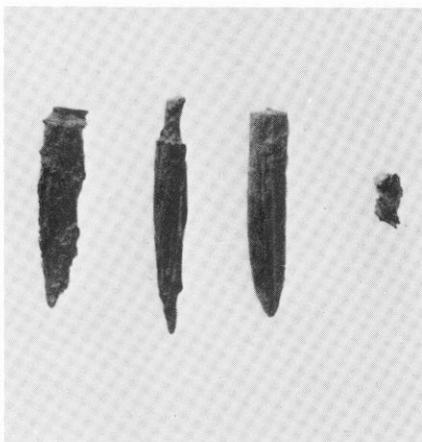
(1) 第5号木棺墓使用釘



(3) 第5号木棺墓副葬刀子



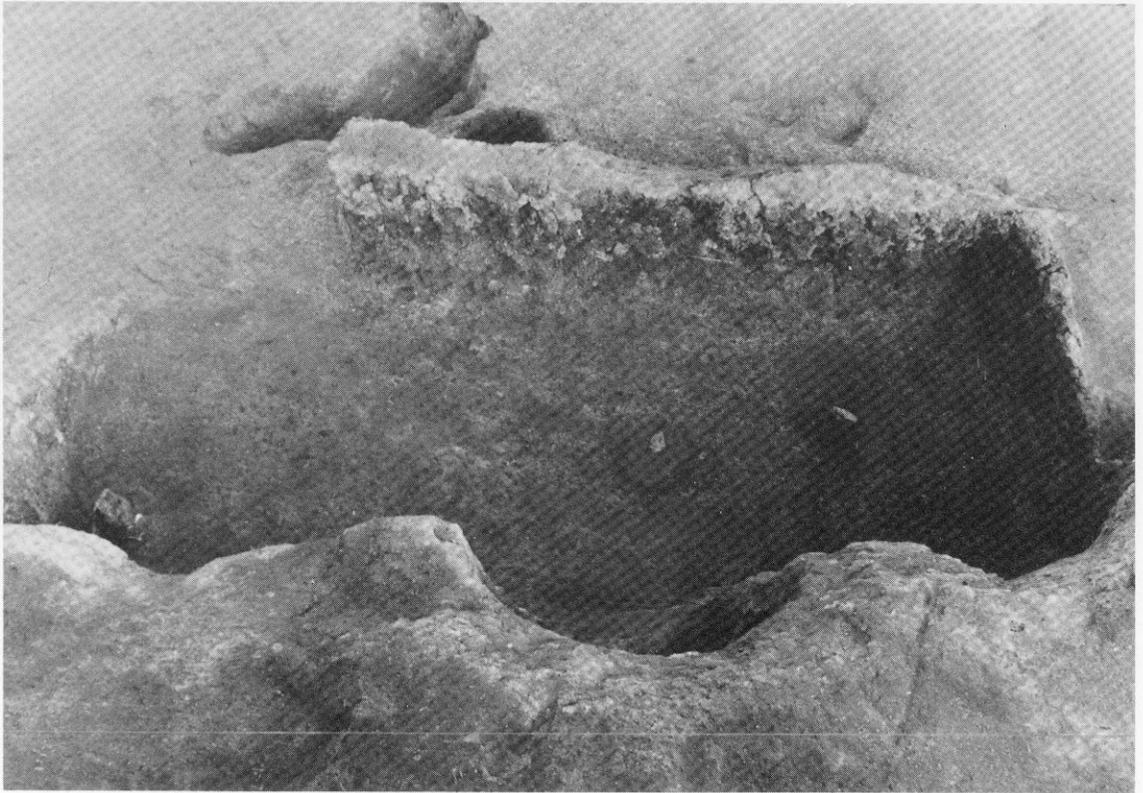
(6) 各木棺墓使用釘附着木質鑑定資料



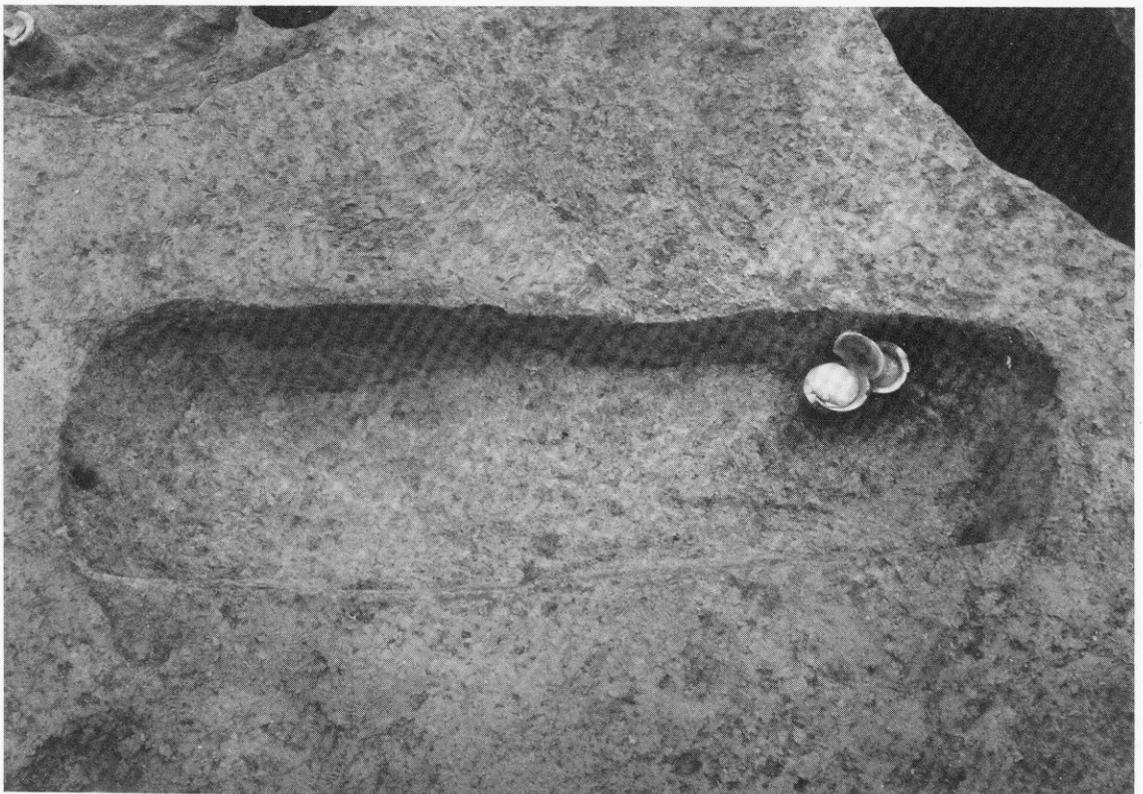
(4) 第6号木棺墓使用釘



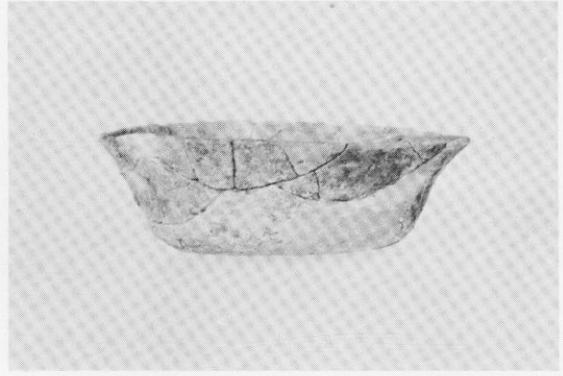
(5) 第6号木棺墓副葬土師器



(1) 第6号木棺墓 (西から)



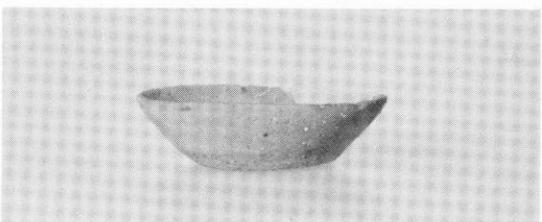
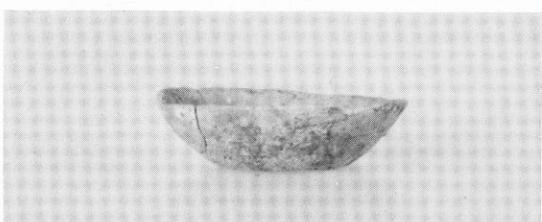
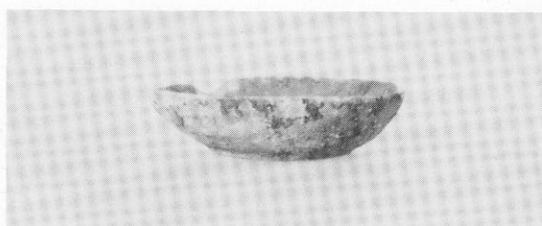
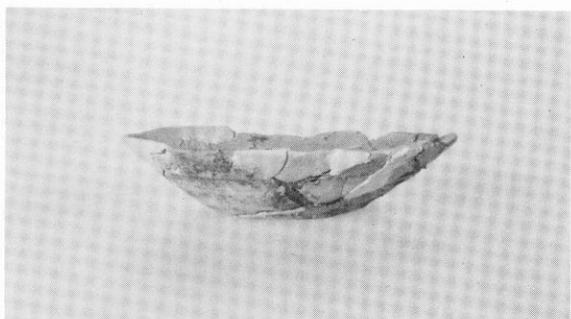
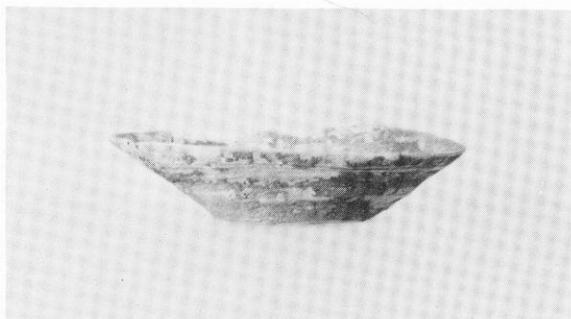
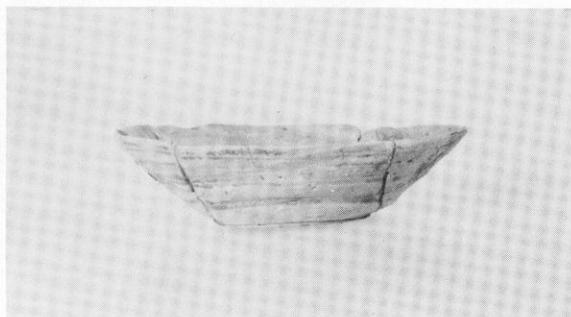
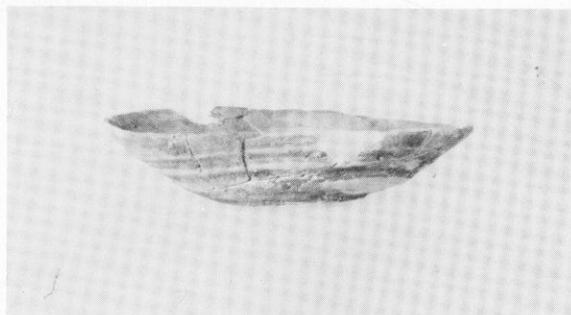
(2) 第1号土壙墓 (東から)



(1) 第1号土塚墓副葬土師器



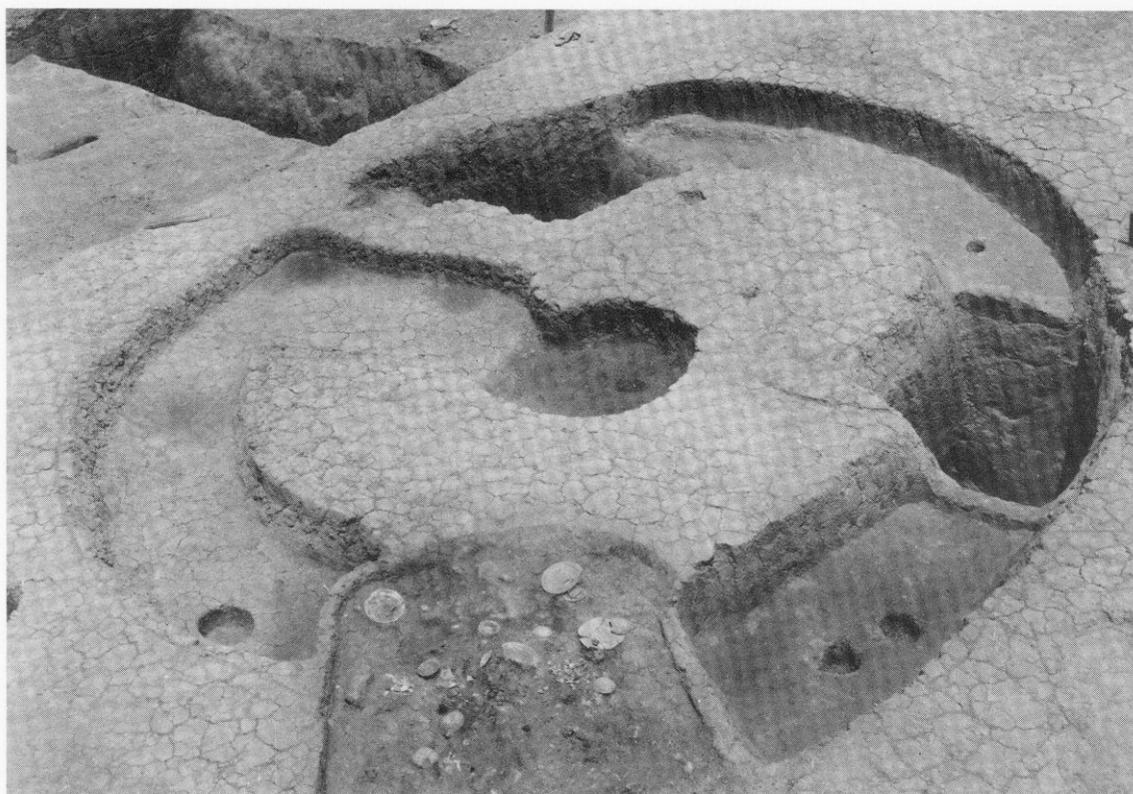
(2) 第1号火葬墓(南から)



第1号火葬墓出土土師器

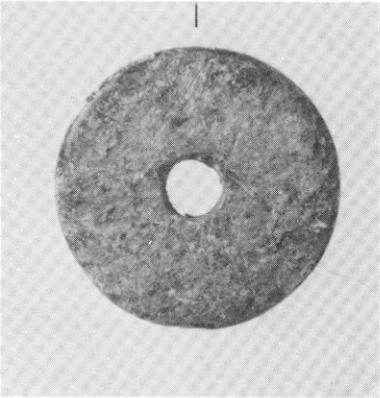
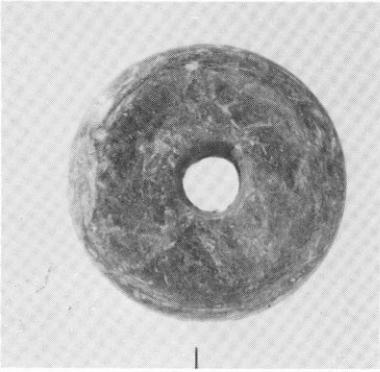


(1) 第2号火葬墓・第4号土塚墓・小石室(南から)

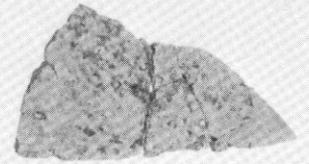
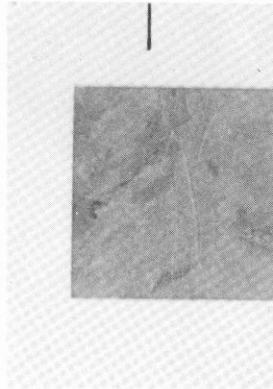
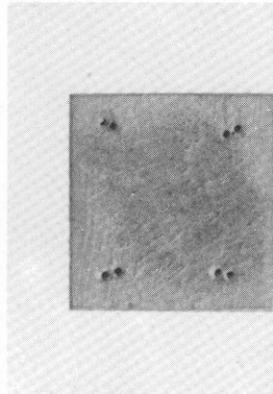


(2) 第1号円形周溝墓(南から)

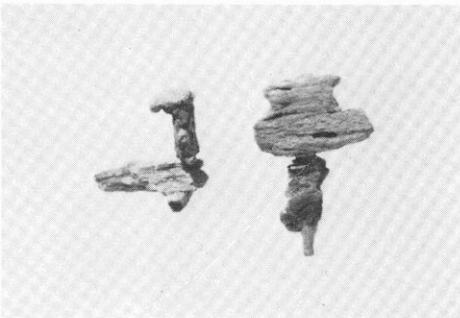
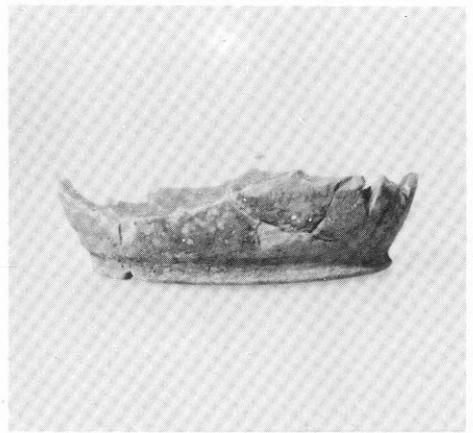
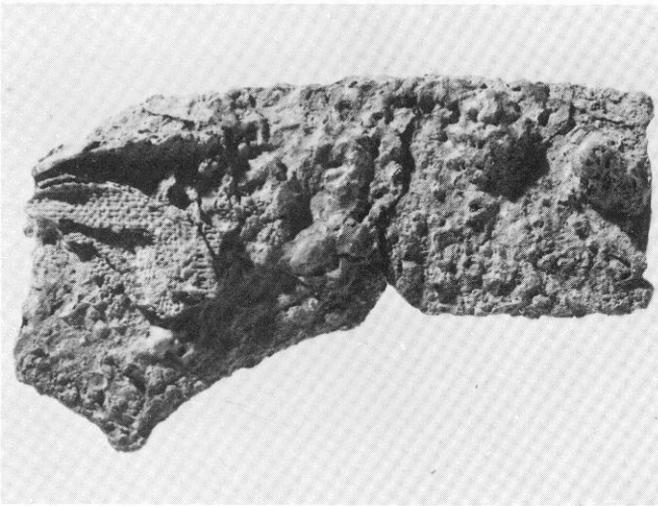
(1) 第6号住居跡南側柱穴出土滑石製紡錘車



(2) 第8号土塚出土石帯・青銅製品

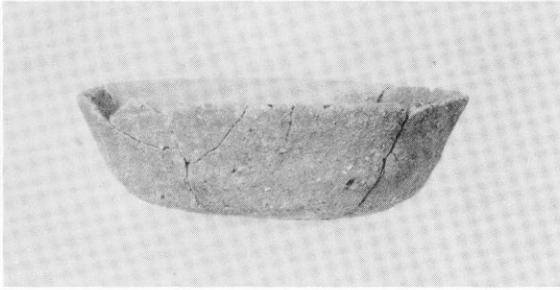
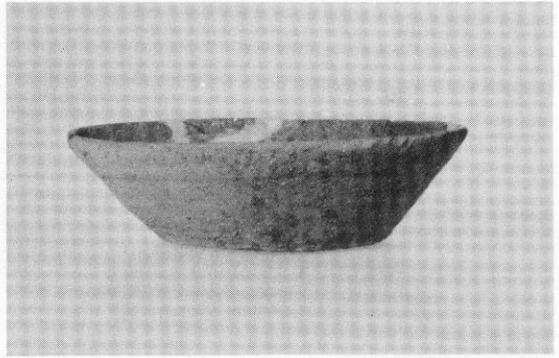


(3) 第6号土塚出土鉄鎌（布付着）



(4) 1号墳盛土中出土釘

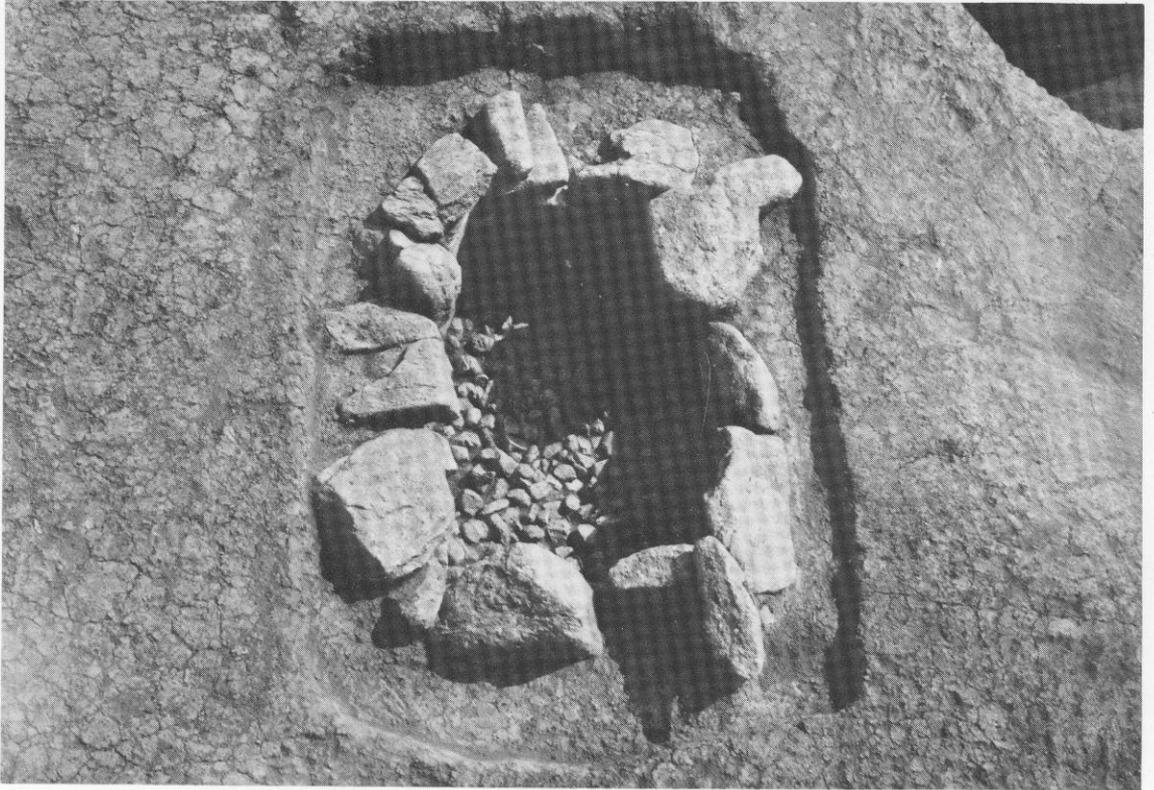
(5) 表採土師器



1号墳盛土中・表採土師器・白磁・青磁・瓦質土器



(1) 竖穴式小石室南侧溝



(2) 竖穴式小石室全景

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 —X X IV—

上 卷

昭和53年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6番29号

印刷 福博綜合印刷株式会社
福岡市博多区堅粕3丁目3-16